

境松遺跡(Ⅱ)・若宮遺跡(Ⅵ)

－ 豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 －

2013年3月

豊橋市教育委員会

境松遺跡(Ⅱ)・若宮遺跡(Ⅵ)

－ 豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 －

2013年3月

豊橋市教育委員会



1. 若宮遺跡の環壕（南東から）

例 言

1. 本書は、豊橋市牟呂町字坂津 3 番地他において豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴い事前に実施した境松遺跡の第二次調査及び若宮遺跡の第五次調査の発掘調査報告書である。調査総面積は3,000㎡で、境松遺跡は遺跡範囲内4ヶ所で調査を行った。調査期間及び各調査区の面積は以下のとおりである。

遺跡名	調査面積	調査期間
境松遺跡A区	409㎡	平成22年5月6日～平成22年6月10日
若宮遺跡	1,507㎡	平成22年7月6日～平成22年10月30日
境松遺跡B区	231㎡	平成22年10月14日～平成22年11月3日
境松遺跡C区	400㎡	平成22年11月24日～平成23年1月11日
境松遺跡D区	453㎡	平成23年1月7日～平成23年2月22日

2. 発掘調査は豊橋市教育委員会が行い、加藤幹樹（教育部美術博物館嘱託員（当時））が担当した。また、岩原剛（教育部美術博物館）が調査指導を担当した。
3. 発掘調査及び報告書の作成に際して、土地所有者をはじめ、地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。本書の執筆に際して、下記の各氏にご教示を頂いている。記して感謝の意を表す次第である。増山禎之・浅岡優・鈴木とよ江・小栗康弘・新美輪子・吉田悠歩・石川明弘・芳賀陽・早野浩二
4. 写真撮影については、発掘調査は各担当が行ったが、航空写真撮影は株式会社アコードに委託して行っている。また出土遺物の撮影は村上昇（教育部美術博物館）が行った。
5. 本書の執筆は加藤が行い、第5章の遺構採取土壌のリン・カルシウム分析は竹原弘展（パレオ・ラボ）に分析・執筆して頂いた。編集は加藤と村上が行った。
6. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 遺構番号は調査区毎に時期が古い段階のものから順に設定している。
8. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。
9. 遺構の略号は以下のとおりである。
住居状遺構：SB 溝：SD 井戸：SE 土坑：SK 柵列：SA 不明遺構：SX
10. 遺物計測表の（ ）内数値は残存値の計測である
11. 井戸などの極端に深い遺構に関しては、安全上完掘が困難な場合は、2mを基準に調査を打ち切っている。
12. 遺構平面図中にある波線は現代の攪乱を示す。またトーンは焼土を示す。

目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地……………1 2. 歴史的環境……………2

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過……………5 2. 調査の方法……………6
3. 基本層序……………7

第3章 境松遺跡A区

1. 遺構……………8 2. 遺物……………18
3. 小結……………27

第4章 境松遺跡B区……………31

第5章 境松遺跡C区

1. 遺構……………33 2. 遺物……………47
3. 遺構採取土壌のリン・カルシウム分析……………67 4. 小結……………69

第6章 境松遺跡D区

1. 遺構……………70 2. 遺物……………83
3. 小結……………104

第7章 若宮遺跡

1. 若宮遺跡の概要……………109 2. 遺構……………111
3. 遺物……………129 4. 結語……………143

報告書抄録

挿図目次

- 第1図 周辺地形図 (1/200,000)……………1 第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)……………4
第3図 調査区位置図 (1/2,500)……………5 第4図 境松A区調査区全体図 (1/200)……………9
第5図 境松A区遺構平面図1 (1/80)……………10 第6図 境松A区遺構平面図2 (1/40・1/80)……………11
第7図 境松A区遺構平面図3 (1/40)……………15 第8図 境松A区遺構平面図4 (1/40)……………17
第9図 境松A区遺物実測図1 (1/3)……………19 第10図 境松A区遺物実測図2 (1/3・1/5)……………21
第11図 境松A区遺物実測図3 (1/3)……………23 第12図 境松A区遺物実測図4 (1/2・1/3・1/4)……………24
第13図 境松A区遺物実測図5 (1/3)……………26 第14図 境松A区遺物実測図6 (1/3・1/4)……………28
第15図 境松B区調査区全体図 (1/200)……………31 第16図 境松B区遺物実測図 (1/2)……………32
第17図 境松C区調査区全体図 (1/200)……………34 第18図 境松C区遺構平面図1 (1/80)……………35
第19図 境松C区遺構平面図2 (1/80)……………36 第20図 境松C区遺構平面図3 (1/60)……………37
第21図 境松C区遺構平面図4 (1/60)……………38 第22図 境松C区遺構平面図5 (1/40)……………39
第23図 境松C区遺構平面図6 (1/20・1/40)……………43 第24図 境松C区遺構平面図7 (1/20・1/40)……………45
第25図 境松C区遺構平面図8 (1/20・1/40・1/60)……………46
第26図 境松C区遺物実測図1 (1/3)……………53 第27図 境松C区遺物実測図2 (1/3)……………54

第28図	境松C区遺物実測図3 (1/3) ……55	第29図	境松C区遺物実測図4 (1/3) ……56
第30図	境松C区遺物実測図5 (1/3) ……57	第31図	境松C区遺物実測図6 (1/3) ……58
第32図	境松C区遺物実測図7 (1/2・1/3) ……59	第33図	境松C区遺物実測図8 (1/3) ……60
第34図	境松C区遺物実測図9 (1/3) ……61	第35図	境松C区遺物実測図10 (1/3) ……62
第36図	境松D区調査区全体図 (1/200) ……71	第37図	境松D区遺構平面図1 (1/20・1/40・1/60・1/80) 73
第38図	境松D区遺構平面図2 (1/80) ……74	第39図	境松D区遺構平面図3 (1/80) ……75
第40図	境松D区遺構平面図4 (1/40・1/60・1/80・1/200) 77	第41図	境松D区遺構平面図5 (1/40・1/80・1/800) 78
第42図	境松D区遺構平面図6 (1/40・1/60・1/100) 80	第43図	境松D区遺構平面図7 (1/20・1/40) ……81
第44図	境松D区遺構平面図8 (1/20・1/40・1/100) 82	第45図	境松D区遺物実測図1 (1/3) ……84
第46図	境松D区遺物実測図2 (1/3) ……86	第47図	境松D区遺物実測図3 (1/3) ……88
第48図	境松D区遺物実測図4 (1/3) ……89	第49図	境松D区遺物実測図5 (1/3) ……90
第50図	境松D区遺物実測図6 (1/3・1/4) ……92	第51図	境松D区遺物実測図7 (1/3・1/4) ……93
第52図	境松D区遺物実測図8 (1/3・1/4) ……95	第53図	境松D区遺物実測図9 (1/3) ……96
第54図	境松D区遺物実測図10 (1/3) ……97	第55図	境松D区遺物実測図11 (1/3) ……100
第56図	境松D区遺物実測図12 (1/3) ……101	第57図	境松D区遺物実測図13 (1/3) ……102
第58図	境松D区遺物実測図14 (1/3・1/4) ……103	第59図	若宮遺跡全体図 (1/400) ……110
第60図	若宮遺跡遺構平面図1 (1/60) ……112	第61図	若宮遺跡遺構平面図2 (1/60) ……114
第62図	若宮遺跡遺構平面図3 (1/60) ……115	第63図	若宮遺跡遺構平面図4 (1/60) ……117
第64図	若宮遺跡遺構平面図5 (1/40・1/80) ……118	第65図	若宮遺跡遺構平面図6 (1/80) ……119
第66図	若宮遺跡遺構平面図7 (1/80) ……120	第67図	若宮遺跡遺構平面図8 (1/80) ……122
第68図	若宮遺跡遺構平面図9 (1/30・1/60・1/80) 123	第69図	若宮遺跡遺構平面図10 (1/200) ……126
第70図	若宮遺跡遺構断面図 (1/80) ……127	第71図	若宮遺跡遺構平面図11 (1/40・1/60) ……130
第72図	若宮遺跡遺物実測図1 (1/3) ……132	第73図	若宮遺跡遺物実測図2 (1/3) ……133
第74図	若宮遺跡遺物実測図3 (1/3) ……134	第75図	若宮遺跡遺物実測図4 (1/3) ……135
第76図	若宮遺跡遺物実測図5 (1/3) ……137	第77図	若宮遺跡遺物実測図6 (1/3) ……138
第78図	若宮遺跡遺物実測図7 (1/3・1/4) ……140	第79図	若宮遺跡遺物実測図8 (1/2・1/3) ……142

表 目 次

第1表	境松遺跡A区遺物観察表 ……29	第2表	境松遺跡C区遺物観察表 ……63
第3表	遺構採取土壌のリン・カルシウム分析 ……75	第4表	境松遺跡D区遺物観察表 ……105
第5表	若宮遺跡遺物観察表 ……144		

カラー写真図版目次

図版1-1 若宮遺跡の環壕（南東から）

写真図版目次

図版1-1 境松遺跡A区全景（上から）	2	境松遺跡B区全景（上から）
図版2-1 境松遺跡C区全景（上から）	2	境松遺跡D区全景（上から）
図版3-1 SX-1 遺物出土状況1（南から）	2	SX-1 完掘状況（南から）
3 SX-1 遺物出土状況2（南西から）	4	SB-1 根石検出状況（南から）
5 SD-3 遺物出土状況（北東から）		
図版4-1 SB-1 完掘状況（上から）	2	SB-2・3 完掘状況（上から）
図版5-1 SB-2 完掘状況（北西から）	2	SB-2 遺物出土状況（南から）
3 SD-8・10完掘状況（西から）	4	SD-1・6 完掘状況（南から）
図版6-1 SD-8 遺物出土状況（東から）	2	SK-5 完掘状況（北西から）
3 SK-5 遺物出土状況（西から）	4	SK-6 断面（南から）
5 SE-4 断面（南から）		
図版7-1 SB-1・2 完掘状況（北から）	2	SB-5 完掘状況（北から）
図版8-1 SB-4・6 完掘状況（北から）	2	SB-2 焼土検出状況（南東から）
3 SB-2 柱穴断面（東から）	4	SB-5 柱穴断面（西から）
5 SB-5 柱穴断面（西から）		
図版9-1 SB-5 焼土・炭化材検出状況（北から）	2	SB-5 遺物出土状況（南から）
図版10-1 SB-5 焼土・炭化物出土状況（西から）	2	SB-5 焼土・炭化物出土状況（北から）
3 SB-5 遺物出土状況（南から）	4	SB-5 遺物出土状況（南から）
5 SB-1 遺物出土状況（東から）	6	SB-5 遺物出土状況（南から）
7 SB-5 遺物出土状況（北から）	8	SB-5 壁面断面（南から）
図版11-1 SK-1 遺物出土状況1（北から）	2	SK-1 遺物出土状況2（北から）
3 SK-1 遺物出土状況3（北から）	4	SK-1 遺物出土状況4（北から）
5 SK-8 遺物出土状況1（南から）	6	SK-8 遺物出土状況2（南から）
7 SK-8 遺物出土状況3（南から）	8	SK-8 遺物出土状況4（南から）
図版12-1 SK-6 遺物出土状況（北から）	2	SK-10遺物出土状況（南から）
3 SK-21遺物出土状況（南から）	4	SK-24・25遺物出土状況（北から）
5 SK-26遺物出土状況（南東から）	6	SB-7 遺物出土状況（南西から）
7 SX-1 完掘状況（東から）	8	SK-32・33完掘状況（東から）
図版13-1 SB-1 完掘状況（上から）	2	SB-1 完掘状況（南西から）
図版14-1 SB-1・3・4 完掘状況（上から）	2	SB-2 全景（上から）
図版15-1 SD-2、SK-7・8 完掘状況（上から）	2	SD-1 完掘状況（北から）

	3	SD-2 遺物出土状況 (北から)		
図版16-1	SD-2 遺物出土状況 (西から)		2	SD-2 銅鏡出土状況 (西から)
	3	SD-2 遺物出土状況 (北から)		4
	5	SD-2、SK-8 断面 (北から)		
図版17-1	SD-3 遺物出土状況 (北から)		2	SD-6 遺物出土状況 (西から)
	3	SK-7 遺物出土状況 (東から)		4
	5	SK-8 遺物出土状況 (南から)		
図版18-1	若宮遺跡全景 (上から)			
図版19-1	SB-1・2、SX-1 完掘状況 (東から)		2	SB-3 完掘状況 (東から)
図版20-1	SB-5 完掘状況 (南から)		2	SB-7 完掘状況 (北東から)
図版21-1	SB-8 完掘状況 (北東から)		2	SB-10・11完掘状況 (上から)
図版22-1	SD-1 断面 (東から)		2	SD-2 断面 (南から)
	3	SD-1・2分岐遺物出土状況 (東から)		4
	5	SD-1・2分岐断面 (東から)		土橋断面 (北西から)
図版23-1	SB-1 遺物出土状況 (西から)		2	SB-2 遺物出土状況 (西から)
	3	SB-7 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)		4
	5	SB-8 遺物出土状況 (北東から)		6
	7	SD-1 最下層遺物出土状況 (東から)		8
図版24	出土遺物-1	図版25	出土遺物-2	
図版26	出土遺物-3	図版27	出土遺物-4	
図版28	出土遺物-5	図版29	出土遺物-1	
図版30	出土遺物-2	図版31	出土遺物-3	
図版32	出土遺物-4	図版33	出土遺物-5	
図版34	出土遺物-6	図版35	出土遺物-7	
図版36	出土遺物-8	図版37	出土遺物-9	
図版38	出土遺物-1	図版39	出土遺物-2	
図版40	出土遺物-3	図版41	出土遺物-4	
図版42	出土遺物-5	図版43	出土遺物-6	
図版44	出土遺物-1	図版45	出土遺物-2	
図版46	出土遺物-3			

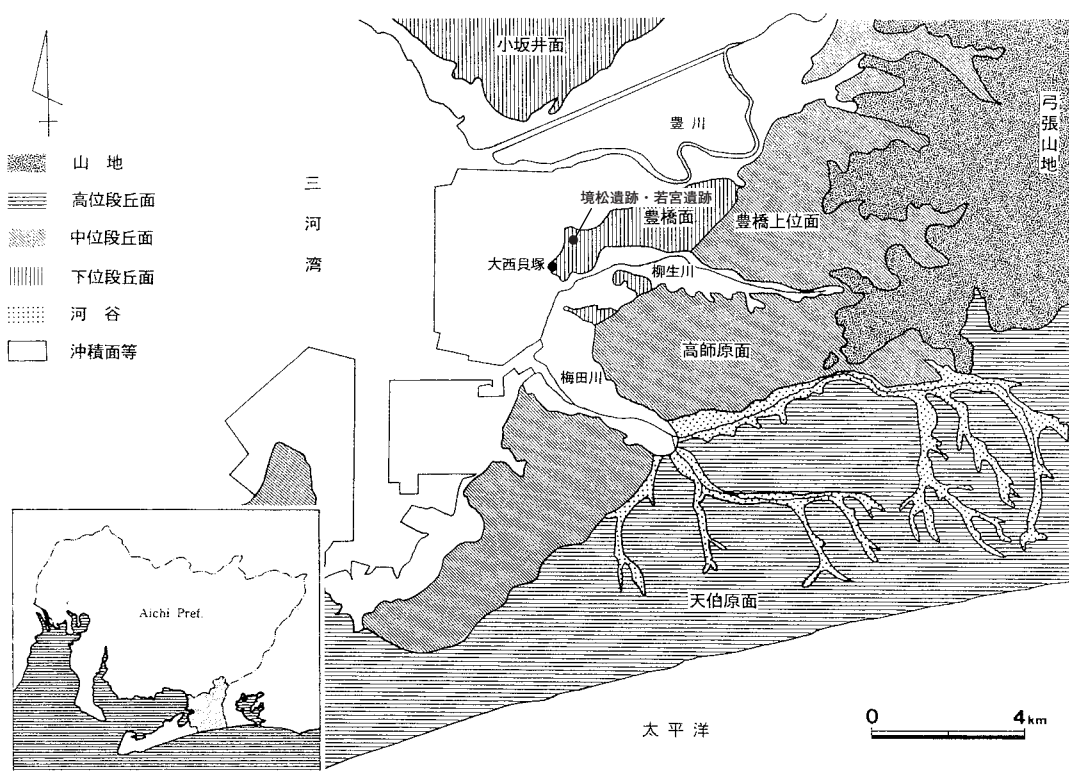
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1図)

境松遺跡と若宮遺跡は、豊橋市牟呂町字境松・若宮に所在する(第1図)。豊橋市は東に弓張山地、南に太平洋、西に三河湾、北西に豊川を臨み、水資源豊かな地域である。また、沖積地や段丘・山地等によって構成される起伏に富んだ地形では、それぞれの環境に応じた多様な生活様式が営まれている。豊橋市域は大半が沖積地上の低位面と豊川と天竜川によって造られた河岸段丘上に所在し、この段丘は標高30~60mの高位面、標高15~30mの高師原面・豊橋上位面と呼ばれる中位面、標高4~10mの豊橋面と呼ばれる低位面の3面に大きく分けることができる。

遺跡の所在する牟呂地区は、沖積面に張り出した河岸段丘の低位面(豊橋面)の先端部に位置しており、前方に三河湾を臨み、北には豊川、南には柳生川が流れている。この段丘は先端部分で幅が約1kmと細く、標高は6m前後と低い。境松遺跡と若宮遺跡は段丘先端の北側に位置し、この周辺は標高が8~12mと高く、小山状の台地となっている。段丘の端部は比高差5m程の段丘崖になっており、段丘上部は平坦面が続いて民家や畑になっている。段丘崖の西側は現在では住宅が点在しているが、かつては一面に水田が広がっていた。この段丘崖の西はかつて三河湾で、江戸時代の新田開発によって干拓された場所である。近年までは、この地区は海苔や貝加工などの沿岸漁業が盛んな地域であった。

若宮遺跡は段丘上部の集落址、境松遺跡は段丘の最上段に形成された集落址である。これらの遺跡は、三河湾の近くに立地した海浜部立地の遺跡であり、三河湾との深い関係が指摘できる。



第1図 周辺地形図 (1 / 200,000)

2. 歴史的環境 (第2図)

境松遺跡と若宮遺跡が所在する牟呂坂津地区とその周辺部は、縄文時代以降、各時代の遺跡が多く残された遺跡の密集地である。ここでは、周辺の遺跡について説明する。なお、文中の番号は第2図に対応する。

縄文時代

縄文時代の貝塚は、内田貝塚(3)、大西貝塚(6)をはじめとする牟呂貝塚群や、王ヶ崎貝塚(9)、小浜貝塚(10)などが確認されている。このうち、王ヶ崎貝塚と小浜貝塚は、大西貝塚等の段丘と柳生川を挟んで対面する低位段丘に位置している。これらの貝塚は、主に晩期に形成され、牟呂貝塚群と呼称される。

牟呂貝塚群は加工場型貝塚と考えられる。坂津寺貝塚(2)はハマグリが主体で、縄文時代中期中葉～後期初頭及び晩期の土器が出土している。現在までに牟呂地区で確認されている最古の遺跡である。水神第1貝塚(4)は沖積地に立地し、縄文時代晩期前葉～中葉を中心とした遺跡であることが確認されている。弓筈状角製品、ヤスの骨角器等が出土している。水神第2貝塚(5)は砂堤上に位置し、貝塚は規模約50×20mで、平面形は隅丸方形を呈していた。貝層はハマグリが99%を占める純貝層で、地床炉は約400ヶ所を数えた。市杵嶋神社貝塚(8)は前方後方墳の墳丘中に残存している貝塚である。大西貝塚は規模約185×40mで、平面形がくの字状をなすハマグリ主体の貝塚である。東海地方最大の貝塚であり、集石・土坑・地床炉などが多数検出された。さんまい貝塚(7)もハマグリ主体の晩期中葉の貝塚である。以上のうち、水神第1・第2貝塚・大西貝塚には、多数の炉が検出され、石器、骨角器等の遺物が極端に少ないという共通点がある。

小浜貝塚は4ヶ所の貝塚からなる地点貝塚であったといわれ、縄文時代前期～晩期の長期にわたる貝塚である。土器や石器、貝製品のほか、屈葬人骨が検出されている。王ヶ崎貝塚は晩期の貝塚である。発掘調査は行われていないが、隣接する磯辺王塚古墳の発掘調査の際、条痕文土器と磨製石斧が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、王ヶ崎貝塚、橋良遺跡(11)や見丁塚遺跡(12)などがある。王ヶ崎貝塚では遠賀川系土器が出土している。橋良遺跡は中期後葉における柳生川流域の拠点集落で、竪穴住居、方形周溝墓等が検出され、土器・石器が豊富に出土している。また見丁塚遺跡では集落遺構は確認されおらず、中期後葉の方形周溝墓が検出されている。この他に境松遺跡(13)、水神第2貝塚や内田貝塚から土器等が出土している。なお、水神第2貝塚では奄美大島以南でしか採れないイモガイ製の貝輪が出土しており、縦型としては分布の東限にあたり、注意される。

古墳時代

古墳時代の集落遺跡としては、大海津遺跡(24)、大西遺跡(25)、橋良遺跡、見丁塚遺跡などで、竪穴住居や掘立柱建物などが確認されている他、若宮遺跡(27)では6～7世紀の住居が多数検出されている。橋良遺跡では前期後葉の竪穴住居が検出され、土師器のS字甕とともに畿内系高坏や山陰系甕が出土した。

大西遺跡は、7世紀中葉～後葉の掘立柱建物を主体とする比較的規模が大きな遺跡である。直径90cmの大型柱穴を持った建物や大壁住居と想定される特殊建物等があり、首長居館を含む拠点的な集落遺跡と推定される。

古墳では、首長墓では市杵嶋神社古墳（20）、三ツ山古墳（14）、牟呂王塚古墳（19）、磯辺王塚古墳（21）があり、群集墳では東脇古墳（17）や権現神社古墳（18）などがある。

市杵嶋神社古墳は前期前葉の前方後方墳で、全長は60m前後と推定され、葺石を伴う。同時期には豊川の上流域・中流域でも前方後方墳が存在しており、豊川流域の3ヶ所にそれぞれ首長の勢力域が広がっていたことがわかる。その後、古墳時代中期の首長墓は豊川右岸に集中しており、左岸の豊橋市域では顕著な首長墓は見いだしにくい。

周辺地域で首長墓が再び確認されるのは、後期に入ってからである。三ツ山古墳は6世紀前葉の全長37mの前方後円墳である。主体部は後円部と前方部とにそれぞれ存在し、前方部の主体部からは鉄製轡や須恵器が出土している。磯辺王塚古墳は6世紀後葉の首長墓で、墳形が明らかではないが、大型の横穴式石室を持つ。副葬品として双龍環頭大刀、頭椎大刀、銀象嵌装円頭大刀など4振の飾大刀や金銅装馬具、トンボ玉など豊富な装身具類が出土した。また牟呂王塚古墳は6世紀末葉の首長墓で、検出長27mの前方後円墳である。圭頭大刀や金銅装馬具などきらびやかな副葬品が出土している。周辺の後期首長墓は渥美湾沿岸の系譜の一端を占め、副葬品に金銅装製品が卓越することから、後期以降に地域と王権との関わりが深くなったことをものがたる。

以上のほか、須恵器と埴輪を併焼した窯跡として水神古窯（26）がある。6世紀初頭（陶邑TK47併行）の窯であり、段丘斜面に3基の窯が並んで検出されている。埴輪は三河系埴輪と呼ばれる外面調整がタテ板ナデを主体とする円筒埴輪が多く、石見型埴輪も含まれている。伊勢地域との関わりが想定される。

古代以降

古代の遺跡は、市道遺跡（28）があり、規模も大きく、この他に大海津遺跡などがある。市道遺跡は北側の掘立柱建物群と南側の塀と溝で囲まれた区画に分けられる。北側では正六角形の掘立柱建物が3棟発見されたほか、総柱建物群が北辺と西辺に並び、その内側には側柱建物や間仕切りのある建物が配列する建物構成をとっており、首長居館、あるいは郡衙や郡倉などの公的施設と推定されている。一方南側区画は寺院遺構（市道廃寺）と考えられ、建て替えを示す二重の区画が存在し、内部には金堂、講堂、僧坊跡が検出された。遺物として須恵器の金属製仏器模倣品、墨書須恵器、瓦塔、仏像の螺髪、多量の瓦が出土している。また、市道1～3号窯は補修瓦を焼成したロストル式平窯である。

中世の遺跡は、公文遺跡（32）や若宮遺跡（27）、王郷遺跡（35）のほか、広域で確認されている。集落の跡や地下式坑が確認されている。公文遺跡は中世前期の豪族居館を中心とした集落跡と考えられる。幅約4m、深さ約1.6mのV字状の大溝が発見され、ここからは多量の山茶碗のほか、馬・牛などの獣骨が出土している。また領主の塚墓と思われる遺構も隣接して検出された。中世後期の城館址では牟呂城址（40）があり、方形に巡ると考えられる土塁と堀が確認されている。

中世末期～近世には、現集落のまとまりが形成された。市場遺跡（34）では、近世の寺院跡と考えられる建物跡が検出されている。



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-----------|------------|
| 1. 石塚貝塚 | 9. 王ヶ崎貝塚 | 17. 東脇古墳 | 25. 大西遺跡 | 33. 市道西遺跡 |
| 2. 坂津寺貝塚 | 10. 小浜貝塚 | 18. 権現神社古墳 | 26. 水神古窯 | 34. 市場遺跡 |
| 3. 内田貝塚 | 11. 橋良遺跡 | 19. 牟呂王塚古墳 | 27. 若宮遺跡 | 35. 王郷遺跡 |
| 4. 水神貝塚 (第1) | 12. 見丁塚遺跡 | 20. 市杵嶋神社古墳 | 28. 市道遺跡 | 36. 吉田城址 |
| 5. 水神貝塚 (第2) | 13. 境松遺跡 | 21. 磯辺王塚古墳 | 29. 百北遺跡 | 37. 喜見寺砦址 |
| 6. 大西貝塚 | 14. 三ツ山古墳 | 22. 万福寺古墳 | 30. 羽根井遺跡 | 38. 清原寺砦址 |
| 7. さんまい貝塚 | 15. 三ツ山古墳群 | 23. 王ヶ崎1号墳 | 31. 築根遺跡 | 39. 羽田村古城址 |
| 8. 市杵嶋神社貝塚 | 16. 牟呂八幡神社古墳 | 24. 大海津遺跡 | 32. 公文遺跡 | 40. 牟呂城址 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過

豊橋市西部の牟呂町中心部を対象とする土地区画整理は、昭和54年度に事業決定が成され、昭和57年度より本格的に牟呂土地区画整理事業として工事が実施されている。これは牟呂町の住宅密集地の整理を意図したもので、平成9年度まで継続して行われた。かつては半農半漁を主な生業とし、木造家屋の間を狭い道路が巡る複雑な町並みであったこの地域も、近年は直線的に整備された閑静な街路が広がり、昔日の面影は失われている。牟呂地区は遺跡の集中地域であり、市教育委員会では区画整理事業の進捗に合わせて長期に渡る発掘調査を実施した。



第3図 調査区位置図 (1 / 2,500)

今回発掘調査を行った境松遺跡と若宮遺跡のある牟呂坂津地区は、JR豊橋駅より西へ約2kmの中心部と臨海部とを結ぶ軸線上にあり、牟呂土地区画整理事業により整備された市街地の北側に隣接する地区である。現在は牟呂用水によって画されているが、牟呂地区とは同一の段丘上にあり、一連の地域として歩んできた歴史的経緯がある。

この牟呂坂津地区において、市役所区画整理課により、平成13～27年度にかけて21.22haに及ぶ土地区画整理事業が計画・実施されている（豊橋牟呂坂津土地区画整理事業）。事業に先立ち、市教育委員会では平成11年度に国庫補助事業で事業地内を対象にした遺跡の範囲確認調査を実施して、その範囲を確定させ、性格のデータ収集に努めた。

今回の報告は、豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴う5年目の本調査分である。事業地内にはこの他に坂津寺貝塚、内田貝塚、三ツ山古墳などの遺跡が存在している。今回の発掘調査は段丘崖を掘削して、宅地及び道路造成を行うため、遺跡の滅失が免れないことから行われた記録保存調査である。境松遺跡は4ヶ所、若宮遺跡は1ヶ所にそれぞれ調査区を設定した。なお、若宮遺跡は当初予定された遺跡の推定範囲よりも遺跡が広がることが判明したため、急遽調査中に調査区の拡張を行った。調査総面積は3,000㎡で、調査期間は平成22年5月6日～平成23年2月22日である。

2. 調査の方法

発掘調査は、基本的に切土によって遺跡を破壊する部分を対象としている。今回の発掘調査は道路部分及び宅地造成部において行った。調査面積は境松遺跡・若宮遺跡を合わせて3,000㎡である。調査区の設定については、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、この国土座標に合わせて若宮遺跡の南西隅を起点にして、10mグリッドを設定した。この起点より西から東にA～Z、北から南に1～10というように名付け、その交点を地区名としている。同様に境松遺跡に関しても境松遺跡の北西端を基準点とし、西～東にA～Z、北～南に1から順にグリッド設定を行っている。発掘調査の手順は表土を重機で掘削し、後は人力で掘り下げた。表土の認定は次項基本層序の第Ⅱ層より上層とし、遺構が認められない場合は、第Ⅲ層まで重機で除去した。なお、具体的な作業順序は次のとおりである。

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
3. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成し、出土状況写真を撮影する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、個別遺構写真を撮影する。
5. ラジコンヘリを用いて調査区の全体写真を撮影し、航空測量による遺構全体図を作成する。

調査を進める中で、成果を市民に報告すべく、平成23年2月5日に豊橋市美術博物館で開催された市民向け講座「とよはし歴史探訪」で若宮遺跡の成果発表を行った。この際50名以上の参加があった。また、若宮遺跡の調査中には多くの研究者の来訪を受け、さまざまな御教示を頂いた。

3. 基本層序

境松遺跡・若宮遺跡が所在する台地の最高位面は、近代以降の掘削により浅いところでは現地表面から10cm程で遺構検出面及び地山に到達する。そのため、包含層は残存していても散布的であり、面的な広がりを追いくい。今回の調査では3面の包含層が確認できたが、いずれも散布的であり第Ⅲ層を除き、調査区内で完結する。なお、台地から北東部に広がる急斜面には貝塚が分布し、台地上位からの流土なども認められるため、この層序の限りではない。

第Ⅰ層	表土層	灰色砂質土層	礫及び現代の遺物。
第Ⅱ層	造成土層	灰色砂質土層	礫の瓦など近代の遺物が混入する。
第Ⅲ層	包含層①	(淡)灰色砂質土層	3～5mm程度の小礫と中世～近世の遺物を包含する。
第Ⅳ層	包含層②	黒褐色砂質土層	3～5mm程度の小礫と弥生～古代の遺物を包含する。
第Ⅴ層	包含層③	暗黄褐色シルト層	石器を包含するが、詳細な時期は不明である。
第Ⅵ層	地山①	黄褐色シルト層	3～5mm程度の小礫がわずかに含まれる。
第Ⅶ層	地山②	黄褐色砂礫層	拇指頭大～拳大の礫で構成される。

第Ⅰ層及び第Ⅱ層は調査時に表土として表記される層である。第Ⅰ層は現代の耕作土で、しまりが無い砂質土層である。第Ⅱ層は斜面以下の降る地形で厚く見られる。しまりが強く、ブロック状の破碎貝や土が混入する。斜面が平坦になるように埋没していることから、近代の整地層であろう。

第Ⅲ層は広範囲に残存している中世から近世の包含層である。斜面部では10～30cm程の堆積状況が確認できるが、平坦面では第Ⅰ・Ⅱ層の時期に削平を受けており、散布的に薄く残る程度である。残存状況が良い地点では遺物・遺構共に検出される。

第Ⅳ層は台地上の所々に薄く残存している層で、砂粒が粗くしまりの強い砂層である。混入物の状況は古墳時代の遺構内埋土に類似する。2～3cm程度の薄い包含層であるが、最も厚く堆積していた箇所約10～15cmを測る。包含層の分布範囲が部分的であり、包含層中から遺構は検出できなかった。弥生時代～古代にかけての遺物を多く包含する。

第Ⅴ層は第Ⅵ層に酷似する。第Ⅵ層中で稀に粘性が若干弱くなり、色調がシミ状に暗く変わる状況が認められる。遺物も出土しないことから、これまでは地山の一部として理解されていたが、若宮遺跡第Ⅴ次調査で出土した石槍や、境松遺跡①で出土した剥片がこのシミ状の土層から出土したことから、弥生時代以前の包含層として第Ⅴ層に認定した。分布範囲は定まらず、堆積状況も数cm程度残存するのみである。

第Ⅵ層は黄褐色、あるいは褐色の粘性に富むシルト層である。有機物の痕跡が斑点のように混ざる。

第Ⅶ層は黄褐色の砂礫層で拇指頭大～拳大までの大きさの砂岩・花崗岩・片麻岩・石英岩などで構成される。

第3章 境松遺跡A区

1. 遺構（第4～8図）

A区では16世紀以降の戦国期～近世にかけての遺構を中心に、古墳時代～近世までの遺構を確認した。最も古い段階では、3世紀頃の古墳時代前期後半に属する土坑が見つまっている。主体となる16世紀頃の遺構は、掘立柱建物、区画溝、溝、土坑等である。掘立柱建物は北西方向に長軸をおく3棟が確認されている。この内2棟（SB-2、SB-3）は、位置・方向・時期がほぼ同じであることから建て直しと考えられる。近世の遺構には掘立柱建物、区画溝、廃棄土坑、井戸、貝塚等がある。調査区内は東西に緩やかに傾斜しており、この傾斜方向へ延びる溝が6本確認され、同位置に重複して存在していることから、再利用も兼ねての掘り直しが推測される。また19世紀初頭の溝の中には、暗渠と推察される内部に破砕貝を詰めた溝も存在する。

A. 掘立柱建物

掘立柱建物は4棟確認された。3棟は調査区の中心から北側に位置し、北東から南西に長軸を据え、16世紀頃の土師器の鍋が柱穴内から出土している。もう1棟は前述の掘立柱建物に重なり、柱穴から磁器片が出土していることから近世の建物と考えられる。

SB-1（第5図）

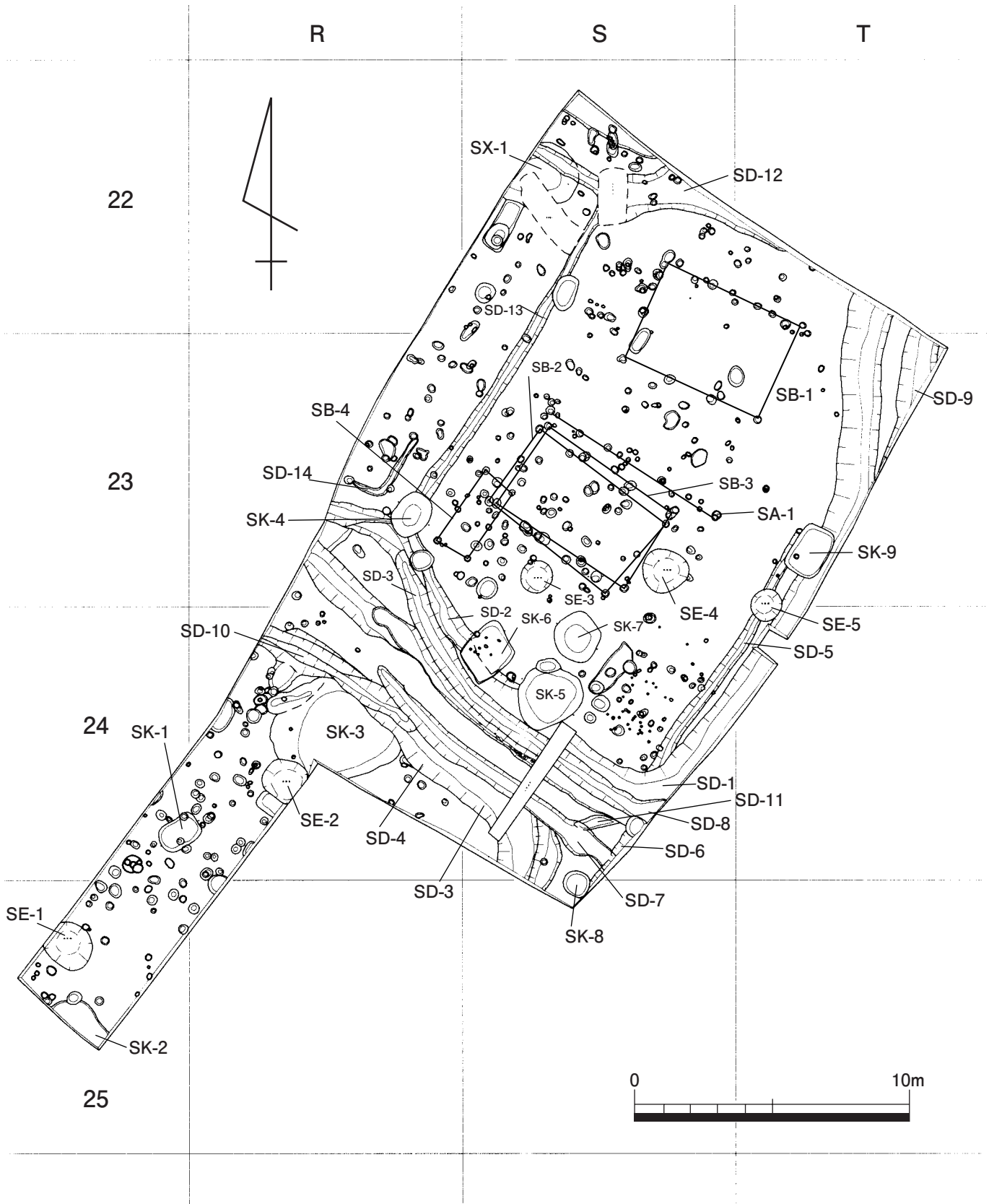
S・T-22・23区で確認された桁行3間、梁行2間の側柱建物である。長軸は西北西方向を向く。規模は桁行6m、梁行3.6mを測る。柱間は桁行・梁行ともに約1.8mで統一されている。柱穴は円形か楕円形を呈しており、いずれも後世に掘削されているため、深いもので30cm、浅いものだと10cm程度が残存するのみである。遺物は土師器の皿や土師器の鍋などが出土しているが、正確な時期を示す遺物は出土していない。またPit1・2・7では根石が確認されている。拳大から人頭大の垂円礫が使用されており、石材はチャート・砂岩・片麻岩など多様である。隣接するSB-2と建物構造が類似することから、16世紀頃の建物と推定される。

SB-2（第5図）

S-23区で確認された桁行3間、梁間2間の側柱建物である。長軸は北西方向を向く。規模は桁行6m、梁行3.5mを測る。柱間は桁行が1.8mで一定であるが、梁行は若干北側辺に寄っている。柱穴は円形か楕円形である。深さはPit5とPit10が20cm未満と浅いが、それ以外は30～40cm程度である。Pit2からは根石と土師器の鍋が出土している。16世紀頃。

SB-3（第6図）

S-23区で確認された桁行3間、梁間2間の側柱建物である。長軸は北西方向を向く。規模は桁行5.7m、梁行3.2mを測る。柱間は1.8～1.9mである。柱穴は円形か楕円形で深さは約30cmである。Pit1からは土師器の鍋が出土している。SB-2とSB-3は長軸方向が同じで、同位置にて重複している。

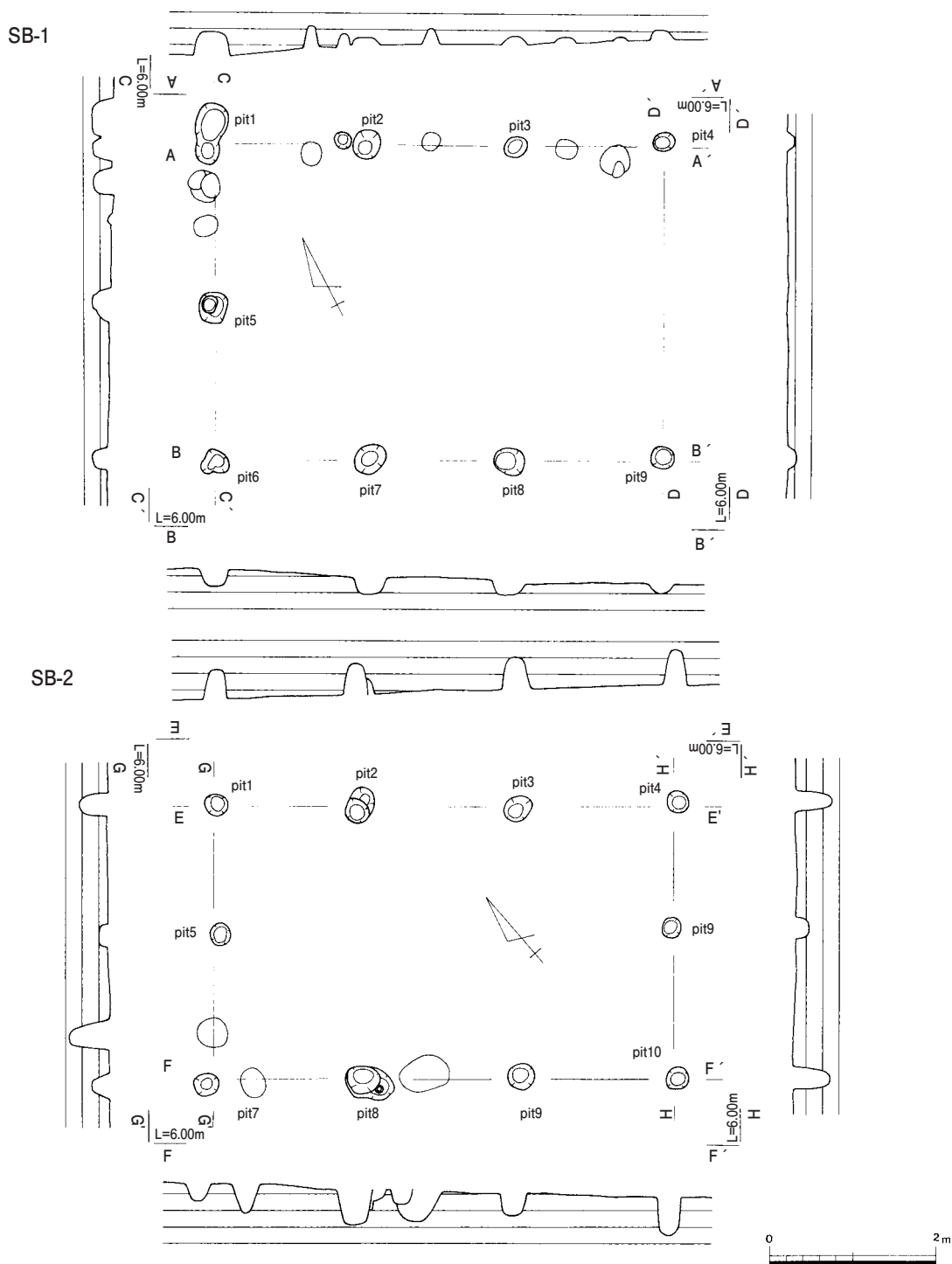


第4図 境松 A 区調査区全体図 (1 / 200)

柱穴も再利用してある上、出土した遺物の時期も同時期である事などから、SB-2の建て直しであろう。また、SB-3は後述するSA-1に並行している。16世紀頃。

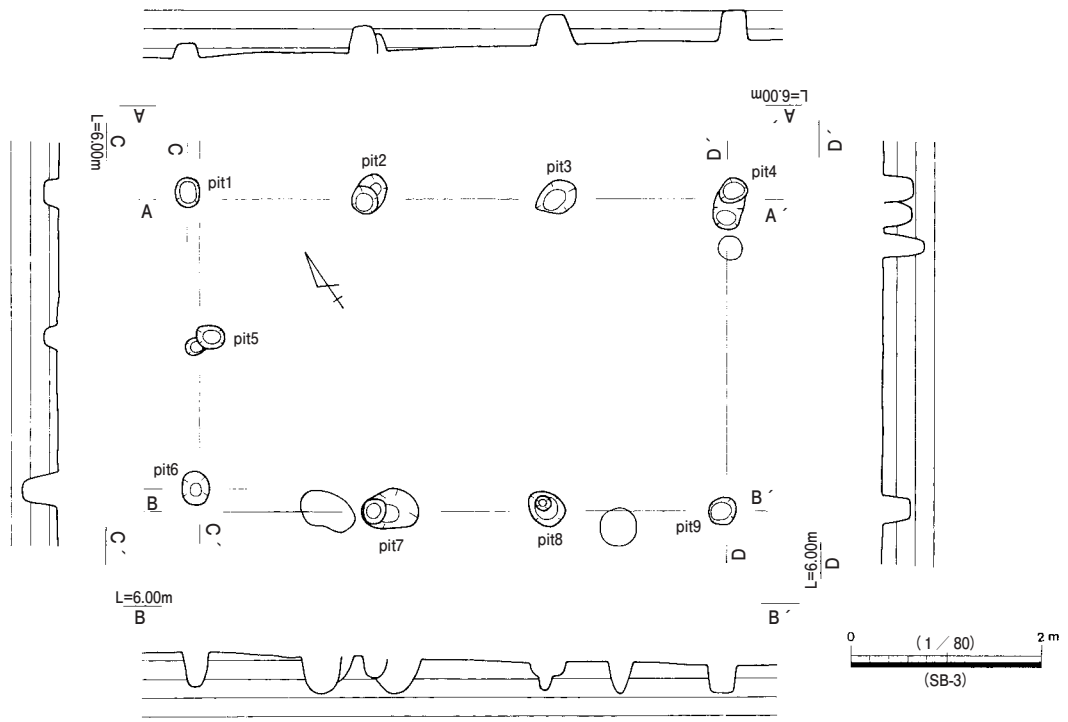
SB-4 (第6図)

S・R-23区で確認された小型の側柱建物である。長軸は北東方向を向く。桁行3m、梁行1.5mを測り、桁間・梁間ともに1.5mである。柱穴は25cm程の円形で、深さは20~30cm程である。柱穴内部から、土師器の鍋の破片や磁器の小破片が出土している。近世以降。

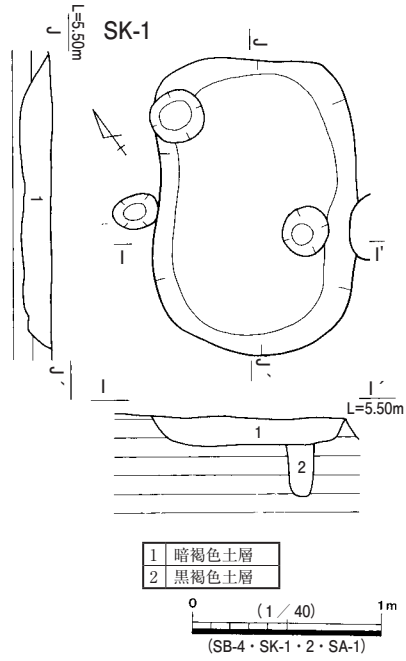
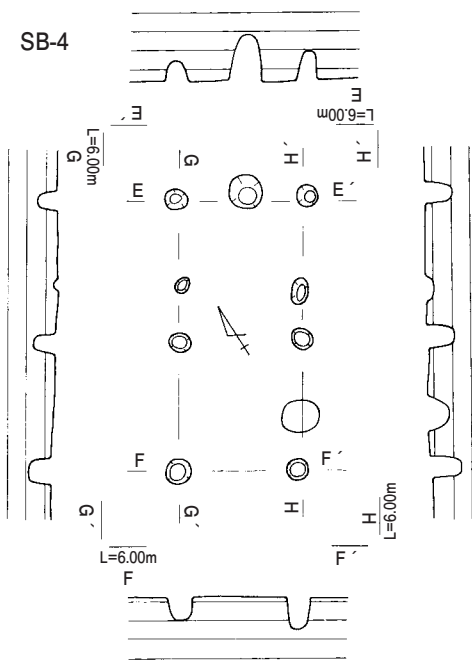


第5図 境松 A 区遺構平面図 1 (1 / 80)

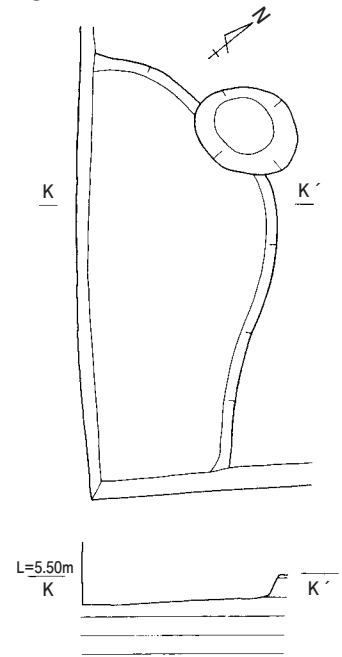
SB-3



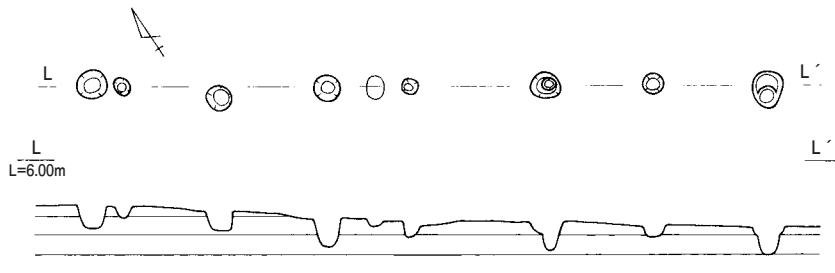
SB-4



SK-2



SA-1



第6図 境松 A 区遺構平面図2 (1/40・1/80)

B. 柵または塀

柵は1ヶ所で確認されている。掘立柱建物と隣接していることから、建物に伴う区画柵あるいは目隠し塀と考えられる。

SA-1 (第6図)

S-23区で確認された7基の土坑が北西方向に直列する。SB-2・3と隣接し、軸方向も同じである。SB-2・3に関連するものであろう。柱間は1.2mを測り、柱穴は円形で深さ20~30cm程である。遺物は土師器の鍋の破片が柱穴内部から出土している。

C. 溝

溝状の遺構は掘り直しを含めて14条確認された。この内の約半数は調査区南部に集中し、台地の傾斜方向に沿って東西方向に延びる。住居の周囲を広く囲う区画溝の他、SD-10のように破碎貝が詰められた排水用暗渠と思われる溝も認められる。

SD-1 (第4図)

R・S・T-23・24区内で検出された東西方向に延びるL字形の溝である。幅が2.3m、深さは検出面から20cmを測る。調査区東壁付近で南北に屈曲し、調査区西側では二又に分岐する。しまりのある砂質土層の上層と、粘性を帯びる下層の2層に分かれ、上層の大半をSD-3・SD-4・SD-8に切られている。断面は幅広の皿形である。同時期の掘立柱建物を囲うように屈曲していることから区画溝であろう。遺物は土師器の鍋・皿、陶器の天目茶碗、山茶碗等が出土している。

SD-2 (第4図)

R・S-24区内で検出された溝で、埋土の混土貝層に拳大の礫を多く含む。調査区西壁方向に向かって次第に浅くなり消滅する。遺物は土師器の鍋・皿、中世陶器等がある。16世紀頃。

SD-3 (第4図)

R・S-24・25区内で検出された東西に延びる溝である。途中で屈曲し調査区南壁に消える。幅は80cm、深さは40cmを測る。断面は浅い皿形を呈し、地山質のブロックやハマグリの破碎貝が部分的に混じる上層と、暗褐色砂質土層の下層の2層に分かれる。上層は調査区南部にて下層と分岐し、屈曲部が一回り大きくなる。層位及び分岐する平面形から掘り直しをしたものであると考えられる。遺物は土師器の鍋・皿、陶器の摺鉢・甕・碗類等がある。16世紀末~17世紀か。

SD-4 (第4図)

R・S-23・24区内で検出された溝である。SD-1の掘り肩を壊して作られており、断面は浅い皿形を呈す。幅は30cm前後で、深さは10cmを測る。遺物は出土していないが、SD-8に壊されていることから、SD-8より古い遺構である。

SD-5 (第4図)

S・T-23・24区で検出された溝である。幅50cm、深さ20cmを測り、調査区東壁に沿うように延びる。遺物は須恵器、山茶碗、土師器の鍋等の小破片が出土している。17世紀以降。

SD-6 (第4図)

調査区東壁に沿うように掘られた溝である。上部が近現代の掘削により消滅しており、底面が薄く残るのみである。埋土がSD-1と類似するため、同じ遺構である可能性がある。

SD-7 (第4図)

R・S-24区で検出された東西に延びる幅1.3m、深さ25cmの溝である。遺物を多く包含する混土貝層の上層と、暗灰色の砂質土層である下層に分けられ、断面は上層がV字形、下層が浅い皿形を呈する。貝層はハマグリを主体とし、ウミニナ・タマキビ等の巻貝類の軸や破片がわずかに入る。遺物は土師器の鍋や皿が主体で、わずかに近世陶器が混じる。18世紀初頭。

SD-8 (第4図)

S・R-23・24区で検出された溝である。東西方向に延びるSD-1に重なって検出され、調査区西壁に向かって次第に浅くなり途切れる。遺物を多く包含する混土貝層の上層と、暗灰色の砂質土層の下層に分けられる。貝層はハマグリ主体の破碎貝で少量巻貝の破片も含まれる。遺物は上層の底面部から瀬戸美濃産の丸碗が出土している他、山茶碗の甕、磁器の染付茶碗、土師器の鍋・皿等が出土している。18世紀末～19世紀半ば。

SD-9 (第4図)

T-23区で検出された南北方向に延びる溝である。幅1.8m、深さ36cmを測る。遺物は土師器の鍋・皿等の破片が出土している。18世紀以降。

SD-10 (第4図)

R-23区で検出された溝である。近現代の掘削により溝の底部のみ検出された。SD-4を掘り込んで作られており、西壁から5m程で消滅する。埋土は破碎貝の混土層で遺物は須恵器の甕、土師器の鍋・皿等が出土している。18～19世紀頃。

SD-11 (第4図)

S-24区で検出された溝で、底部5cm前後残るのみであった。土師器の鍋の破片が出土している。18世紀以降。

SD-12 (第4図)

S-22区で検出された浅い皿形の溝である。幅は1.3m、深さは20cm程である。遺物は土師器の鍋・皿、瀬戸美濃産の陶器の植木鉢片等が出土している。18世紀末～19世紀頃。

SD-13 (第4図)

R・S-22・23区で検出されたコの字形に屈曲する溝である。溝で囲まれた範囲からは柱穴痕の残る土坑が2基検出されたが、いずれも掘立柱建物や柵列のように並ぶ状況は確認できない。溝の断面はU字形で幅40～50cm、深さ20cmを測る。19世紀前半。

SD-14 (第4図)

R-23区内のSD-13によって区画された内部から検出された溝である。L字形に屈曲する。幅30cm、深さは10cm程である。遺物は土師器の破片が出土している。時期不明。

D. 土坑

土坑には柱穴、廃棄土坑などがある。調査区の東側、傾斜の高い位置に多く検出された。このうち主なものを抽出し、掲載した。遺構の時期はそれぞれ異なるが、おおむね15～16世紀と19世紀に集中している。

SK-1 (第6図)

Q・R-24区で検出された隅丸長方形の土坑である。深さ15cm前後の浅い土坑で断面は皿形を呈する。土師器が少量出土している。15～16世紀か。

SK-2 (第6図)

Q-25区の調査区端で検出された土坑である。正確な形状は不明であるが、おおよそ隅丸方形で、深さは10cm程度の浅い皿状の遺構である。竪穴住居の可能性もあるが、山茶碗を素材とする陶製円盤が1点出土したのみで、柱穴も検出されなかったことから土坑とした。時期不明。

SK-3 (第7図)

R-24区で検出された大型の土坑で、SD-4を壊して掘り込まれている。平面形は楕円形を呈し、深さ20～25cm程の皿型で、遺物が多数出土した。15～16世紀。

SK-4 (第7図)

S-24区で検出された大型の土坑である。平面形は楕円形。深さが40cm程で断面形は皿形を呈する。土坑の東端部に木材が浅く刺さった状況で出土したが、整列せず判然としない。出土遺物は多様であるが、完形品がわずかであることから廃棄土坑であろう。19世紀。

SK-5 (第7図)

R-23区で検出された土坑である。深さ45cm程の大型の土坑である。断面が半円形の土坑で、重なるSD-13と同時期かそれ以降に存在したと考えられる。遺物は陶器の播鉢・植木鉢・火鉢等の破片が出土している。19世紀。

SK-6 (第7図)

S-24区で検出された楕円形の土坑である。平面形が近接するSK-4に類似しており、同様の廃棄土坑と推定されるが、遺物が出土しなかったため、遺構の性格や時期は不明。

SK-7 (第7図)

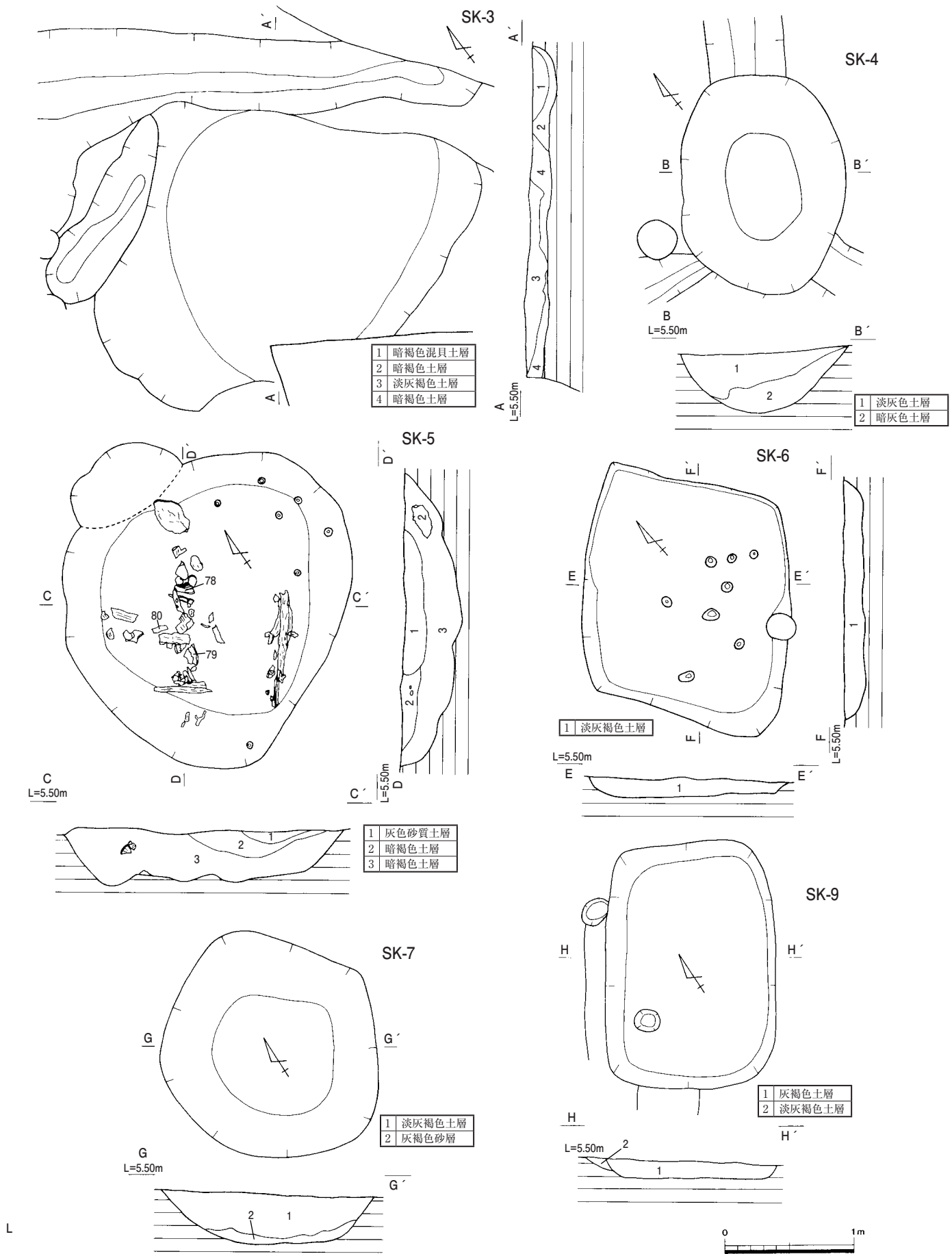
S-24区で検出された円形の土坑である。断面形は皿形を呈している。埋土に拇指頭大～拳大の礫が多く含まれていた。遺物が出土していないため、遺構の性格や時期は不明。

SK-8 (第7図)

S-24区の調査区東壁で検出された土坑である。近世の貝層を掘り込んで作られている。下部の埋土はハマグリ純貝層である。遺物は土師皿や内耳鍋、近世陶器等の破片が出土した。19世紀以降。

SK-9 (第7図)

T-23区で検出された長方形の土坑である。断面形は浅い皿形で、埋土はしまりのない砂質土層であった。染付茶碗の破片の他、土師器の皿が出土した。19世紀。



第7図 境松 A区遺構平面図3 (1 / 40)

E. 貝層

貝層は遺構検出面の上部に存在する近世以降の整地土中に確認された。正確な貝層分布範囲は不明であるが、調査区南東壁面全体に確認できることから、近代以降の整地層であると考えられる。このような状況は牟呂坂津地区をはじめ豊橋市の各地で確認されており、先述した溝内部に破碎貝を埋める状況と同じく、貝殻の再利用に強い関心があったことが認められる。調査段階での残存部は調査区壁付近に最長1m程度で、最も残りが良い箇所から40cmをサンプリングした。貝層はハマグリを主体としカキやナなどの貝類が含まれる混土貝層を上層、ハマグリ破碎貝を中心とした混貝土層が下層となる2層からなる。遺物は近世陶器、土師器の皿、内耳鍋、釘等が出土している。18世紀末～19世紀。

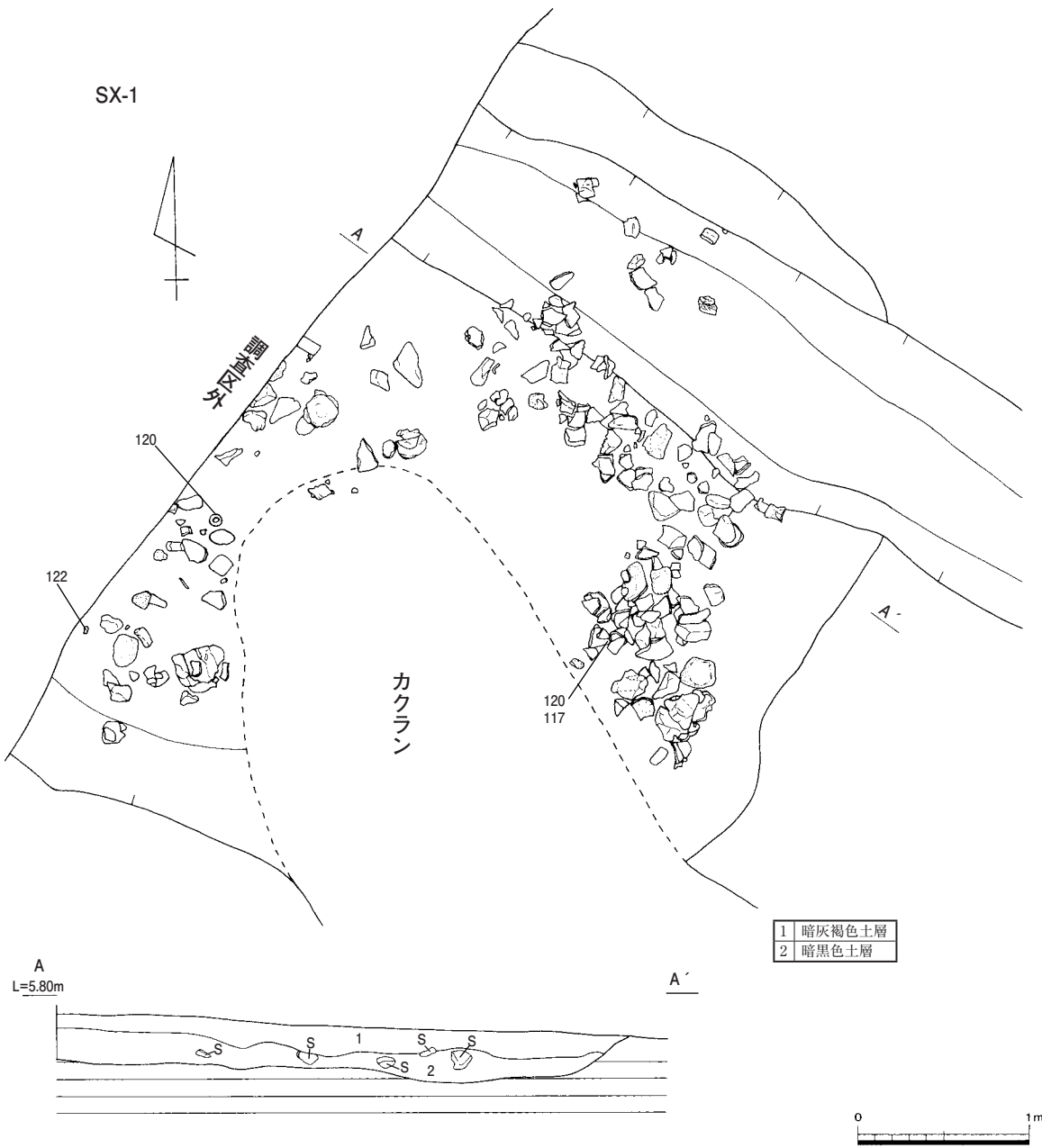
F. 井戸（第4図）

井戸は調査区全体で5ヶ所確認されたが一括して掲載する。当調査区では検出面から1.5mを超える深さの造成に伴う掘削が行われなかったため、調査の安全性を考慮し、井戸の掘削は検出面から約1mで中止している。平面形はSE-1とSE-2は不定形な円形であるのに対し、それ以外は整った円形である。SE-1～3の埋土はしまりの弱い砂質土層が主体であったが、SE-4は周辺にハマグリの殻を敷き詰め中心に土層と礫を含んだ土が交互に埋められていた。SE-5には海岸の砂の様な粒子が細かく均一な砂が敷き詰めてあった。遺物が出土したのはSE-1とSE-2で、SE-1からは土師器の皿や瓦、陶器の大型甕、瓦質土器、磁器の染付茶碗等が多数出土している。SE-2からは磁器の染付茶碗や近世陶器の小破片が出土した。SE-3は人頭大の礫が2個体出土し、その片方に赤色塗料が塗られていたため、現代に埋められたと考えられる。SE-1・2は19世紀、それ以外は近代以降か。

G. 不明遺構（第8図）

SX-1

S-22区の調査区壁付近で検出された大型の土坑である。調査区の境で検出されたため、半面は未調査である。加えて近現代の攪乱により全体の形状は不明であるが、不整円形をした浅い皿状の遺構と推定される。深さは15cmを測り、埋土は黒褐色の砂質土層で、拳大の礫や遺物を多く包含する。遺物は古墳時代初頭と推定される。土師器と磨石が出土している。遺構の形状と土器の出土量から堅穴建物の可能性があるが、平面形態が判然としない点、柱穴となりうる土坑が検出できなかった点などから不明遺構とした。3世紀後半、狭間Ⅲ式期か。



第8図 境松 A 区遺構平面図 4 (1 / 40)

2. 遺物 (第9～14図)

弥生時代から近世にかけての遺物が出土した。調査区内出土遺物の主体時期は3世紀末～4世紀初頭、15～17世紀、18世紀以降に大きく分けられ、各時期に伴う土師器、陶磁器、瓦、石器、銭貨、鉄製品、木製品、貝殻等が出土している。出土遺物の総量は収納用コンテナ(34×54×20cm)9箱分である。

SB-2 (第9図)

1は柱穴から出土したくの字形内耳鍋である。器形は半球状で、口縁部は肥厚し、端部に弱く括れた面を作り出している。調整は内面が横ナデ、外面は口縁部付近までは横ナデ、胴部から底部にかけてはハケ後ナデ、底部はヘラ削りと分けられている。外面は胴部を中心に煤が付着している。15～16世紀。

SB-4 (第9図)

2は柱穴から出土した土師器鍋の破片である。胴部と底部の境にヘラ削りによる稜を作り出している。内面は板ナデ、外面はヘラ削り後、指ナデが施されている。外面底部には煤が付着している。

SA-1 (第9図)

3・4は土師器鍋の胴部から底部にかけての破片である。内面は板ナデ後、ハケ、外面はハケの後ナデられている。2点は同一個体と考えられる。16世紀以降。

SD-1 (第9図)

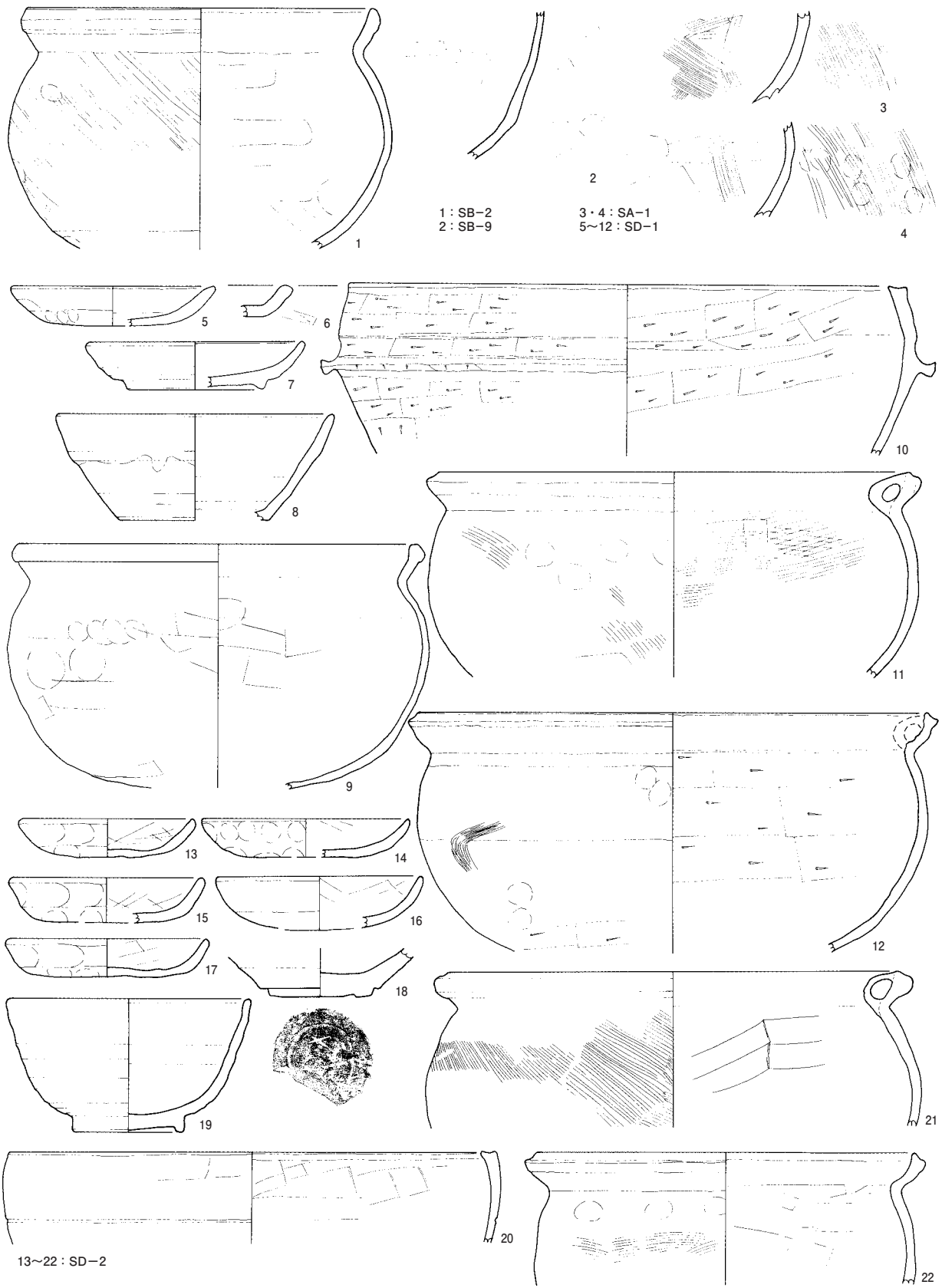
5～7は皿である。5は土師器、6は須恵器、7は陶器である。5は口縁部内面を面取りしている。6は混入品であろう。7は白釉が施されている。8は陶器の平碗である。内面及び外面口縁部に灰釉が施されている。9・11・12は土師器のくの字形内耳鍋である。内面は板ナデ、外面はヘラ削り後ナデである。いずれも外面胴部以下に煤が付着している。10は土師器の羽付鍋である。口縁部が内傾し端部が肥厚している。内面は板ナデ、外面はヘラ削り後横ナデで、鏝を貼付するために施された指ナデにより胴部の鏝周辺が薄くなっている。

SD-2 (第9図)

13～17は土師器の皿である。いずれも手づくねで成形され、内面をナデて仕上げられている。16は内面全体に煤が付着していることから、灯明皿に転用されたものであろう。18・19は陶器の碗である。18は碗の底部で、内面は灰釉が塗られ、一部目積により釉薬がはがれている。底部は削り出し高台で、底面には窯印と思われる線が刻まれている。19は削り出し高台の丸碗で、内外面ともに鉄釉が施されている。20は口縁部が逆ハの字形にひらく土師器の内耳鍋である。外面胴部に一条の沈線が入る。内面は板ナデ調整、外面は全面に煤が付着している。21・22は土師器のくの字形内耳鍋である。内面は板ナデ調整、外面はハケ目またはナデ調整が施されている。

SD-3 (第10図)

23は弥生土器もしくは土師器の高坏の脚部である。混入品で、周辺の状況から、弥生時代終末～古墳時代初頭のものであろう。24は土師器の皿である。手づくねで内外面ともにナデられている。25は



第9図 境松 A 区遺物実測図 1 (1/3)

陶器の天目茶碗で、内外面ともに灰釉が施釉されているが、外面底部周辺には釉薬は塗られていない。26は陶器の壺の底部で外面には灰釉が施釉されている。底部には糸切痕が残る。27は土師器のくの字形内耳鍋である。外部にはハケ目が施されている。

SD-6 (第10図)

28は陶製円盤である。渥美産と考えられる皿を転用し、底部周辺を打欠いて成形している。裏面は糸切痕が残り、表面には部分的に煤の付着が確認できる。灯明皿として利用された可能性がある。

SD-7 (第10図)

29は陶器の型押皿の菊皿である。内外面ともに灰釉が施釉されている。30～32は土師器の羽付釜である。いずれも直立する口縁部を持ち、胴部は半球状になる。鏝は断面三角形で、張出し部は小型化している。内外面ともに調整はナデである。

SD-8 (第10図)

33～36は土師器の皿である。手づくねで、内面はナデ調整である。33は底部底面に墨書痕が薄く残る。記号であろうが内容は不明である。37は陶器の菊皿である。回転ケズリ後、全体的に長石釉がかかるが、外面の高台付近は無釉である。口縁部の一部に緑釉が施されている。38・39は陶器の緑釉丸碗である。いずれも付高台で内外面に施釉されている。40は磁器の染付柳茶碗である。41は陶器の筒形香炉の底部である。側面に花卉文がつき、底部には糸切痕が残る。42は陶器の焜炉の底部である。内外面ともに板ナデ調整で、内面には煤が付着している。43は土師器の焙烙である。体部から緩やかに立ちあがる口縁はわずかに内弯し、端部にはへこみがある。調整は内面がヘラケズリ後ナデ、外面は体部がヘラケズリ、口縁部が指ナデである。44は土師器の内耳鍋の口縁部である。羽付きで全体的に厚い。内外面ともにヘラケズリだが耳部は外部から押さえられている。45は陶器の甕である。内外面ともにケズリ調整である。46・47は石器である。46は側面に微細剥離痕がある剥片で、石材は流紋岩である。47は原礫面を残したチャートの剥片である。2点とも詳細時期は不明で、混入品である。

SD-10 (第11図)

48～50は土師器の皿である。いずれも手づくねで内面は指ナデか板ナデ調整である。

SD-12 (第11図)

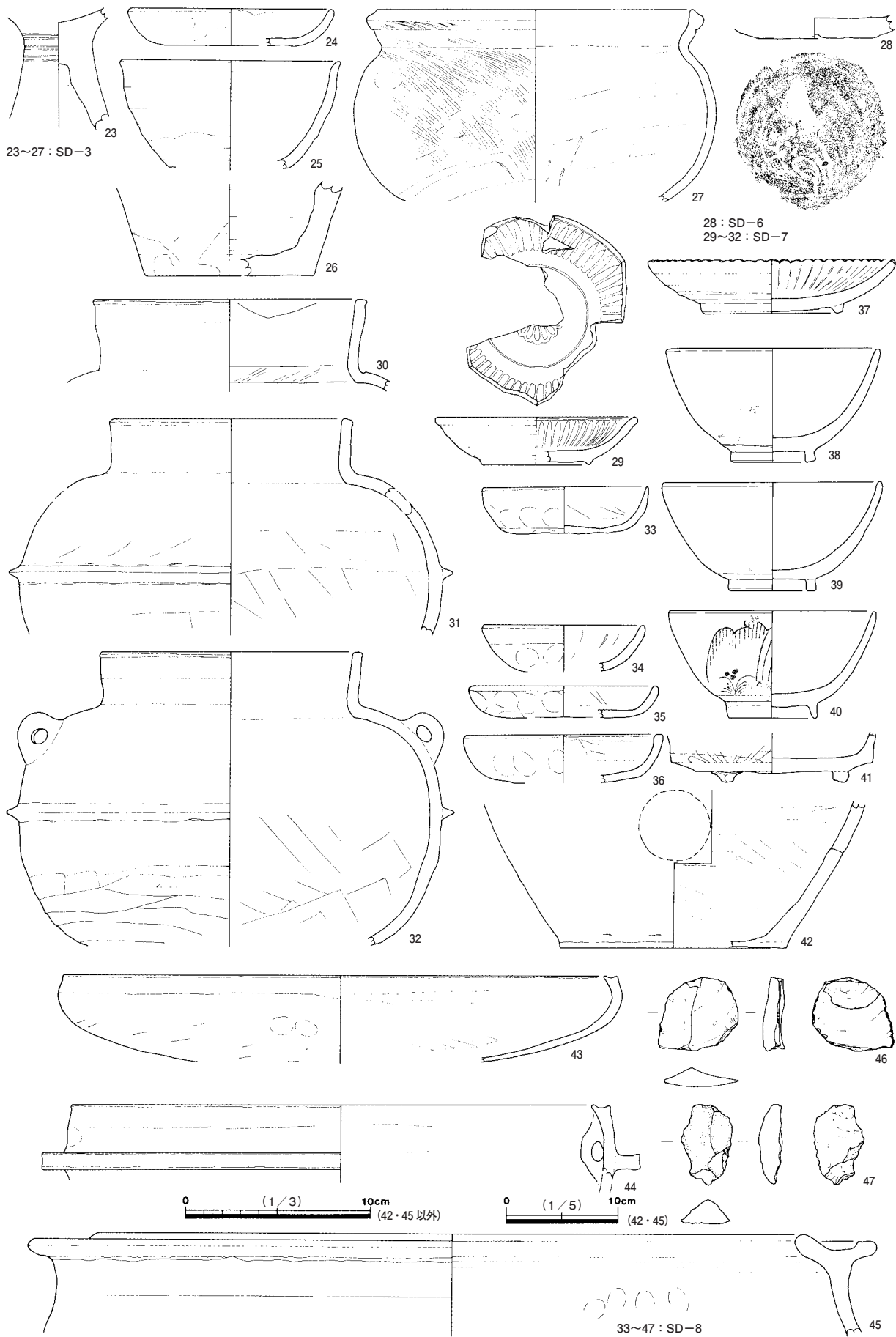
51は土師器の皿である。手づくねで内面はナデ調整である。52は陶器の鉢である。口縁端部に面を持ち、胴部がわずかに外反する。鉄釉が施釉されている。53は逆ハの字形になる土師器の内耳鍋である。口縁端部は肥厚し、上端にへこみを持つ。内外面ともに板ナデで、外面は全体に煤が付着している。

SD-13 (第11図)

54は陶器の掛分茶碗である。口縁部は灰釉、胴部から底部にかけて鉄釉が施釉されている。55～57は磁器の碗である。55は胴部は緩やかに弯曲し、高台の端部が薄くなる。56～60は陶器である。56・57は広東碗である。56の胴部は緩やかに弯曲するが、57の胴部は直線的が直線的に延びる。58は筒形湯呑、59は香炉である。香炉の内部には灰色の砂粒が硬質化して付着している。60は播鉢である。口縁部は段を持ち肥厚する。

SK-1 (第11図)

61は土師器の伊勢型鍋、62は土師器の鍋である。いずれも口縁部のみの小破片である。



第10図 境松 A 区遺物実測図2 (1/3・1/5)

SK-2 (第11図)

63は陶製円盤である。15世紀の緑釉小皿の胴部を内面方向から折り取り形成している。内面中央に板ナデとトチンの痕跡が残り、底面には回転糸切痕がある。

SK-3 (第11図)

64～66は土師器の皿である。いずれも手づくねで内面をナデている。67は陶器の天目茶碗である。内外面ともに鉄釉がかかる。68～72は土師器のくの字形口縁内耳鍋である。いずれも胴部と底部を板ナデ等によって区別されていて、内外面ともにヘラによる成形後に、指オサエやナデ調整を施されている。器形は70・71のように器高が高く半球状になるものと、68・69・72のように器高が低くつぶれた形になるものがある。

SK-4 (第12図・写真図版26)

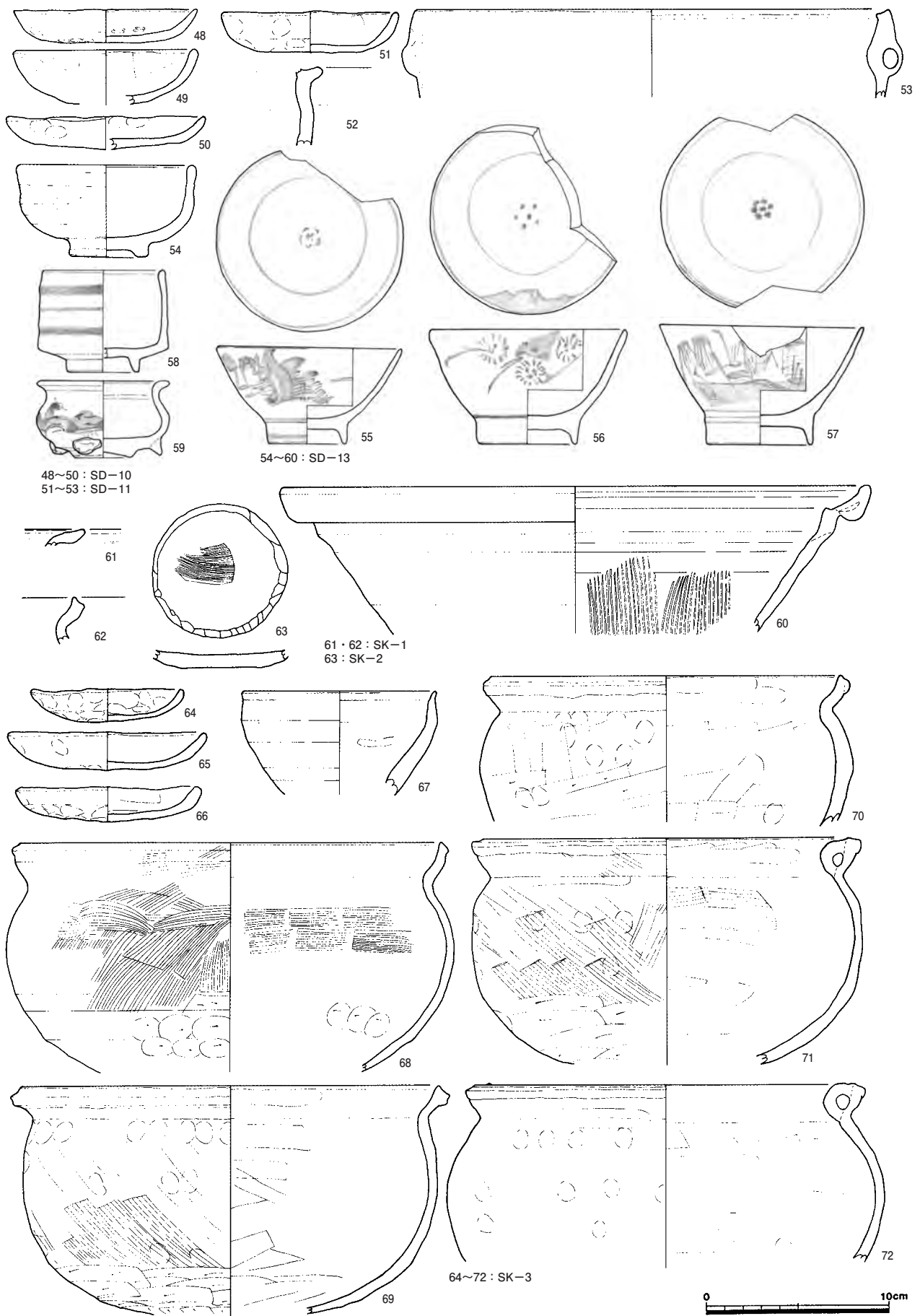
73は陶器の灯明受皿、74は陶器の灯明皿である。いずれも回転ロクロ成形で、内面及び外面口縁部付近に錆釉が施釉されている。75は磁器の端反碗、76は磁器の染付広東碗である。登窯第9小期頃か。77は陶器の箱形湯呑茶碗である。78は陶器の鉢である。楕円形にゆがんでおり、口縁端部には指オサエによる凹みがある。79は陶器の甕である。内外面に回転ケズリ、ヘラケズリが見られる。口縁部及び内面には白色の付着物が確認できる。常滑産。80～82は石器である。80は石臼である。砂岩製の上臼で、側面に長方形の切り込みがある。使用面に回転線条痕が残っていることから碾臼であるが、粉を挽く「目」となる溝が見られない。また器高が揃っておらず不定形である。81は黒色片岩製の砥石である。長方形で3面に使用面を持つ。表面の線条痕は縦軸に並行して長く延びるが、裏面は横方向に細かい刻み目のような線条痕を残す。82はチャートの剥片である。不定形で打点付近に微細剥離が認められる。同遺構から同じようなチャート製剥片が他に4点出土しており、火打石の破片と推測される。83は寛永通宝である。風化が著しく、読みとれる文字は「寛」と「永」の二文字である。裏面には「文」の字がある。84～88は鉄製品である。84は鎌である。全体に錆が付着しており原形は不明である。85は釘で、断面は四角形である。86は逆刺の様なものが延びる。87・88は平釘であろう。89～93は木器及び材である。89は穿孔された材である。90は蓋である。把手、あるいは、つまみが貼りつけてあったと推定されるが痕跡は不明瞭である。91・92は下駄で、91は女物、92は男物である。93は木製の椀に塗られていた漆の部分のみが残ったものである。底部には「申」と書かれている。表皮のみでもろいため、図化はせず写真のみの報告である(写真図版26)。この他にも掲載はしなかったが、材と思われる木片や木板が出土している。また土坑に刺さって出土した材も保存状態が悪く、明瞭な加工痕は見られなかったため図化していない。

SK-9 (第13図)

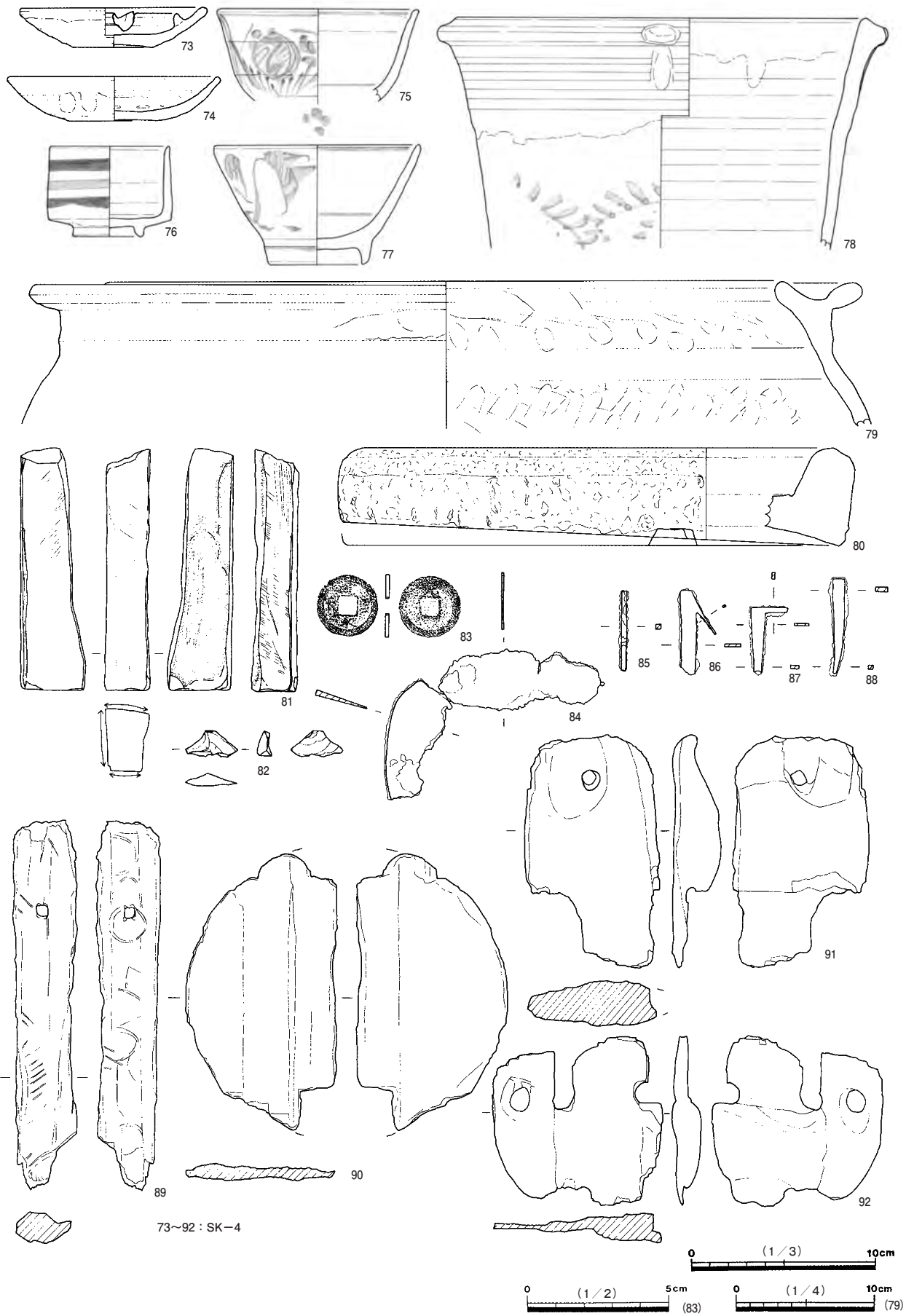
94・95は土師器の皿である。両方ともに手づくね成形で内面は板ナデしている。94は底部の一部が肥厚しているが、中心からは少々ずれている。95は底面が平坦で内面に煤が付着している。

貝層 (第13図)

96・97は土師器の皿である。手づくね成形の後、内面を板ナデしている。いずれも内面中央部が膨らむが、96は中央の膨らみが顕著である。98は磁器の碗である。99～102は土師器の内耳鍋である。99・100は逆ハの字に開く内耳鍋で、100は内湾している。101・102はくの字形口縁の内耳鍋である。



第11図 境松 A 区遺物実測図3 (1/3)



第12図 境松 A 区遺物実測図 4 (1 / 2 · 1 / 3 · 1 / 4)

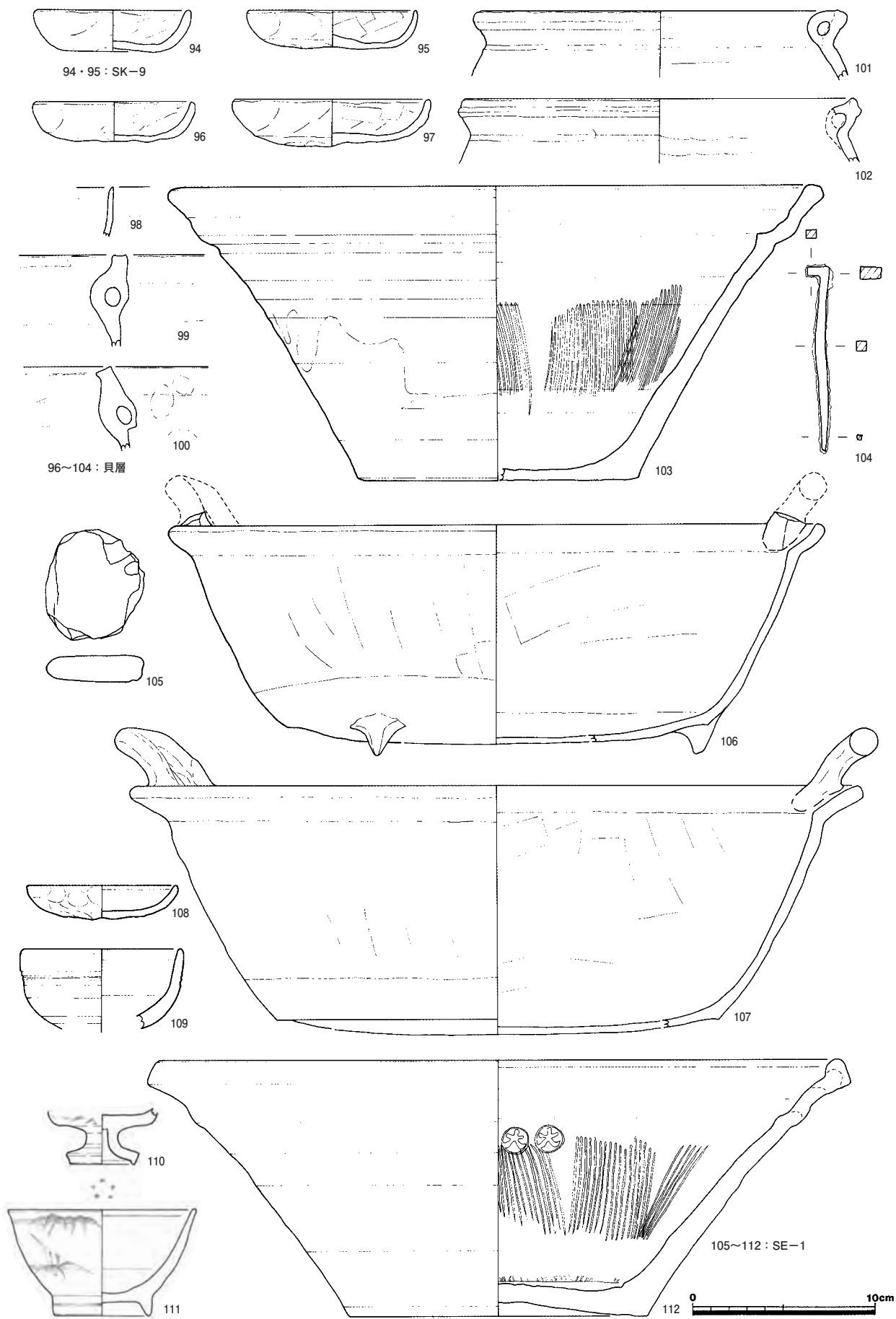
いずれも調整は内外面ともにヘラケズリの後に指ナデである。103は陶器の播鉢である。頸部で段がつき、口縁部はくびれを付けながら直線的に延びる。内面は使用が激しく、底面付近の櫛目は削れてなくなっている。104は釘である。先端はL字曲がり、断面はほぼ正方形である。

SE-1 (第13図)

105は土製円盤である。表裏面ともに摩滅している。平瓦の転用品と考えられる。106・107は瓦質の把付鍋である。同様の遺物は4個体出土し、すべて底面は緩く弯曲した平底である。106のように底面に脚が有るものと、107のように脚が無いものがそれぞれ2点ずつ出土している。口縁部は106のみ受口状になっているが、その他は直線的に開く。内外面ともにヘラケズリで、外面は煤が全体的に付着している。108は土師器の皿である。内面中央部は平坦で、内面全体に煤が付着している。手づくね成形で内面は指ナデである。109は陶器の碗である。胴部外面には3本の沈線があり、内面から上の沈線までに灰釉、下の沈線から底部までが鉄釉が施釉されている。110は陶器の灰釉仏用具である。111は陶器の染付広東碗である。胴部はわずかに丸みを帯び、口縁部がわずかに外反する。112は陶器の播鉢である。胴部は直線的に延び、頸部の段は緩やかに張る程度である。口縁端部は内面側に肥厚し受口状になっている。内面は底部周辺が使用によりカキ目が消えている。

SX-1 (第14図)

113～129は土師器である。113は広口壺の口縁部である。口縁端部が垂下するが、全体が著しく摩滅しているため文様等は不明である。胎土や摩滅状況などが同一遺構内の他の遺物と異なることから、混入の可能性がある。114は器台の口縁部である。段を有し口縁端部は外反している。全体に摩滅しているが、外面は横ナデである。115は二重口縁壺の口縁部である。口縁端部に面を持ち受口状になっている。内外面ともにナデ調整であり、内面の一部には赤彩と思われる薄紅色の痕跡が残る。116・117は広口壺の口縁部である。外反した口縁端部には面があり、受口状口縁になっている。117は口縁端部に面を持たず、欠損部は輪積が剥がれたような痕跡が残る。いずれもナデ調整である。118・119は鉢である。118は平底で、器形はやや内弯気味である。119は胴部が口縁部より張り出す下膨れの器形をしている。口縁部は外反し、内面には接合痕跡が残る。胎土には大きな鉾物は含まれず、きめ細かい。全体にナデ調整されている。120は丸底甕である。くの字形口縁で底部には窪みを有する。外面の一部ハケ調整が残る。121はくの字形口縁の甕である。内外面ともに板ナデで、外面の一部には煤が付着している。122・123はミニチュア土器である。122は小型壺で、体部は球体で口縁部が直線的に外反する。内外面ともに指ナデで精巧に作られている。123は小型鉢である。122に比べ粗雑で、口縁部の高さ、厚さが一定でない。粘土塊を押し潰した後、口縁部をつまみあげて成形している。124～127は壺もしくは甕の底部である。124・126は丸底で、125・127は平底である。124～126は底部から直接立ち上がるが、127は段がつくため広口壺の底部と考えられる。128・129は台付甕の脚部である。128は器厚が薄く、摩滅が著しい。130は砂岩の磨石である。表面中央と角端部に弱い使用痕が確認できる。119と128以外の土器は、2～3mmの長石や石英が多く含まれ、ナデられた器面も粗い。SX-1の土器は二重口縁の壺やミニチュア土器が出土していること、また台付甕よりも平底甕や丸底甕が多く見られることから、古墳時代初頭・狭間Ⅲ式期の遺構と考えられる。



第13図 境松 A 区遺物実測図5 (1 / 3)

包含層（第14図）

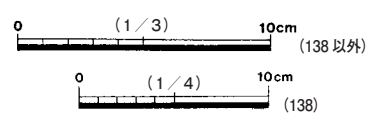
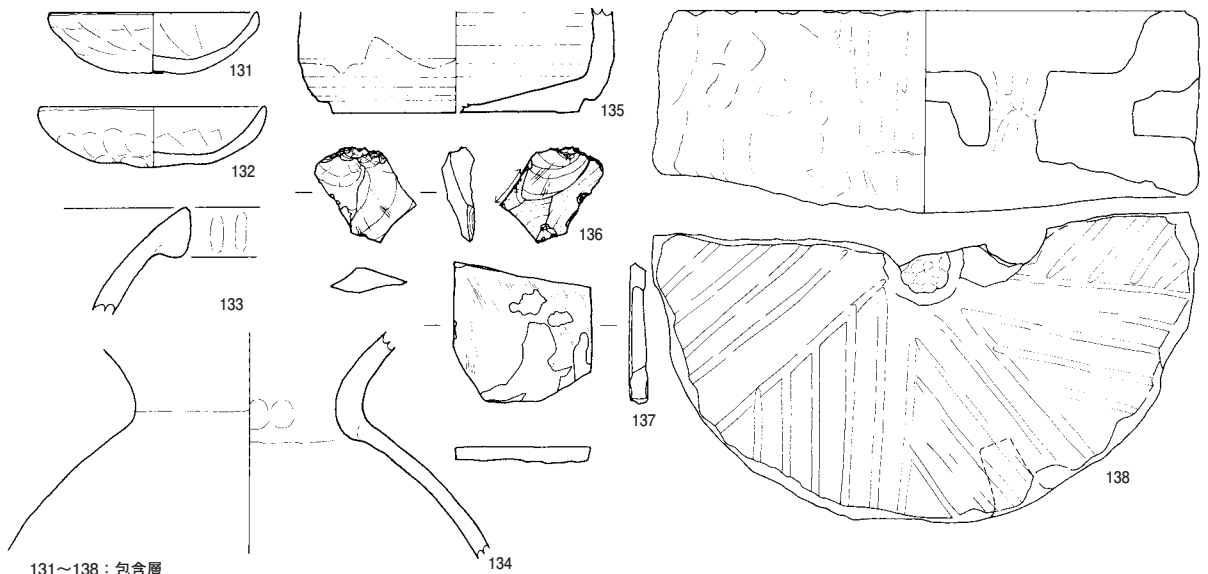
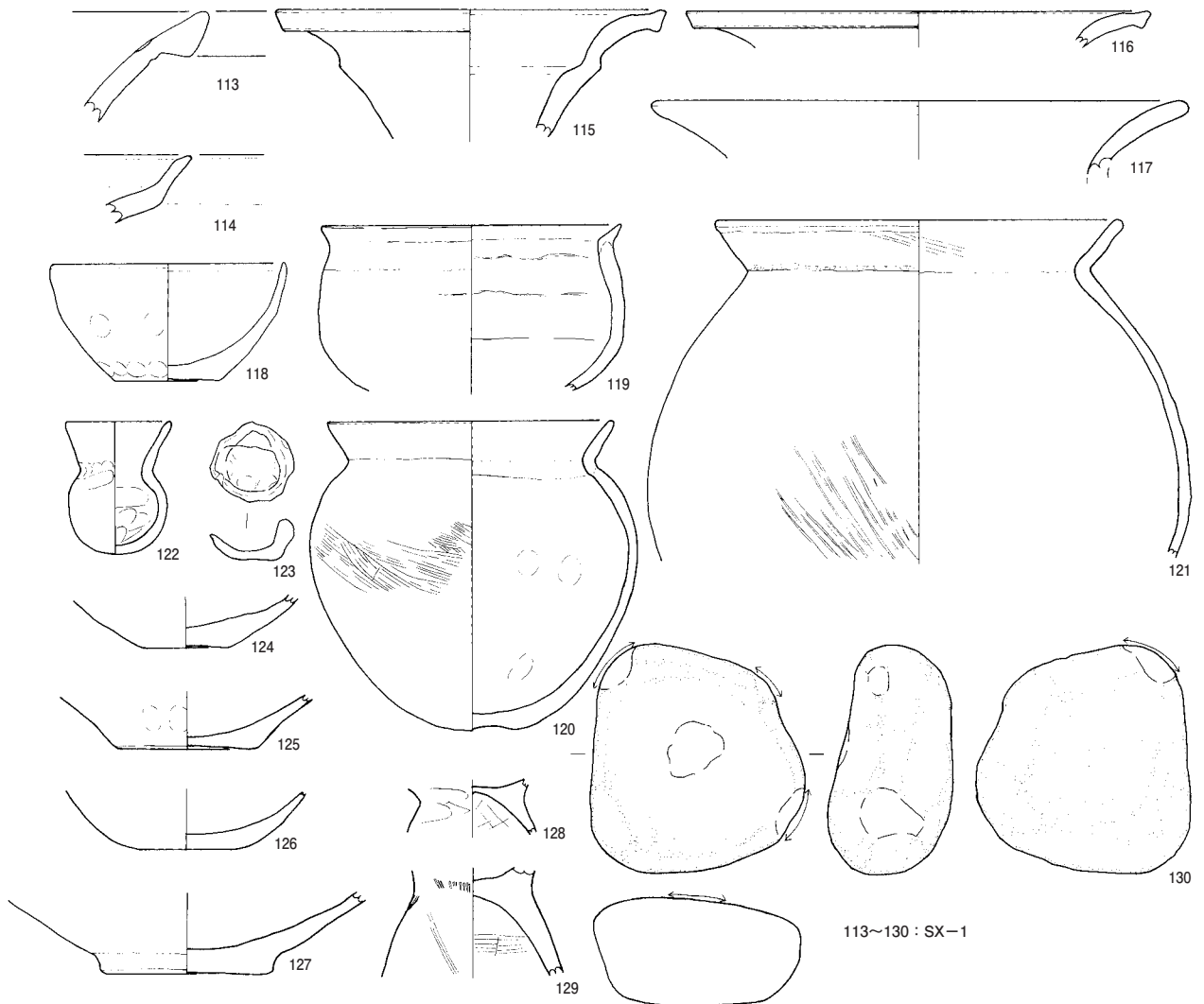
重機による表土掘削時もしくは遺構検出時に出土し、基本層序中の出土層が明確なものを掲載した。図化したもの以外にも15世紀以降の土器小破片が多く出土している。

131・132は土師器の皿である。いずれも手づくね成形で内面が板ナデである。131は内面中央部が膨らむ。133・134は土師器の広口壺である。S X - 1の近辺で出土したことからS X - 1に伴う可能性が高い。胎土、摩滅の状況が113と類似する。同一個体であろうが接合しなかった。133は口縁部で垂下する端部の面に棒状の刻み目がある。134は頸部から胴部かけての破片である。胴部よりも頸部から口縁部にかけての器厚が厚くなっている。135は陶器の鉢である。底部片で回転ケズリの後、灰釉が施釉される。底部は削り出し高台で、底面には糸切痕が残る。すべて第Ⅲ層から出土した。136～138は石器である。136はサヌカイトの剥片である。打点付近には複数の剥離痕があり、裏面には素材面が確認できる。側面には微細剥離痕が残る。出土地点はS K - 4から東壁に向かって約3mの地点で、出土層位は第Ⅴ層である。137は凝灰岩の砥石である。断面長方形の薄い板状を呈している。裏面は剥落しているが、表面には斜方向と縦方向の線条痕が明瞭に残る。出土層位は第Ⅲ層である。138は石臼である。砂岩製の白で、「目」は八分画に区切られている。

3. 小結

A調査区は、境松遺跡第二次調査の1地点目に相当する。境松遺跡は第一次調査において、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に弥生時代末～古墳時代初頭にかけての時期に主体をおき、A調査区においても、同時期の遺構及び遺物が発見されることが期待された。しかし、調査の結果はS X - 1を除き、16世紀以降の遺構群が主体を占める状況にあり、それらの他時期の遺構においても、古墳時代以前の遺物の混入は稀薄であった。また、A調査区の位置は遺跡範囲の南東端部にあたり、遺跡の主要部である台地から標高が4m以上下がった場所にある。以上のような遺構・遺物の状況や立地的条件に加え、後述する台地上のC・D調査区の状況と考え合わせると、S X - 1が古墳時代前期における遺跡範囲の南限である可能性がある。

A調査区で主体となる時期は16世紀以降である。主要遺構は2棟確認された掘立柱建物で、軸方向や規模、建築位置等が類似することから、建て替えか同時期に存在したものと考えられる。調査区自体は南東方向に緩やかな傾斜をしているが、掘立柱建物の周囲はほぼ平坦面であることから、傾斜がなくなる台地のふもとに16世紀頃の居住域があったと推定される。こうした状況は近世以降も続き、傾斜方向に沿って複数掘られた溝や、井戸、廃棄土坑、貝層による整地等、人の営みが確認できる遺構が複数検出された。A調査区の範囲では一部しか確認できなかったが、かなりの広範囲に近世の集落が広がっていると想定される。



第14图 境松 A 区遗物实测图6 (1/3 · 1/4)

第1表 境松遺跡A区遺物観察表

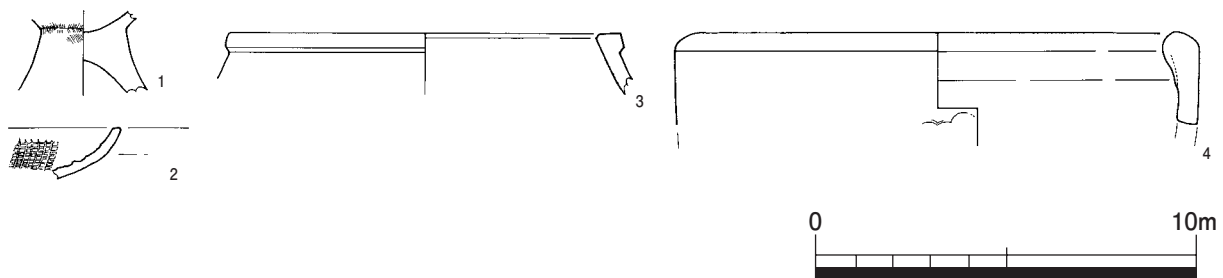
遺物No.	遺構名	分類	器種		時期	法量 (cm)			残存率	胎土		焼成	色調		調整等・備考
						口径/長さ	器高/幅	底形/厚さ		石材	釉		内面	外面	
1	SB-2 (P7)	土師器	鍋	内耳鍋	15~16世紀				20%	密	良好	にぶい黄橙	10YR6/3		
2	SB-3 (P4)	土師器	鍋						5%	密	良好	明黄褐	10YR6/8		
3	SA-1 (P3)	土師器	鍋		16世紀以降				1%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2		
4	SA-1 (P4)	土師器	鍋		16世紀以降				1%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2		
5	SD-1	土師器	皿		16世紀以降	106	25		30%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3	指ナデ、口縁部面取り	
6	SD-1	須恵器	皿						5%	密	良好	灰白色	2.5Y7/1	回転ナデ、糸切り痕有り	
7	SD-1	陶器	皿			11.4	2.5	7.2	20%	密	良好	淡黄	2.5Y8/4		
8	SD-1	陶器	碗	平碗		14.4	(5.5)		10%	密	良好	灰白	2.5Y7/1		
9	SD-1	土師器	鍋	内耳鍋	15世紀後半~16世紀	22.0			20%	密	やや良	浅黄橙	10YR8/3	内面：ケズリ後板ナデ 外面ケズリ後ナデ、ハケメほぼなし	
10	SD-1	土師器	鍋	羽付鍋	15世紀末~17世紀初頭	29.0			20%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	回転ケズリ後ナデ	
11	SD-1	土師器	鍋	内耳鍋		25.6	10.6		30%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3		
12	SD-1	土師器	鍋	内耳鍋	15世紀後半~16世紀	37.4	12.4		20%	密	やや良	灰白	2.5Y8/1	内面：ケズリ後板ナデ 外面ケズリ後ナデ、ハケメほぼなし	
13	SD-2	土師器	皿				9.2	2.0	30%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3		
14	SD-2	土師器	皿				10.2	2.8	30%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3		
15	SD-2	土師器	皿				10.6	2.0	60%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4		
16	SD-2	土師器	皿	灯明皿		10.8	2.0		30%	密	良好	橙	7.5YR7/6	内面に煤付着	
17	SD-2	土師器	皿				10.8	(2.7)	25%	密	良好	灰白	10YR8/2		
18	SD-2	陶器	碗				(2.6)	5.6	10%	密	良好	浅黄	2.5Y7/3		
19	SD-2	陶器	碗	丸碗	17世紀		12.8	6.9	5.8	密	良好	灰白	5Y8/1	鉄釉	
20	SD-2	土師器	碗	内耳碗		25.4	(4.7)		5%	密	良好	にぶい黄橙	10YR6/4		
21	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋	15世紀後半~16世紀	24.8	(8.4)		20%	密	良好	灰白	2.5Y8/2	ハケメ・板ナデ	
22	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋			20.8	(6.9)	10%	密	良好	淡黄	2.5Y8/3		
23	SD-3	疑土器/土師器	高坏						5%	やや粗	やや良	橙	7.5YR6/6		
24	SD-3	土師器	皿				11.2	2.0	20%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2		
25	SD-3	陶器	碗	天目茶碗								灰黄	2.5Y7/2		
26	SD-3	陶器	壺				(5.1)	9.2	5%	密	良好	浅黄	2.5 Y 7/4		
27	SD-3	土師器	鍋	内耳鍋			18.3	10.4	20%	密	良好	灰白	2.5Y8/2		
28	SD-6	陶器	陶製円盤				1.2	6.8	100%	密	良好	黄灰	2.5Y6/1	煤付着	
29	SD-7	陶器	皿	菊皿	18世紀前半	11.0	2.6	6.2	40%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3		
30	SD-7	土師器	鍋	羽付釜		14.8	(4.8)		5%	密	良好	灰白	2.5Y8/2		
31	SD-7	土師器	鍋	羽付釜		13.2	(11.7)		10%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3		
32	SD-7	土師器	鍋	羽付釜		14.2	(15.9)		20%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3		
33	SD-8	土師器	皿			9.1	2.6	5.6	100%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3	裏面に墨書痕あり	
34	SD-8	土師器	皿			8.8	(2.5)		20%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3		
35	SD-8	土師器	皿			10.2	(1.7)		20%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2		
36	SD-8	土師器	皿			10.8	(2.6)		20%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2		
37	SD-8	陶器	皿	菊皿	16世紀以降	13.4	2.9	7.8	30%	密	良好	灰白	2.5Y8/3		
38	SD-8	陶器	碗	丸碗		11.5	6.1	4.6	60%	密	良好	灰白	10YR8/1		
39	SD-8	陶器	碗	丸碗	19世紀前半	11.9	5.9	4.8	70%	密	やや良	灰白	10YR8/1		
40	SD-8	磁器	碗	染付柳茶碗	18世紀末~19世紀初頭	11.2	5.8	5.0	40%	密	良好	灰白	10Y8/1	肥前	
41	SD-8	陶器	香炉	筒型香炉	18世紀後半		(2.7)	11.2	10%	密	良好	黄橙	10YR8/6		
42	SD-8	陶器	焔炉				(13.4)	20.8	20%	やや粗	やや良	灰黄褐	10YR6/2		
43	SD-8	土師器	焙烙		18世紀半ば	30.6	(4.7)		10%	密	良好	明黄褐	10YR6/6	横ナデ	
44	SD-8	土師器	鍋	内耳鍋		29.2	(4.1)		3%	密	良好	にぶい黄橙	7.5YR7/4		
45	SD-8	土師器	甕				76.8	(9.0)	10%	やや粗	やや良	橙	7.5Y6/8		
46	SD-8	石器	UF			4.0	4.2	1.0		流紋岩		にぶい黄橙	10YR6/3		
47	SD-8	石器	剥片			4.3	2.7	1.3		チャート		黒褐	N2/1		
48	SD-10	土師器	皿			10.2	3.0		40%	密	良好	橙	5YR7/3	指ナデ	
49	SD-10	土師器	皿			10.1	1.2		30%	密	良好	橙	7.5YR7/6	指ナデ	
50	SD-10	土師器	皿			11.1	1.8		30%	密	良好	灰白	10YR8/2	指ナデ	
51	SD-12	土師器	皿			9.8	2.2		20%	密	良好	にぶい黄橙	10YR6/4	手づくね	
52	SD-12	陶器	鉢				(3.7)		1%	密	良好	淡黄	2.5Y8/4		
53	SD-12	土師器	鍋	内耳鍋		26.0	(4.7)		3%	密	良好	にぶい黄	7.5YR5/4	横ナデ耳部分外面指押え	
54	SD-13	陶器	碗	掛分茶碗	19世紀中頃	9.9	5.1	4.4	30%	密	良好	灰白	5Y7/2		
55	SD-13	磁器	碗	染付碗	19世紀中頃	10.2	5.3	4.3	80%	密	良好	灰白	5Y7/1		
56	SD-13	磁器	碗	広東碗	19世紀	10.8	6.3	5.3	70%	密	良好	灰白	5Y8/1		
57	SD-13	磁器	碗	広東碗	19世紀	11.1	5.8	6.5	80%	密	良好	灰白	5Y7/2		
58	SD-13	陶器	湯呑	筒形湯呑	19世紀中頃	6.1	5.6	4.0	40%	密	良好	淡黄	2.5Y7/2		
59	SD-13	磁器	香炉			7.2	3.0	4.2	80%	密	良好	灰白	5Y8/1	回転ナデ	
60	SD-13	陶器	鉢鉢		18世紀前半	35.0	8.1		10%	密	良好	淡黄	2.5Y8/4	回転ケズリ	
61	SK-1	土師器	鍋	伊勢型鍋	14世紀頃				1%	密	良好	灰白	2.5Y8/2	板ナデ	
62	SK-1	土師器	鍋						1%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3	ナデ	
63	SK-2	陶器	陶製円盤		15世紀頃	長さ7.4	幅7.4	厚さ0.7		密	良好	灰黄	2.5Y7/2	表面ケズリ痕、底部回転糸切り痕	
64	SK-3	土師器	皿			8.4	1.8		60%	密	良好	灰白	2.5Y8/1	指押え後ナデ 手づくね	
65	SK-3	土師器	皿			10.9	2.1		60%	密	良好	橙	5YR6/1		
66	SK-3	土師器	皿			10.3	1.4		30%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3		
67	SK-3	陶器	碗	天目茶碗	大室3後半	10.6			20%	密	良好	灰白	2.5Y8/1	鉄釉	
68	SK-3	土師器	鍋	内耳鍋	15世紀後半~16世紀	24.0	(12.6)		30%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3	内面ハケ後ナデ、外面ハケメ	

69	SK-3	土師器	鍋	内耳鍋		24.5	(13.7)			30%	密	良好	浅黄橙	10YR8/3	
70	SK-3	土師器	鍋	内耳鍋		20.2	(8.4)			20%	密	良好	灰白	7.5YR8/2	
71	SK-3	土師器	鍋	内耳鍋		21.4	(12.4)			20%	密	良好	浅黄橙	7.5YR8/3	内外面ハケ目、口縁部横ナデ 外面煤付着
72	SK-3	土師器	鍋	内耳鍋		21.8	(9.6)			5%	密	良好	橙色	7.5YR6/6	内面板ナデ・外面指ナデ 外面煤付着
73	SK-4	陶器	皿	灯明受皿		10.2	2.2	4.4		70%	密	良好	灰褐	7.5YR6/1	
74	SK-4	陶器	皿	灯明皿		11.6	2.4	5.0		70%	密	良好	灰褐	7.5YR6/1	
75	SK-4	磁器	碗	菊反碗		10.9	(4.9)			60%	密	良好	灰白	5Y8/1	
76	SK-4	磁器	碗	夾付広東碗	登室第9小期?	11.2	6.5	5.5		70%	密	良好	灰白	5Y8/2	
77	SK-4	磁器	湯呑	箱形湯呑茶碗		6.5	5.0	3.8		80%	密	良好	灰白	5Y8/2	
78	SK-4	陶器	鉢			24.4	(12.5)			10%	密	良好	淡黄	2.5Y8/4	
79	SK-4	陶器	甕			60.4	(10.4)			10%	密	良好	にぶい褐	7.5Y5/3	
80	SK-4	石器	石臼			28.2	5.4					砂岩			
81	SK-4	石器	砥石			(13.2)	2.5	3.5				黑色片岩			
82	SK-4	石器	剥片			1.4	2.8	0.8				チャート			火打石片か?
83	SK-4	古銭	寛永通宝												
84	SK-4	鉄製品	鎌			(8.1)	(12.1)	0.1		30%					
85	SK-4	鉄製品	釘			(4.3)	0.3	0.2							
86	SK-4	鉄製品				(4.7)	1.9	0.2							
87	SK-4	鉄製品	釘			(3.7)	2.0	0.2							
88	SK-4	鉄製品	釘			(5.4)	0.6	0.2							
89	SK-4	木器	材			(20.1)	3.4	(1.6)							
90	SK-4	木器	蓋			13.0	8.1	(0.8)							
91	SK-4	木器	下駄	女物		(12.6)	(7.1)	(2.6)							
92	SK-4	木器	下駄	男物		(9.2)	(9.3)	(1.6)							
93	SK-4	木器	碗	漆碗											写真のみ、「申」の文字
94	SK-9	土師器	皿			8.7	3.3			60%	密	良好	浅黄褐	7.5YR8/6	
95	SK-9	土師器	皿			9.0	2.2			60%	密	良好	灰黄	2.5Y6/2	
96	貝層	土師器	皿			7.4	2.1			60%	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	
97	貝層	土師器	皿			10.9	2.6			100%	密	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	
98	貝層	磁器	碗				(2.7)			1%	密	良好	灰白	5Y8/1	
99	貝層	土師器	鍋	内耳鍋			(5)			3%	密	良好	にぶい黄橙	10YR6/4	
100	貝層	土師器	鍋	内耳鍋			(4.6)			3%	密	良好	にぶい黄橙	10YR6/4	
101	貝層	土師器	鍋	内耳鍋		20.6	(3.8)			3%	密	良好	灰白	10YR8/2	
102	貝層	土師器	鍋	内耳鍋		22.1	(3.5)			3%	密	良好	浅黄橙	10YR8/4	
103	貝層	陶器	鉢	播鉢	18世紀末~19世紀初頭	36.0	16.1	15.4		25%	密	良好	浅黄	2.5Y7/4	
104	貝層	鉄製品	釘			10.4	0.6	0.5		90%					
105	SE-1	瓦質土器	土製円盤		近世	長さ 6	幅 5.4	厚さ 1.4			密	良好	灰		打欠後研磨
106	SE-1	瓦質土器	鍋	把手付鍋	近世	36.2	12.8	23.2		40%	密	良好	灰		
107	SE-1	瓦質土器	鍋	把手付鍋	近世	40.2	13.6	24.2		30%	密	良好	灰		
108	SE-1	土師器	皿			8.4	1.8			60%	密	良好	にぶい橙	7.5YR7/3	
109	SE-1	陶器	碗			8.6	(4.4)			20%	密	良好	淡黄	2.5Y8/3	
110	SE-1	磁器	仏器具				(2.7)	4.0			密	良好	灰白	2.5Y8/2	
111	SE-1	陶器	碗	広東碗	19世紀初頭	10.3	5	5.4		40%	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	
112	SE-1	陶器	鉢	播鉢	19世紀初頭	38.6	14.1	16.4		30%	密	良好	浅黄	2.5Y7/3	回転ケズリ
113	SX-1	土師器	壺	広口壺						1%	やや粗	やや不良	浅黄橙	10YR8/4	全体に磨減
114	SX-1	土師器	器台		狭間Ⅲ	8.0				3%	やや粗	やや不良	橙	7.5YR6/6	全体に磨減
115	SX-1	土師器	壺	二重口縁壺	狭間Ⅲ	18.4	(4.6)			3%	やや粗	やや不良	灰白	2.5Y7/1	口縁部受口沈線及び朱塗り
116	SX-1	土師器	壺	広口壺		19.6	(1.5)			1%	やや粗	やや不良	にぶい黄	2.5Y6/3	
117	SX-1	土師器	壺	広口壺		22.6	(2.1)			3%	やや粗	やや不良	暗灰黄	2.5Y5/2	
118	SX-1	土師器	鉢	小型鉢		10.0	4.9	4.4		60%	やや粗	やや不良	にぶい黄褐	10YR5/3	手づくね後ナデ
119	SX-1	土師器	鉢	小型鉢		12.6	(6.9)			20%	やや粗	やや不良	暗灰黄	2.5Y5/2	全体に磨減・口縁部横ナデ
120	SX-1	土師器	甕	丸底甕			12.1	10.4		60%	やや粗	やや不良	にぶい黄	2.5Y6/4	外面ハケ目
121	SX-1	土師器	甕			17.2	(14.2)			40%	やや粗	やや不良	にぶい黄褐	10YR4/3	
122	SX-1	土師器	壺	ミニチュア土器	狭間Ⅲ	4.4	5.6			60%	やや粗	やや不良	黒褐	2.5Y3/2	指押さえ後指ナデ
123	SX-1	土師器	鉢	ミニチュア土器		3.5	1.9			90%	やや粗	やや不良	灰黄	2.5Y6/2	手づくね
124	SX-1	土師器	壺/甕				(2.2)	3.5		5%	やや粗	やや不良	にぶい黄	2.5Y6/3	
125	SX-1	土師器	壺	広口壺			(2.3)	6.0		3%	やや粗	やや不良	にぶい黄褐	10YR5/3	
126	SX-1	土師器	壺/甕					4.0		5%	やや粗	やや不良	黄褐色	2.5Y5/3	
127	SX-1	土師器	壺/甕				(3.1)	7.3		5%	やや粗	やや不良	明黄褐	10YR6/6	
128	SX-1	土師器	甕	台付甕						3%	やや粗	やや不良	にぶい黄橙	10YR6/4	
129	SX-1	土師器	甕	台付甕						3%	密	良好	にぶい橙	7.5YR6/4	ハケ目
130	SX-1	石器	磨石			9.6	10.0	4.5		100%		砂岩			
131	包含層	土師器	皿			8.4	2.4			60%	密	良好	にぶい橙	7.5YR7/3	
132	包含層	土師器	皿			9.1	2.4			95%	密	良好	にぶい橙	7.5YR6/4	
133	包含層	土師器	壺	広口壺						1%	やや粗	やや不良	浅黄橙	10YR8/4	113と同一個体か?
134	包含層	土師器	壺	広口壺		頸 9.0	(9.0)			5%	やや粗	やや不良	浅黄橙	10YR8/4	113と同一個体か?
135	包含層	陶器	鉢			9.8	4.1			10%	密	良好	灰白	7.5YR8/1	
136	包含層	石器	剥片			3.3	4.0	1.5				安山岩			
137	包含層	石器	砥石			5.6	5.4	0.6				凝灰岩			
138	包含層	石器	石臼				28.0	10.8				砂岩			

第4章 境松遺跡B区

B区は境松遺跡二次調査の2地点目に相当し、遺跡範囲の中央南端部にあたる。現代の削平により、旧地形から下、1m以上が消失している。隣接する若宮遺跡が同程度の標高で遺構検出面が残存していたことから発掘調査を行ったが、地山直上まで針金やガラス瓶・ビニルなどが見つかり、遺跡は既に滅失していた。遺構は土坑状の浅いくぼみが2ヶ所確認されたが近～現代のものと推定される。念のため、調査区南側を3cm幅でサブトレンチを設定して掘り下げたが、第VI層相当の地山を破壊して攪乱層が堆積していたため調査を終了した。尚、近隣住民への聞き取りで、昭和の中頃に近隣の道路建設用の土として削平されたことが判明した。遺物は攪乱層から4点出土している(第15図)。

1は土師器の台付甕の台部である。表面にハケメが確認できる。2は陶器のおろし皿である。目の刻みは、鋭角のV字状で、縦目がより深く刻まれている。3は土師器の甕、4は瓦質の火鉢である。1は古墳時代以前の遺物で、2～4は近世以降である。



第15図 境松B区遺物実測図(1/2)

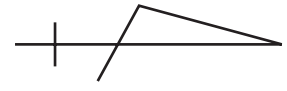
23

22

21

20

J

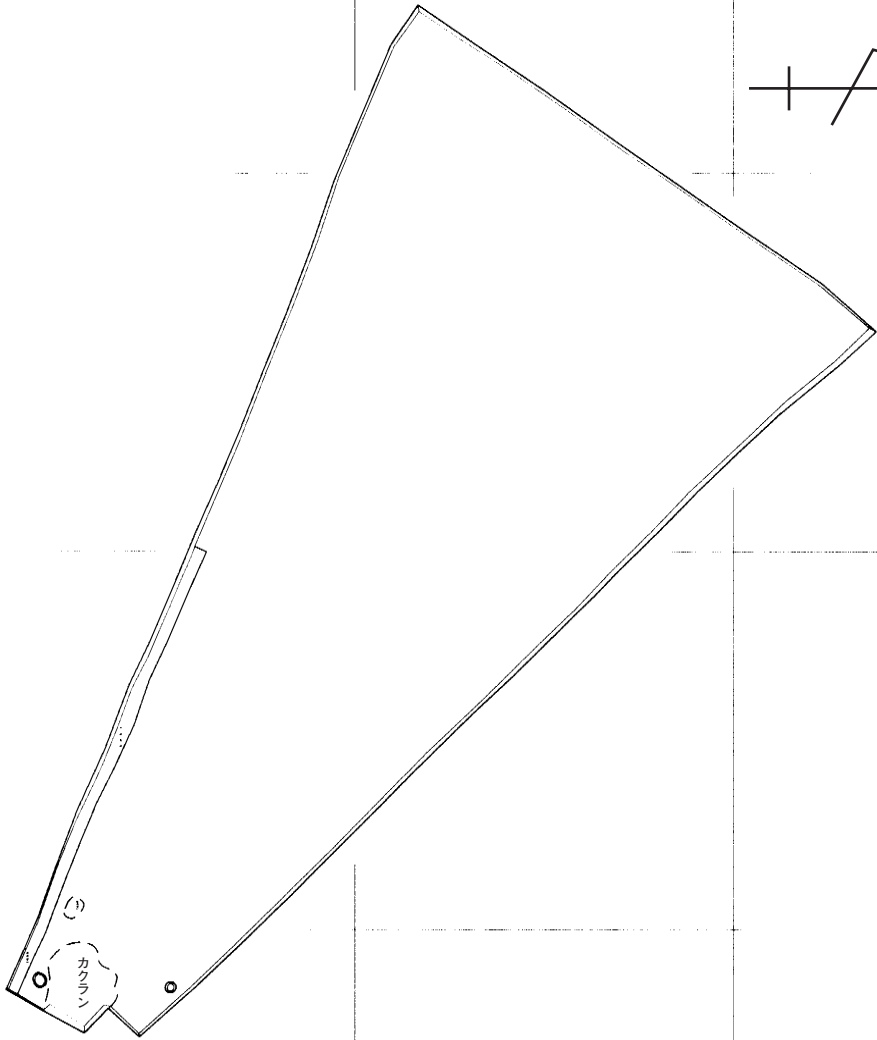


K

L

M

N



第16図 境松 B 区調査区全体図 (1 / 200)

第5章 境松遺跡C区

1. 遺構 (第17～25図)

C区は遺跡の西部にあたり、台地上で最も標高値の高い面に所在する。他の地点と比較すると、住居址等の大型遺構が良好に残存していた。特に調査区南部には第Ⅳ層相当の包含層が厚く堆積しており、弥生時代中期～古代にかけての遺物が多く出土している。検出された遺構や出土遺物は、弥生時代中期前葉（続水神平式）、古墳時代初頭（狭間Ⅱ～Ⅲ式）、鎌倉時代の3時期に分けられる。主要な遺構には弥生時代中期の竪穴建物や土器埋納土坑、古墳時代の竪穴建物、中世の土坑・溝等がある。弥生時代の竪穴建物は、他地点で検出された竪穴建物よりも大型である。土器埋納土坑は5基検出された。複数の甕や壺が人為的に割られ、破片を重ねるようにして埋納されていた。いずれも人骨等は出土していない。古墳時代の竪穴建物は2軒確認された。部分的に後世の攪乱を受けるが、上部に包含層が残存しており、良好な残存状況であった。建物の内部からは高坏や台付甕等が出土している。中世の遺構は土坑と溝がある。隅丸長方形の土坑は2基検出され、12世紀頃の遺物が出土する。また、土坑と溝から出土した遺物が接合している。

A. 竪穴建物

竪穴建物は5軒検出された。弥生時代が3軒、古墳時代が2軒である。弥生時代と推定される3軒は、大きいもので長径が約10mを測る。しかしながら、壁溝と地床炉以外は削平された状況で、遺物も少量壁溝や柱穴から出土するのみであった。いずれも長床式に相当すると考えられる。古墳時代の竪穴建物は2軒検出された。一辺5mの隅丸方形で、4本の主柱穴と地床炉が伴う。古墳時代初頭・廻間Ⅱ～Ⅲ式が出土している。

SB-1 (第18図)

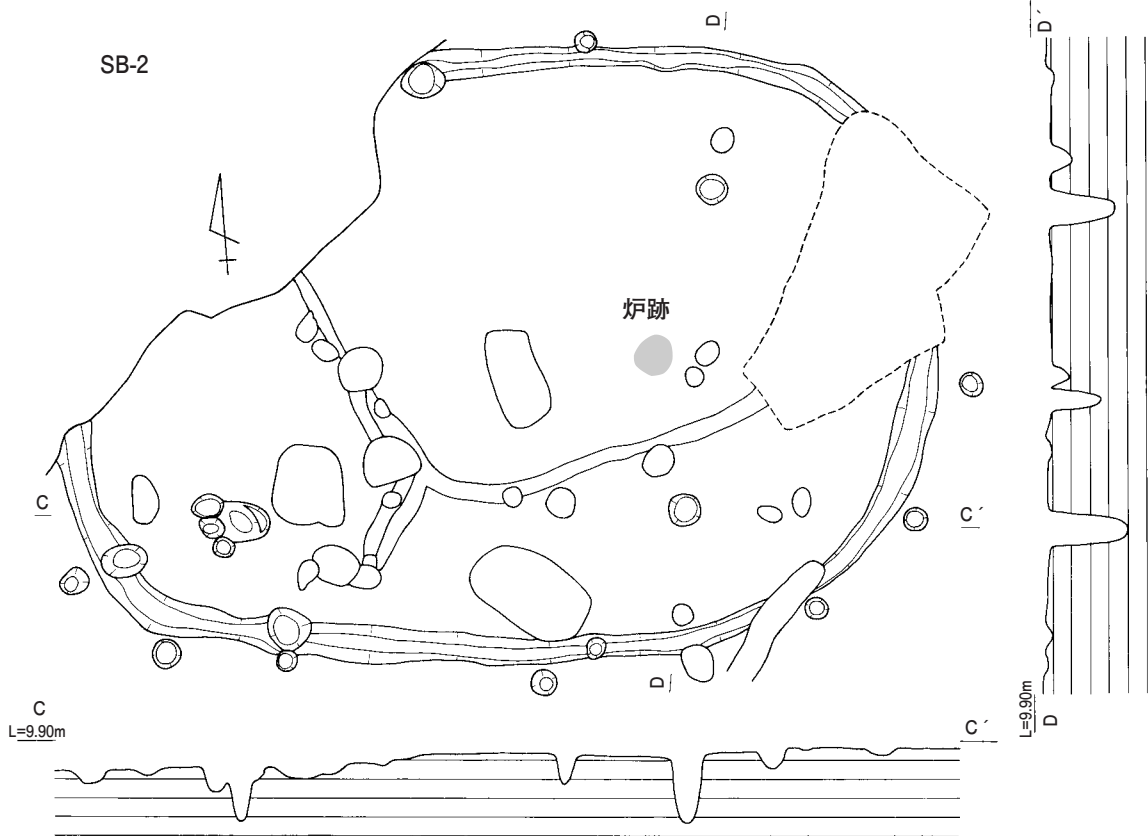
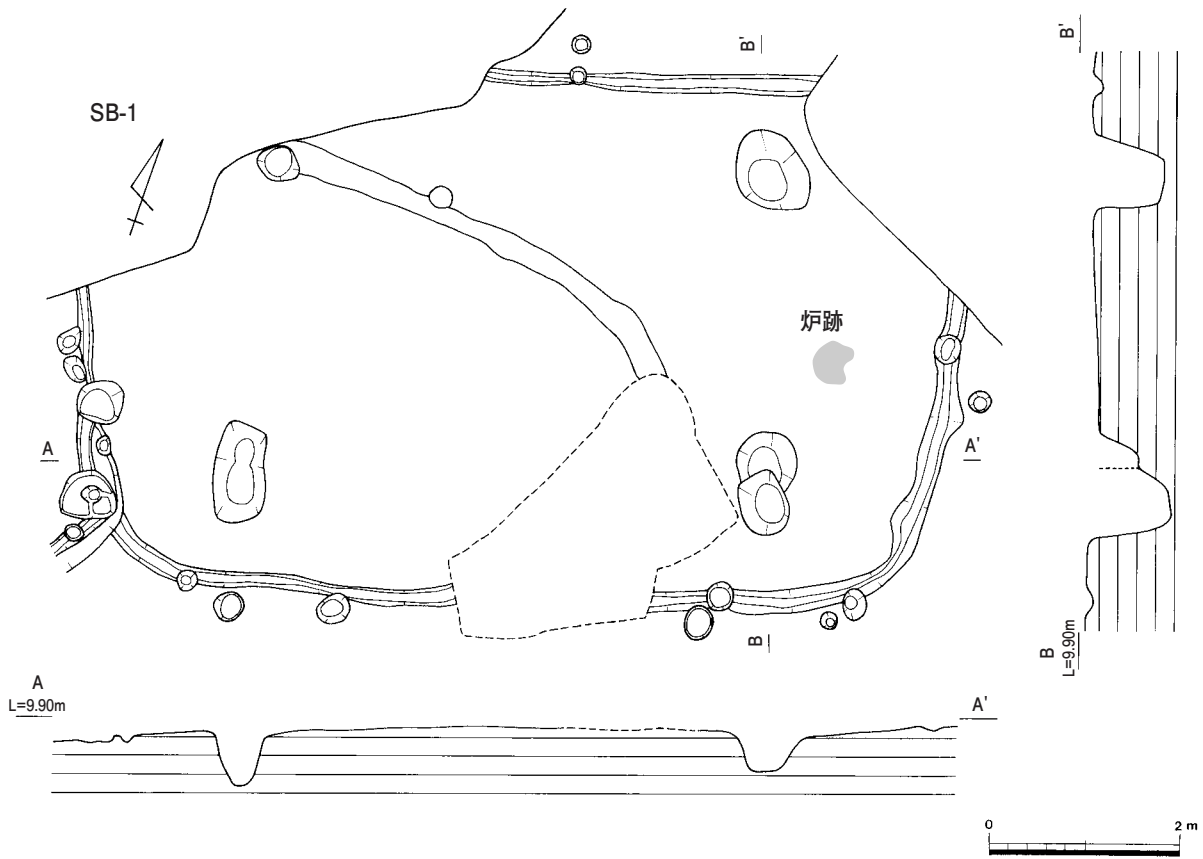
D・E-15・16区で検出された竪穴建物である。隅丸長方形を呈し、長軸約9m、短軸6.5mを測る。長軸は東西方向を向く。地床炉は短軸中央の東寄りに配置されている。床面が被熱を受け赤褐色に硬化していたが、焼土自体は削平されていた。主柱穴は4本検出された。60～80cmの不定形で、深さは60～70cmを測る。それぞれ2基の土坑が重なったような状況であった。柱痕は確認できなかったが、埋土内に焼土や炭化物が混入する共通点がみられた。壁溝は深さが1cm未満しか残っておらず、埋土は地山に似た粘質土であった。柱穴から条痕文の施された土器が出土しているが、竪穴建物の形状や規模、周辺から検出される建物址の状況から、長床式期と考えられる。

SB-2 (第18図)

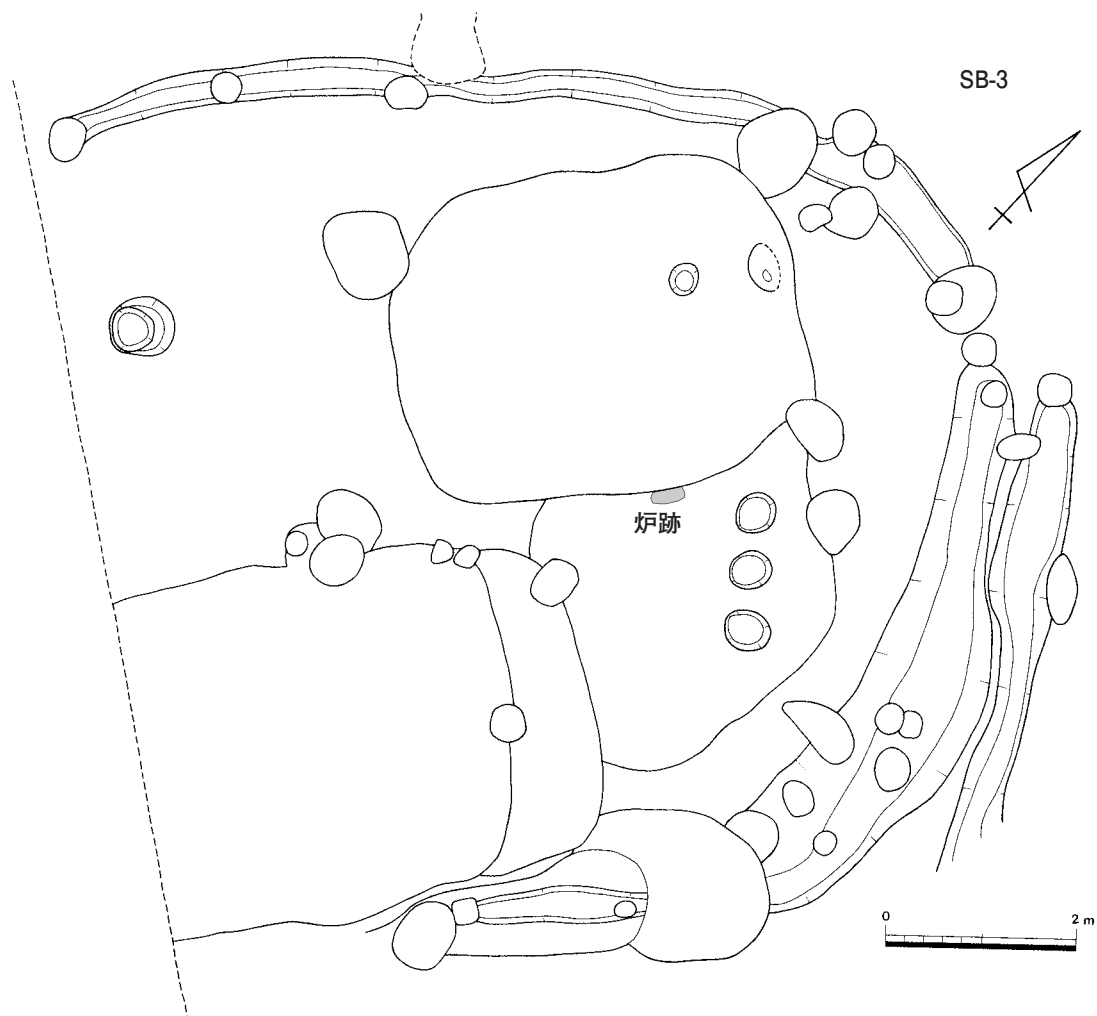
D・E-15・16区で検出された竪穴建物である。長楕円形を呈し、長軸約9m、短軸約6.3mを測る。長軸方向は東西を向く。地床炉は短軸中央の東寄りに配置されている。SB-1と同様に、被熱痕は確認できたが焼土は残っていない。主柱穴は4基検出された。いずれも40cm前後の円形で、深さは約



第17図 境松 C 区調査区全体図 (1 / 200)



第18図 境松 C 区遺構平面図 1 (1 / 80)



第19図 境松C区遺構平面図2 (1/80)

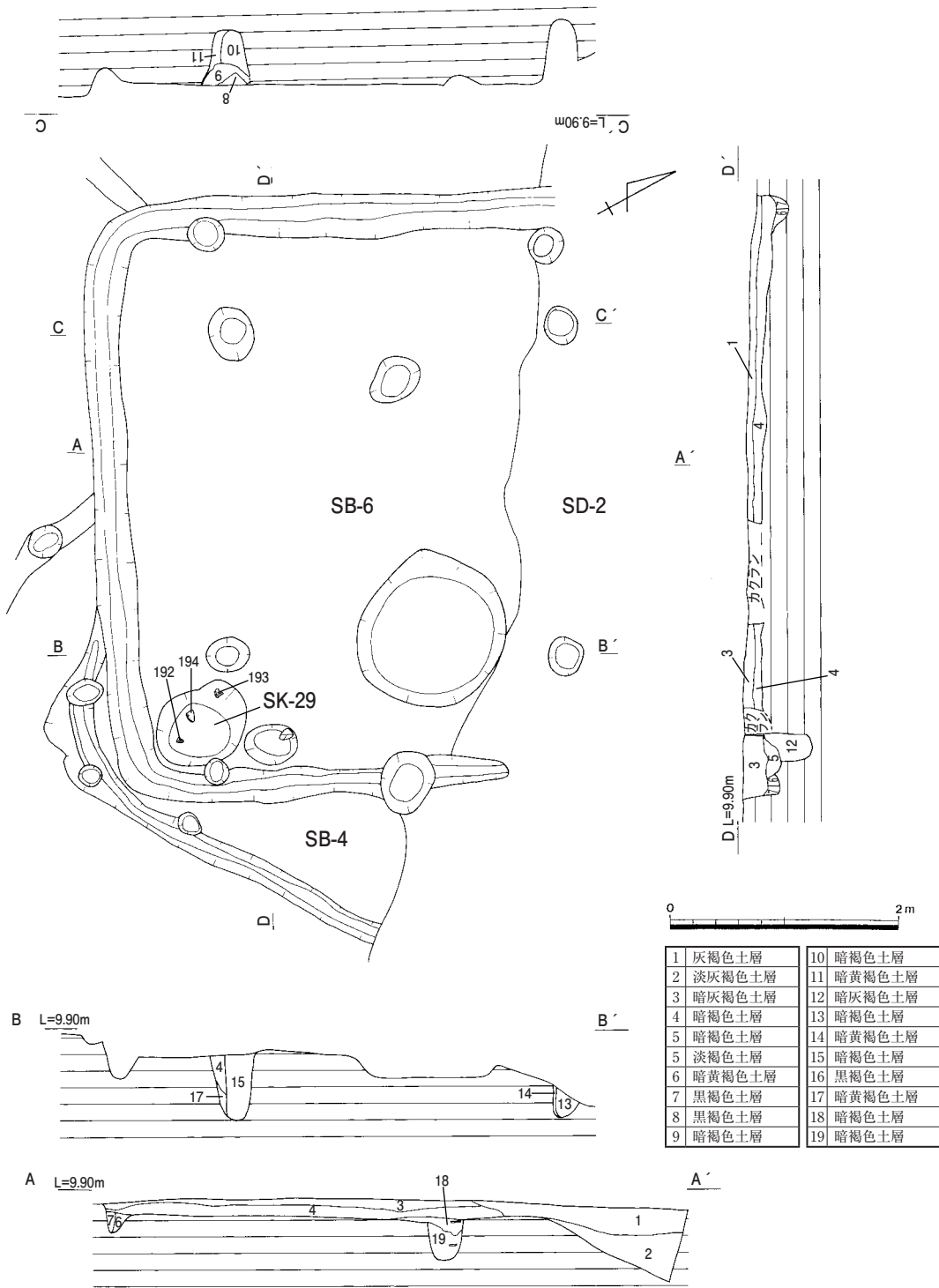
80cmである。壁溝は深さが15cm前後であった。重複したSB-1とは、規模や向きが類似することから建て直しの可能性がある。攪乱により2軒の明確な新旧関係は不明であるが、SB-1の壁溝がSB-2内部で不鮮明になる状況から、SB-1がより古いと考えられる。遺物は壁溝内や柱穴から土器片が出土している。弥生時代中期・長床式期。

SB-3 (第19図)

D-16・17区で検出された竪穴建物である。楕円形を呈し、規模は残存部で3.5mを測る。長軸は北東を向く。後世の攪乱が著しく、壁溝以外に地床炉や柱穴は確認できなかった。壁溝は15cm程で、高坏と思われる土器片が出土している。

SB-4 (第20図)

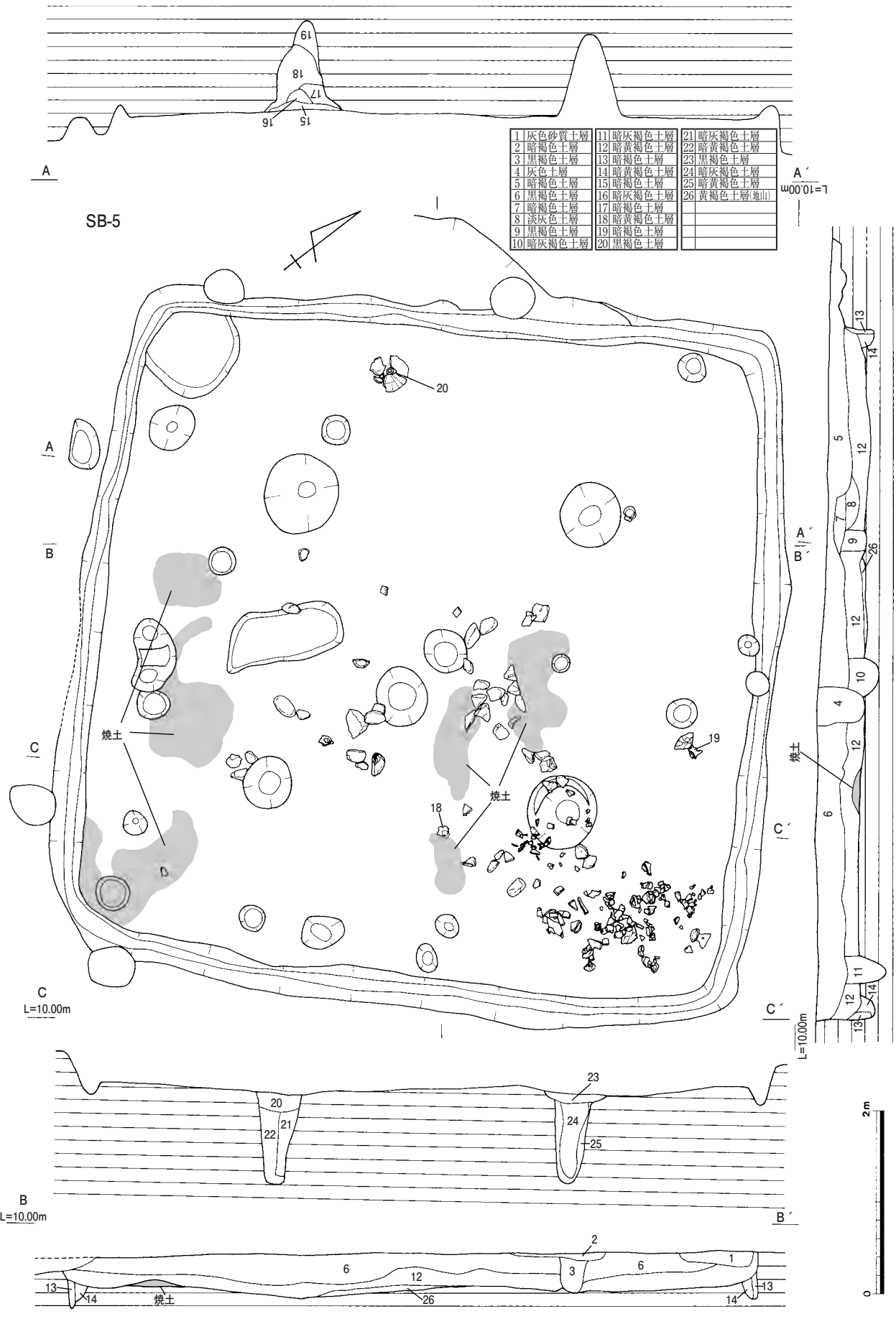
F-15区で検出された建物である。残存部が少なく全体形は不明である。支柱穴は4基と思われるが、2基はSD-2に壊されて消滅している。壁溝は10cm前後である。遺物は出土していないが、古墳時代初頭のSB-6に壊されている。弥生時代中期～後期。



第20図 境松 C 区遺構平面図 3 (1 / 60)

SB-5 (第21図)

D・E-17区で検出された竪穴建物である。一辺約5mの隅丸正方形を呈し、北東方向を向く。埋土は40cm前後で、層厚25~30cmの上層と、底面から10~15cm堆積する下層に分けられる。上層は黒褐色の砂質土層で、拳大の礫や焼土、土塊などが多く混入する。出土遺物は古墳時代後期の須恵器や土

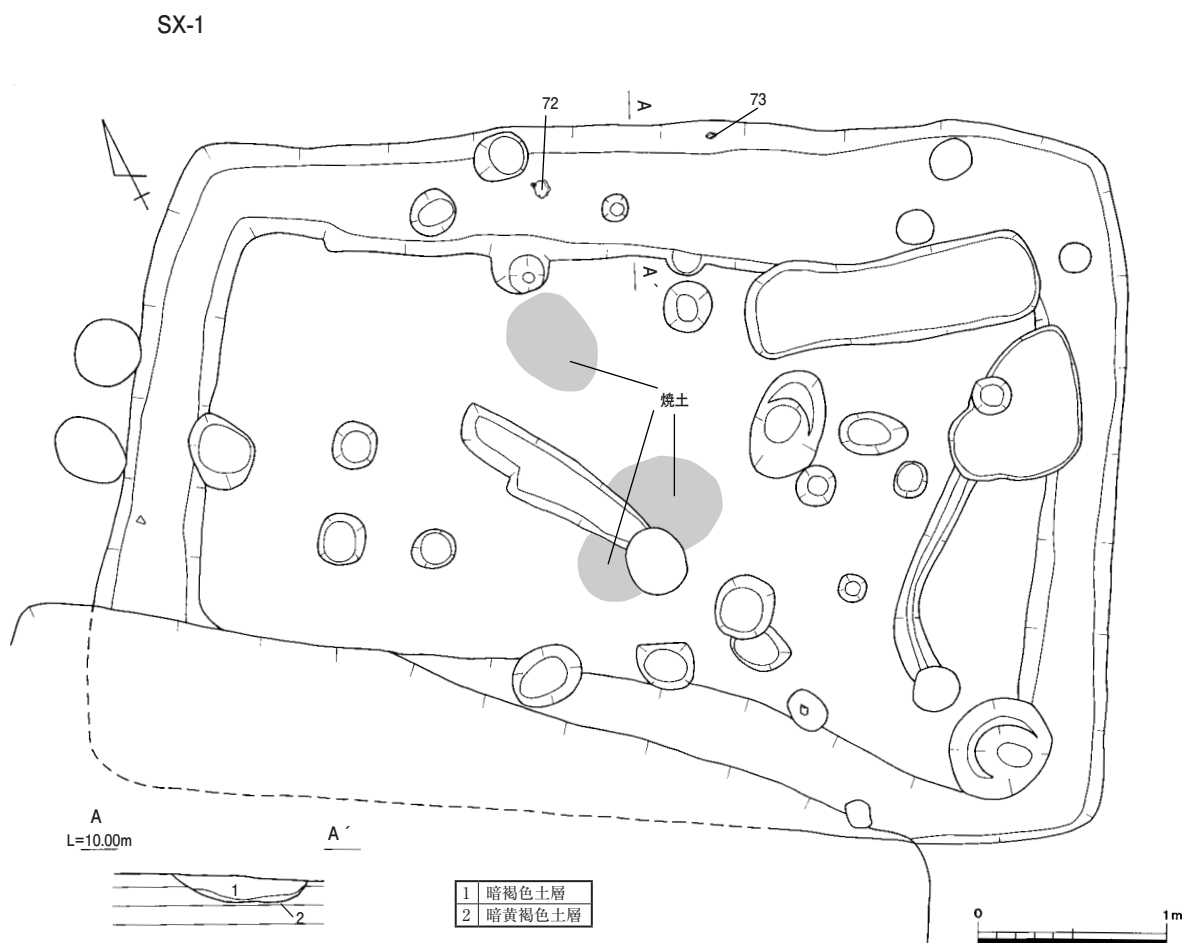


第21図 境松 C 区遺構平面図 4 (1 / 60)

師器等が主体である。遺物は遺構北東部に集中して出土し、礫などが散布していた。下層は炭化物の混じる暗黄褐色土層が面的に広がっており、高坏や台付甕等の古墳時代初頭の遺物が出土した。また、建物の中央部では、下層より下に層厚3cm未満の薄い層が確認された。全体に広がるような状況ではなく、部分的であることから、貼床ではなく生活痕跡であると考えられる。床面は地山を利用しており、直上から棒状の炭化物や焼土等が出土した。地床炉は中央から南寄りに配置されていた。焼土は硬化した土塊で、厚さ6cm程であった。4本ある支柱穴は、いずれも40~50cmの円形で、床面から70cmを測る。一部は柱穴痕が鮮明に残る状況であった。壁溝は床面から15cmを測り、厚さ3~4cm程の壁板が差し込まれた痕跡が鮮明に残存していた。以上から、SB-5は古墳時代初頭に築造され、廃絶を迎えた後に下層が堆積し、土坑状の窪みとなった古墳時代後期に廃棄土坑として使用されたと考えられる。

SB-6 (第20図)

E・F-15区で検出された竪穴建物である。一辺が5.5mの隅丸方形を呈し北東方向を向く。埋土は約20cmで、上層と下層の2層に分かれる。上層は暗灰褐色の砂質土層で、下層は暗褐色である。上層よりも下層の方がしまりは強く、粘性を帯びている。いずれの層も土器を含むが小破片のみで、時



第22図 境松 C 区遺構平面図 5 (1 / 40)

期も弥生時代～古墳時代の遺物が混在する。地床炉は確認できなかったが、南西壁付近に焼土が確認されたことから、後世の攪乱で破壊されたと推定される。支柱穴は4基で、直径40cm程の円形と呈し、深さは床面から約60cmである。壁溝は床面から20cm程の深さで確認された。

B. 掘立柱建物

掘立柱建物は1棟確認された。他にはSK-27・SK-28・SK-31などが、掘立柱建物になる可能性があるが、断定できないため土坑として扱う。

SB-7 (第25図)

D-16区で検出された掘立柱建物である。桁行2間以上、梁間1間以上の側柱建物である。柱穴は直径40cm前後の円形で、深さは60～70cm程である。柱穴(Pit 1)から筑が出土している(第25図)。時期は中世である。

C. 溝

C地区で確認された溝は2本である。それぞれ弥生時代と中世のものである。

SD-1 (第17図)

E-16区で検出された溝である。断面はU字形で、2本の溝が連結している。北側程、浅くなる。深さは40cmを測る。SB-2を壊し、平底壺の底部が出土している。弥生時代後期～古墳時代前期か。

SD-2 (第17図)

調査区北壁に沿って検出された溝である。東端で大きく南西方向に屈曲する。V字形の断面を呈し、中世の遺物と古代以前の遺物が出土した。層位は2層に分けられ、上層に近世の埋土、下層に中世の埋土が堆積している。調査区北東端の屈曲部では、底面に拳大の礫が敷き詰められていた。遺物は上層から近世の瓦や土師器の皿が出土し、下層からは山茶碗が出土している。遺構の時期に相当する遺物の出土量は少なく、弥生土器や土師器片などの混入物が多く出土した。下層から出土した陶器片が後述するSK-32の遺物と接合する。12世紀頃。

D. 不明遺構

SX-1 (第22図)

E-16・17区で検出された幅40～50cm、深さ10cm未満の浅い溝が、長方形に廻る遺構である。わずかに弥生土器や土師器片が出土した他、石製紡錘車が出土している。SB-5を切って掘られている。時期は古墳時代中期。

E. 土坑

土坑は調査区内から柱穴を含めて646基検出された。主要な土坑には弥生時代の土器埋納土坑や中世の大型土坑などがある。SK-1～20は、出土した土器や埋土の状況から、弥生時代中期前葉の続

水神平式期。S K - 21～31は弥生時代中期末以降、S K - 32～37は中世以降の土坑である。中世の大型土坑S K - 32・33は埋土中に焼土が多く堆積していたが、炭化物はほとんど確認できなかったことから、焼土の廃棄土坑と推定される。

S K - 1 (第23図)

D - 16区で検出された土器埋納土坑である。直径約40cmの円形を呈し、深さは50cm程である。出土した土器はいずれも条痕文土器で、6個体の土器を割り、意図的に積み重ねた状況で出土した。土器片は5cm四方程度の小破片と、長径が20cmを超える大破片があり、小破片と大破片を交互に積み重ね、土坑径いっぱいに敷き詰めたような状況であった。また土器の下からは人頭大の礫が出土した。礫は乳白色の凝灰岩で、加工痕は認められないが一部が赤褐色に変色している。土層は黒褐色の上層と暗褐色の下層の2層に分かれ、土器と礫は上層から出土する。下層は遺物を包含しない。弥生土器の広口壺と甕が出土する。弥生時代中期前葉・水神平Ⅱ式期。

S K - 2 (第23図)

D - 17区で検出された土器埋納土坑である。長径約40cmの楕円形で、深さは20cm程である。上部の大半が削平されているが、条痕文土器の小破片がまとまって出土している。土器は3個体以上が確認されたが、S K - 1のような礫は確認されなかった。S K - 1に類似する状況であったと考えられる。

S K - 3 (第23図)

D - 17区で検出された土坑である。直径約20cmの小型の円形で、深さは30cmを測る。弥生土器の小破片がまとまって出土したが、いずれも無文か、もしくは摩滅して文様が確認できないものばかりであった。1点条痕文土器らしき土器片が出土しており、土器埋納土坑の可能性が考えられる。

S K - 4 (第23図)

E - 15区で検出された土坑である。長径60cmの隅丸方形を呈し、深さは50cmを測る。条痕文土器と薄手の甕の底部が出土している。

S K - 5 (第23図)

E - 16区で検出された土坑で、上部をS D - 1に壊されている。直径25cm程の円形で、深さは残部で20cmを測る。条痕文土器の小破片が出土しているが、表面が摩滅している。

S K - 6 (第23図)

E - 16区で検出された土器埋納土坑である。長径40cm程の楕円形で、深さが約20cmの浅い皿形を呈する。甕の底部が正位置で据えられており、甕の内部に壺や甕の破片が詰められた状況で出土した。3個体以上の土器破片が確認されたが、意図的に組み重ねていると考えられる。出土した土器はいずれも条痕文土器である。

S K - 7 (第23図)

E - 16区で検出された土坑である。直径約20cmの円形を呈する小型の土坑で、深さは30cmを測る。条痕文土器の小破片が出土している。

S K - 8 (第23図)

E - 16区で検出された土器埋納土坑である。直径約45cmの円形で、深さは30cmを測る。土層は3

層に分けられ、上層から順に1層が土器の詰まった黒褐色土層、2層は1層に酷似する黒褐色土層で柱穴痕状に堆積していた。3層は地山に類似する暗黄褐色土層である。このうちの2層と3層は土層サンプリングを行っており、蛍光X線によるリン・カルシウム分析を行っている。分析結果は別項に記載した。出土遺物は土器のみで、いずれの層でも出土するが大半が1層からの出土である。埋納されていた土器は2個体確認されたが、出土した破片の9割以上が同一の個体である。この個体は大型の広口壺で、5cm～10cm大に細かく分割され、円形に組み重ねられて配置されていた。土器の表裏は無意識に組まれたと思われるが、底部と口縁部が上部に配置されていた点は、意図的に配置された可能性がある。

SK-9 (第23図)

E-16区で検出された土坑で、直径、深さともに約40cmの円形土坑である。細い条痕を持つ土器片が出土している。

SK-10 (第23図)

E-16区で検出された土器埋納土坑である。直径約40cmの円形で、深さは約50cmを測る。比較的多くの土器が出土したが、出土状況はSK-1のように組み重ねた状態ではなく、土坑内に散布するような状況であった。土器片はすべて小破片で5個体が確認された。出土した遺物はいずれも条痕文土器である。

SK-11 (第23図)

E-16区で検出された土坑で、長径60cmの不定形で、深さは35cmを測る。条痕文土器の小破片が出土する。

SK-12 (第23図)

E-16区で検出された長楕円形の土坑である。深さは30cmを測る。土器は出土していないが、安山岩製の削器が出土している。周辺の縄文貝塚で使用されたものである可能性がある。

SK-13 (第23図)

E-17区で検出された円形の土坑である。直径30cm程の円形で、深さは20cmを測る。条痕文土器の壺の頸部が出土している。

SK-14 (第23図)

E-17区で検出された円形の土坑である。直径25cm程の楕円形で、深さは30cmを測る。土器の小破片と黒曜石の剥片が出土した。土器は無文の胴部片である。

SK-15 (第23図)

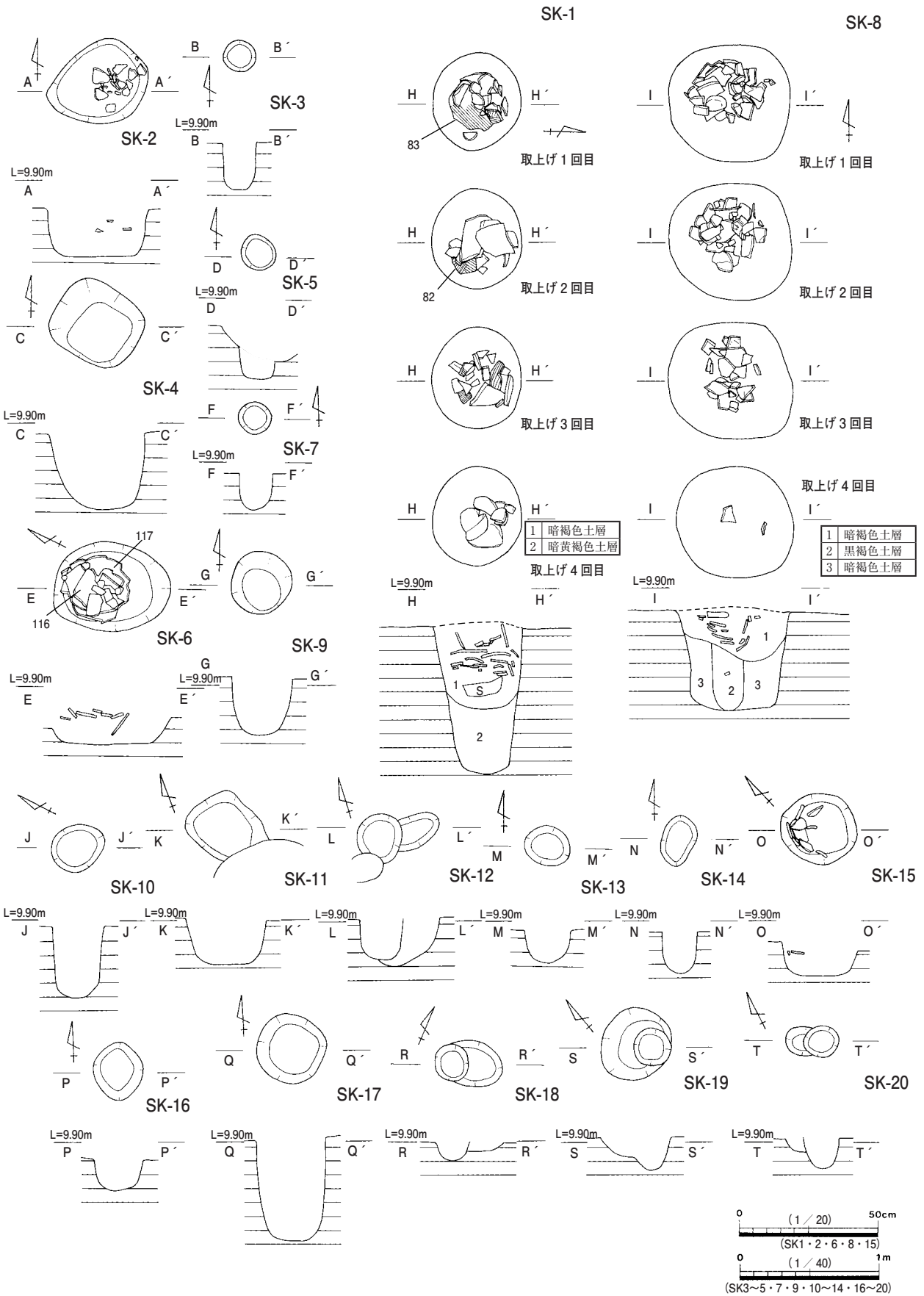
E-17区で検出された円形の土坑である。直径25cm、深さが10cm程の浅い皿形を呈する。土器片が土坑壁に貼り付く様に出土した。

SK-16 (第23図)

E-17区で検出された円形の土坑で、直径30cm、深さ25cmを測る。土器片と黒曜石の剥片が出土している。

SK-17 (第23図)

F-15区で検出された円形の土坑である。直径50cmで深さが90cmを超える。



第23図 境松 C 区遺構平面図 6 (1/20・1/40)

S K-18 (第23図)

F-16区で検出された土坑である。楕円形で深さが10cm程の浅い土坑で、後世の土坑に破壊されている。掲載していないが、条痕文土器と思われる土器片が出土した。

S K-19 (第23図)

F-16区で検出された土坑である。長径30cmほどの楕円形土坑で、2基の土坑が重複している。条痕文土器が出土した。

S K-20 (第23図)

F-16区で検出された柱穴状の土坑である。直径20cm程の小型土坑で、条痕文土器片が出土している。

S K-21 (第24図)

D-15区から検出された長楕円形の土坑である。上部を別の浅い土坑が削平している。長径は60cm程で、深さは40cm程である。弥生時代後期の台付甕が出土した。土器片が散布し、これらが一部のみ残存する土器や半割された土器であることから、廃棄土坑であると考えられる。

S K-22 (第24図)

D-16区で検出された土坑である。柱穴痕は確認できなかったが、下場が先細る事から柱穴と思われる。台付甕の破片が出土している。

S K-23 (第24図)

D-16区で検出された円形の土坑である。底面が平坦で、深さが30cm程である。埋土は暗褐色土の単一層で、弥生土器片が出土している。

S K-24・25 (第24図)

E-15区で検出された。検出時長楕円形の土坑と判断し、掘削した結果、2基の土坑が切りあっていた。寸胴型の断面形を呈し、深さが60cmを超える。S K-24の方が新しいと考えられる。弥生時代中期の土器片が出土している。

S K-26 (第24図)

E-15区から検出された円形の土坑である。直径が60cm、深さが70cmを超える。広口壺の頸部から口縁部が、切り離され反転して伏せるように配置されていた。弥生時代後期・寄道式期か。

S K-27 (第24図)

E-16区で検出された楕円形の土坑である。長径1mを超え、深さは60cmを測る。埋土はしまりが強く焼土が検出され、土器片が出土した。また5mm大の炭化物がいずれの層でも検出された。

S K-28 (第24図)

E-17区で検出された円形の土坑である。直径60cmの円形で、深さは約1mと深い。土器の小破片が複数出土した。

S K-29 (第20図)

F-15区で検出された円形の土坑である。S B-6に壊されている。弥生時代か。

S K-30 (第24図)

F-15区で検出された柱穴状の土坑である。残存部は浅く10cm程の深さである。器台の一部が出土

している。

SK-31 (第24図)

F-15区で検出された円形の土坑で、SK-27と同じく直径60cm、深さは1mを測る。深さや規模から、掘立柱建物の可能性がある。弥生土器が少量出土している。

SK-32 (第25図)

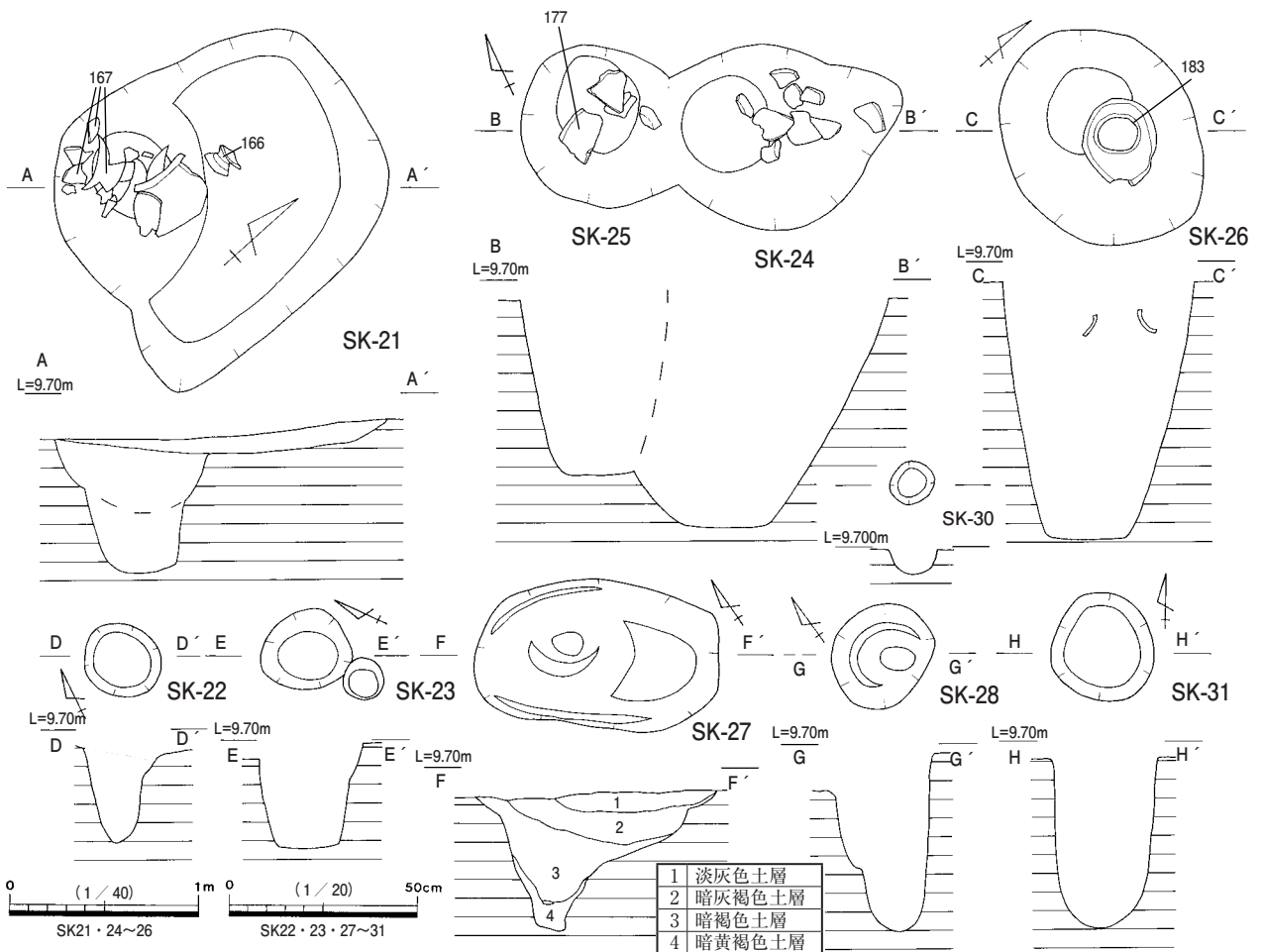
D-16区で検出された長径が3.3mの隅丸方形の大型土坑である。竪穴状を呈するが、内外に柱穴は配列されず、地床炉や壁溝も確認できなかった。出土した遺物は14世紀頃のものであり、埋土内から炭化物や人頭大の礫、焼土等を検出した。出土した陶器の鉢(第34図-212)がSD-2で出土した破片と接合した。中世の廃棄土坑か。

SK-33 (第25図)

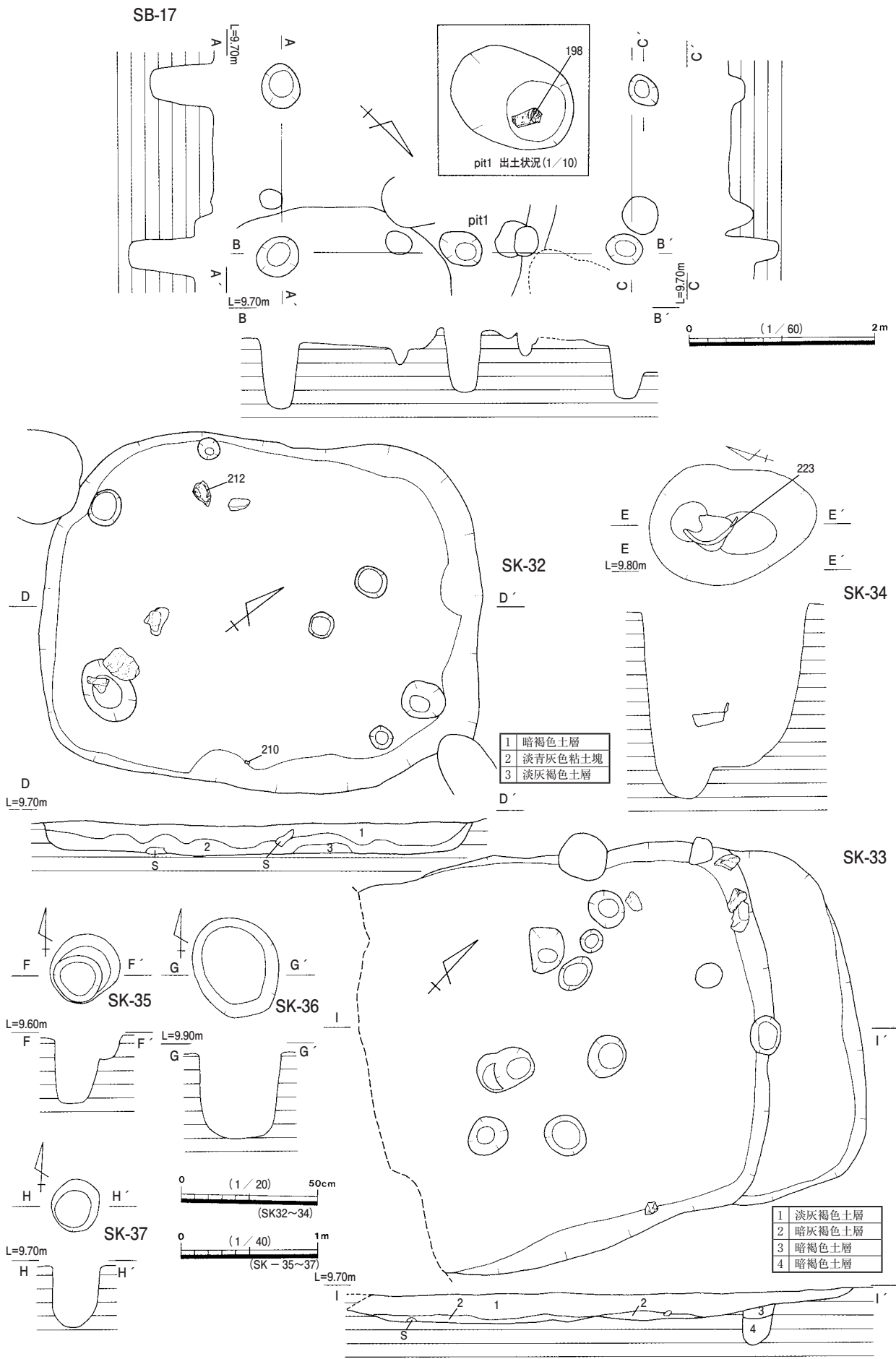
D-16・17区で検出された大型土坑である。西部を現代の切り土によって掘削されており、東側は段差があり、高くなっている。規模や出土遺物の時期、埋土内の混入物などはSK-32と類似するが、より多くの焼土が検出されている。中世の廃棄土坑。

SK-34 (第25図)

直径60cm、深さが70cmの柱穴状の土坑である。柱穴の礎石のように配置された礫の上で甕の口縁部が出土した。周囲に同規模の土坑がないため、単発土坑として扱った。中世か。



第24図 境松C区遺構平面図7 (1/20・1/40)



第25図 境松 C 区遺構平面図 8 (1/20・1/40・1/60)

S K-35 (第25図)

D-16区で検出された土坑で、土師器や弥生土器、石器などの遺物が出土した。2基の土坑が重なっており、遺物は古い土坑の物と考えられる。埋土が淡灰色でしまりも弱いことから、中世の遺構である。

S K-36 (第25図)

E-15区から検出された。直径60cm程の円形で深さは70cm程の土坑である。炭化物を検出した。

S K-37 (第25図)

E-16区で検出された柱穴状土坑である。S K-34と同じく礫を伴い、中世の甕の破片が出土した。

2. 遺物 (第26~35図)

遺物は弥生時代~中世にかけての遺物が出土した。多くは遺構内から出土しているが、包含層からも弥生時代~古墳時代後半にかけての遺物が多く出土している。包含層は調査区南部に残存していたため、南部の遺構と時期的に重なるものが多く出土した。主に古墳時代~中世の遺物が出土し、特に土錘や古墳時代初頭の土器群はS B-1とS X-1の周辺から多く出土した。なお、S K-1~S K-20で出土した条痕文土器の内、同一土坑内で複数個体が確認される場合がある。この個体の分類は器種、同一部位の最小個体数、胎土、施文状況を基準に行った。

また、出土遺物は出土した遺構の時代順に掲載し、前半に弥生~古墳時代の遺構出土の遺物を、後半に中世以降の遺構と包含層出土の遺物を掲載する。

A. 弥生時代~古墳時代

S B-1 (第26図)

1~7はS B-1の柱穴から出土した弥生土器である。いずれも条痕文が施されている。1・2は壺、3~7は甕である。3は口縁部で端部にも条痕が施されている。続水神平式であるが、建物址の形状から判断して、遺構に伴うものではないと考える。

S B-2 (第26図)

8~15はS B-2の壁溝と柱穴から出土した弥生土器である。8~10は条痕文土器で8・9が壺、10が甕である。11~15は長床式と考えられる土器片で、壺や台付甕の小破片が出土している。

S B-5 (第27図・第28図)

16~26はS B-5埋土下層(12層)から出土した土師器である。16~20は高坏で、脚の広がり丸みを帯びる。坏部は16・20のような有稜形、17・18のような小皿形、19の碗形等多様である。20は有稜高坏で、住居址の床面から正位置で出土した。ハケが残るが、それ以外はナデ調整されている。脚部の穿孔は3ヶ所である。21~26はくの字状口縁甕である。ハケもしくは板ナデ調整である。口縁部は21のみ緩やかに内弯し、それ以外は外反する。口縁端部は24のように面取りするものがある。古墳

時代初頭。

27～54はS B - 5の埋土上層（6層）から出土した。土師器の壺・高坏・台付甕・鉢等と、須恵器の坏身・坏蓋・壺等が確認された。27～30は弥生土器で、弥生時代後期・寄道式である。27・28は壺で口縁端部に刻みや押し引きにより施文される。29は柱状高坏の脚部で、30は大型壺の口縁部である。31～54は古墳時代中期以降の遺物である。31～38は須恵器である。31は口縁端部を屈曲させた碗形高坏である。32が坏蓋、33～35は坏身である。36～38は壺である。39～52は土師器である。39は小壺で、手づくね成形後ナデ調整される。表面が水磨を受けた様に溶けており、胎土も他の土師器よりも細粒である。40は小型の鉢で、外に大きく開く形状である。41～45は壺もしくは甕の破片である。41・42は底部、43～45は口縁部である。46～48は高坏の脚部で、松河戸～宇田式である。49～52は台付甕である。53は敲石である。表裏面と下端部に敲打痕ができる。54は土製肢脚である。断面形は四角形を呈する。古墳時代後期。

S B - 6（第26図）

55～57は弥生土器の壺の口縁部で、55は寄道式であろう。58～63は土師器である。58は高坏、59～63は台付甕で、59はS字状口縁台付甕である。64～66は弥生土器もしくは土師器である。64は器台で、口縁端部を面取りした後、沈線が施されている。65・66は鉢である。他の土器と比較して器厚が厚く、口縁部を屈折させている。67は須恵器の平瓶である。

S D - 1（第26図）

68～70は弥生土器である。68・69は条痕文土器、70は弥生時代後期以降の平底壺である。

S X - 1（第26図）

71は条痕文土器、72は土師器の小型甕の底部である。73は石製紡錘車である。砂岩製で中心部が厚くなる。弥生時代の遺物と思われる。

S K - 1（第29図）

74～94はS K - 1に埋納されていた弥生土器である。壺と甕の破片で、6個体を確認した。いずれの個体も棒状工具による条痕が施されている。もっとも多く出土したのは個体①で74～85である。頸部に縦位条痕文、胴部に羽状条痕を配置し、肩部の横位条痕文で区画している。胴部～頸部にかけての破片が出土したが、口縁部・腰部・底部は出土していない。個体②は86・87である。胴部は個体①より器厚が厚く、胎土が粗い。個体③は88・89である。器厚は薄く、条痕も細い。羽状条痕がわずかに崩れている。個体④は90である。器厚が薄く条痕は細い。個体⑤は91で、甕の口縁部である。口縁端部及び、内外面に横方向の条痕を施す。器厚は薄く外反する。個体④・⑤は1点だけの出土である。個体⑥は92～94で、口縁部が大きく外反する甕である。口縁端部の一部が小突起状に立ち上がる。

S K - 2（第30図）

95～107はS K - 2に埋納されていた弥生土器である。S K - 1と異なり、大半が壺の破片で構成される。S K - 2では3個体を確認した。個体aは95～102である。壺の口縁部から腰部にかけて出土している。口縁端部には刻目が施され、頸部には連弧文が施されている。個体bは103・104である。器厚が薄く、104には櫛描文も確認できる。個体cは105～107で、頸部から底部にかけて出土した。個体aに近いが、胎土が粗く条痕の幅が太いことから、別個体として分類した。

SK-3 (第30図)

弥生土器の108が出土している。摩滅が著しい。外面に条痕文が施されている。

SK-4 (第30図)

弥生土器の破片と小型の甕の底部が出土している。109・110は条痕土器で同一個体である。111は小型の甕の底部であるが、時期は不明である。

SK-5 (第30図)

弥生土器112・113の2点が出土している。いずれも条痕文土器だが、条痕が細く胎土が粗い。

SK-6 (第30図)

弥生土器の壺の口縁部と甕が2個体出土している。114は壺の口縁部で口縁部直下に押圧突起が連続し、口縁端部には押引文が見られる。また内面施文も確認できる。115は他の個体と条痕の施文具が異なり、凹断面が平坦で浅い。116は甕の胴部から底部で、底部から腰部にかけては条痕が斜位に施され、胴部下半からは横位に条痕の向きが変わる。内面は板ナデ調整である。117は底部を欠いた甕である。器形はほぼ垂直に立ち上がり、頸部で強く外反する。口縁部は面取りされ、緩やかな波状になっている。条痕文は116と同じく底部から腰部までを斜位方向に描上げ、胴部下半からは横位、あるいは緩い斜位に変化する。胴部上半から口縁部にかけては、条痕が不明瞭となり、方向は不規則である。

SK-7 (第30図)

弥生土器の壺と甕の破片が出土した。118は甕の口縁部で、口縁端部に刻目、内外面に円弧文が施される。119と同一個体と思われる。120は壺の頸部である。縦位の条痕を切って横位の条痕が施されている。

SK-8 (第31図)

条痕文土器の壺(121~129)と甕(130)が出土したが、出土した破片の9割が大型の壺で同一個体である。土器片は接合しない破片が多く、仮にすべての破片を総合しても、土器全体の3分の1程度である。今回は一定の大きさ以上の破片を抽出して掲載した。出土した部位は壺が口縁部・肩部・胴部で、甕が底部片のみである。壺は口縁部の直下に押圧突起が連続し、端部に押引文を施し、一部が摘み上げられるように隆起する。口縁内面には横位押引文、隆起した部分には円弧文が施される。外面は押圧突起の下から縦位の条痕文が見られる。頸部及び胴部は横位の条痕が施されており、わずかに羽状を呈している。肩部には押圧突帯文が見られる。130は甕の底部である。器厚は薄く、斜位方向の条痕が見られる。

SK-9 (第31図)

弥生土器の壺と甕が出土した。出土した土器片の条痕はいずれも細い。131・132・134は甕の破片である。133は壺の頸部と思われる。134の底部は条痕が見られず、ハケ目に近いナデ痕を確認した。

SK-10 (第31図)

5個体の条痕文土器が出土した。すべて壺の破片である。135~139は個体アに分類される。壺の口縁部、頸部、胴部で口縁端部に2条の角形刺突文を連続して配置し、口縁直下に押圧突起をもつ。内面には横位の条痕が施文されている。140・141は個体イで、いずれも肩部である。波状文の下部には横位の条痕が確認できる。142は個体ウである。個体アに類似するが、同一部位の器厚や径が異なる

ため、別個体に分類した。143は個体エ、144～146は個体オである。145は壺の胴部片で、器厚が薄く、内外面の調整が個体アとは異なる。個体オは頸部片に羽状条痕が崩れたような状況が確認できることから個体イとは異なる。146の底部径から、個体オは小型の壺であると思われる。

S K-11 (第32図)

147・148は、条痕文土器の小破片である。甕の胴部片と推定される。

S K-12 (第32図)

149は安山岩製の削器である。表面には原礫面や同一方向の剥離痕が見られ、一次剥片を素材としている。下端部は微細剥離を連続して施し、鋸歯状の刃部としている。共伴遺物は無く、時期は不明であるが、周辺の縄文貝塚で使用されたものか。

S K-13 (第32図)

150は条痕文土器である。頸部片で、斜位の条痕が施されている。

S K-14 (第32図)

151は黒曜石の剥片である。土器は共伴しない。S K-16出土の剥片と同じく長野県産の黒曜石であると推察される。

S K-15 (第32図)

152～155は条痕文土器である。いずれも摩滅が著しい。154が甕、それ以外は壺である。153は条痕が摩滅しているが、わずかに崩れた羽状条痕が確認できる。

S K-16 (第32図)

156は黒曜石の剥片である。土器は共伴しない。S K-14から出土した剥片とともに長野県産の黒曜石であると推察される。

S K-17 (第32図)

157～159は弥生土器である。157は壺の頸部片で、長い跳上文が施されている。

S K-19 (第32図)

160の弥生土器片と161・162の石器2点が出土した。160は壺の肩部で、棒状工具で区画された内側に擬縄文を充填させている。在地の土器ではなく、尾張地方に分布する土器と推定される。共伴した石器は剥片で安山岩製である。

S K-20 (第32図)

163は弥生土器である。甕の口縁部で、外面には条痕文が確認できるが、内面はハケ目のような痕跡が残る。

S K-21 (第32図)

164～167は弥生土器の台付甕である。半割されたくの字状口縁台付甕が1点、口縁部片が2点、台杯部が1点出土している。167は球状の胴部で、口縁が強く外反し、頸部の屈曲は顕著である。外面はハケ目、内面はハケ目の後に板ナデ調整が施される。弥生時代後期。

S K-22 (第32図)

168・169は弥生土器である。168は台杯甕、169は壺の底部で内面はナデ調整が施されている。

S K-23 (第32図)

170~172は弥生土器である。170は壺の胴部で、棒状工具による櫛描文が施されている。171・172は台杯甕である。170は口縁端部に刻目があり、172は柱状を呈する。いずれも弥生時代中期末・長床式である。

S K-24・25 (第33図)

173~181は弥生土器である。173~175・181は壺である。173は受口状の壺の口縁部で端部は欠損している。頸部には櫛描文が施されている。176~180は台付甕である。口縁端部に刻目を施す180と、面取りする176が見られる。弥生時代中期後半・長床式。この他、土器片が多数出土している。

S K-26 (第33図)

182・183は弥生土器の壺である。182は小型壺で、口縁端部は面取りされている。内面にはハケ調整が残る。183は広口壺である。口縁内面に竹管刺突文と押引文が施され、端部は垂下し、3条の横線文が施される。頸部には、突帯が廻り、竹管刺突文が施される。

S K-27 (第33図)

184~186は弥生土器である。条痕文土器と、台付甕の破片が出土した。184・185のように条痕文土器も出土しているが、186の柱状台付甕が出土していることから、遺構の時期は弥生時代中期後半・長床式期と考えられる。

S K-28 (第33図)

187~191は弥生土器である。受口状を呈する壺の口縁部187や188・189の台付甕、191の高坏等が出土している。190は棒状工具を刺突した装飾部の破片だと思われる。

S K-29 (第33図)

192~194は弥生土器である。192は高坏の脚部で細横線文が廻る。193は壺の底部で、下部から跳ね上げるようなミガキ痕が確認できる。194は広口壺の口縁部で内面に連続刺突文、口縁端部には横線文が廻る。弥生時代後期・寄道式か。

S K-30 (第33図)

195は弥生土器の器台である。6条の棒状工具による沈線と2cm台の穿孔が確認できる。弥生時代後期・寄道式か。

S K-31 (第33図)

196・197は弥生土器である。196が台付甕、197は広口壺の口縁部片である。196の広口壺は垂下する口縁端部に3条の横線文を施し、内面にハの字状の押引き文を施している。弥生時代後期・寄道式。

B. 中世以降・包含層

S B-7 (第34図)

198は筑である。Pit1 から出土した。上部が欠損している。

S D-2 (第34図)

199~204は古墳時代以前の土器で混入品である。S D-2がS B-6を破壊した際に混入したと考

えられる。205は陶器の碗である。高台が潰れていることから、渥美窯3型式と考えられる。

S K-32 (第34図)

13世紀末～14世紀にかけての遺物が出土した。206～209は陶器の碗である。209は高台が無い。210は土師器の碗である。底部に回転糸切痕が残る。211は土師器の鍋である。所謂伊勢型鍋で、頸部が直立する。212は陶器の鉢である。内面は使用が著しい。底部が壺や甕のような形状をしており、製作段階で鉢に切り替えたものと推測される。S D-2から同一個体の破片が出土し、接合している。213・214は管状土錘である。215は古銭である。表面が錆と風化により文字等は判読できなかった。

S K-33 (第34図)

S K-34と同時期の遺物が出土した。216は陶器の碗である。217・218は陶器の小皿である。219は土師器の羽釜、220は土師器の鍋の口縁部である。221は陶器の壺の胴部片である。222は古銭で、215と同じく、文字の判読はできない。

S K-34 (第34図)

223は陶器の甕である。予め口縁部だけに打割され、土坑に反転して取められていた。渥美産で肩部に文様の一部が残る。

S K-35 (第34図)

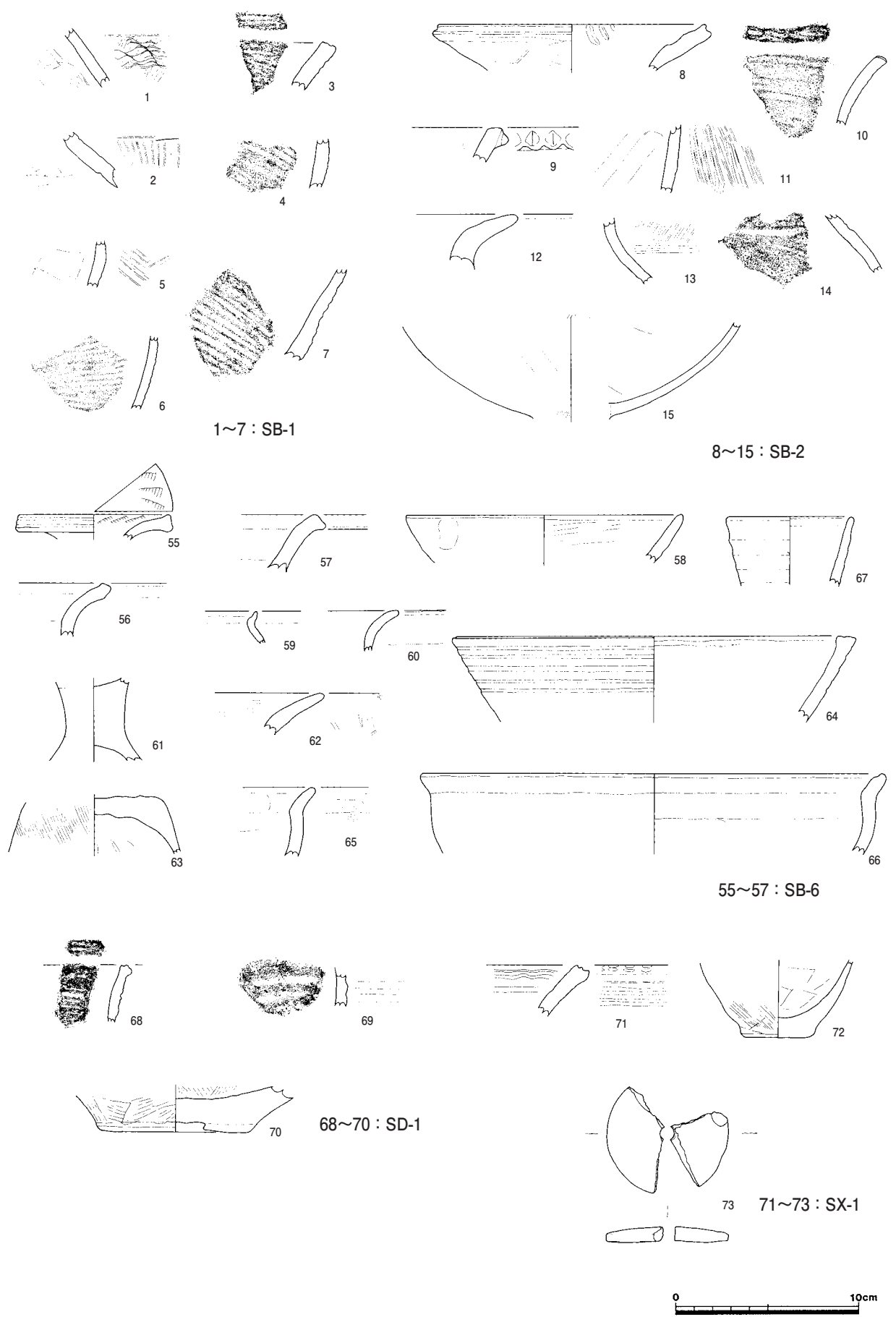
中世以降の土坑であるが、弥生時代～古墳時代にかけての遺物が出土している。出土した遺物は224が条痕文土器、225・226・227が土師器の甕である。228は黒曜石の残核片である。

S K-37 (第34図)

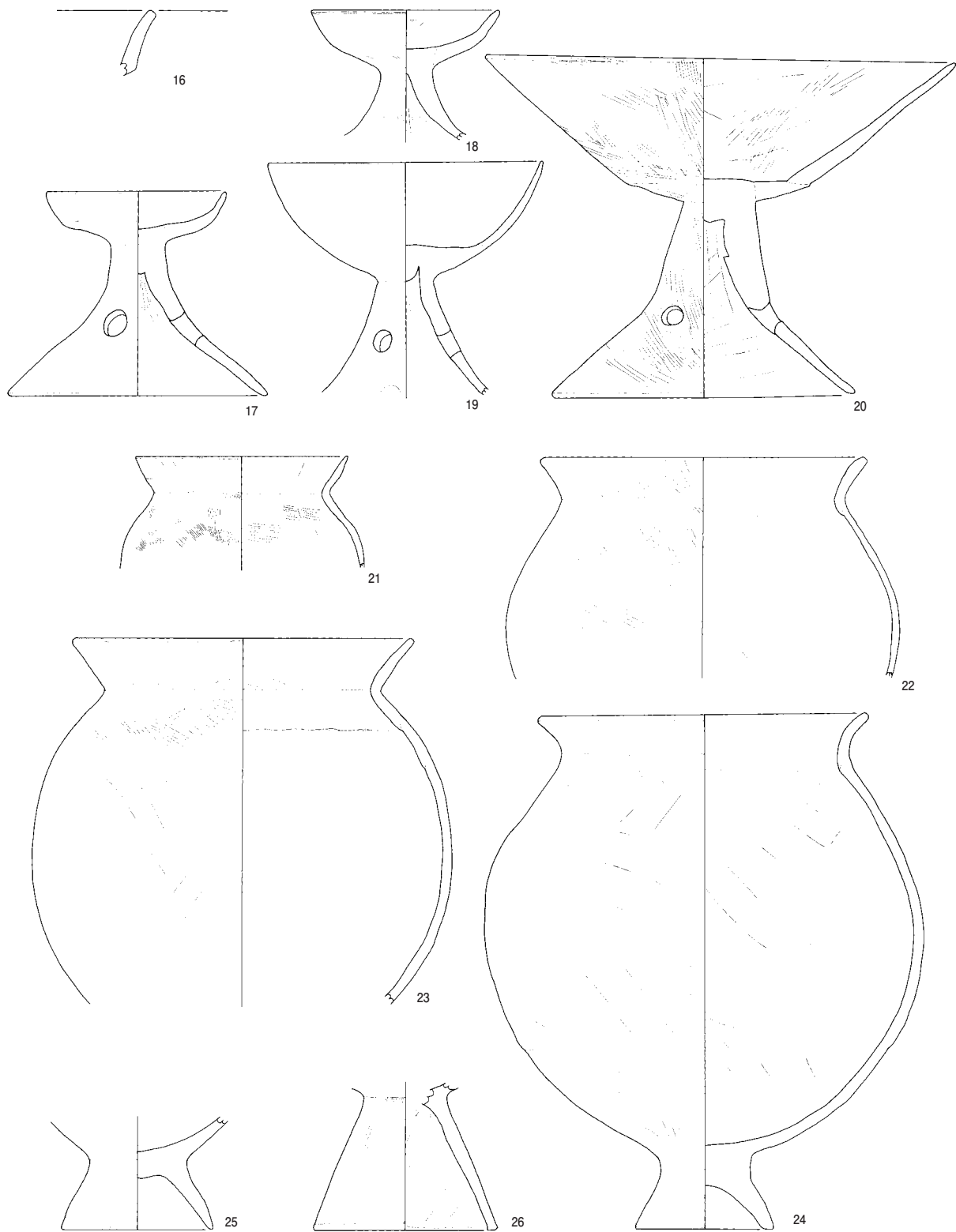
229は渥美産の甕である。215に類似する。包含層と検出時に土坑周辺で出土しており、土坑に伴う遺物でない可能性がある。

包含層 (第35図)

230～233は弥生時代中期前葉の条痕文土器である。230・231が甕、232・233が壺である。口縁端部を刺突文や押引文で施文している。233は摩滅が著しく、条痕はほとんど確認できない。234は弥生土器の広口壺である。内面と口縁端部に竹管文と押引文で施文している。弥生時代後期・寄道式。235は土師器の甕、236は土師器の壺の口縁部である。いずれも受口状を呈している。237は土師器のS字甕である。狭間Ⅱ～Ⅲ式と考えられる。238は土師器の台付甕の脚部である。239～246は球状土錘である。2～3cmの球状で胎土は土師器に近く粗い。古墳時代のものと考えられる。247～256は須恵器である。247・248は坏蓋、249～251は坏身である。252～254は高坏で、255・256は壺あるいは甕である。高坏は口縁部を屈曲させ、254は沈線が廻る。いずれも6世紀末～7世紀にかけての遺物である。257～259は土師器の甕である。259は外面ハケ調整、内面ナデ調整である。260は土師器の碗の底部である。261・262は陶器の碗である。260～262は14世紀か。263は陶器の片口鉢である。胎土が粗く、石英粒などが多く混入し、瀬戸産の遺物と考えられる。264は陶器の甕で内外面ともに板ナデ調整が施される。腰部ではタタキも確認できる。265～268は土師器の鍋である。口縁部を折り込む伊勢型鍋である。いずれも接合したのは口縁部破片のみで、胴部と思われる破片も出土しているが、器厚は非常に薄い。269・270は管状土錘である。S K-33で出土した遺物と類似する。



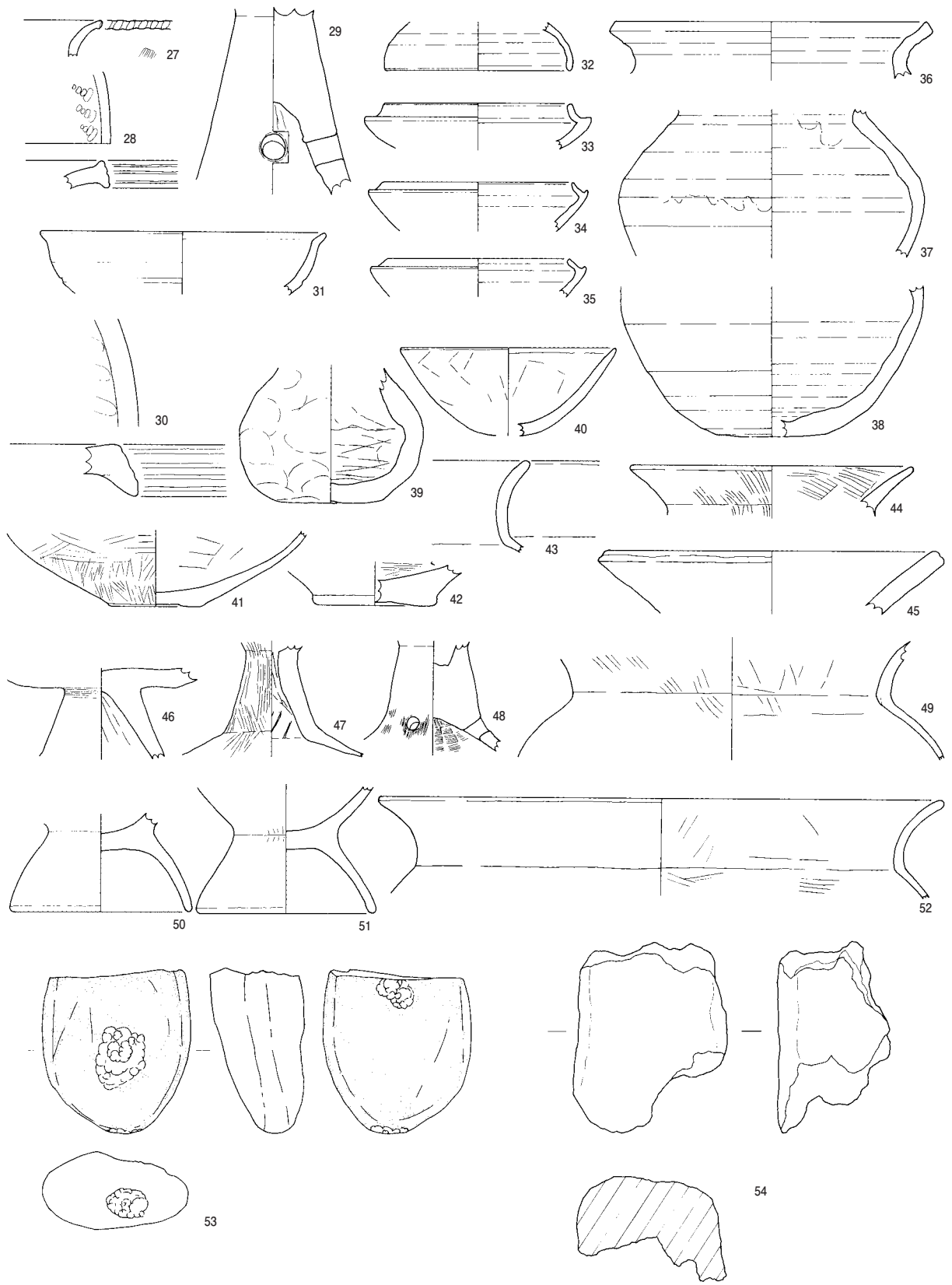
第26図 境松 C 区遺物実測図 1 (1 / 3)



16~26 : SB-5 (12層)

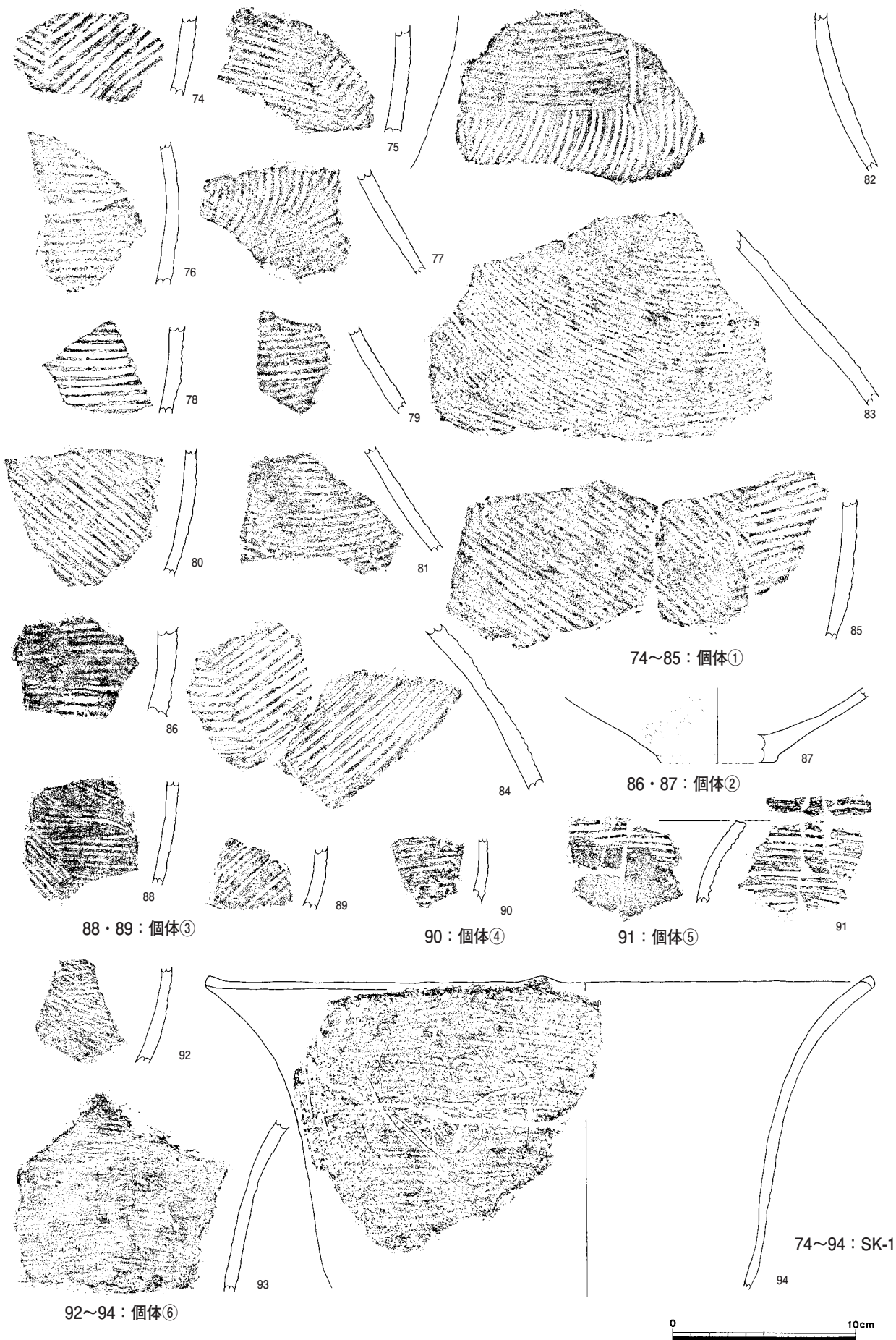


第27図 境松C区遺物実測図2 (1/3)

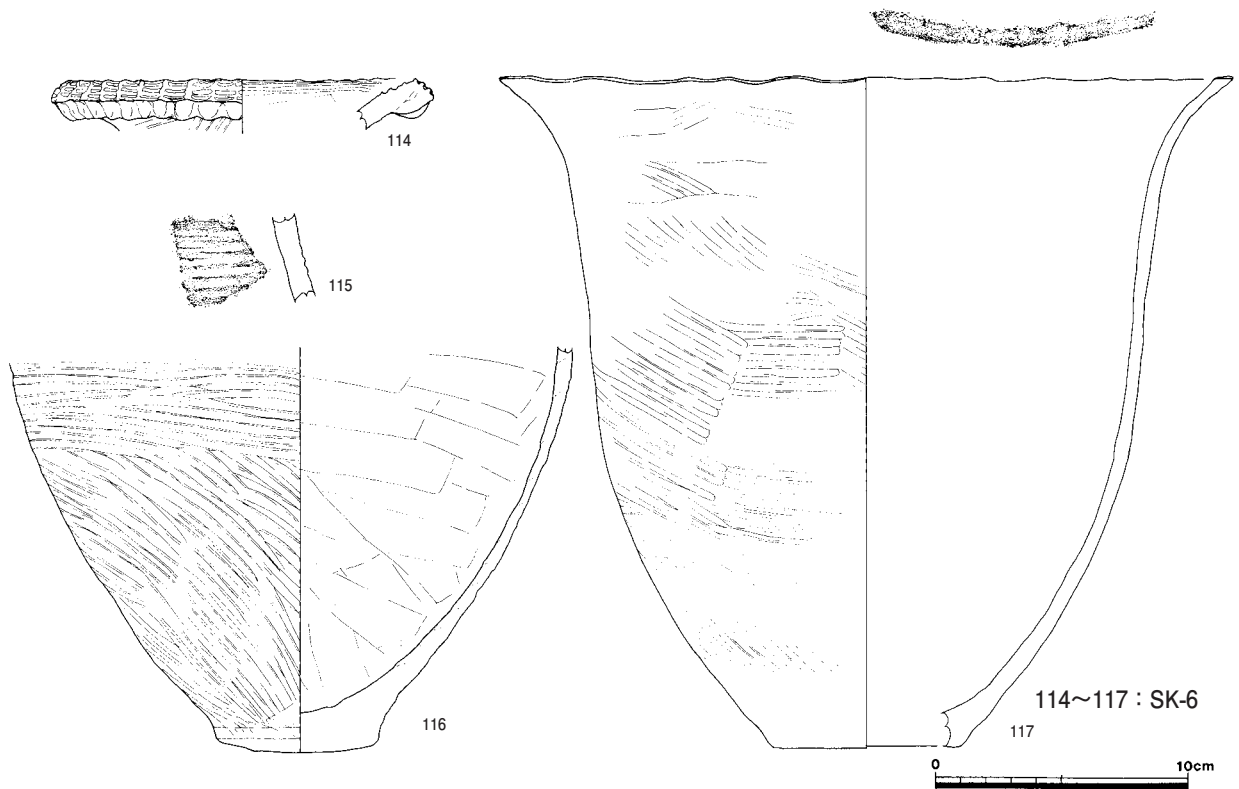
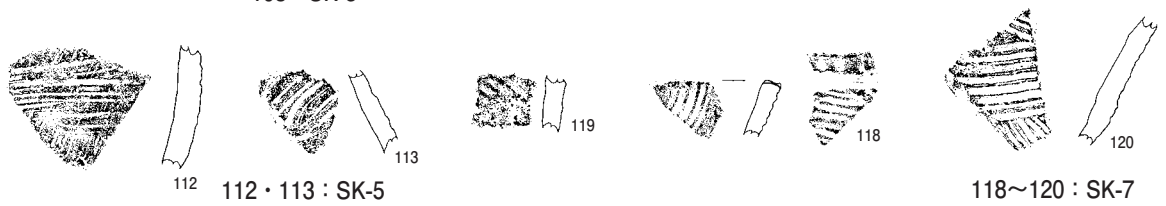
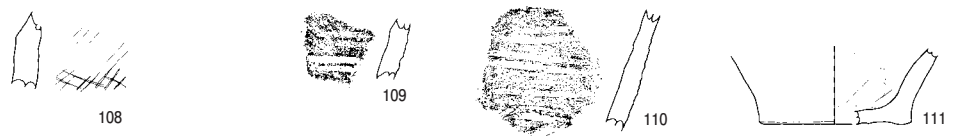
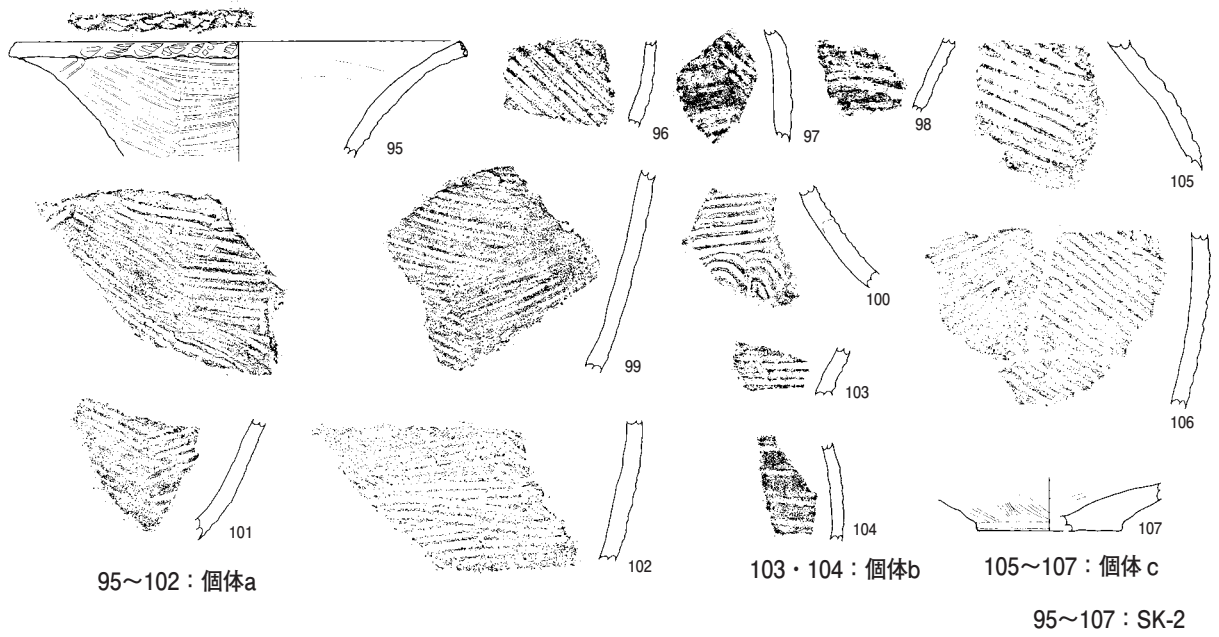


27~54 : SB-5 (6層)

第28図 境松 C 区遺物実測図3 (1 / 3)



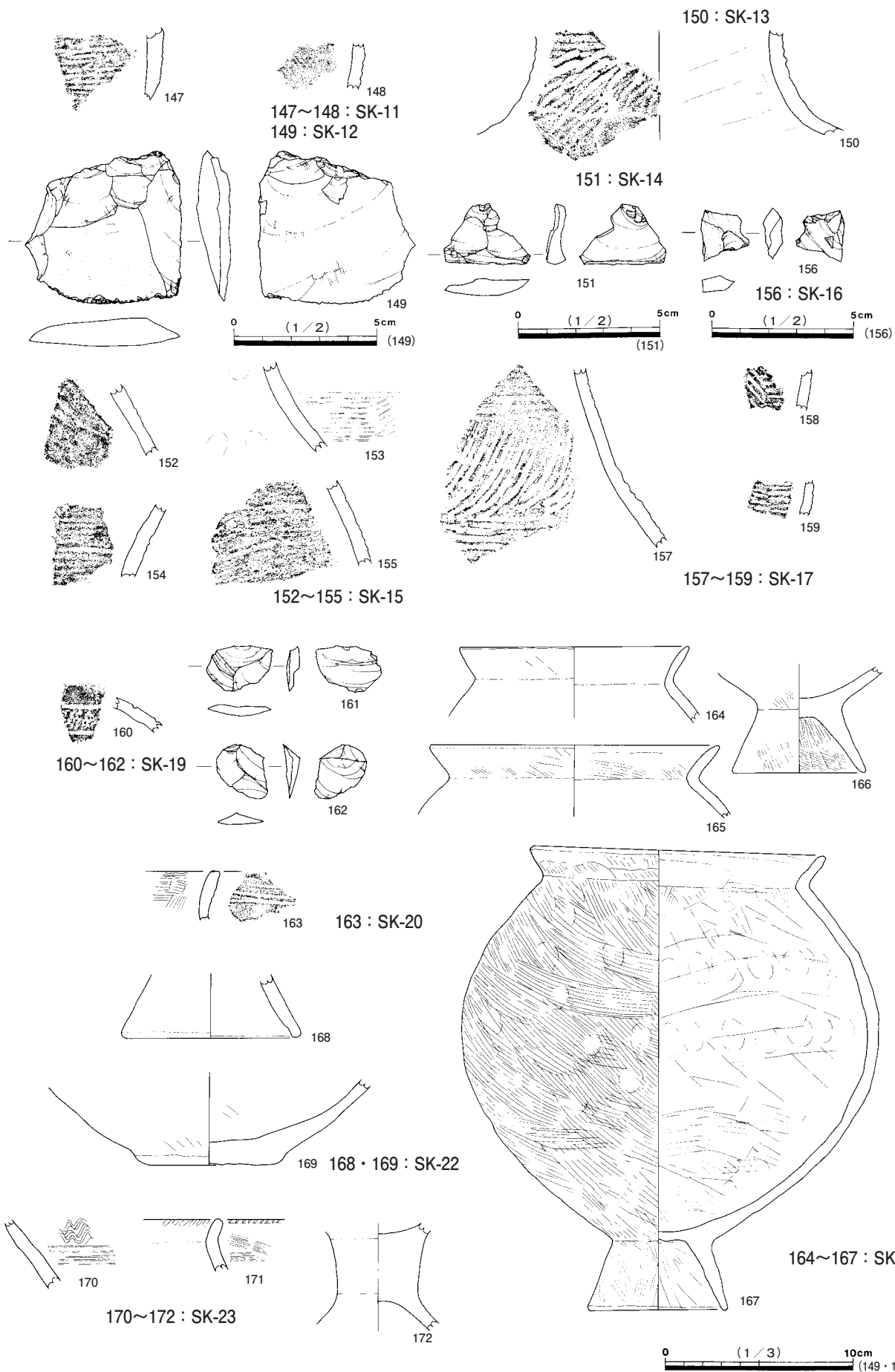
第29图 境松 C 区遺物実測図4 (1 / 3)



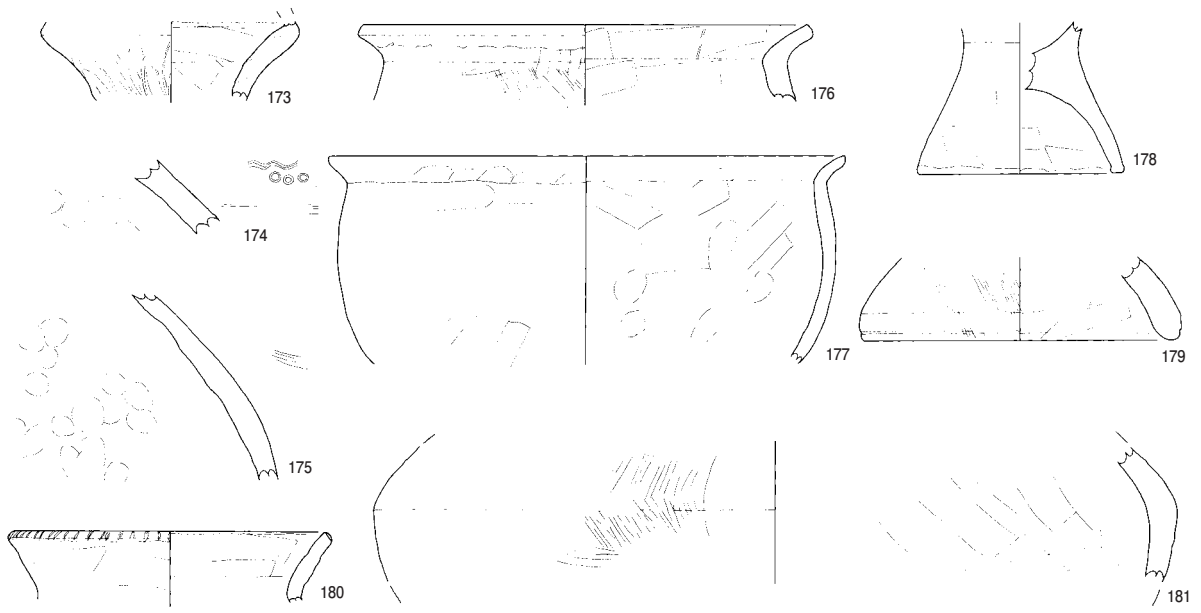
第30図 境松C区遺物実測図5 (1/3)



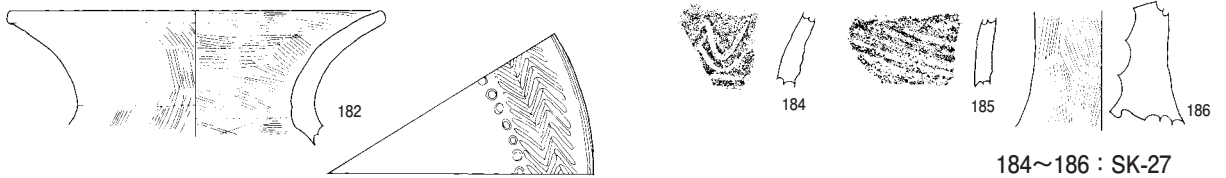
第31図 境松 C 区遺物実測図6 (1 / 3)



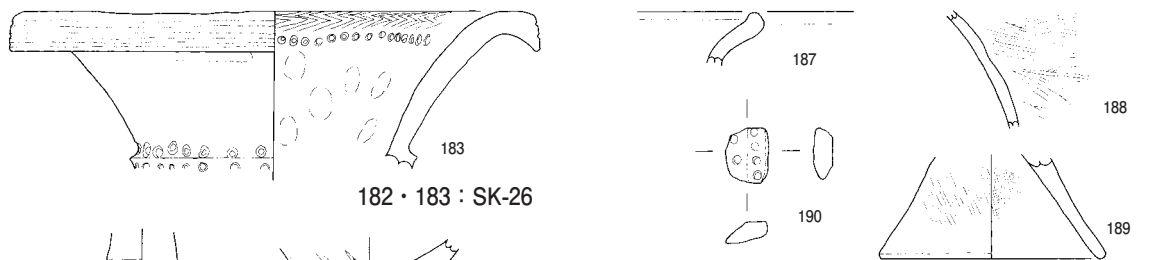
第32図 境松 C 区遺物実測図7 (1/2・1/3)



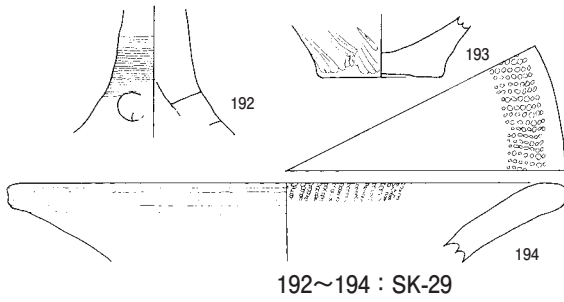
173~181 : SK-24・25



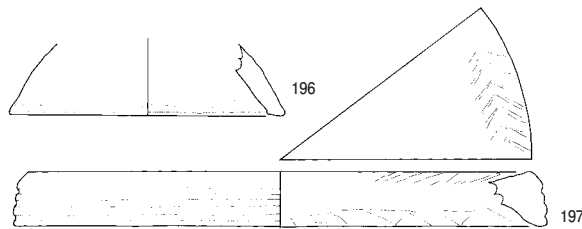
184~186 : SK-27



187~191 : SK-28

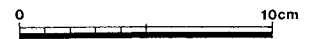


192~194 : SK-29

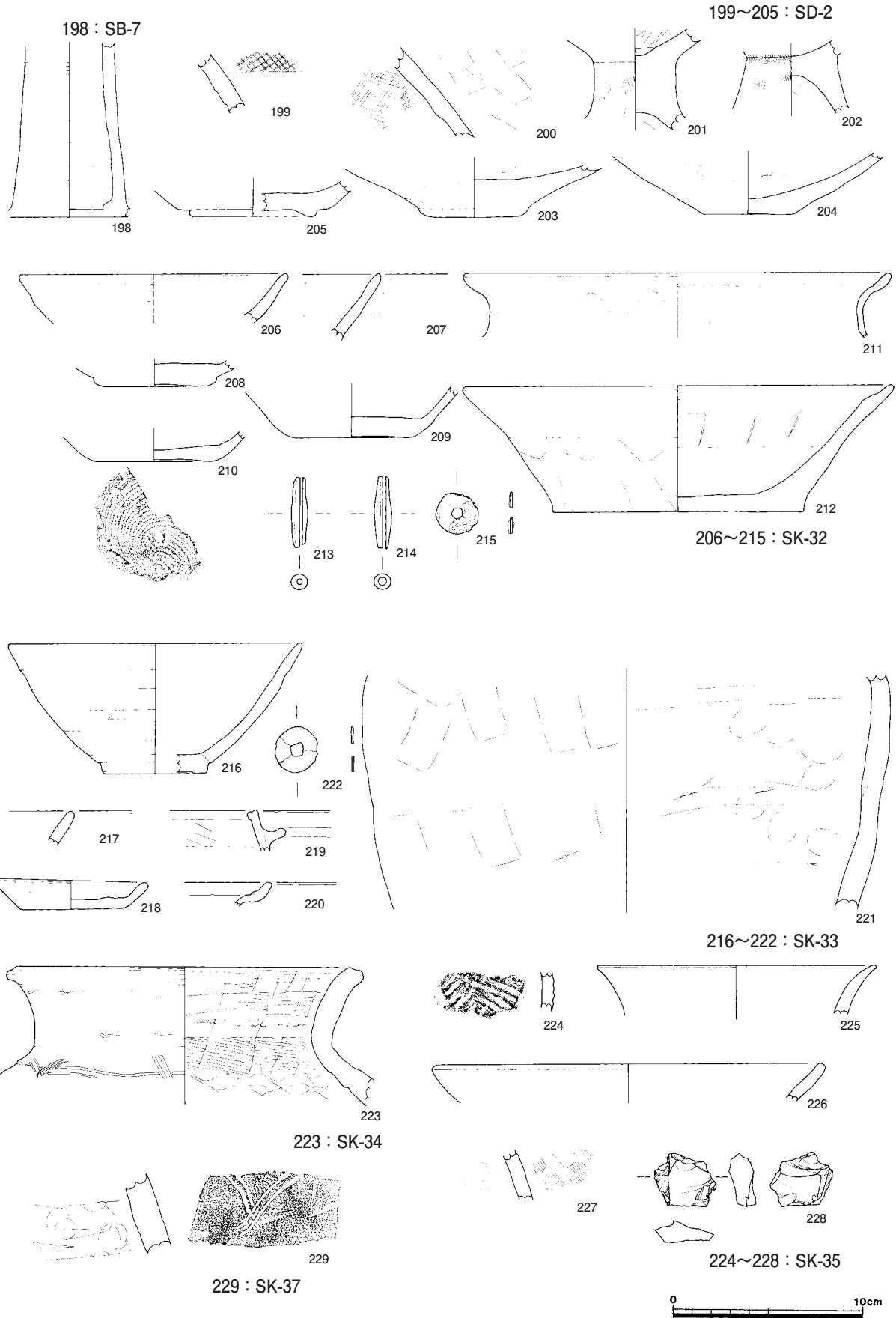


196・197 : SK-31

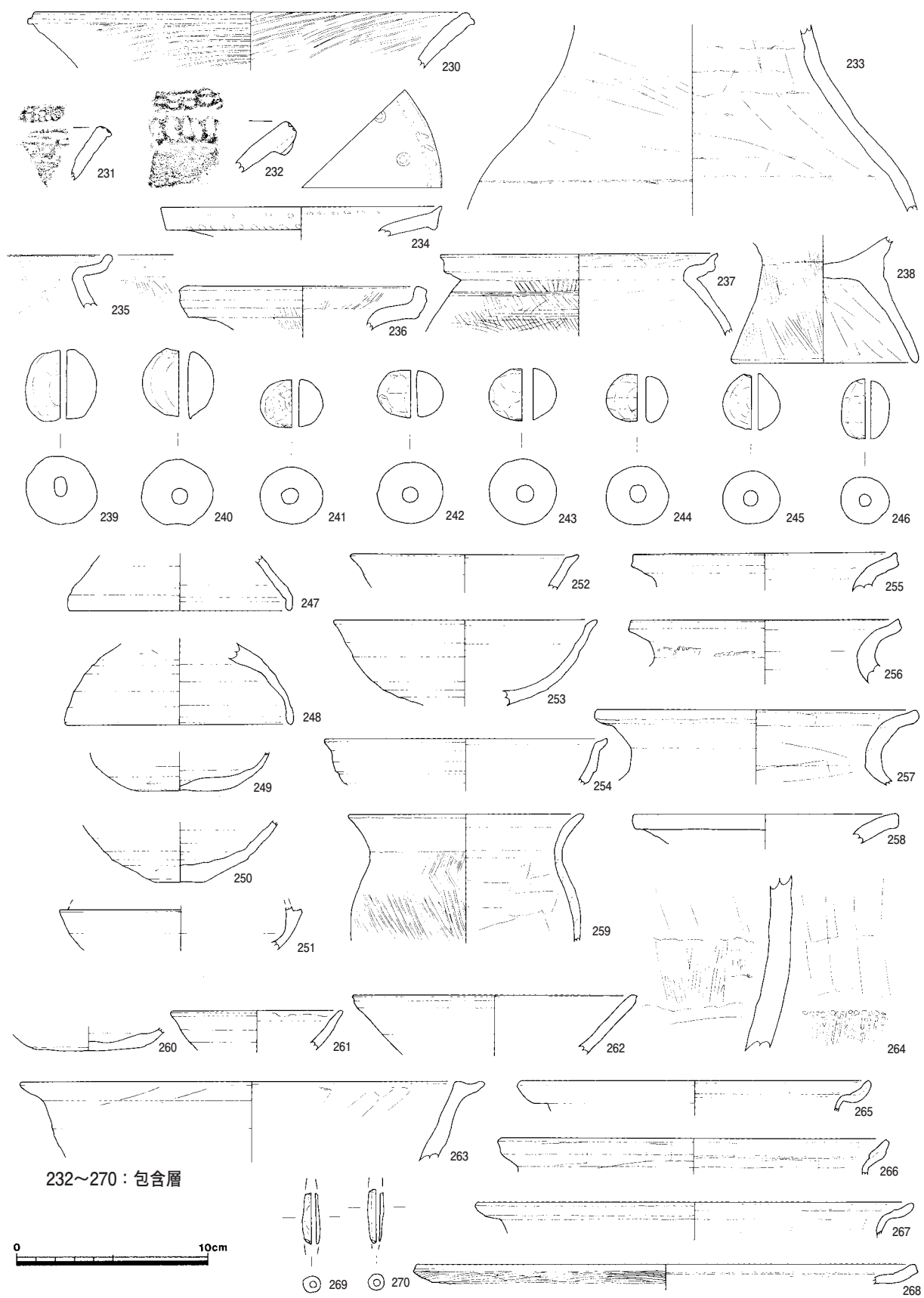
195 : SK-30



第33図 境松 C 区遺物実測図 8 (1 / 3)



第34図 境松 C 区遺物実測図 9 (1 / 3)



第35図 境松 C 区遺物実測図10 (1 / 3)

第 2 表 境松遺跡 C 区遺物観察表

NO.	遺構名	分類	器種	細分	時期	法量 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		備考
						口径 / 長さ	器高 / 幅	底径 / 厚さ						
1	SB-1	弥生土器	壺				(3.2)			密	良	10YR7/4	にふい黄橙	
2	SB-1	弥生土器	壺				(2.6)			やや密	良	2.5YR5/8	明赤褐	
3	SB-1	弥生土器	壺		続水神平式		(3.0)			やや密	良	10YR6/4	にふい黄橙	
4	SB-1	弥生土器	甕				(2.8)			やや密	良	10YR4/4	褐	磨減著しい
5	SB-1	弥生土器	甕				(2.5)			やや粗雑	良	7.5YR5/8	明褐	
6	SB-1	弥生土器	甕				(5.0)			密	良	10YR6/4	にふい黄橙	
7	SB-1	弥生土器	甕				(5.0)			密	良	10YR4/4	褐	
8	SB-2	弥生土器	壺	広口壺	続水神平式	15.2	(2.5)		5%	密	良	10YR5/4	にふい黄褐	
9	SB-2	弥生土器	壺	広口壺	続水神平式		(1.9)			やや粗雑	良	5YR5/6	明赤褐	
10	SB-2	弥生土器	甕		続水神平式		(3.8)			やや粗雑	良	10YR5/4	にふい黄褐	磨減著しい
11	SB-2	弥生土器	甕		長床式		(3.7)			密	良	10YR6/6	明黄褐	
12	SB-2	弥生土器	壺		長床式		(3.7)			密	良	5YR4/6	赤褐	
13	SB-2	弥生土器	壺		長床式		(3.1)			やや粗雑	良	7.5YR4/6	褐	
14	SB-2	弥生土器	甕	台付甕	長床式		(5.3)			密	やや粗雑	7.5YR4/3	褐	
15	SB-2	弥生土器	壺	広口壺	長床式		(3.0)			密	良	5YR5/6	明赤褐	
16	SB-5	土師器	高坏	有縁高坏			(3.3)			密	良	5YR5/6	明赤褐	
17	SB-5	土師器	高坏	小皿形高坏	狭間Ⅱ式		10.3	13.0	90%	密	良	7.5YR7/6	橙	
18	SB-5	土師器	高坏	小皿形高坏	狭間Ⅱ式	9.5	(6.5)			密	良	5YR6/8	橙	小型製品
19	SB-5	土師器	高坏	碗形高坏		13.8	(11.7)			密	良	5YR5/6	明赤褐	
20	SB-5	土師器	高坏	有縁高坏	狭間Ⅱ式		(11.0)	14.8	95%	密	良	10YR5/6	黄褐	
21	SB-5	土師器	甕			10.7	(5.5)			密	良	10YR6/6	明黄褐	
22	SB-5	土師器	甕			16.4	(11.0)	19.7	10%	密	良	5YR4/4	にふい赤褐	
23	SB-5	土師器	甕			17.2	(18.3)		30%	やや粗雑	良	10YR7/4	にふい黄橙	
24	SB-5	土師器	甕	台付甕		16.6	25.8	6.9	60%	やや粗雑	良	10YR6/6	明黄褐	
25	SB-5	土師器	甕	台付甕			(5.6)	7.6		やや粗雑	良	7.5YR5/8	明褐	
26	SB-5	土師器	甕	台付甕			(7.4)	9.2		密	良	7.5YR5/8	明褐	
27	SB-5	弥生土器	壺		寄道式		(1.8)			やや粗雑	良	7.5YR3/1	黒褐	
28	SB-5	弥生土器	広口壺		寄道式		(1.5)			やや粗雑	良	10YR6/4	にふい黄橙	
29	SB-5	弥生土器	高坏		寄道式		(9.4)			密	良	10YR7/4	にふい黄橙	
30	SB-5	弥生土器	壺	大型壺	寄道式		(2.6)			やや粗雑	良	2.5YR4/8	赤褐	
31	SB-5	須恵器	高坏	碗形高坏	7世紀	14.6	(3.2)			密	良	2.5Y7/2	灰黄色	
32	SB-5	須恵器	坏蓋		7世紀	9.6	(2.4)			密	良	5Y6/1	灰	
33	SB-5	須恵器	坏身		6世紀末	9.7	(2.3)		10%	密	良	5GY6/1	オリブ灰	最大径 11.6
34	SB-5	須恵器	坏身		7世紀	11.2	(2.5)			密	良	5Y6/1	灰	
35	SB-5	須恵器	坏身		7世紀	11.0	(1.9)			密	良	5Y6/1	灰	
36	SB-5	須恵器	壺	広口壺	7世紀	16.4	(2.9)			密	良	5Y6/1	灰	
37	SB-5	須恵器	壺	広口壺	7世紀		(7.6)		5%	密	良	2.5Y6/2	灰黄	最小径 9.5 最大径 15.6
38	SB-5	須恵器	壺	広口壺	7世紀		(7.7)	5.6		密	良	5Y5/1	灰	
39	SB-5	土師器	壺	小型壺	松河渡Ⅱ		(7.0)		60%	密	良	10YR7/4	にふい黄橙	体部径 9.35
40	SB-5	土師器	鉢	碗形鉢		11.0	(4.5)		40%	密	良	7.5YR5/6	明褐	
41	SB-5	土師器	壺				(3.9)	5.0		やや粗雑	良	7.5YR4/4	褐	
42	SB-5	土師器	壺				(2.1)	6.4		密	良	10YR7/6	明黄褐	
43	SB-5	土師器	甕				(4.7)			密	良	7.5YR5/6	明褐	
44	SB-5	土師器	壺	くの字状口縁台付甕		14.4	(2.5)			密	良	7.5YR5/6	明褐	
45	SB-5	土師器	壺	広口壺		17.7	(3.2)			密	良	7.5YR6/6	橙	
46	SB-5	土師器	高坏		宇多Ⅰ式		(5.7)		40%	密	良	7.5YR6/6	橙	最小径 2.6
47	SB-5	土師器	高坏	有縁高坏	狭間Ⅱ式		(4.6)		20%	密	良	10YR5/4	にふい黄橙	脚部最小径 4.9
48	SB-5	土師器	高坏	有縁高坏			(5.8)			密	良	10YR8/4	浅黄橙	
49	SB-5	土師器	台付甕				(6.12)		5%	密	良	7.5YR3/1	黒褐	
50	SB-5	土師器	甕	台付甕			(5.0)	9.4		やや粗雑	良	10YR8/4	浅黄橙	
51	SB-5	土師器	甕	台付甕			(6.5)	9.2		やや粗雑	良	10YR8/4	浅黄橙	
52	SB-5	土師器	甕	台付甕		28.8	(5.0)			密	良	10YR5/4	にふい黄褐	大型台付甕
53	SB-5	石器	敲石			(8.4)	7.4	4.7						
54	SB-5	土製品	支脚	土製支脚		(9.8)	7.8			やや粗雑	良	10YR5/4	にふい黄褐	
55	SB-6	弥生土器	壺	細頸壺	寄道式	8.6	(1.8)		3%	やや粗雑	やや不良	10YR7/4	にふい黄橙	
56	SB-6	弥生土器	甕	受口状口縁台付甕			(2.9)		3%	密	良	10YR7/3	にふい黄橙	
57	SB-6	弥生土器	壺	広口壺			(3.1)		5%	密	良	10YR4/2	灰黄褐	
58	SB-6	土師器	高坏	碗形高坏		15.2	(2.7)		3%	やや粗雑	良	10YR6/3	にふい黄橙	
59	SB-6	土師器	甕	受口状口縁台付甕			(1.8)			密	良	10YR6/4	にふい黄橙	
60	SB-6	土師器	甕	くの字状口縁台付甕			(2.2)		3%	密	良	10YR5/3	にふい黄褐	
61	SB-6	土師器	甕	台付甕	長床式		(4.6)		5%	密	良	2.5Y3/2	黒褐	
62	SB-6	土師器	壺	台付甕			(3.2)		5%	やや粗雑	やや不良	7.5YR7/4	にふい橙	
63	SB-6	土師器	壺	台付甕			2.3		5%	密	良	10YR7/6	明黄褐	
64	SB-6	弥生土器	器台			22.2	(4.7)		3%	密	良	7.5YR7/6	橙	沈線内に朱あり。
65	SB-6	土師器	鉢	碗形高坏			(3.8)			密	やや不良	10YR7/3	にふい黄橙	
66	SB-6	弥生土器	鉢	碗形高坏		25.6	(4.4)			密	良	2.5Y3/1	黒褐	
67	SB-6	須恵器	平飯		7世紀	7.0	(3.9)		5%	密	良	2.5Y7/1	灰白	
68	SD-1	弥生土器					(3.2)			やや粗雑	良	10YR5/4	にふい黄褐	

69	SD-1	弥生土器				(22)			やや粗雑	良	10YR5/4	にぶい黄橙		
70	SD-1	弥生土器	壺			(25)	8.9	5%	やや密	良	2.5YR7/1	灰白		
71	SX-1	弥生土器	甕		統水神平式	(28)			やや粗雑	良	7.5YR4/4	褐		
72	SX-1	土脚器	甕			(42)	4.0		密	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
73	SX-1	石製品	紡錘車			6.6		0.8	60%				孔径0.8	
74	SK-1	弥生土器	壺		統水神平式	(44)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
75	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(5.8)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
76	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(7.8)			やや粗雑	良	10YR7/4	明黄褐		
77	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式				やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
78	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(4.7)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
79	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(4.9)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
80	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(7.0)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
81	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(5.8)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
82	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(7.5)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
83	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(9.7)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
84	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式				やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
85	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(7.8)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
86	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(4.9)			やや粗雑	良	10YR6/4	にぶい黄橙		
87	SK-1	弥生土器	壺	広口壺	統水神平式	(4.0)	6.7		密	良	10YR6/4	にぶい黄橙		
88	SK-1	弥生土器	甕		統水神平式	(5.6)			やや粗雑	良	7.5YR5/6	明褐		
89	SK-1	弥生土器	甕		統水神平式	(3.5)			やや粗雑	良	7.5YR5/6	明褐		
90	SK-1	弥生土器	甕		統水神平式	(3.6)			やや粗雑	良	10YR6/3	にぶい黄橙		
91	SK-1	弥生土器	甕		統水神平式	(4.4)			やや粗雑	良	5YR5/8	明赤褐		
92	SK-1	弥生土器	甕		統水神平式				やや粗雑	良	2.5YR5/8	明赤褐		
93	SK-1	弥生土器	甕		統水神平式	(9.3)			やや粗雑	良	5YR5/6	明赤褐		
94	SK-1	弥生土器	甕		統水神平式	36.8	(13.0)		やや粗雑	良	5YR5/6	明赤褐		
95	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	18.2	(4.5)		密	良	7.5YR5/6	明褐		
96	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(3.4)			密	良				
97	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(4.4)			密	良				
98	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(2.9)			密	良				
99	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(8.0)			やや粗雑 砂、小石を含む	良	7.5YR5/8	明褐		
100	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(4.0)			密	良	7.5YR5/8	明褐		
101	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(4.7)			やや粗雑 砂を含む	良	7.5YR5/6	明褐		
102	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(5.5)			やや粗雑 砂、小石を含む	良	7.5YR5/6	明褐		
103	SK-2	弥生土器	甕			(2.6)			密	良	10YR7/3	にぶい黄橙		
104	SK-2	弥生土器	甕		統水神平式	(3.8)			密	良				
105	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(5.0)			やや粗雑 砂、小石を多く含む	良	7.5YR5/6	明褐		
106	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(6.9)			やや粗雑 砂、小石を多く含む	良	7.5YR6/6	橙		
107	SK-2	弥生土器	壺		統水神平式	(1.9)	5.8		やや粗雑 砂、小石を多く含む	良	7.5YR5/6	明褐		
108	SK-3	弥生土器	甕			(3.0)			密	良	10YR4/4	褐		
109	SK-4	弥生土器	甕		統水神平式	(2.3)			やや密	良	5YR4/6	赤褐		
110	SK-4	弥生土器	甕		統水神平式	(4.8)			やや密	良	10YR5/4	にぶい黄橙		
111	SK-4	弥生土器	甕			(3.0)	6.0	5%	密	良	2.5YR5/6	明赤褐		
112	SK-5	弥生土器				(4.8)			密	良	7.5YR6/6	橙		
113	SK-5	弥生土器			水神平皿式	(3.2)			密	良	7.5YR4/2	明褐		
114	SK-6	弥生土器	甕			15.2	(1.9)		やや粗雑	良	10YR5/8	黄褐		
115	SK-6	弥生土器	壺			(3.5)			やや粗雑	良	10YR6/6	明黄褐		
116	SK-6	弥生土器	甕			(16.0)	6.4	40%	やや密	良	7.5YR4/4	褐		
117	SK-6	弥生土器	甕		統水神平式	29.2	26.0	7.4	30%	やや粗雑	良	10YR6/4	にぶい黄橙	
118	SK-7	弥生土器	壺		統水神平式	(2.2)								
119	SK-7	弥生土器	壺		統水神平式	(2.1)								
120	SK-7	弥生土器	壺			(5.0)		3%	やや密	良	5YR5/6	明赤褐		
121	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	32.2	(3.7)		やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
122	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	(4.7)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
123	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	(6.0)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
124	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	(7.3)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
125	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式				やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
126	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	(6.8)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
127	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	(10.3)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
128	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	(10.9)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
129	SK-8	弥生土器	壺		統水神平式	(13.9)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
130	SK-8	弥生土器	甕		統水神平式	(5.0)	5.5		やや粗雑	良	2.5YR4/6	赤褐		
131	SK-9	弥生土器	甕			(5.5)			やや密	良	10YR5/4	にぶい黄橙		
132	SK-9	弥生土器	甕			(3.6)			やや密	良	7.5YR5/6	明褐		
133	SK-9	弥生土器	壺		統水神平式	(4.1)								
134	SK-9	弥生土器	甕			(3.2)	6.0		密	良	10YR5/4	にぶい黄橙		
135	SK-10	弥生土器	壺			18.8	(2.5)	3%	やや粗雑	良	10YR4/1	褐灰		
136	SK-10	弥生土器	壺			(5.3)			やや密	良	10YR6/4	にぶい黄橙		

137	SK-10	弥生土器	壺			(4.7)		5%	やや密	良	10YR5/4	にぶい黄褐	
138	SK-10	弥生土器	壺			(3.7)			やや粗雑	良	10YR3/1	黒褐	
139	SK-10	弥生土器	壺			(4.1)			やや粗雑	良	10YR3/1	黒褐	
140	SK-10	弥生土器	壺			(4.4)			やや粗雑	良	10YR4/4	褐	
141	SK-10	弥生土器	壺			(4.8)			やや粗雑	良	7.5YR6/6	橙	
142	SK-10	弥生土器	壺			(4.9)			やや密	良	10YR5/4	にぶい黄褐	直径120
143	SK-10	弥生土器	壺			(5.9)			やや粗雑	良	5YR4/6	赤褐	
144	SK-10	弥生土器	壺			(4.5)			やや粗雑	良	10YR5/3	にぶい黄橙	
145	SK-10	弥生土器	壺			(3.4)			やや粗雑	良	10YR5/8	黄褐	
146	SK-10	弥生土器	壺			(2.5)	6.9	5%	やや粗雑	良	10YR5/6	黄褐	
147	SK-11	弥生土器	甕		続水神平式	(3.8)			やや密	良	10YR4/4	褐	
148	SK-11	弥生土器	甕		続水神平式	(2.4)			密	良	7.5YR3/2	黒褐	
149	SK-12	石器	削器			5.4	5.6	1.3	安山岩				
150	SK-13	弥生土器	壺			(5.5)			やや粗雑	良	5YR6/6	橙	
151	SK-14	石器	剥片			2.1	3.1	0.7	黒曜石				
152	SK-15	弥生土器	壺			(3.8)			やや粗雑	良	10YR5/2	灰黄褐	
153	SK-15	弥生土器	壺			(4.8)			密	良	10YR6/4	にぶい黄橙	
154	SK-15	弥生土器	甕		続水神平式	(3.8)							
155	SK-15	弥生土器	壺			(4.5)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
156	SK-16	石器	剥片			1.8	1.6	0.7	黒曜石				
157	SK-15	弥生土器	壺			(9.4)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
158	SK-17	弥生土器	壺			(2.1)			密	良	7.5YR3/	黒褐	
159	SK-18	弥生土器	壺			(1.8)			やや粗雑	良	5YR5/6	明赤褐	
160	SK-19	弥生土器	壺		弥生中期	(1.9)		3%	密	良	10YR4/2	灰黄褐	外来系(尾張系か) 偽縄文
161	SK-19	石器	剥片			1.6	2.3	0.4	安山岩				
162	SK-19	石器	剥片			1.9	1.7	0.5	安山岩				
163	SK-20	弥生土器	甕										
164	SK-21	弥生土器	甕	台付甕		122	(4.1)		やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
165	SK-21	弥生土器	甕	台付甕		155	(4.9)		やや粗雑	良	10YR6/3	にぶい黄橙	
166	SK-21	弥生土器	甕	台付甕			(5.7)	7.2	密	良	10R5/4	赤褐?	
167	SK-21	弥生土器	甕	台付甕		158	24.8	7.4	60%	密	良	10YR5/4	にぶい黄褐
168	SK-22	弥生土器	甕	台付甕			(3.4)	9.6	密	良	7.5YR5/4	にぶい褐	
169	SK-22	弥生土器	壺	平底壺			(4.6)	8.0	やや粗雑	良	7.5YR5/8	明褐	
170	SK-23	弥生土器	壺	台付甕	長床式		(3.7)		やや粗雑	良	7.5YR6/6	橙	
171	SK-23	弥生土器	甕	台付甕	長床式		(2.7)		やや粗雑	良	2.5YR5/6	明赤褐	
172	SK-23	弥生土器	甕	台付甕	長床式		(5.8)		やや粗雑	良	7.5YR7/6	橙	
173	SK-24・25	弥生土器	壺	受口状口縁壺	長床式	10.3	(3.0)	5%	やや粗雑	良	5YR6/6	橙	
174	SK-24・25	弥生土器	壺		長床式		(3.0)	5%	密	良	10YR6/3	にぶい黄橙	
175	SK-24・25	弥生土器	壺		長床式		(7.4)		密	良	5YR5/6	明赤褐	
176	SK-24・25	弥生土器	甕	台付甕	長床式	18.0	(3.0)	5%	やや粗雑	良	10YR6/4	にぶい黄橙	
177	SK-24・25	弥生土器	甕	台付甕	長床式	20.4	(8.3)		やや粗雑	良	7.5YR4/4	褐	
178	SK-24・25	弥生土器	甕	台付甕	長床式	4.5	(6.0)	8.2	5%	密	良	5YR5/6	明赤褐
179	SK-24・25	弥生土器	甕	台付甕	長床式	12.6	(3.2)		やや粗い	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
180	SK-24・25	弥生土器	甕	台付甕	長床式	12.0	(3.0)	5%	密	良	10YR4/2	灰黄褐	
181	SK-24・25	弥生土器	壺		長床式		(5.3)		やや密	良	2.5Y5/1	黄灰	最大径31.8
182	SK-26	弥生土器	壺	小型壺		15.0	(5.3)	10%	やや粗雑	良	2.5YR6/8	橙	直径9.4
183	SK-26	弥生土器	壺	広口壺		21.1	(6.3)	頸10.8	10%	やや粗雑	良	5YR5/6	明赤褐
184	SK-27	弥生土器	甕		続水神平式		(2.9)		やや粗雑	良	2.5Y6/1	黄灰	
185	SK-27	弥生土器	壺		続水神平式		(2.7)						
186	SK-27	弥生土器	甕		長床式		(5.0)		やや密	良	5YR5/6	明赤褐	
187	SK-28	弥生土器	甕	受口状口縁甕			(2.1)		やや粗雑	良	5YR6/8	橙	
188	SK-28	弥生土器	甕				(4.6)		密	良	7.5YR6/4	にぶい橙	
189	SK-28	弥生土器	甕	台付甕			(4.1)	9.0	密	良	2.5YR6/2	灰黄	
190	SK-28	土製品				(2.1)			やや粗雑	良	7.5YR7/6	橙	
191	SK-28	弥生土器	高坏				(4.7)		密	良	2.5YR6/2	灰黄	
192	SK-29	弥生土器	高坏		寄道式	3.5	(4.9)	5%	密	良	5YR5/6	明赤褐	
193	SK-29	弥生土器	甕		水神平皿式		(2.4)	5.0	5%	やや粗雑	良	10YR4/3	にぶい黄褐
194	SK-29	弥生土器	壺	広口壺		22.2	(3.1)	5%	やや粗雑	良	2.5YR5/6	明赤褐	
195	SK-30	弥生土器	器台		寄道式?	14.8	(4.4)	5%	密	良	7.5YR6/6	橙	
196	SK-31	弥生土器	甕	台付甕	寄道式	11.0	(2.8)		やや密	良	5YR5/8	明赤褐	
197	SK-31	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	21.0	(2.1)		やや粗雑	良	7.5YR6/6	橙	
198	SH-1	陶器	筑		K-14		(9.3)		密	良	2.5YR7/2	灰黄	
199	SD-2	弥生土器	壺		長床式		(3.2)		やや粗雑	良	5YR4/2	灰オリーブ	格子目文
200	SD-2	土師器	甕				(4.7)		やや粗雑	良	10YR8/4	浅黄橙	
201	SD-2	弥生土器	甕	台付甕			(5.4)		やや粗雑	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
202	SD-2	弥生土器	甕	台付甕			(3.9)		やや粗雑	良	10YR8/4	浅黄橙	
203	SD-2	弥生土器	壺				(2.7)	5.8	やや粗雑	良	5Y3/1	オリーブ黒	
204	SD-2	弥生土器	壺				(3.3)	4.8	密	良	2.5Y6/2	灰黄	
205	SD-2	陶器	碗	山茶碗	13世紀末		(1.9)	6.7	密	良	2.5Y7/1	灰白	
206	SK-32	陶器	碗	山茶碗	14世紀頃	14.2	(2.6)		密	良	2.5YR6/1	赤灰	
207	SK-32	陶器	碗	山茶碗	13世紀末~14世紀中頃		(3.5)		密	良	10Y5/1	灰	

208	SK-32	陶器	碗	山茶碗	13世紀末～14世紀中頃		(14)	6.4		密	良	5Y6/1	灰	無高台の山茶碗
209	SK-32	陶器	碗	山茶碗	13世紀末～14世紀中頃		(27)	6.2		密	良	25Y6/1	黄灰	無高台の山茶碗
210	SK-32	土師器	碗		13世紀		(16)	6.2		密	良	7.5YR5/8	明褐	中世土師器皿
211	SK-32	土師器	鍋	伊勢型鍋	14世紀中頃		(34)			密	良	10YR7/1	灰白	
212	SK-32	陶器	鉢	片口鉢?	12世紀～13世紀中ば	228	6.7	13.3	50%	密	良	25Y7/1	灰白	
213	SK-32	土製品	土錘	管状土錘		0.85	(38)			密	良	25Y6/3	にぶい黄	孔径0.3
214	SK-32	土製品	土錘	管状土錘		0.9 3.9				密	良	25YR6/6	橙	孔径0.4
215	SK-33	貨幣	銅銭		中世	2.2		0.1	95%					孔径0.6 × 0.6 mm
216	SK-33	陶器	碗		14世紀中頃	15.6	6.9	5.7	20%	密	良	10YR7/2	にぶい黄橙	
217	SK-33	陶器	小皿	山茶碗			(18)			密	良	25YR7/1	灰白	
218	SK-33	陶器	小皿	山茶碗	13世紀末～14世紀中頃	8.2	(17)		80%	密	良	25YR7/1	灰白	
219	SK-33	土師器	羽釜	内弯形羽釜	14世紀頃		(23)			密	良	25Y8/2	灰白	
220	SK-33	土師器	鍋	伊勢型鍋	14世紀頃		(13)			密	良	10YR5/2	灰黄褐	
221	SK-33	陶器	壺				(124)			密	良	7.5YR5/4	にぶい褐	
222	SK-32	貨幣	銅銭		中世	23～24		0.1	98%					孔径0.6 × 0.6 mm
223	SK-34	陶器	甕		12世紀後半～13世紀	18.9	(7.5)		15%	密	良	7.5YR6/1	灰	
224	SK-35	弥生土器	甕				(20)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙	磨減著しい
225	SK-35	土師器	甕	長胴甕		14.8	(27)			密	良	7.5YR5/6	明褐	磨減著しい
226	SK-35	土師器	甕			20.8	(20)			やや粗雑	良	5YR5/8	明赤褐	
227	SK-35	土師器	甕				(26)			やや粗雑	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
228	SK-35	石器	残枝片			1.8	2.2	0.9		黒曜石				
229	SK-37	陶器	壺		渥美Ⅲ		(41)							
230	包含層	弥生土器	甕		続水神平式	23.4	(2.9)		3%	やや密	良	10YR5/8	黄褐	
231	包含層	弥生土器	甕				(27)			密	良	5YR5/6	明赤褐	
232	包含層	弥生土器	壺				(27)			密	良	7.5YR6/6	橙	
233	包含層	弥生土器	壺		続水神平式		(9.7)		10%	やや密	良	10YR5/4	にぶい黄褐	
234	包含層	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	14.8	(1.5)			密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
235	包含層	土師器	甕	受口状口縁甕	狭間Ⅲ式		(27)			密	良	25YR4/1	黄灰	
236	包含層	弥生土器	壺	受口状口縁甕		13.0	(2.3)		3%	密	良	7.5YR6/6	橙	
237	包含層	土師器	甕	S字甕	狭間Ⅱ～Ⅲ式	14.5	(4.3)		3%	密	良	10YR5/2	灰黄褐	
238	包含層	弥生土器	甕	台付甕			(6.6)	9.8	10%	密	良	10YR6/4	にぶい黄橙	
239	包含層	土製品	土錘			3.7	3.55		100%	密	良	25Y6/2	灰黄	孔径0.6 × 1.0 mm 長さ3.8
240	包含層	土製品	土錘			3.7	3.4		98%	密	良	25Y6/2	灰黄	孔径0.8 mm 長さ3.7 mm
241	包含層	土製品	土錘			3.25	3.0		100%	密	良	25Y3/1	黒褐	孔径0.9 mm 長さ2.5 mm
242	包含層	土製品	土錘			3.45	3.25		100%	密	良	25Y6/2	灰黄	孔径0.8 長さ2.5 mm
243	包含層	土製品	土錘			3.55	3.5		100%	密	良	25Y7/2	灰黄	孔径0.9 長さ2.8 mm
244	包含層	土製品	土錘			3.25	2.5		100%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	孔径0.85
245	包含層	土製品	土錘			3.0	2.8		100%	密	良	7.5YR6/4	にぶい橙	孔径0.8 mm 長さ2.9 mm
246	包含層	土製品	土錘			2.55	2.45		100%	密	良	25Y5/4	黄褐	孔径0.6 mm 長さ3.1 mm
247	包含層	須恵器	坏蓋			11.8	(2.9)			密	良	5Y6/1	灰	
248	包含層	須恵器	坏蓋		6末～7世紀初頭	12.0	(4.2)		15%	密	良	N7/	灰白	
249	包含層	須恵器	坏身		7～8世紀	4.2	(2.0)		10%	密	良	10YR7/1	灰白	
250	包含層	須恵器	坏身		7世紀前半		(3.2)	2.6	30%	密	良	10YR6/1	灰	
251	包含層	須恵器	坏身				(2.2)			密	良	N6/1	灰	最大径12.8
252	包含層	須恵器	高坏			12.0	(1.8)			密	良	25Y7/1	灰白	
253	包含層	須恵器	高坏		7世紀前半	13.8	(4.5)		5%	密	良	25Y6/2	灰黄	
254	包含層	須恵器	高坏		7世紀前半	14.8	(2.4)		5%	密	良	5Y5/1	灰	
255	包含層	須恵器				14.0	(2.0)			密	良	7.5Y6/1	灰	
256	包含層	須恵器	壺		7世紀前半	14.3	(3.3)		3%	密	良	10YR6/1	灰	
257	包含層	土師器	甕			17.0	(3.9)		5%	密	良	25YR5/6	明赤褐	
258	包含層	土師器	甕			14.0	(1.5)		5%	やや粗雑	良	10YR6/6	明黄褐	
259	包含層	土師器	甕			12.4	(6.7)		10%	密	良	10YR4/2	外: 灰黄褐	
260	包含層	土師器	碗				(1.2)	6.1		密	良	5YR5/8	明褐	表面糸切痕跡有
261	包含層	陶器	碗		渥美Ⅱ	9.0	(2.1)		10%	密	良	25Y7/1	灰白	
262	包含層	陶器	碗	山茶碗	渥美Ⅲ	14.9	(3.1)		5%	密	良	5Y6/1	灰	
263	包含層	陶器	鉢	片口鉢	瀬戸10型式	24.4	(4.2)			密	良	5Y5/1	灰	
264	包含層	陶器	甕				(9.2)			密	良	5Y7/1	灰白	
265	包含層	土師器	鍋	伊勢型鍋		18.6	(1.6)			密	良	10YR5/2	灰黄褐	
266	包含層	土師器	鍋	伊勢型鍋		20.6	(1.8)			密	良	10YR6/2	灰黄褐	
267	包含層	土師器	鍋	伊勢型鍋	14～15世紀	23.0	(1.8)			密	良	25Y7/2	灰黄	
268	包含層	土師器	鍋	伊勢型鍋		26.6	(1.1)		3%	密	良	10YR5/2	灰黄褐	
269	包含層	土製品	土錘	管状土錘		0.9	(2.6)		60%	密	良	25YR5/4	にぶい赤褐	孔径0.35 mm
270	包含層	土製品	土錘	管状土錘		0.8	(2.8)		60%	密	良	25YR5/6	明赤褐	孔径0.35 mm

3. 遺構採取土壌のリン・カルシウム分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

A. はじめに

豊橋市牟呂町に所在する境松遺跡の遺構から採取された土壌について、蛍光 X 線分析によるリン・カルシウム分析を行い、骨の痕跡が残っていないかを調べた。

B. 試料と方法

分析対象となる試料は、葬送儀礼に関連する可能性のある境松遺跡 C 区 SK - 8 より採取された土壌計 2 点で、時期は出土した条痕文土器の壺から弥生時代中期前半である。

分析は、藤根ほか (2008) の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析によりリン、カルシウムを多く含む箇所を面的に検出し直接測定できるという利点がある。測定試料は、乾燥後、極軽く粉碎して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で 20t・1 分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である (株) 堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム (Rh) ターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器 (Xerophy) で、検出可能元素はナトリウム (Na) ~ウラン (U) である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得て、その結果を基にリン (P) のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では 50kV、1.00mA、ビーム径 100 μ m、測定時間 2000s を 5 回走査、パルス処理時間 P3 に、ポイント分析では 50kV、0.10~0.44mA (自動設定)、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s、パルス処理時間 P4 に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

C. 結果

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った。ポイント分析結果より酸化物の形で表した半定量値を第 3 表に示す。

分析の結果、分析 No. 1 はリン (P_2O_5) が 0.03~0.59%、カルシウム (CaO) が 0.14~0.98% の値を示した。分析 No. 2 はリンが 0.00~0.64%、カルシウムが 0.61~0.81% の値を示した。分析 No. 3 はリンが 0.00~0.06%、カルシウムが 0.55~1.38% の値を示した。

D. 考察

ヒトを含む動物の骨や歯は、ハイドロキシアパタイト $Ca_5(PO_4)_3OH$ が主成分であり、すなわち蛍光 X 線分析ではリン (P) とカルシウム (Ca) が共に高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウムは鉄

第3表 半定量分析結果 (mass%)

試料	ポイント	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
2層	a	0.84	24.20	63.64	0.64	0.27	1.38	0.76	0.95	0.05	7.20	0.01	0.02	0.01	0.02
	b	0.79	25.20	61.28	0.00	0.18	1.39	0.81	0.99	0.09	9.22	0.01	0.01	0.01	0.04
	c	0.93	20.63	69.07	0.00	0.21	1.32	0.61	0.82	0.08	6.21	0.01	0.01	0.00	0.08
	d	0.82	25.50	61.76	0.08	0.25	1.41	0.79	1.24	0.05	8.05	0.02	0.01	0.00	0.02
	e	0.81	24.77	63.14	0.21	0.24	1.45	0.67	1.02	0.10	7.54	0.01	0.02	0.00	0.01
3層	a	0.82	23.07	62.31	0.06	0.24	1.39	0.55	0.98	0.08	10.46	0.02	0.01	0.00	0.02
	b	0.78	25.76	61.80	0.00	0.18	1.60	0.62	1.03	0.07	8.11	0.01	0.01	0.01	0.02
	c	0.95	18.37	71.11	0.04	0.26	1.96	1.38	0.76	0.07	5.04	0.02	0.02	0.00	0.02
	d	0.88	26.44	61.74	0.04	0.21	4.64	0.66	0.61	0.10	4.62	0.02	0.01	0.00	0.03
	e	0.80	24.10	61.58	0.05	0.21	1.61	0.64	1.10	0.08	9.76	0.02	0.02	0.01	0.02

物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、木材なども蛍光 X 線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムのみを検出では骨由来であるか骨以外のもの由来であるかを判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には骨が存在していたが、堆積・埋没過程で分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない可能性や、骨からピビアナイト Fe₃(PO₄)₂·8H₂O が析出しているケースのように骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという可能性もある。

今回測定したいずれのプレス試料とも、リンの含有量が1%未満であり、リン含有量の明らかに多い箇所は検出されなかった。しかしながら、試料間で比較すると、3層がいずれの箇所も0.1%未満であるのに対して、2層は0.5%を超える箇所が存在した。これらが骨・歯に由来する可能性はある。

E. おわりに

境松遺跡C区の遺構 (SK-8) より採取された土壌について分析を行った結果、いずれの試料からもリン、カルシウムともに明らかに多く含む箇所は見出せなかったものの、2層の土壌から、わずかながらリンが多い傾向が見られた。以上、自然科学的見地から、これら遺構内の土壌についてヒトを含む動物の骨・歯などの存在を示唆する結果を得た。遺構の性格については、出土状況や類例など考古学的所見と合わせて総合的に判断することが望まれる。

参考文献

- 藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎 (2008) 蛍光 X 線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析. 日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集, 108-109.

4. 小結

境松遺跡は、丘陵上を中心とした遺跡であり、境松C区も立地条件から集落の中心地の範疇であると考えられる。検出された遺構も境松遺跡の主要時期である弥生時代中期末～古墳時代前半の建物址が集中している状況であった。弥生時代の住居址は大型の傾向があり、最も大きいもので長径が9mを超えている。さらに住居址が重複しており、建て直しを行いながら、同地に居住した様相が見て取れる。古墳時代前半に相当する住居址は、台地上にのみ存在する。弥生時代や古墳時代後半の集落範囲に比べ、より高台に集中していた様相が見受けられる。また、古墳時代前半の住居址は、深度が40cmと深く掘り込まれており、原位置を保った土器が出土する等、良好な状況で検出された。これに対して弥生時代の住居址は、他の調査区や周辺遺跡で検出されたものと同じく、周溝の底部のみが検出され、住居内の掘り込みはほとんど確認できなかった。両時代の住居検出面の標高地は同程度であるため、弥生時代の住居址は元々掘り込みが浅いものであったと推測される。

C区の調査成果としては、こうした集落の中心地の確認がなされたことに加え、これまで周辺遺跡で発見されていなかった続水神平式期の遺構が発見されたことが挙げられる。弥生時代中期前葉の続水神平式の土器は、内田貝塚や坂津寺貝塚で確認されている他、市杵島神社貝塚で一定量の出土量が確認されているが、台地上の遺構内から出土した事例は初である。これらの土坑からは、土器あるいは黒曜石の剥片が出土するが、その出土量は一定ではない。SK-1やSK-8のように多量の土器片を意図的に配置した例から、土器片が1点出土するだけの例など多様である。特筆されるのは前者の事例で、柱穴状の土坑を掘った後、礫を配置し、複数個体の土器片を重ねて配置した土坑である。土坑内の埋土は2層に分かれ、中心部分は柱穴痕のようであった。最初に配置される礫は土坑深度の半分程の高さで出土したことから、予め礫の下に土あるいは何らかの有機物が埋納されていたと推測される。また出土した土器片は土坑の大きさに合わせて敷き詰められており、土器が土坑上に配置され沈下したとは考え難い。加えて、土器片は一部接合するものの、完形品あるいは半割品などの成形とはならず、個体数も複数確認されている。

当該時期の土器は甕棺墓等の、葬送儀礼において使用される事例が確認されているが、C区で発見された土坑は、埋葬用には小規模過ぎる上、土器片が意図的に打割されている点から、甕棺墓とは異なるものであると言える。ただし、前述のとおり、土器片より下層の埋土（2層）からはリンがやや多く検出されているため、再葬儀礼に関連する可能性は残る。

以上から、弥生時代中期前葉の土器を伴う土坑群は、土器もしくは土器の下に何らかの物を埋納するためのものであると思われる。今後、当遺跡の周辺の調査が進むにつれて、同様の遺構が増加すると思われる。そのため、続水神平式の段階に相当する集落址等が発見される可能性も多いにある。

第6章 境松遺跡D区

1. 遺構 (第36図)

D区は遺跡の北部に相当し、遺跡範囲内で最も標高値の高い面に位置する。検出された主要遺構は堅穴住居、掘立柱建物、溝、大型土坑である。立地から弥生時代中期末～古墳時代前半にかけての集落址が予想されたが、中世以降に大きく改変されていた。

調査区内で確認された遺構の主要時期は古墳時代前半、中世、近世の3時期である。堅穴建物は、規模と遺物から、C区で検出された古墳時代前半の住居址と同時期であると考えられる。溝は10世紀頃と近世の溝の2時期が確認された。このうち10世紀頃の遺物が出土する。溝SD-1は、台地の北側斜面に沿って掘られ、底部は段を成すように成形されている。また調査区の主時期である中近世期には複数の掘立柱建物と大型の土坑や溝が検出された。掘立柱建物は、SB-4のように、周囲を外周する柱間構造も確認された。また、調査範囲の西側を占める大型土坑は、複数の土坑が重複したもので、中世から近世の遺物が多量に出土した。近世の溝は調査区を直線軸に横断する溝が2条並列し、埋土には礫と土器が敷き詰められたように埋没していた。また、更に新しい18世紀の溝は調査区を蛇行し、東西方向へ延びていた。埋土には焼土や土壁などの遺物が混入していた。

A. 堅穴建物

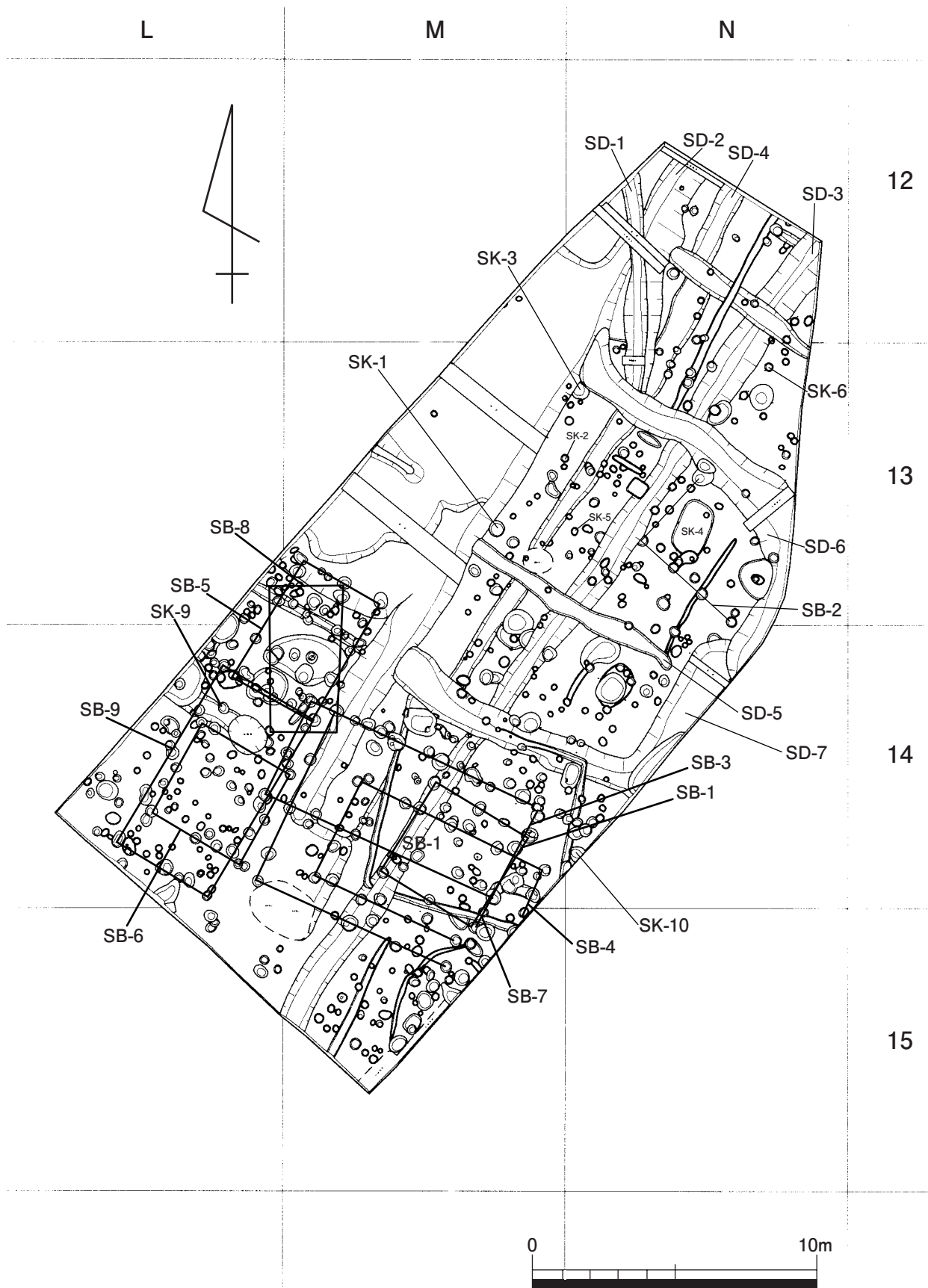
堅穴建物は古墳時代初頭の1軒のみが検出された。中世以降により大きく破壊され、遺物もほとんどが小破片である。

SB-1 (第37図)

M・N-14・15区で検出された堅穴建物である。柱穴と壁溝から構成され、隅丸方形を呈している。規模は一辺が約6.5mを測る。柱穴は3基確認されたが、北東部の柱穴はSB-3の柱穴と重複しており、確認できなかった。また、貯蔵穴のような土坑は共伴せず地焼炉も確認できなかった。中近世の掘立柱建物SB-3や溝SD-2等に破壊されている。建物の埋土には焼土や炭化物が混入しており、地床炉は後世の攪乱を受けて消滅したと考えられる。遺物は、埋土中に破片が散布するような状況であったが、建物の南東部に土器や焼土等とともに、土師器や鉄斧等の遺物が集中している状況が確認できた。いずれも床面直上で出土していることから、住居に伴う遺物であると考えられる。古墳時代初頭。狭間Ⅱ～Ⅲ式期。

B. 掘立柱建物

掘立柱建物は8棟検出された。SB-2が古墳時代、それ以外は戦国時代以降である。SB-3は礎石を伴った柱穴が複数検出された他、SB-4は主柱穴列の外周に、一回り大きい柱穴列が廻る構造である。一般的な居住用の建物でなく、隣接地に鎌倉時代から続く坂津寺が所在することから、寺社関連の建物である可能性がある。



第36図 境松 D 区調査区全体図 (1/200)

SB-2 (第37図)

N-13区で検出された桁行3間、梁行2間の側柱建物である。主軸は北西方向を向く。30cm程の小型の柱穴がL字状に配列して検出され、残りは近世の溝に破壊されていた。柱間は約1.2mで統一されている。柱穴から土師器の丸底甕が出土している。古墳時代初頭。

SB-3 (第38図)

L・M-14区で検出された桁行5間、梁行2間の側柱建物である。主軸は東西方向を向き、柱間は1.8～2m程である。検出された柱穴は12基確認され、このうち5基からは礎石や根石が確認されている。柱穴痕が明瞭に残った柱穴は確認できなかったため、他の柱穴でも礎石が配置されていた可能性がある。柱穴の規模は40cm程で、柱穴の深さも40～50cmと同規模である。柱穴からの出土遺物は土師器の皿や鍋の破片の他、陶器の皿が出土している。15世紀後半か。

SB-4 (第38図)

L・M-14・15区で検出された掘立柱建物である。中央に桁行4間以上、梁行2間の柱穴が、柱間1.8mの間隔で配列する。主軸は北西方向を向く。また、その外周に桁行5軒以上、梁行4間の柱穴列が廻る。柱穴の規模、柱間間隔は同規模である。南側外周列の梁行1間のみ、柱間間隔が90cmと半分になっている。回廊あるいは縁側状の廊下のような付随設備の可能性はある。柱穴の一部からは、根石と思われる礫が出土する。柱穴は中央部が12基、外周部で13基確認され、いずれも規模は類似している。柱穴いずれも40～50cm程に円形で、深さは60cm程である。柱穴からは、土師器の皿や鍋の破片が出土し、混入と推定されるものには、弥生土器や須恵器、山茶碗の破片等が出土した。15世紀。

SB-5 (第39図)

M・L-13・14区で検出された桁行3間、梁行2間の側柱建物である。主軸は北西を向き、柱間は1.6mで統一される。柱穴は全部で10基検出され、いずれも30～40cm程の円形で、深さは約60cmと揃っている。土師器の皿や鍋、陶器の破片が出土しているが、いずれも胴部の小破片で、凶化していない。15世紀後半以降。

SB-6 (第39図)

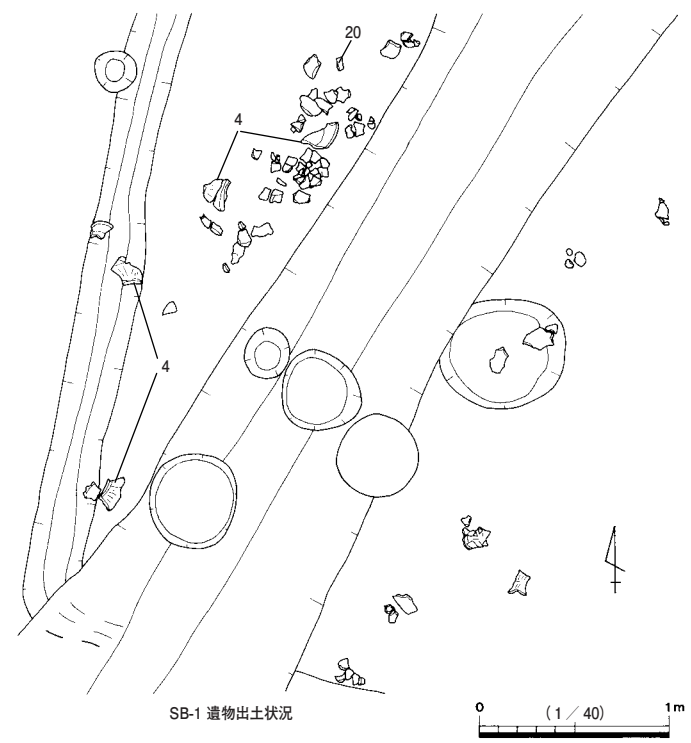
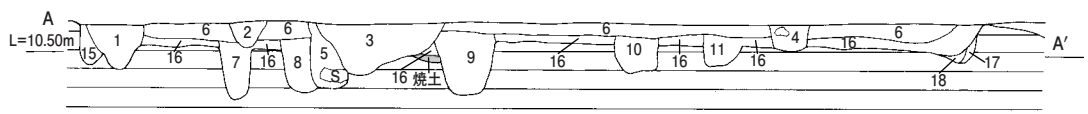
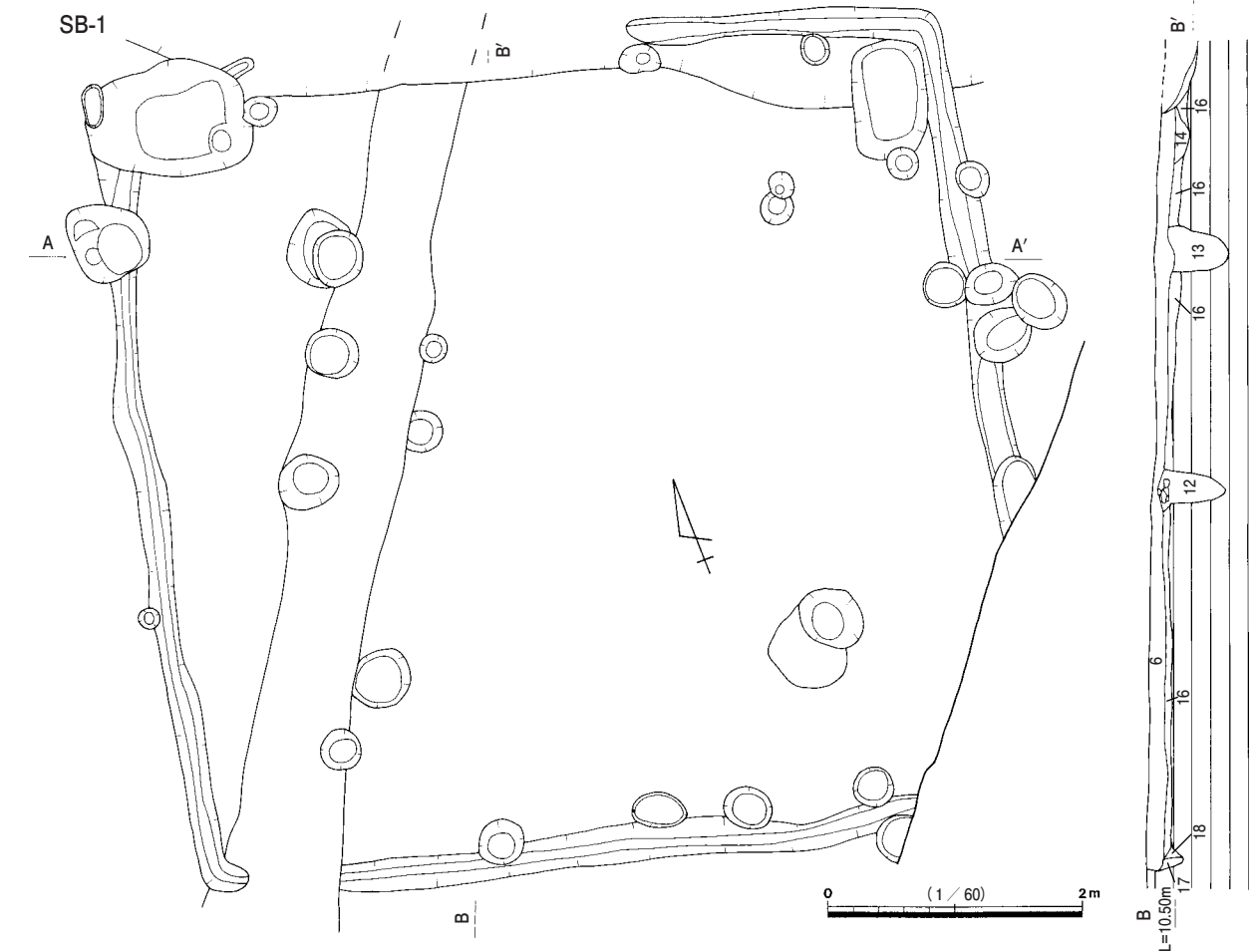
M・L-14区で検出された桁行2間、梁行2間の方形掘立柱建物である。主軸は北東方向を向き、柱間は1.8mである。柱穴は7基確認され、規模は40cm程の円形で類似するが、四隅の柱穴が深さ50cm程であるのに対して、中間の柱穴は10cm程浅くなっていた。柱穴の一つは近世の井戸により消滅している。土師器の皿や鍋が出土している。16世紀頃。

SB-7 (第39図)

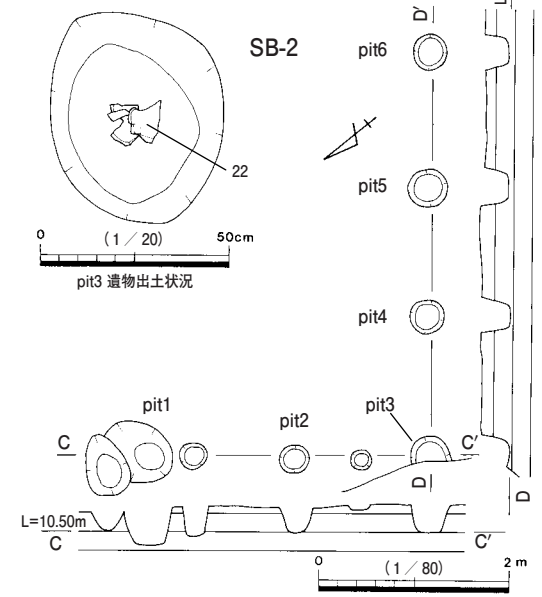
M-14・15区で検出された桁行2間、梁行2間の方形掘立柱建物である。主軸は北西方向を向く。SB-6と類似点が多く、柱間は1.8mである。柱穴は7基確認されており、もう1基は近世の溝により破壊されている。柱穴の規模は40cm程で、深さは50cm程で統一される。土師器の皿や鍋の破片の他、五輪塔の空輪が出土している。

SB-8 (第39図)

M・L-13・14区で検出された桁行3間、梁行2間の側柱建物である。主軸は真北を向く。柱間は1.8mで揃っているが、柱穴規模は一定ではない。柱穴は7基確認され、四隅は規模が40cm、深さも40

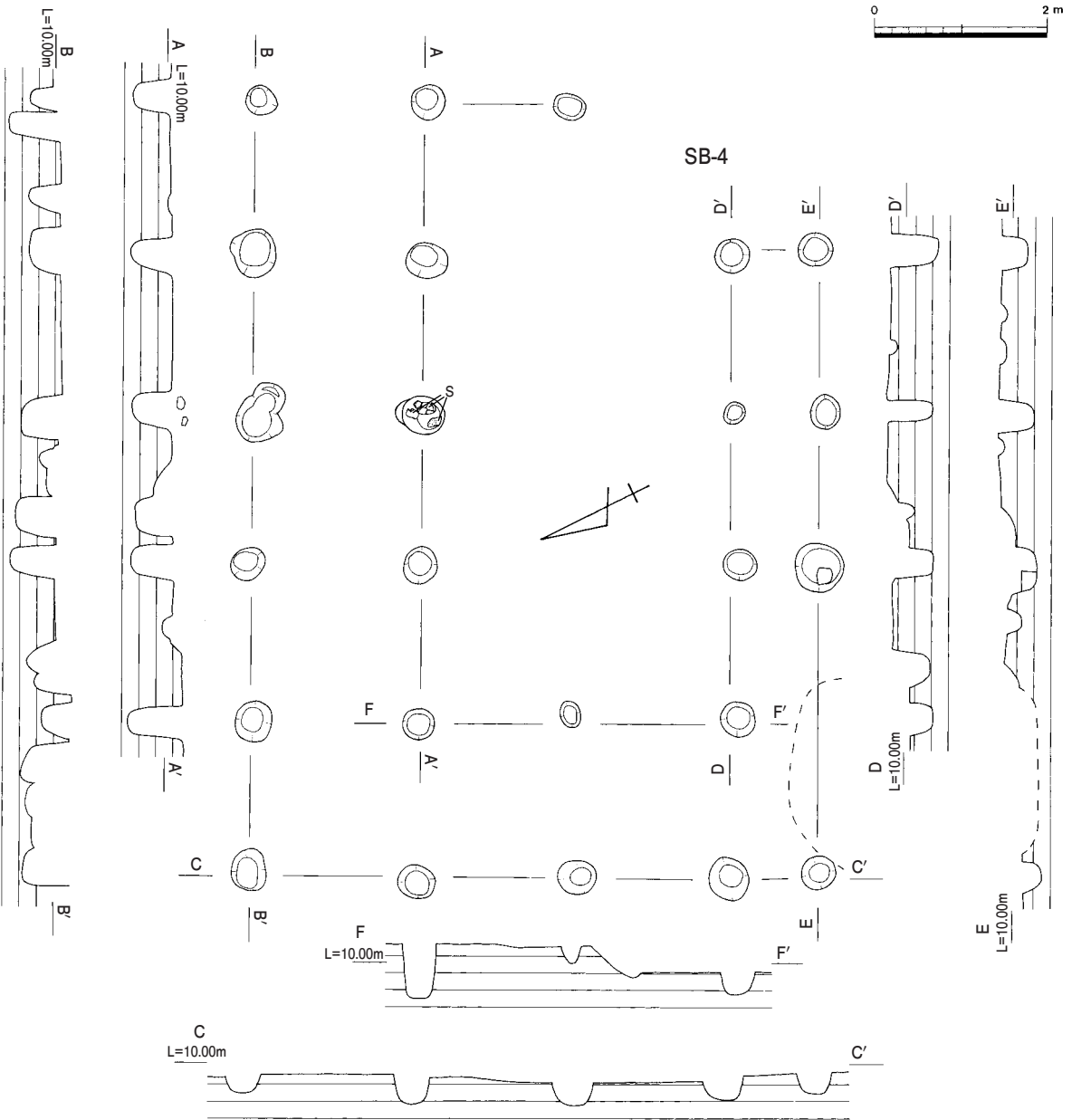
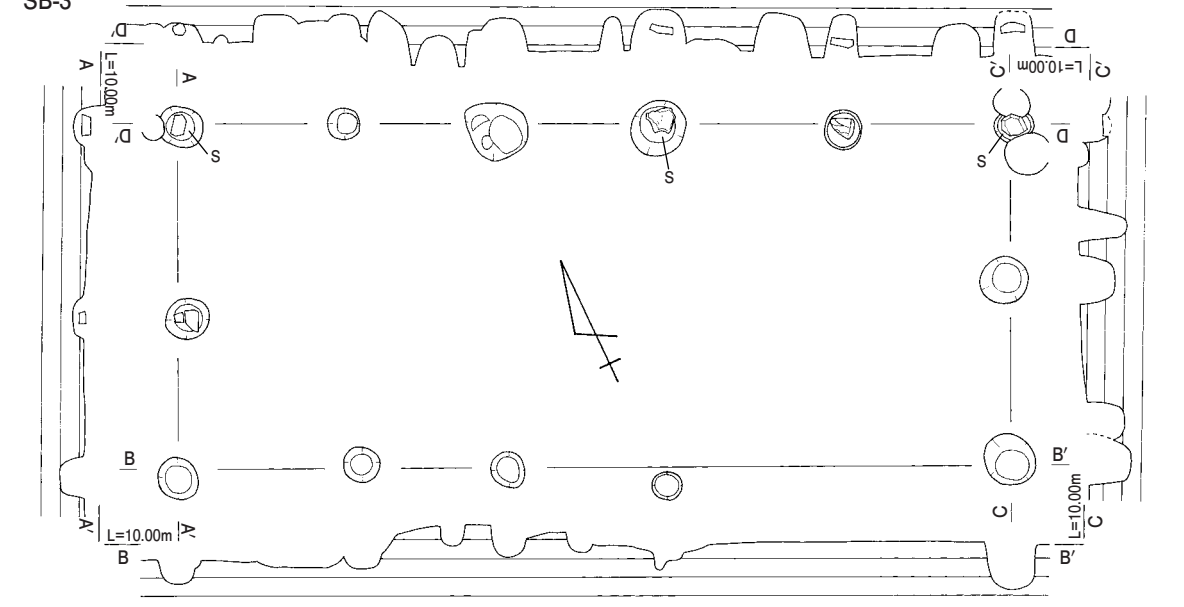


1 淡灰色砂層	7 暗褐色土層	13 暗褐色土層
2 黄褐色土層	8 暗褐色土層	14 黄褐色土層
3 淡灰色土層	9 暗褐色土層	15 暗灰褐色土層
4 淡灰色土層	10 暗褐色土層	16 黑褐色土層
5 暗灰色土層	11 暗褐色土層	17 暗黑褐色土層
6 暗褐色土層	12 暗灰褐色土層	18 暗褐色土層

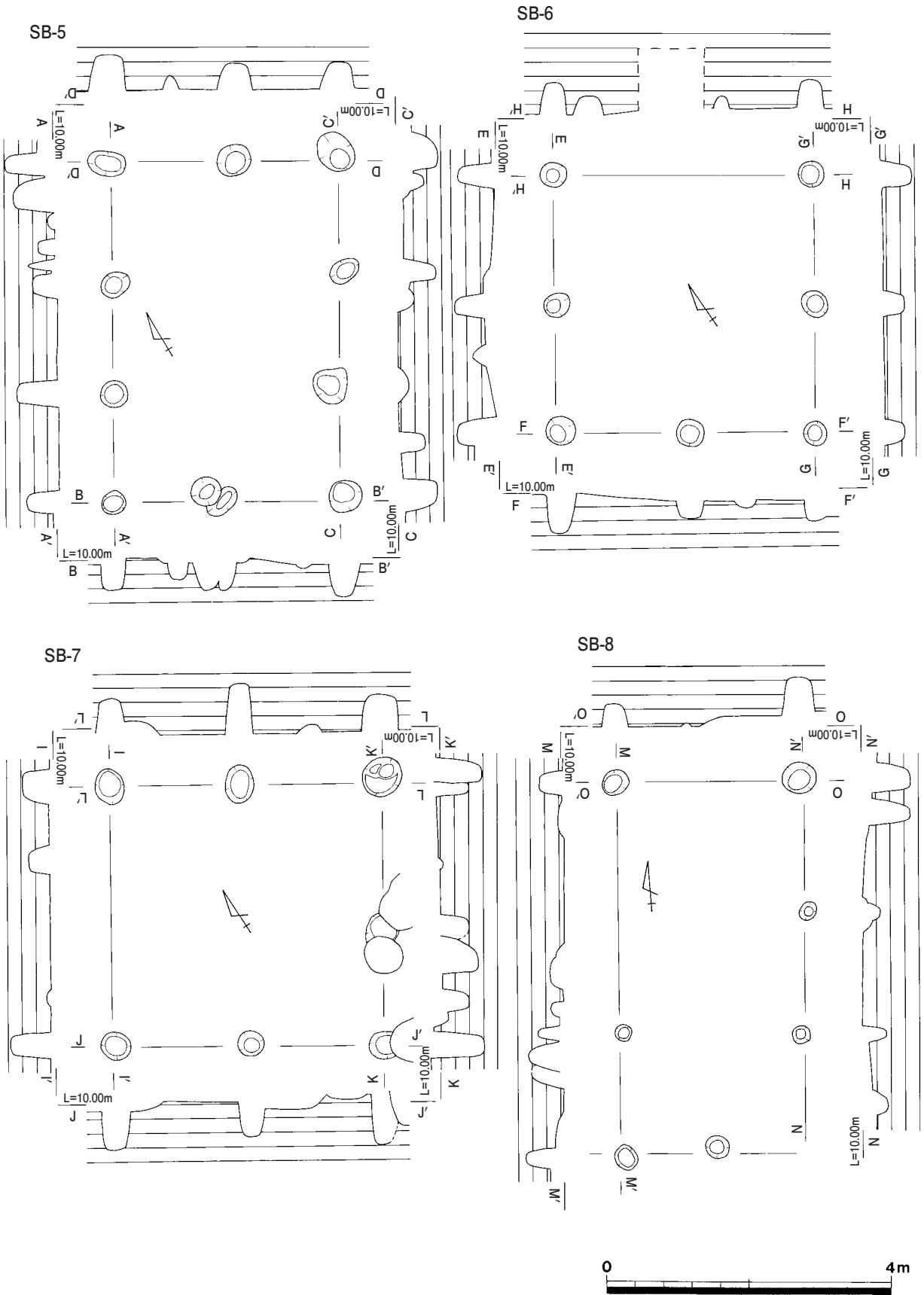


第37図 境松 D 区遺構平面図 1 (1/20・1/40・1/60・1/80)

SB-3



第38図 境松 D 区遺構平面図 2 (1 / 80)



第39図 境松 D 区遺構平面図 3 (1 / 80)

cmを測るが、中間の柱穴は径が20cm程と小さく、深さも10cm程浅い。遺物は土師器の皿や鍋、羽釜等が出土している。

S B - 9 (第40図)

L・M-14区で検出された桁行4間、梁行2間の側柱建物である。主軸は北東を向く。柱間は1.8mで一定で、柱穴は12基確認された。柱穴規模は約40cmで、深さは40～50cmである。他の掘立柱建物と比較して、柱穴の埋土のしまりが弱く、柱穴から出土した遺物に近世の瓦片が含まれる。この他、土師器の皿や鍋が出土する。17世紀。

C. 溝

溝は7条確認されている。このうちSD-1は調査区北側に向かって、段々に下がる傾斜した溝である。この溝からは10世紀頃の陶器片が出土している。SD-2～4の溝は戦国時代の溝で、調査区を縦断するように直線的に掘られている。また部分的に礫や遺物が多数出土する。区画溝としては、区画範囲が狭すぎるため、道の区画溝として機能した可能性があるが、溝の間の地山が硬化した状況は確認できなかった。近世のSD-7は焼土や土壁の破片を多数包含している。調査区を横断するように延びることから、区画溝の可能性はある。

S D - 1 (第40図)

N-12・13区で検出された。幅は上場で1.5m、下場で50cm程である。北側に向かって傾斜し、底面は緩やかな段上を呈している。SD-2やSK-7に一部破壊されている。埋土からは陶器の碗や陶錘等が出土した。10世紀頃か。

S D - 2 (第41図)

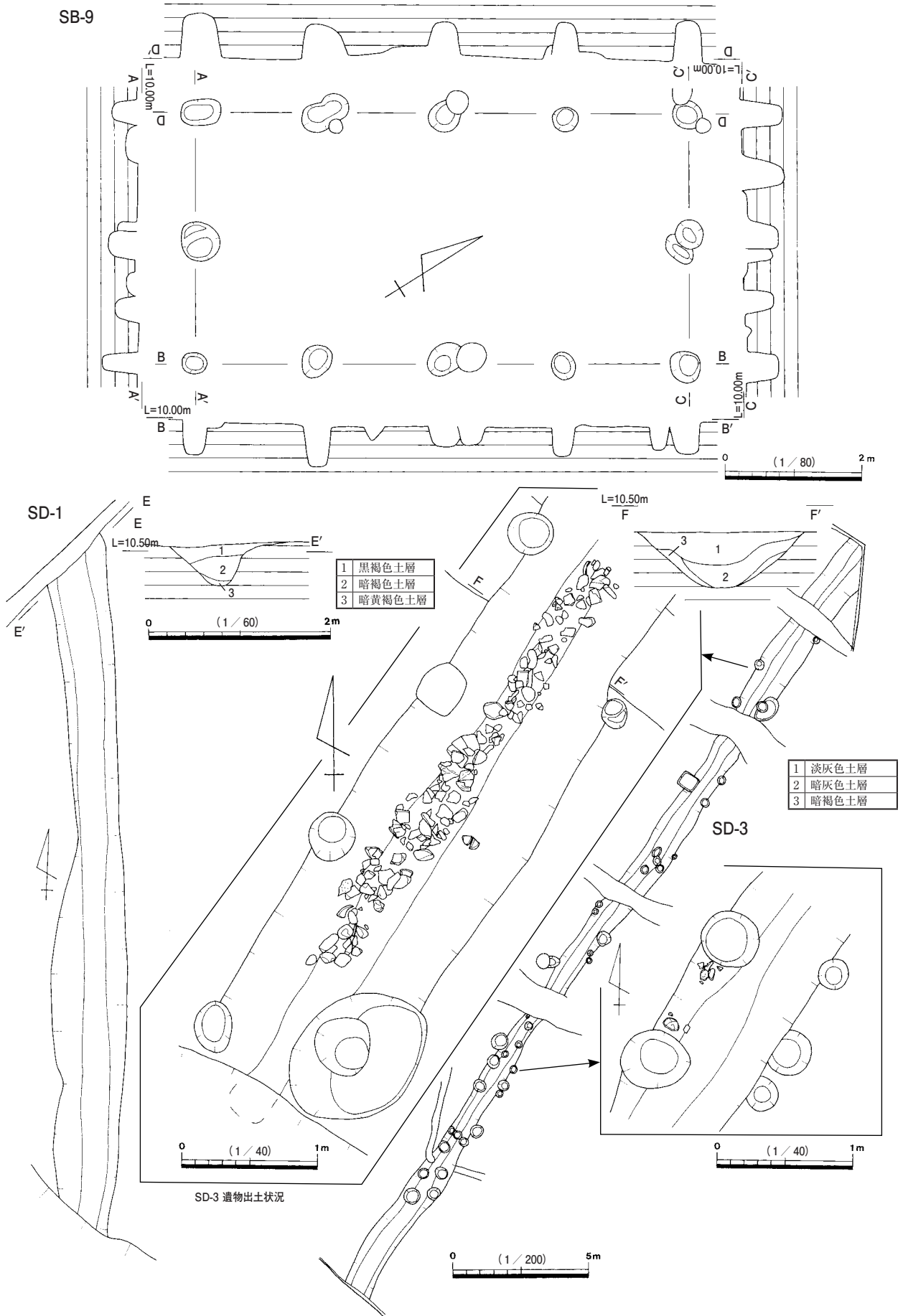
N・M-12～14区で検出された。SK-7を壊して作られている。後述するSD-3・4と同じく、調査区を縦断するように延びる。幅は上端で1.2m、下場で70cm程である。部分的に礫が埋没し、埋土からは土器片が散見される。土器の多くがSK-7を壊した際に混入したものと思われる。出土する遺物は中世～戦国時代の物が主体であるが、石斧や舌状石製品、銅鏡等の各時期の特殊な遺物も出土した。

S D - 3 (第40図)

N・M-12～14区で検出された。幅は1.5～2mで下場が40cm程である。一角に拳大から20cm程の礫を敷き詰めた状況が確認されたが、それ以外の埋土では、礫は含まれるものの、散見される程度であった。埋土には土師器の皿、陶器の甕・播鉢等の遺物が含まれる。土器の出土量が多いことから、廃棄場として使用された可能性もある。17世紀頃か。

S D - 4 (第36図)

M-12～14区で検出された。規模や埋土等がSD-3と類似するが、礫などは検出されず、遺物も少量であった。幅は上場で1.5～2mで、下場が40cm程である。M-14区で、途切れるように消失する。遺物は土師器の皿と鍋の胴部片で図化に耐えないため、掲載していない。戦国時代か。



第40図 境松 D区遺構平面図4 (1/40・1/60・1/80・1/200)



第41図 境松 D 区遺構平面図 5 (1/40・1/80・1/800)

SD-5 (第42図)

N-14区で検出された溝で、浅い皿状の断面を持つ。幅は50cm程で、深さは20cm程と浅いが、土師器の皿や鉄釘が出土した。17世紀頃。

SD-6 (第42図)

N-13区で検出された、幅広の溝である。東西方向に延び、東部で南に屈曲する。幅は、上場で2m、下場で90cmを測る。近世の陶器や土師器の皿が出土している。17世紀後半～18世紀。

SD-7 (第42図)

N-14区で検出された溝で、SD-6を壊して作られている。調査区東部で土坑状に深く掘り下げられており、近世の染付皿や土壁が焼土に混じって出土した。また石製品や鉄製品、土壁片なども出土している。炭化物、焼土は溝中に広く散布している状況であった。18世紀。

D. 土坑

土坑は調査区全域で広く検出されたが、遺物を包含するものは少なく、ほとんどが時期不明の土坑や柱穴であった。SK-7・8は中世の大型土坑である。特にSK-8は土器を多量に含むことから廃棄土坑の可能性が高いが、床面より陶器の皿が3枚重なって出土するなど、廃棄以外の目的も考えられる。

SK-1 (第43図)

M-13区で検出された円形の土坑である。直径幅50cm、深さ30cmで断面が寸胴形を呈する。弥生土器の破片が出土している。弥生時代中期。

SK-2 (第43図)

M-14区で検出された円形の土坑である。直径幅30cm、深さ10cm程度の浅い皿型の土坑である。弥生土器の破片が出土している。

SK-3 (第43図)

N-13区で検出された不定形の土坑である。SD-2に破壊されているが、土坑内から台付甕が出土した。長径60cm、深さ25cmで、断面は浅い皿形を呈する。弥生時代後期～古墳時代初頭。

SK-4 (第43図)

N-13区で検出された楕円形の土坑である。長径2m、短径1mを測り、深さは15cmと浅い。細頸壺が出土している。古墳時代初頭。

SK-5 (第43図)

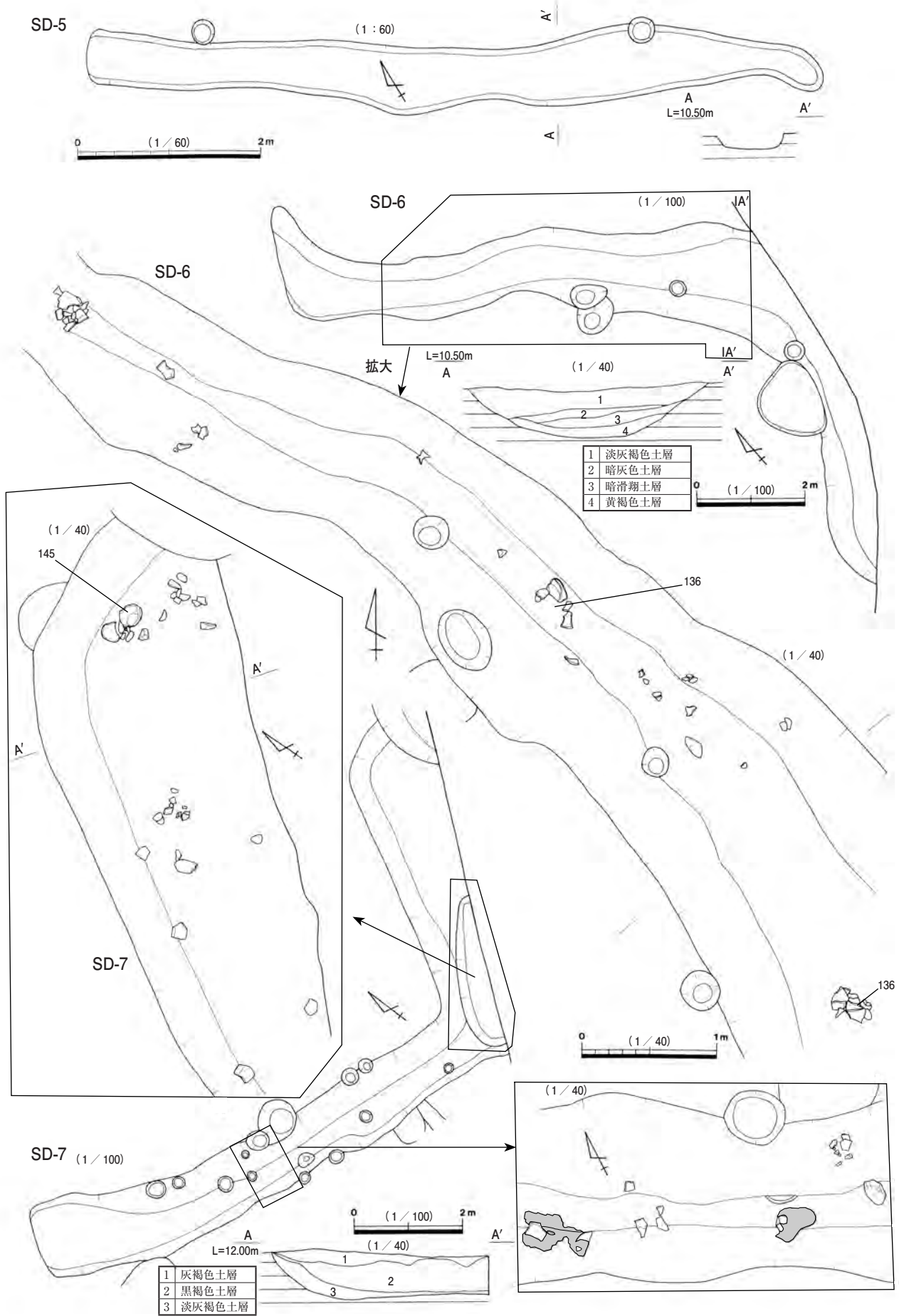
N-13区で検出された円形の土坑である。直径25cm、深さ20cm程の浅い土坑である。土師器の甕が出土している。古墳時代。

SK-6 (第43図)

M-15区で検出された柱穴状の土坑である。柱穴痕は確認できず、周囲に配列された柱穴もないことから、土坑として掲載した。直径40cm、深さは30cm程である。台付甕が出土している。古墳時代初頭。

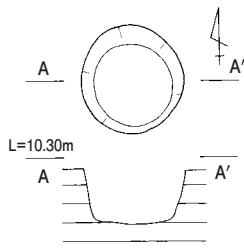
SK-7 (第43図)

SK-8と重複する大型土坑である。直径約1.5mで深さは40cm程である。遺物とともに、拳大の礫

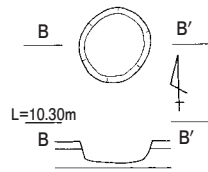


第42図 境松D区遺構平面図6 (1/40・1/60・1/100)

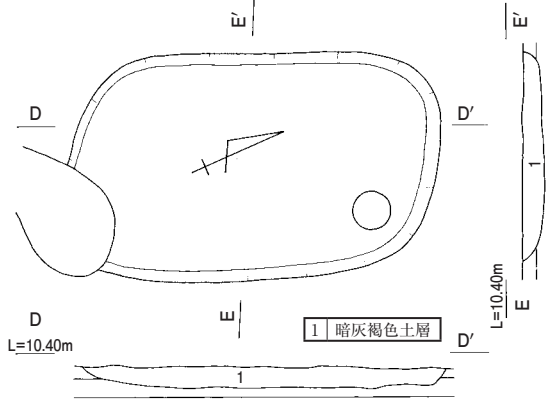
SK-1



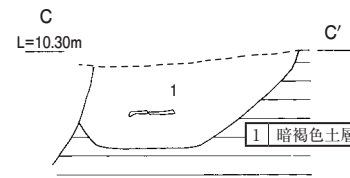
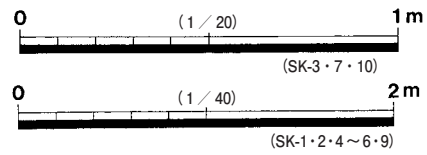
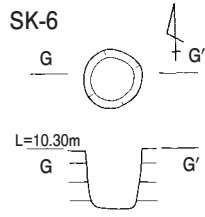
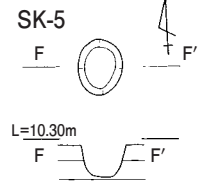
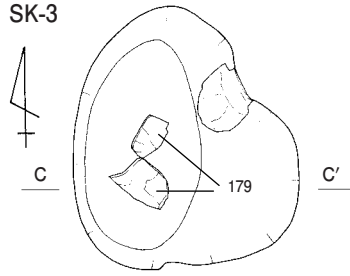
SK-2



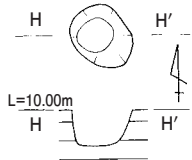
SK-4



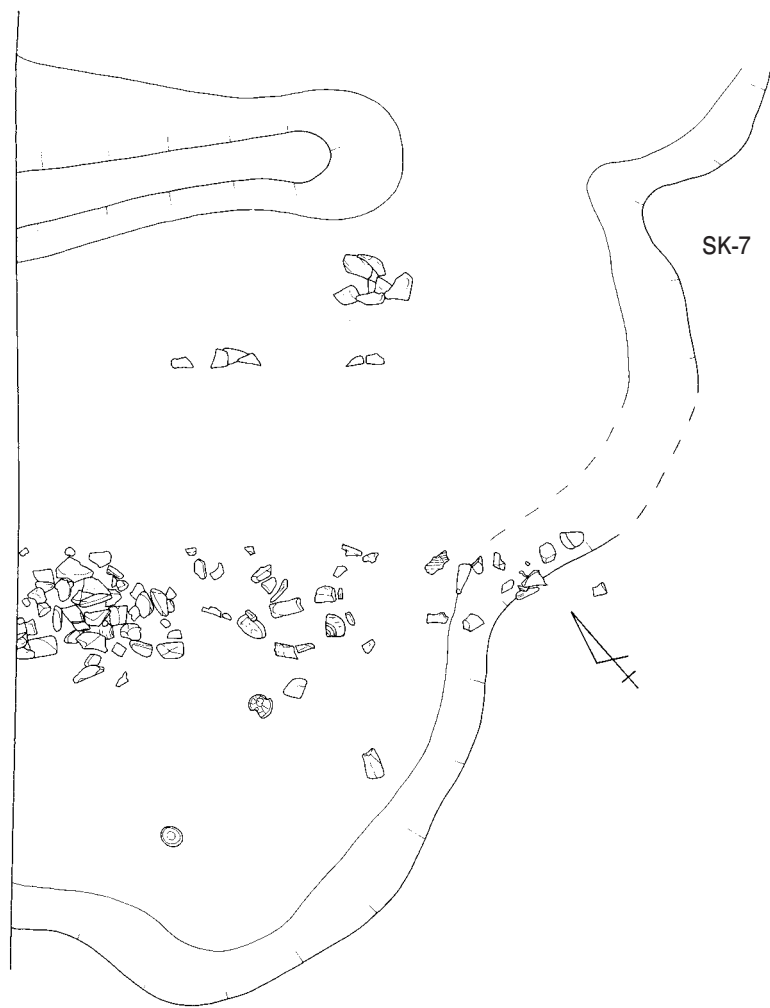
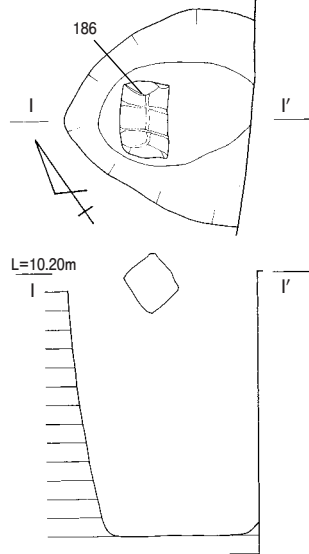
SK-3



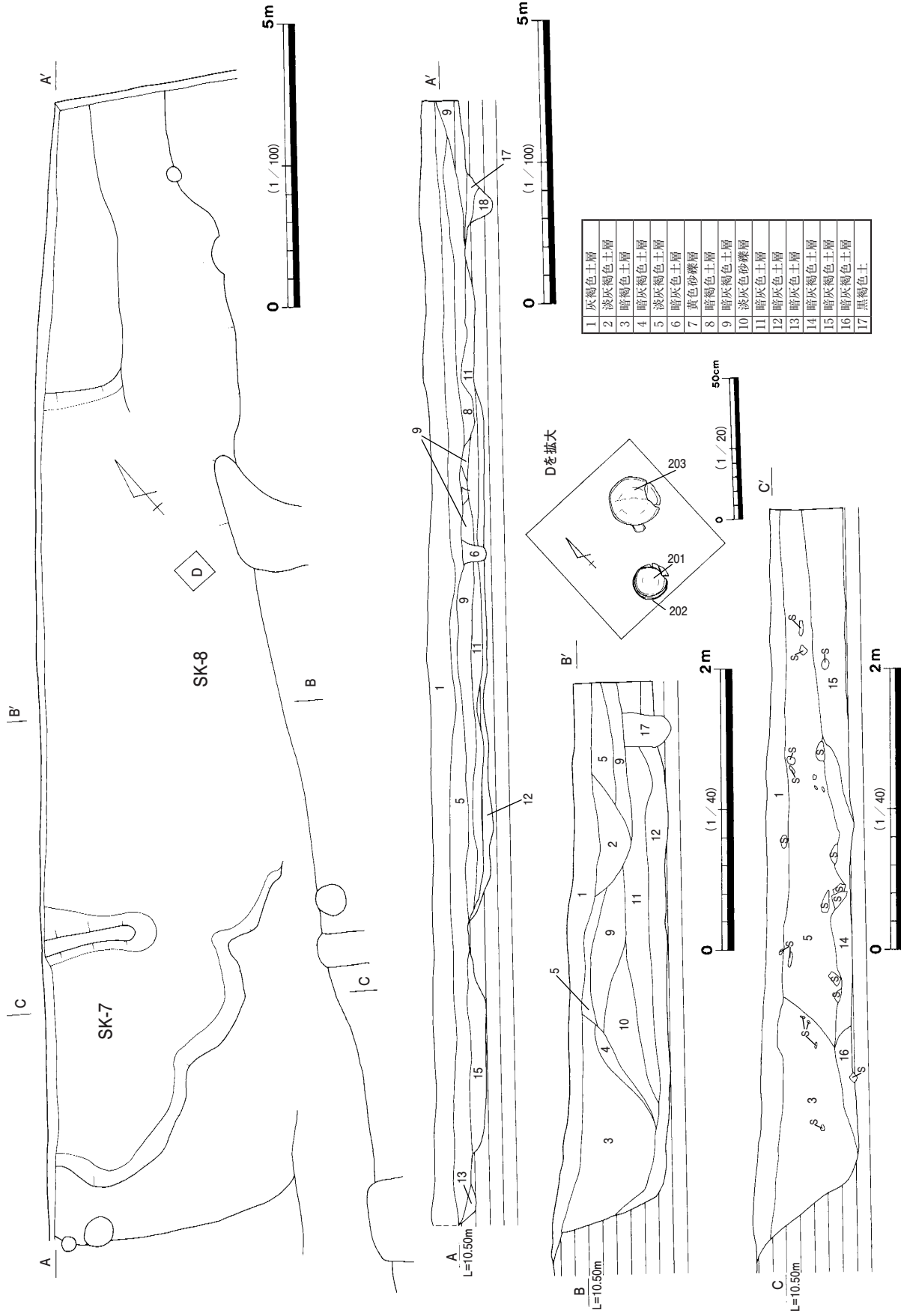
SK-9



SK-10



第43図 境松 D 区遺構平面図 7 (1/20・1/40)



第44図 境松 D 区遺構平面図 8 (1/20・1/40・1/100)

が多数出土した。埋土中の遺物は中世が中心である。

SK-8 (第44図)

調査区北西で検出された大型土坑である。直径13mを超える。深さは80cm程で、埋土内に土器や礫を多く含む。SK-7と隣接しており、遺物・時期ともに類似する。SK-7のような大型の土坑が複数重なって作られた可能性があるが、断面からは土坑の重複は確認できなかった。最下層から出土した遺物には陶器の皿(第55図-201・202・203)などがある。遺物の出土は5層・9層・11層に集中しているが、層毎に出土遺物の時期の違いはない。東側をSD-2に壊されており、SD-2の遺物とは時期も出土遺物の組成も類似する。中世～戦国時代の廃棄土坑であると思われる。

SK-9 (第43図)

L-14区で検出された円形の土坑で、直径30cm、深さ20cmを測る。砥石と土師器の皿が出土している。16世紀末～17世紀。

SK-10 (第43図)

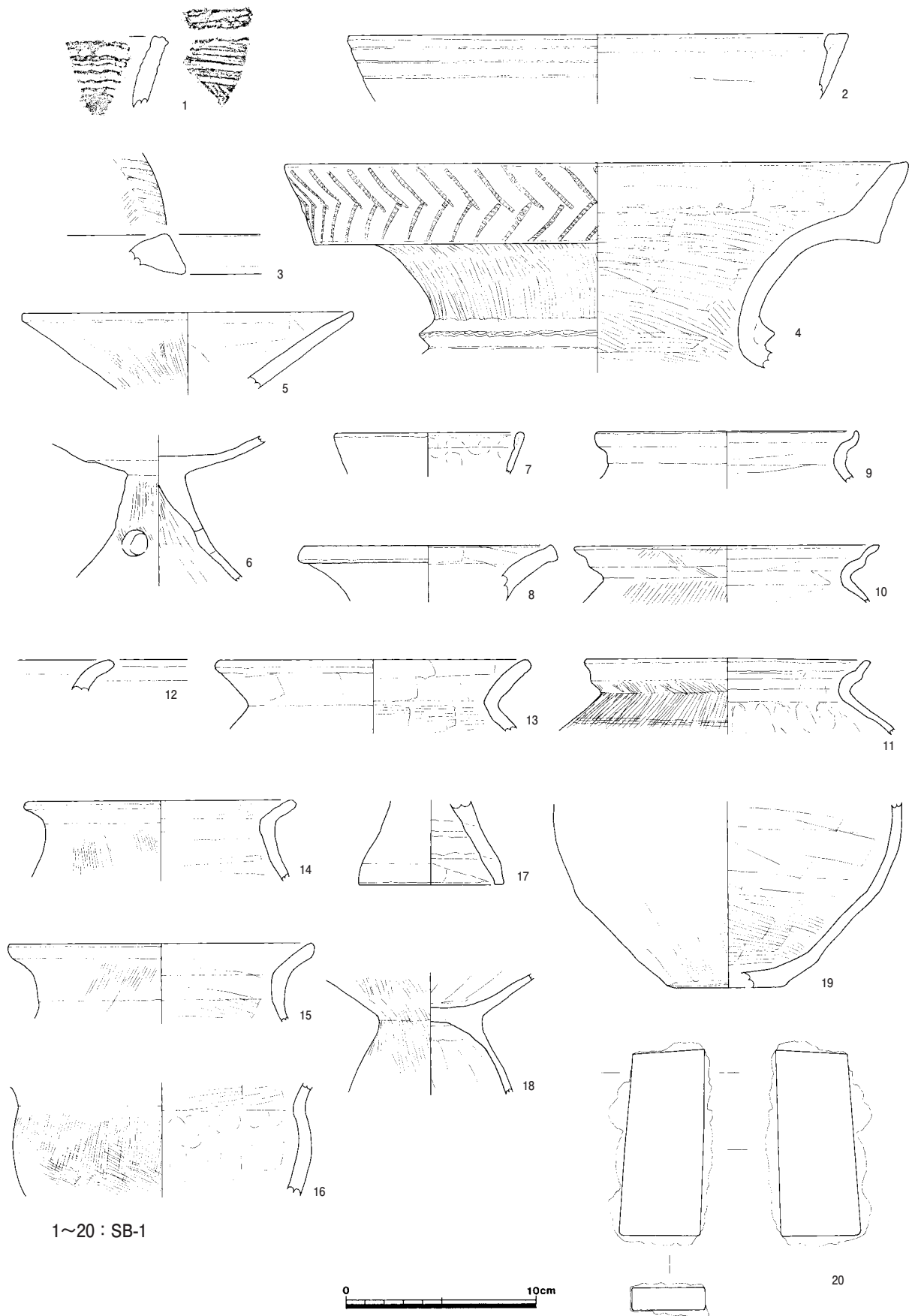
N-14区で検出された柱穴状の土坑である。一部が調査区の外に出ているが、直径50cm、深さ70cmを測る。近世の一石五輪塔の破片が出土している。

2. 遺物

遺物は竪穴建物から出土した古墳時代の遺物と、SD-2、SK-7、SK-8から出土した中世の遺物が中心である。特に、後者が大多数を占める。また、中世の遺物は、多種多様な器種が混在する。播鉢や土師器の鍋などの日常雑器に加え、仏具や瓦なども出土する。廃棄土坑としてあらゆる物を投げ込んだ可能性があり、多数の遺物を所有できた財力を持つ人物あるいは集団が、調査区周辺に存在したことを示唆する。また、近世の溝SD-6やSD-7から出土した遺物には、磁器と甕等の大型品が多くみられた。

SB-1 (第45図)

土師器の他に鉄斧や弥生土器等が出土した。出土した遺物の大半が、残存状況の良好だった竪穴建物の南西部で出土している。1～3は弥生土器である。1は甕の口縁部で、条痕文が施文される。弥生時代中期前半の遺物である。2は高坏と思われる。脚部にも見えるが径が大きい点、内面がナデ調整されている点などから口縁部として掲載した。3は広口壺の口縁部である。内面に押引文が施文される。弥生時代後期に属すると思われる。4～19は土師器である。いずれも古墳時代初頭・狭間Ⅱ～Ⅲ式である。4は広口の加飾壺である。口縁端部を上方向に屈曲させ、外面には櫛状工具を押圧して横位の羽状文が廻っている。頸部には突帯が貼り付けられ、端部には刻目のような文様が施文されている。内外面ともにハケ目調整されており、外部は頸部から上方向への描上げで施文の一部としている。器厚は厚く、胎土や施文状況も他の土器とは異なることから、他地域の影響を受けた、あるいは他地域からもたらされた土器である可能性が高い。5・6は有稜高坏である。外面ハケ目調整、内面はナデ調整である。脚部は穿孔部から緩やかに膨らんで広がる。7は平底甕、8も甕の口縁部だと思われるが、混入品の細頸壺の可能性もある。7は器厚が非常に薄く口縁部は直立している。9・10・



第45図 境松 D 区遺物実測図 1 (1 / 3)

11は受口状口縁のS字甕である。9は口縁端部が直立し、10は外反する。10・11は胴部にハケ調整が確認できる。12～16は甕である12～15は頸部で強く屈曲する。16は丸底になると推察されるが、頸部の屈曲は緩やかである。いずれも外面にはハケ調整が施される。17・18は台杯甕の脚部である。18は器厚が薄く、S字甕の脚部であろう。19は平底甕の底部である。歪みがあるが、胴部に向かって丸みを帯びていく。外面ハケ調整、内面はハケ後ナデである。20は鉄斧である。角板状で表面は錆が付着している。刃部は確認できず欠損している可能性がある。

S B - 2 (第46図)

21・22は土師器の甕である。21は口縁部で、頸部からの立ち上がりは緩やかで、1cmと短い。端部は面取りされ、内外面ともにナデ調整である。22は平底の底部片である。内外面にハケ調整が施され、外面は下部からの描上げ、内面はハケ目調整である。古墳時代の遺物であろう。

S B - 3 (第46図)

土師器の皿と陶器の皿が出土した。23・24は土師器の皿である。23は小型で口径が6cm程である。口縁内面にはナデ調整による稜がある。24は器高が低く、緩やかに立ち上がる。2点とも手づくね成形である。25は陶器の皿である。口縁端部に灰釉が厚く塗られている。古瀬戸後期の縁釉小皿、15世紀後半頃の遺物である。26は山茶碗の鉢である。口縁部が肥大化している。13世紀の渥美産。

S B - 4 (第46図)

土師器の皿の破片が複数個体出土した。27～33は土師器の皿である。27～30は小皿で口径が6～8cm程である。28～30は手づくね成形で、内面は板ナデ調整されている。31～33は口径が10cm以上ある皿である。31は口縁部内面に凹みが付けられている。32は底部からの立ち上がりがやや直線的である。33は口径が大きく、器高が低い。いずれも15世紀後半～16世紀頃か。

S B - 6 (第46図)

34は土師器の皿である。口径は10cm以下で、型押し成形で内面は板ナデ調整である。

S B - 7 (第46図)

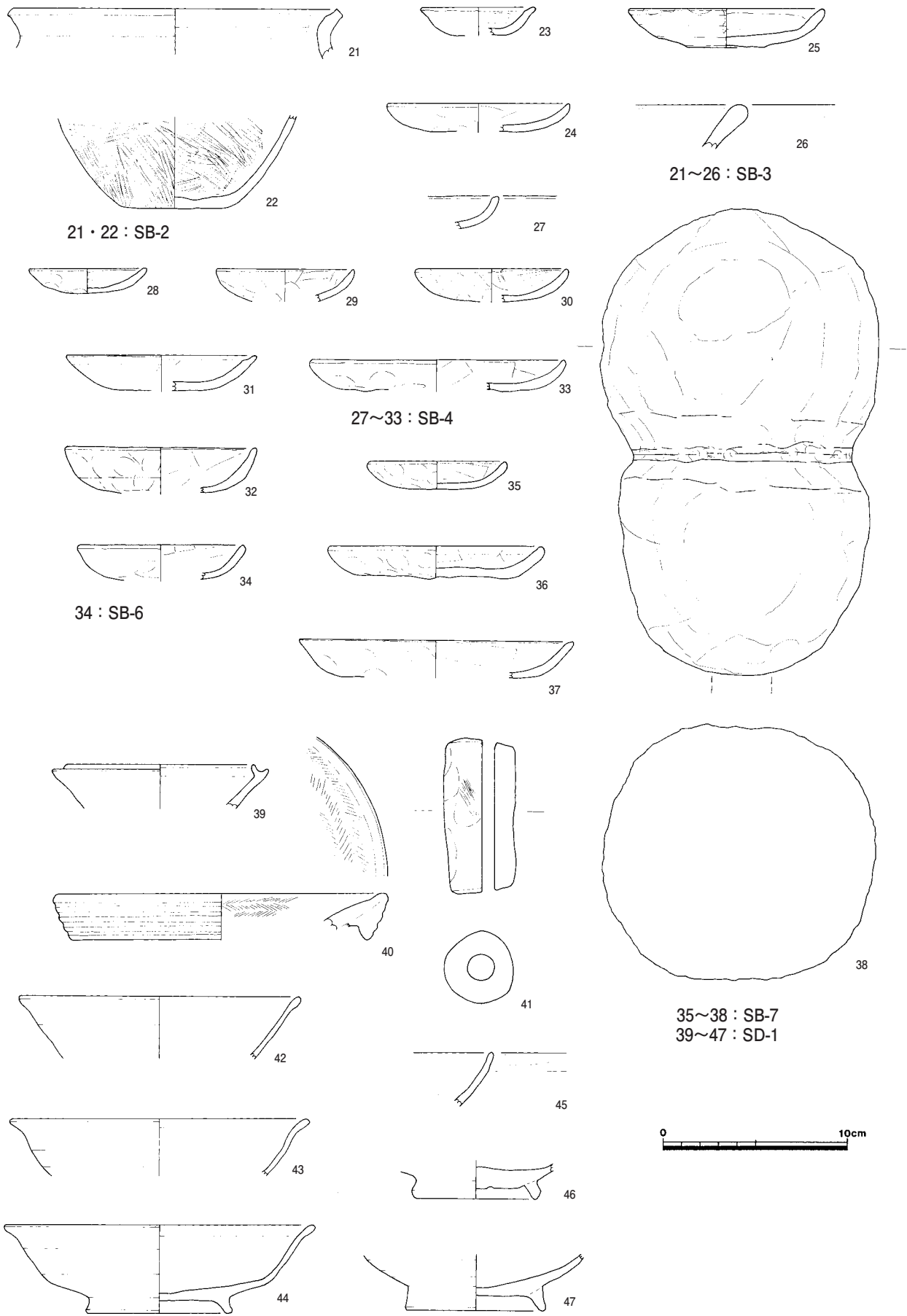
土師器の皿の他、石製五輪塔の空風輪が出土した。35は小皿で口径は8cm以下である。36・37は口径が10cmを超える。35・36は手づくね成形、37は型押し成形である。38は五輪塔の空風輪である。花崗岩製で表面は摩滅している。17世紀頃か。

S D - 1 (第46図)

10世紀頃の陶器の他、須恵器や土師器が出土する。39は須恵器の坏身、40は土師器の加飾壺である。41は陶器の鍾で表面には自然釉が掛かる。42～47は灰釉陶器の碗である。42は口縁端部がわずかに肥厚し、体部から直線的に立ち上がる。43・44は腰部から直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。45は緩い丸みを帯びて立ち上がる。46・47は底部片である。いずれも10世紀頃。

S D - 2 (第47図・48図・49図)

多様な器種の遺物が出土した。48～55は土師器の皿である。48・49は口径が9cm以下で、それ以外は9cm以上である。28～53は器高が低く、立ち上がりが緩やかである。54・55は器高が高く、口縁部直下で外反する。56・57は口縁部に灰釉が施される陶器の小皿である。古瀬戸の縁釉皿である。58は陶器の天目茶碗である。胴部は丸みを持って開き、胴部半ばまで鉄釉が施される。瀬戸の大窯製



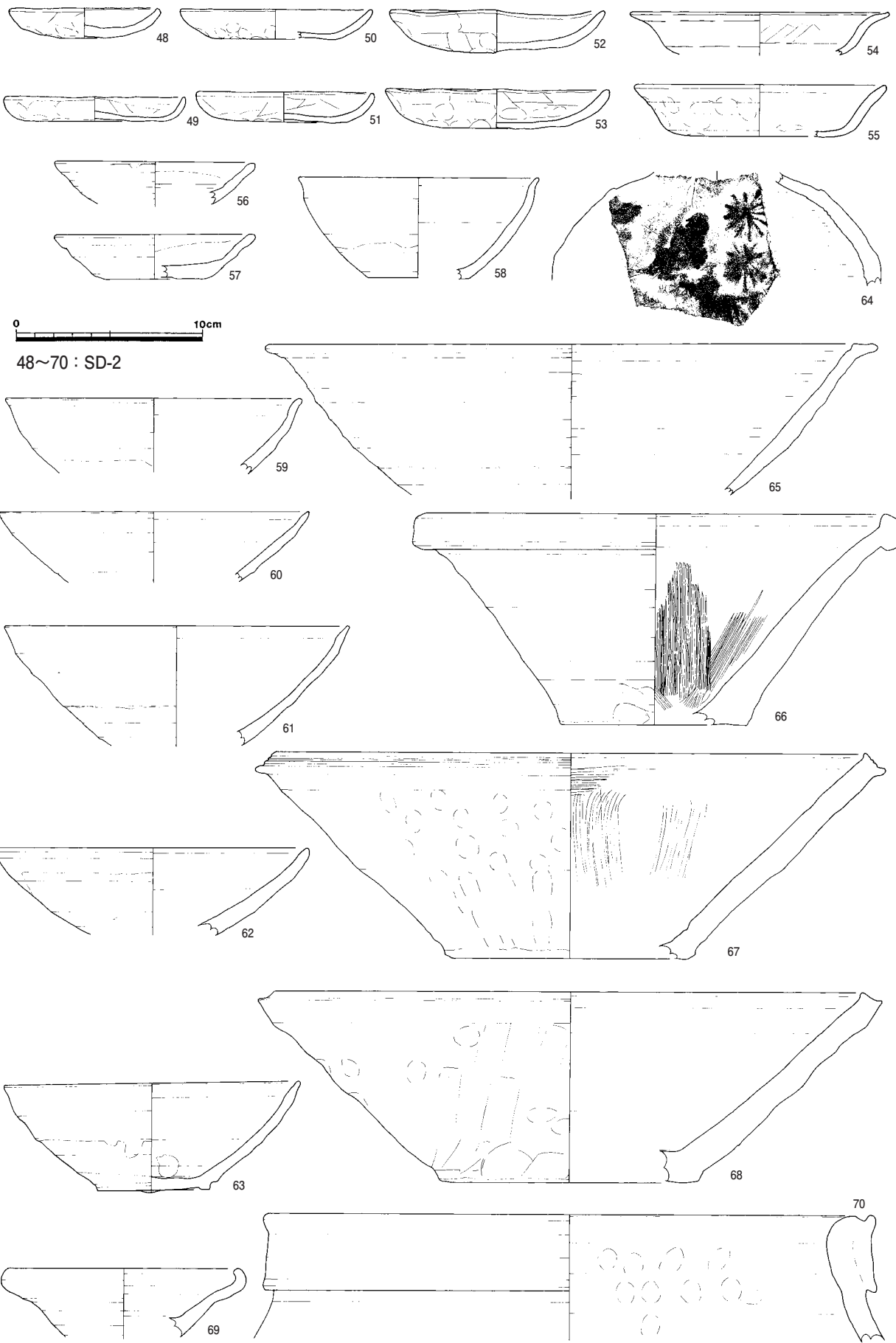
第46図 境松 D 区遺物実測図2 (1 / 3)

品と考えられる。59～63は陶器の平碗である。古瀬戸から大窯にかけての遺物で、いずれも瀬戸美濃産である。59は丸みのある胴部で、口縁部付近で直立し、端部はわずかに外反する。60は口縁部に向かって大きく開くが、胴部の立ち上がりは直線的である。61は59に類似するが、口縁部が先細る。62は器壁が厚く浅い。62は丸みのある胴部で、口縁部は細くなる。いずれも内面及び外面の胴部下半まで灰釉が施釉されている。64は陶器で、古瀬戸の瓶子である。菊花文の上に鉄釉が施釉される。65は陶器の折縁深皿である。内外面に灰釉が施釉される。66～68は陶器の播鉢である。66は瀬戸美濃産、67・68は常滑産である。66は口縁部が瘤状に肥大化する。67は口縁端部に3条の沈線が廻り、内面位は細い卸目が残る。68は内面に卸目が残っていない。69は陶器で鉄釉が施された燭台と思われる。70は陶器の甕である。常滑産。播鉢や甕はいずれも16世紀頃の遺物である。71～77は土師器の鍋である。71は口縁端部を内面に折り返す伊勢型鍋である。72～74・76はくの字口縁内耳鍋である。胴部で径が最大となる。内外面にハケ調整が施されるが、口縁部はいずれもナデ調整である。75・77は内弯形の内耳鍋で、75は口縁下部に大きく穿孔部があるのに対して、77は口縁部に穿孔部が付く。75は逆ハの字型に近い器形である。78は土師器の蓋である。端部は面取りされる。79は硯で両面を使用している。80は砥石である。凝灰岩製で長方形の板状を呈す。四面全てが使用面である。81は瀬戸美濃産の陶器で、筒形容器である。胴部はわずかに丸みを帯び、口縁部は外に屈曲する。

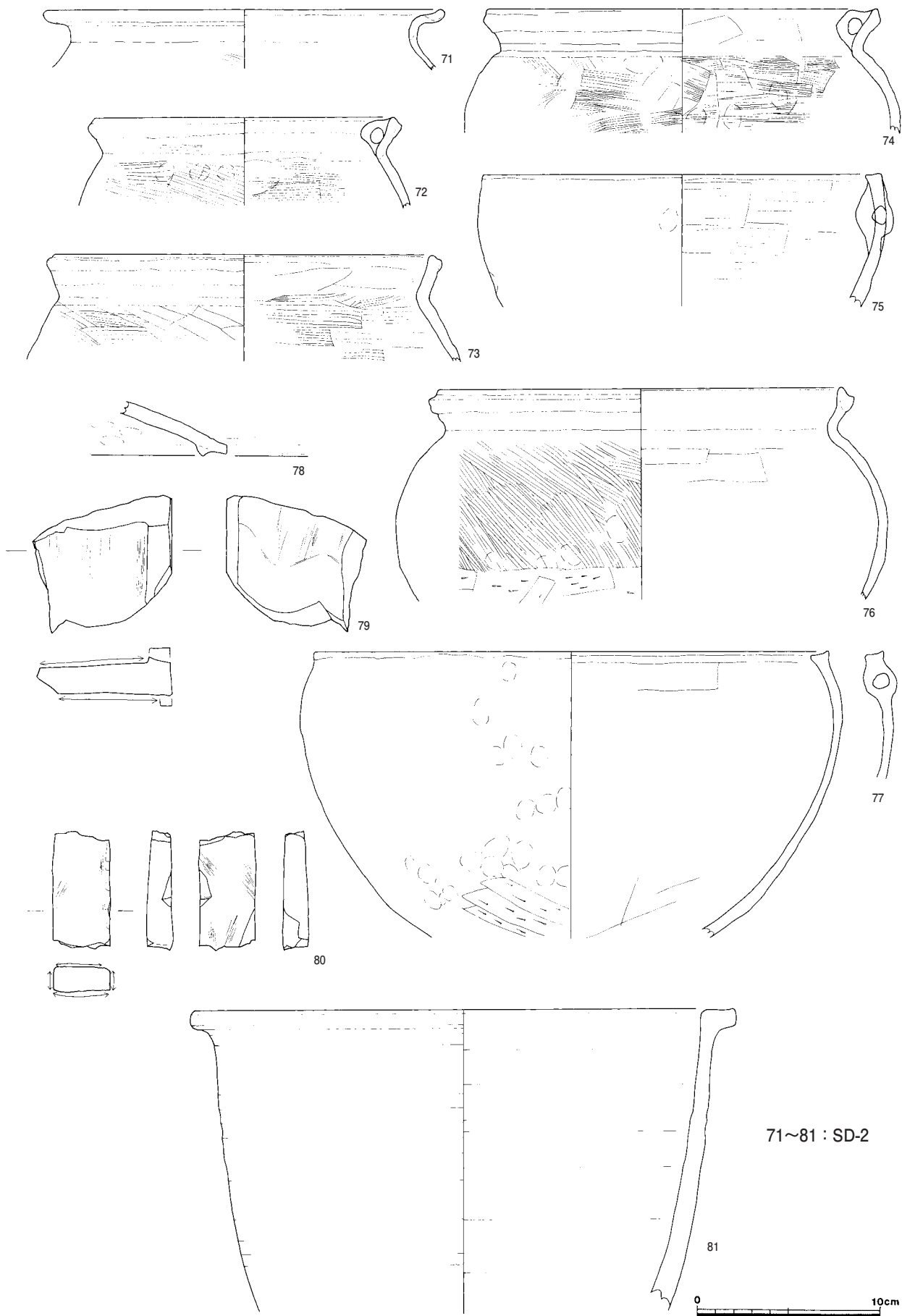
82～96は混入品と時期不明遺物である。82～84は弥生土器である。82・83は広口壺である。83は口縁端部に4条の櫛描沈線が廻り、口縁内面には羽状の櫛描文が施文される。中央には焼成前に穿孔されている。84は胎盤状土製品である。85～88は古墳時代～古代の遺物である。85は土師器の甕である。小型の丸底甕で、頸部に刻目が施される。器厚は薄く、表面にはハケ目が残る。古墳時代初頭か。86は土師器の甕である。口縁端部は丸く外反する。87は須恵器の甕である。外面はタタキ、内面は指オサエとナデ調整である。88は土製肢脚である。断面は楕円形に近く、稜は明瞭ではない。板状の粘土を折り込んで柱状に成形している。表面には指オサエの痕が残る。89～94は中世の遺物である。89・90は陶器の碗である。89は灰釉陶器の底部である。90は渥美産の山茶碗で、胴部は緩やかな丸みを帯びる。91・92は陶器の広口壺である。12世紀の渥美産と考えられる。91は頸部に沈線が刻まれている。93は布目瓦である。外面にケズリ痕、内面に布目が残る。94は渥美産もしくは常滑産と思われる陶器の甕である。表面に花印が押されている。気厚は薄く、内面は指オサエとナデ調整である。95は銅製の鉢である。器厚は薄く、口縁端部がわずかに肥厚する。仏具の一種と考えられる。96は石斧である。塩基性岩製の磨製石斧で、刃部を欠損している。縄文時代。

SD-3 (第50図)

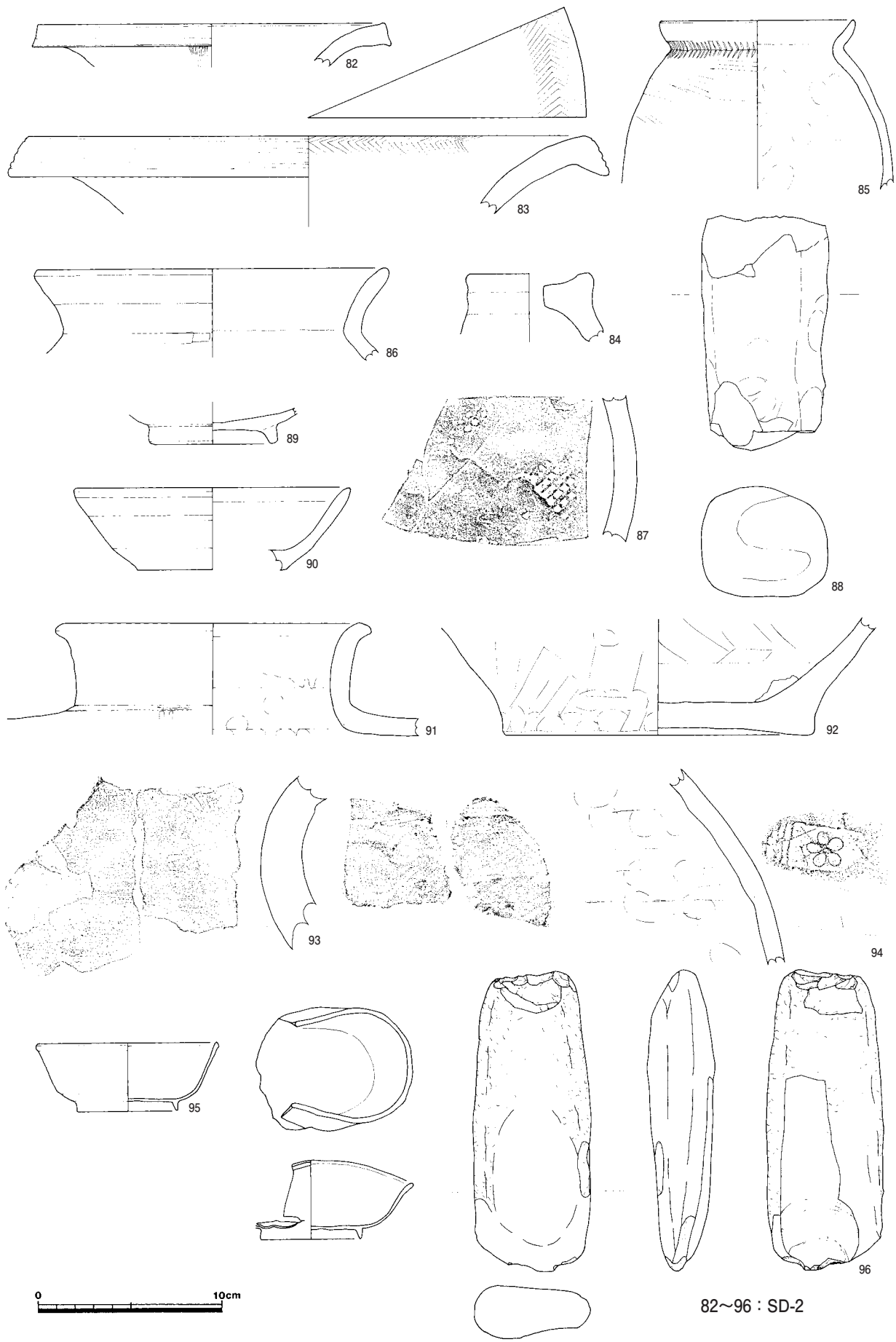
中世の遺物の他、古墳時代の土師器等の混入品が出土した。97～100は古墳時代の土師器である。97は甕の口縁部である。口縁端部付近でわずかに内弯する。98は壺の底部で内外面に板ナデ調整される。99は台杯甕の脚部である。内外面にハケ目が施される。100は高坏の脚部である。屈曲部が底部の直上にあり、全体にハケ目が残る。101は土師器の管状土錘である。両端部は欠損している。102は土製肢脚である。明瞭な稜を有しており、五角形あるいは六角形を呈すと思われる。表面にはケズリ痕が確認できる。103は山茶碗の碗である。渥美産で、13世紀の遺物である。104～110は土師器の皿である。いずれも口径が10cm以上ある。108・110のみ口縁部で屈曲し、それ以外の先端部は丸い。104・106・



第47図 境松 D区遺物実測図3 (1/3)



第48図 境松 D区遺物実測図4 (1/3)



第49图 境松D区遺物実測図5 (1/3)

110は丸みをもって立ちあがるが、105・107～109は腰部の屈曲が明瞭で、垂直に近い立ち上がりを呈す。111は陶器の皿で、瀬戸美濃産の折縁皿である。大釜第3段階か。112は陶器の天目茶碗である。瀬戸美濃産、登窯第1段階。113は常滑産の陶器の甕である。口縁部の折り返しが頸部と一体化する。16世紀末～17世紀初頭。114・115は陶器の挿鉢である。114は瀬戸美濃産で登窯第1段階。115は胎土、卸目の付け方等から在地、あるいは別地域からの搬入品であると思われる。116は砥石である。凝灰岩製で、表面に研磨痕と断面三角形の傷が無数に残る。裏面と側面は研磨痕のみ確認できる。117は五輪塔の空風輪である。花崗岩製で、全体が風化している。

SD-5 (第51図)

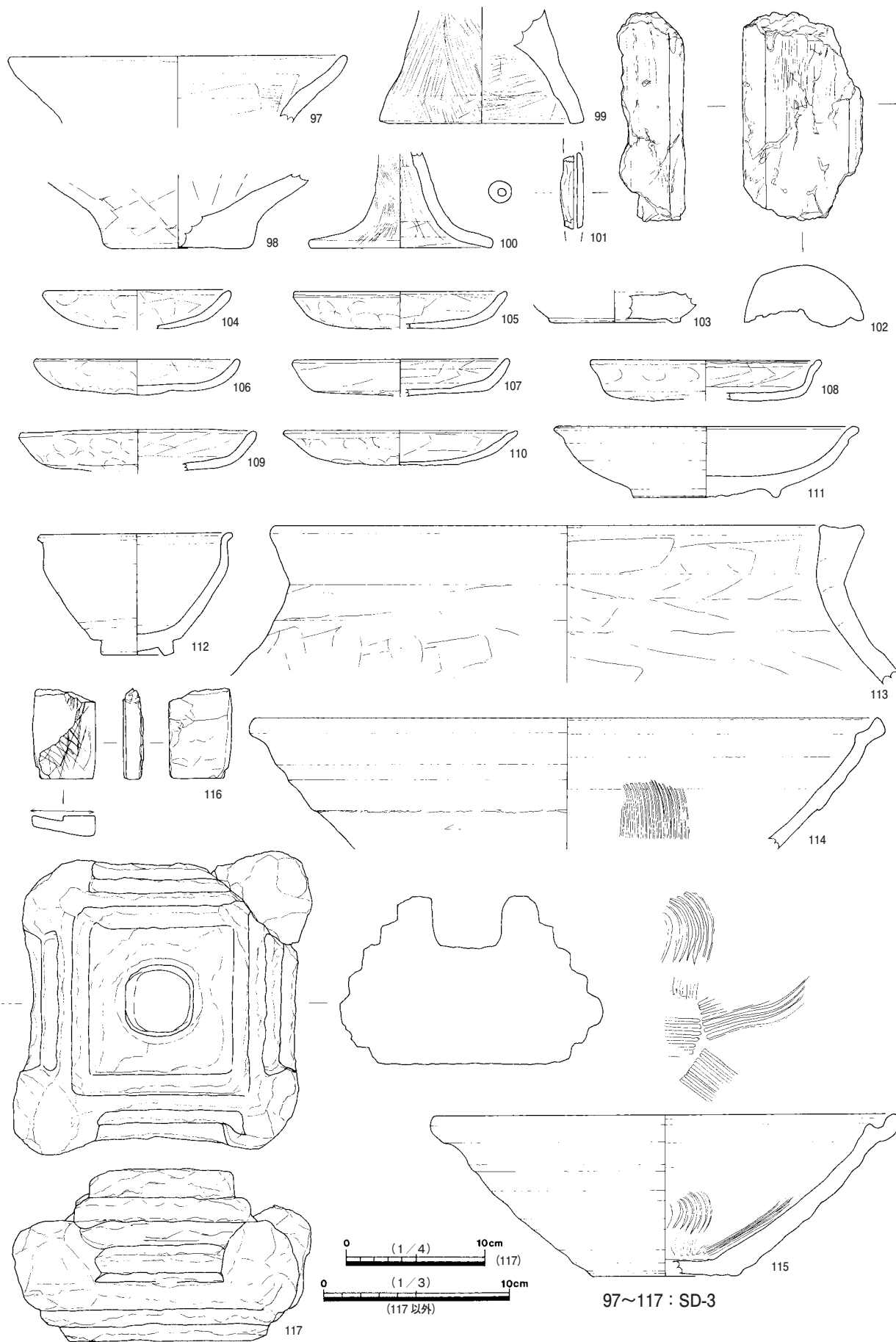
土師器の皿と鉄釘が出土した。118～120は土師器の皿である。口径はいずれも12cm以下である。118・120は型押し成形で、119は手づくね成形である。121は鉄釘である。先端部付近で、幅は4mm程である。

SD-6 (第51図)

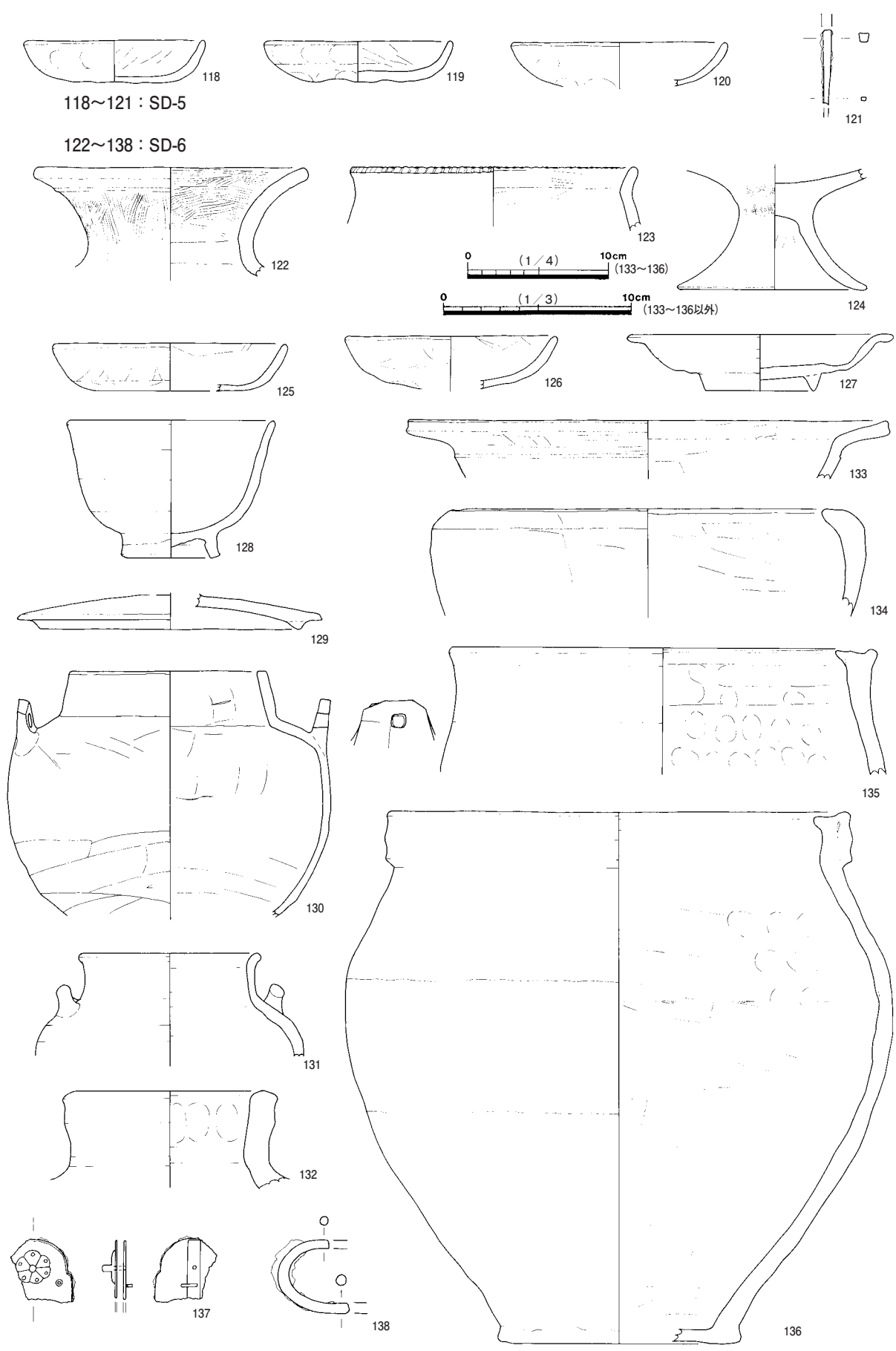
122～124は混入品で古墳時代以前の遺物である。122は土師器の広口壺である。口縁部は緩やかに屈曲し、端部は丸みを帯びる。内外面にハケ調整が施される。古墳時代初頭。123は弥生土器の台杯甕の口縁部である。口縁部は先端付近でわずかに屈曲し、端部には刻みが施される。弥生時代中期頃。124は土師器の高杯の脚部である。古墳時代。125・126は土師器の皿である。いずれも底部からの立ち上がりは急角度で、口径は10cmを超える。127は陶器の反り皿である。器厚は薄く、口縁部が強く外反する。内外面ともに灰釉が施釉されるが、内面中央部は施釉されておらず、1mm程高くなっている。高台は貼り付け高台で、高台の形は三角形を呈している。128は陶器の碗である。瀬戸美濃産の丸碗で、体部の立ち上がりは直線的である。口縁部付近がわずかに外反する。129は土師器の蓋である。中央がわずかに反りかえることから、摘みが付いていたと思われる。茶釜の蓋と思われる。130は土師器の茶釜である。口縁部は蓋を乗せるため、面取りされて平坦である。吊り孔は肩部から張り出している。内外面にナデ調整、外面底部はヘラケズリ、多量の煤が付着している。131は瀬戸美濃産の陶器の茶入れである。頸部は直立して立ち上がり、口縁部で外反する。頸部の付け根に紐通し用の把手が付く。132は陶器の直口壺の口縁部である。生産地は不明で内外面に自然釉が掛かる。133は土師器の鉢である。口縁部が強く外反し、端部は面取りされている。胎土は土師器の皿に似る。134は土師器の焜炉である。口縁部は内反し、底部に向かうほど器厚が薄くなる。135・136は常滑産の陶器の甕である。135は口縁部が内部に張り出すが、外面に折り返した状況は確認できない。136は頸部で直立し、外反して折り返す。端部は内部に摘み上げている。焼成が甘く、外面は全体的に摩滅している。137は飾金具である。表面には菊花文、裏面には挟み留め金具も残っている。挟部が5mm程と薄いため、布製品に取り付けられたと考えられる。138は鉄製の把手である。断面は円形で、幅が5mmに満たない。

SD-7 (第52図・53図)

139は瀬戸美濃産の陶器の丸皿である。口縁端部は先細り、丸みを帯びる。全体に長石釉が施釉されるが、底面は無釉である。140～144は土師器の皿である。いずれも最大径手前で屈曲し、直立的に立ち上がる。142のみ手づくね成形である。143は穿孔されている。145～149は陶器の碗、150～152は肥前産の磁器である。145は大皿である。緩やかに丸みを持って立ち上がり、口



第50图 境松D区遺物実測図6 (1/3 · 1/4)



第51図 境松D区遺物実測図7 (1/3・1/4)

縁部はわずかに外反する。146・147は陶器の瀬戸美濃産の筒形碗である。146は鉄釉、147は灰釉が施釉される。148は陶器の天目茶碗である。口縁部は内弯気味に直立し、端部で外反する。表面には鉄釉が施釉される。149は磁器の丸碗で口縁部はやや内弯気味である。150は磁器の筒形碗で内面底部にも花卉文が染付される。151・152は陶器の茶入れである。151は瀬戸美濃産、152は産地不明である。153・154は常滑産の陶器の壺である。下半部に重ね焼きした痕跡が残る。155は土師器の甕である。古墳時代初頭の混入品で、口縁部がわずかに受口状を呈している。156は管状土錘である。孔径は1 cmである。157・158は石製品である。157は硯で、板状に剥落している。158は石臼の上臼部である。159・160は銅製の箸である。159は断面が四角であるが、160は断面が円形である。161・162は銭貨である。161は皇宗通宝、162は文字を読み取ることができなかった。163は火打金である。使用部が弯曲せず、直線的である。164・165は鉄滓である。扁平な鉄滓で複数出土している。166～173は土壁の一部である。内部に竹を格子状に配置し、表裏面からは挟むようにして作成される。竹は細く縦割りにされており、土壁の厚みにより、使用する太さを変えている。側縁部や172の様な角隅が残ることから、板状の土壁であったと推測される。

SK-1 (第54図)

174・175は弥生土器の台付甕である。175はくの字状口縁台付甕で、口縁端部は面取りされている。175は口縁部が肥大し、外反する。

SK-2 (第54図)

176～178は弥生土器である。176は直口壺で、口縁部は横方向にナデ消し、頸部はミガキ調整が施される。177は広口壺である。口縁端部は3条の櫛描き沈線が廻り、口縁内面には櫛状工具を押圧した羽状文が施される。178は小型の台杯甕である。頸部は緩やかに湾曲し、稜を持たない。いずれも弥生時代後期。

SK-3 (第54図)

179は弥生土器の台杯甕である。口縁部が短く、緩やかに外反し、頸部に稜は見られない。外面は口縁部がナデ調整、頸部以下はハケ目である。

SK-4 (第54図)

180は弥生土器と考えられる。細頸壺の口縁部である。口縁端部は面取りされる。

SK-5 (第54図)

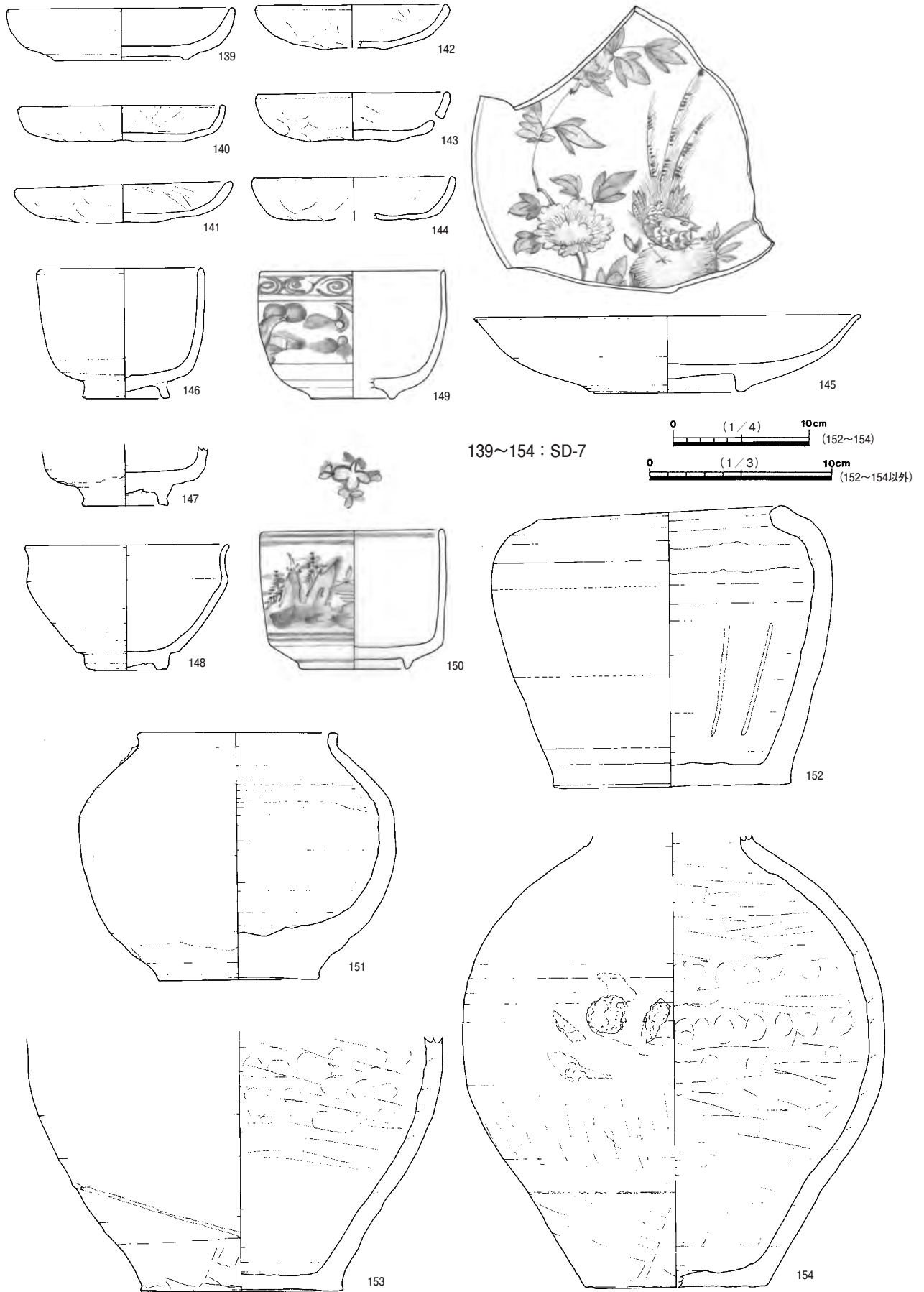
181は弥生土器の広口壺の口縁部である。口縁部が有段で、受口状に立ち上がる。端部は面取りされ、口縁下半には櫛描沈線が3条廻る。

SK-6 (第54図)

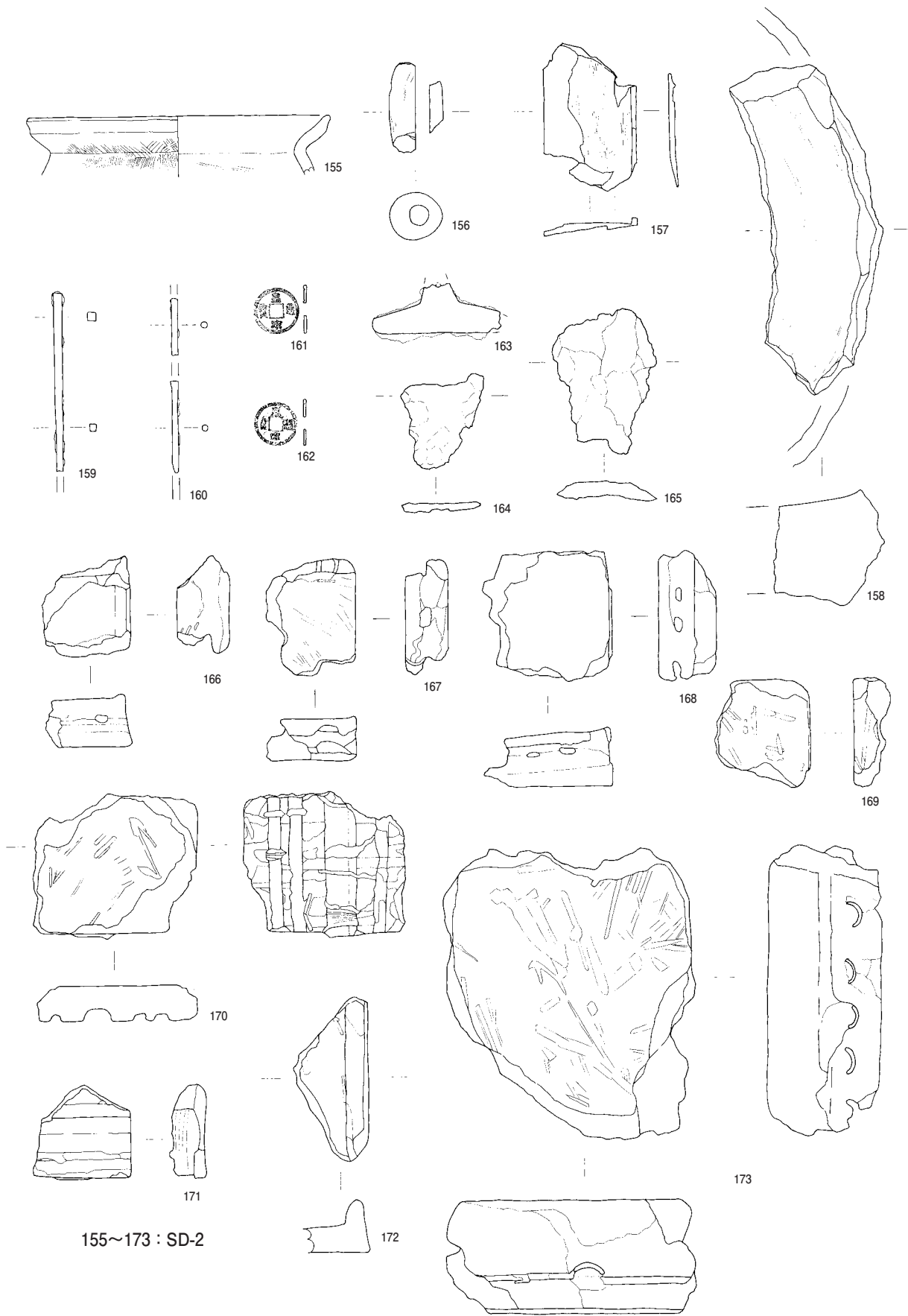
182・183は土師器の台杯甕である。182は頸部に明瞭な稜を持ち、183は端部を面取りする。2点とも内外面ともにナデ調整である。いずれも古墳時代か。

SK-7 (第55図)

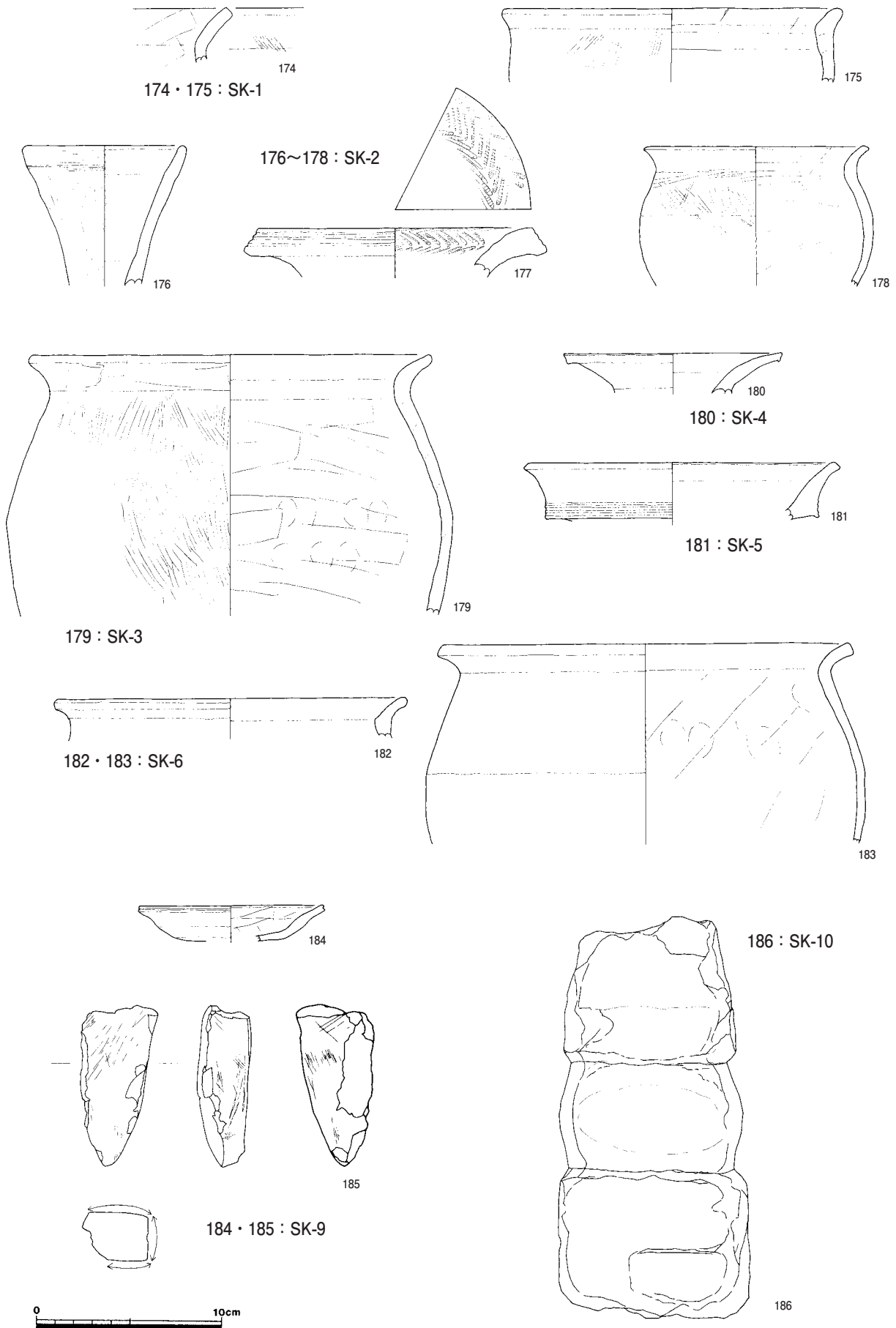
上層(1層～11層)がSD-2及び、SK-8と判別できないことから、最下層(14層・15層)から出土した遺物を抽出した。187～191は土師器の皿である。いずれも手づくね成形で、187～190のように丸みを帯びて立ち上がるものと、191のように最大径手前で急に屈曲して立ち上がるものがある。



第52図 境松 D 区遺物実測図 8 (1/3・1/4)



第53图 境松D区遺物実測図9 (1/3)



第54図 境松 D 区遺物実測図10 (1 / 3)

188・189・191は口縁部内面を面取りしている。192は陶器の四耳壺である。肩部は張らず、頸部から丸みを帯びて胴部へ向かう。耳部は小さく、直上に3条の沈線が刻まれる。古瀬戸後期。193は平瓦である。内面にヘラケズリ痕が確認できる。近世の瓦とは胎土が異なり、密できめが細かい。194は土師器の羽付茶釜である。口縁端部は折り返して成形されており、くの字口縁内耳鍋に影響を受けていると考えられる。胎土も土師器の内耳鍋に類似している。外耳は板状でなく丸い柱状である。195は直立口縁の土師器の内耳鍋である。気厚は1cmと厚く、頸部内面に明瞭な稜を有し、外面も沈線で区画する。下半部には煤が付着している。口縁部から胴部までをナデ調整、腰部以下はヘラケズリ痕が残る。西三河で確認される鍋で、15世紀頃の物である。196～198は土製肢脚である。断面は隅丸方形で、表面には指オサエ痕とヘラケズリ痕が残る。古代以降の遺物である。

SK-8 (第56図)

SK-7と分けられ、且つSD-2よりも下層(9～12層)で出土した遺物を抽出した。199～205は12層の遺物である。199・200は土師器の皿である。手づくね成形で口径は10cmを超える。201～203は瀬戸美濃産の陶器の端反皿である。SK-8の底面で201から順に3枚重なって出土した。廃棄ではなく、埋納の様な出土状況であったが、出土位置には他の遺構は検出されていない。表面には灰釉が施釉される。203はやや大きめで口径が14cm程ある。大窯期の遺物であろう。204は土師器の鍋である。逆ハの字に開く形で、底面にケズリ痕が残る。205は瓦である。内面に多量の煤が付着している。彎曲が弱いことから平瓦であろう。

206～221は9層及び11層の遺物である。206～211は土師器の皿である。206のみ丸みのある器形で、207～211は最大径手前で急に屈曲し立ち上がる。口縁端部は内面を面取りする、あるいは屈曲させるものや端部に沈線を廻らすものなど多様である。212～214は瀬戸美濃産の陶器である。212は丸皿である。高台は低く全体に灰釉が施釉される。213は天目茶碗である。胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。212・213は大窯第1段階と思われる。214は古瀬戸後期の直縁大皿である。口径が32cmを超え、底部以外は灰釉が施釉される。215は陶器の壺の底部である。底部の最大径に高台が付く。中世後半のものと考えられるが、10世紀頃の灰釉陶器の可能性もある。216は陶器の壺である。中世後半。217は舌状石製品である。凝灰岩製で断面円形の柱状を呈している。穿孔部は表裏面から削って扁平にしている。全体が研磨されている。218は瓦質土製品の砥石である。板状に加工した瓦質土器を研磨具に使用したものである。表裏面に微細な研磨痕が確認できる。219・220は鉄製品である。いずれも釘であると思われるが、219は断面が円形だが、上部ではやや角ばっている。220は扁平な板状で、断面は錆の付着で不明瞭である。221は布目瓦である。平瓦で、表面にはケズリ痕、内面には布目痕が残る。上層から破片が出土し接合している。

SK-7・SK-8上層 (第57図)

SK-7・SK-8の上層(1～5層)に堆積した砂質土から出土した遺物である。SK-7・SK-8・SD-2のいずれかの遺構に伴うものだが、区別できないため、一括して掲載する。222～224は弥生土器の壺である。222は条痕文土器で口縁部内面には波状文が施される。弥生時代中期前半。223・224は広口壺で、いずれも口縁部が垂下し、口縁端部と内面に、押引文が施される。224は5mm大の瘤が貼り付けられる。弥生時代後期以降の遺物である。225は土師器で、高坏の脚部である。

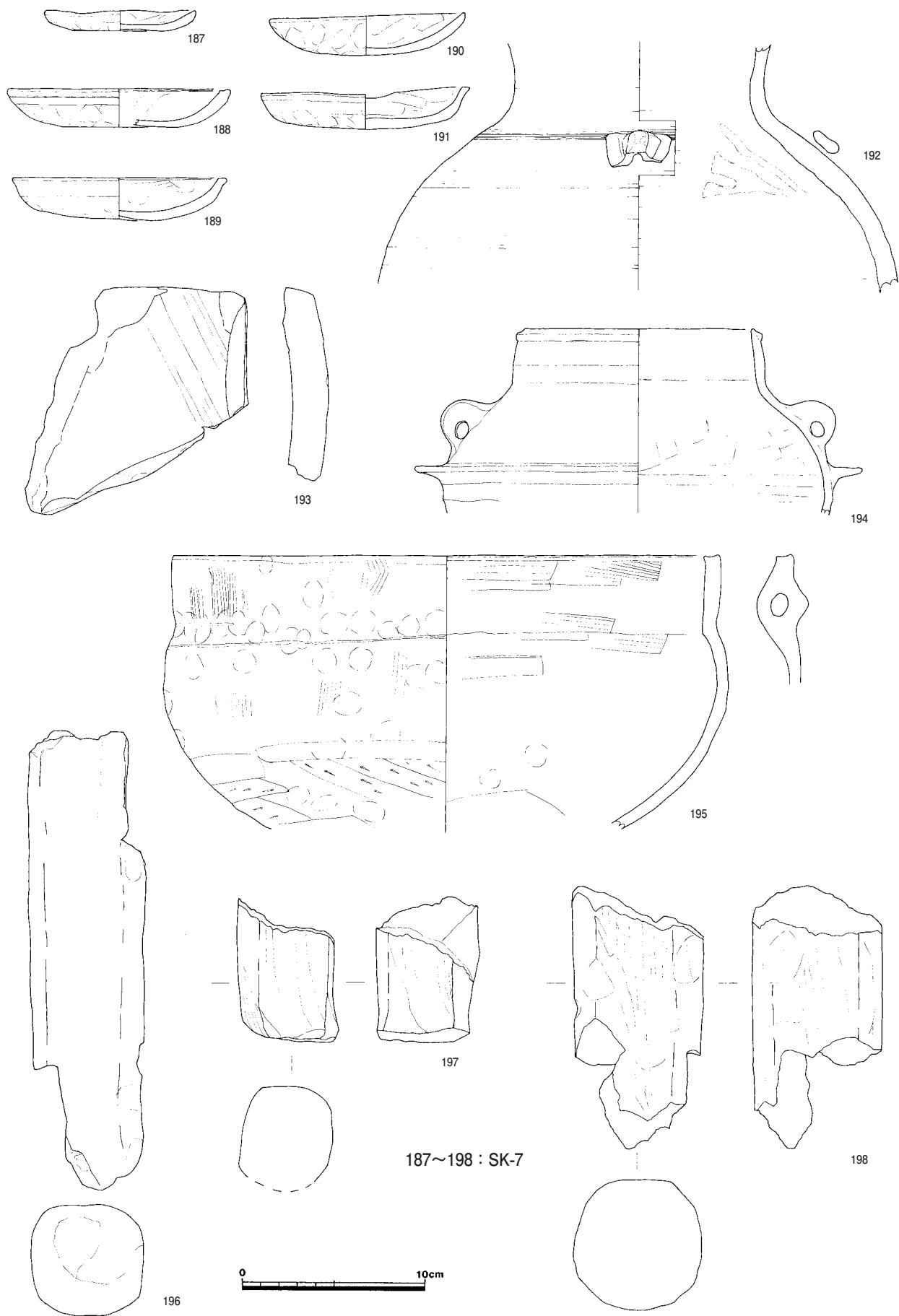
屈曲部手前に稜を持つ。古墳時代中期・宇多式。226～229は山茶碗の小皿と碗である。いずれも渥美産で渥美Ⅲ型式である。226は小皿で、口径は10cm程である。227～229は底部から丸みを持って立ち上がる、229は口縁部でわずかに外反する。230～241は土師器の皿である。230・231・233・235は丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。口径が8cm以下の小型品が含まれる。232・234・236～241は最大径の手前で急角度に屈曲し立ち上がる。いずれも口径10cmを超える。中でも238・240・241は口縁部で屈曲し外反し、口径は14cm程に大きくなる。242は青磁の小皿である。腰部で稜を付けて屈曲し、やや外反する。中国産と考えられる。243～248は瀬戸美濃産の陶器の皿である。243は反り皿である。高台は底面を平坦にし、胴部は直線的に立ち上がる。大窯第4段階か。244～246は丸皿である。244・245は高台が付くが、246には見られない。246は内面が施釉されていない緑釉皿である。いずれも大窯第4段階。247は丸皿で内面に菊花文が施され、灰釉が施される。大窯第2段階か。248は菊反皿である。口径が20cmを超え、長石釉が施される。登窯第1段階か。249～252は山茶碗と陶器の鉢である。249・251は播鉢で瀬戸美濃産である。249は内面の卸目が摩り消えている。いずれも大窯第3段階か。250・252は陶器の片口鉢。250は瀬戸産の山茶碗10型式か。252は渥美産で12世紀頃か。253は土師器の鉢である。碗状で内面は板ナデ調整である。胎土はきめ細かく、搬入品であろう。254・255は陶器の壺の頸部である。254は頸部が直行し、口縁部はやや外反する。端部は折り返され、全体に灰釉が施される。255は口縁端部が玉縁状を呈している。器厚が薄く、茶入れの可能性がある。256は土師器の鍋である。15世紀の内弯形羽釜である。口縁端部は内向し、口縁部直下につく羽は短い。257は陶器の半胴である。底部からは丸みを持って立ち上がり、内面はロクロケズリ痕が明瞭に残る。瀬戸美濃産で、登窯第2段階。258は渥美産の陶器の大甕である。口縁部が短く、肩部がなだらかに広がる。13世紀前半か。259は常滑産の陶器の大甕である。口縁部は外に折り返され接着しており、頸部が垂直ぎみに下降してから肩部が張る。15世紀後半か。260は円筒埴輪である。外面に帯状の貼り付け痕跡がある。近隣に古墳が存在することから、同地区にも古墳が存在した可能性がある。261・262は平瓦である。261は土師質で、262は瓦質である。263・264は土製肢脚である。断面は円形に近く、263のみケズリによる稜が付く。265は管状土錘である。266は陶器の皿の底部を利用した土製円盤である。中央に穿孔しようとした痕跡が見受けられるが、貫通していない。素材は山茶碗である。267は一石五輪塔の空風輪である。先端部に突起が残る以外は、風化が著しく、加工等は確認できない。268～269は砥石である。いずれも小型の持ち砥石で、淡緑色の凝灰岩である。268は板状、269・270は角柱状の素材を利用している。

S K - 9 (第53図)

184は土師器の皿である。口径は10cm程で、口縁端部に沈線が廻る。185は凝灰岩製の砥石である。板状の素材で、3面に使用が確認できる。

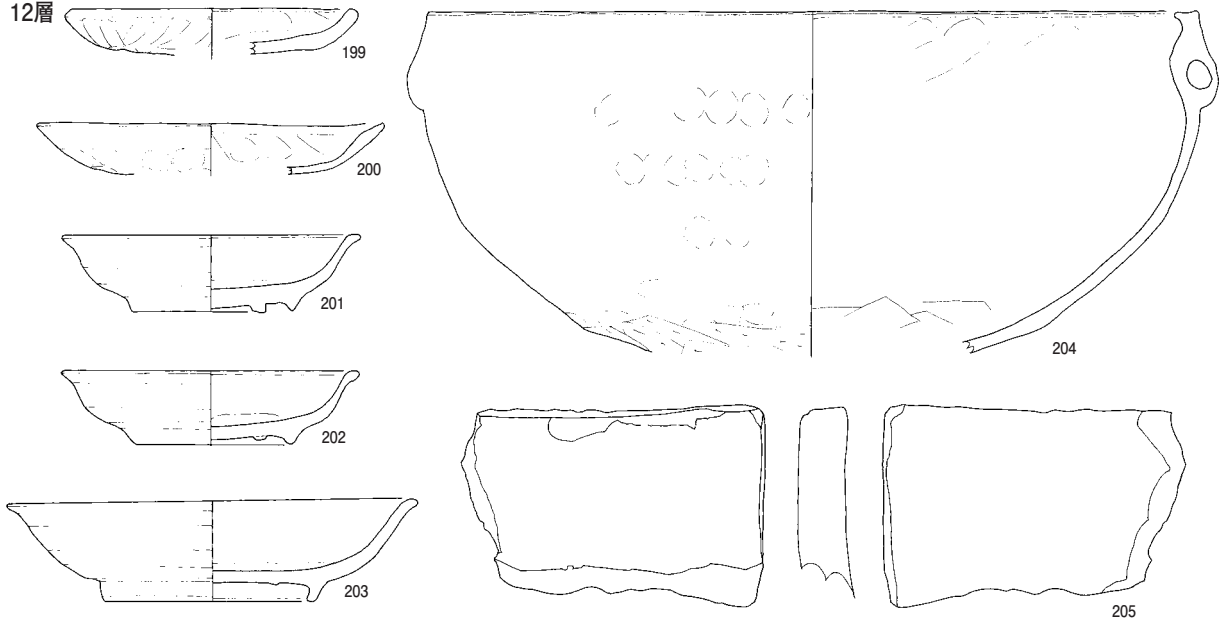
S K - 10 (第53図)

186は一石五輪塔である。表面は風化が著しい。S K - 10埋土の上部から出土している。

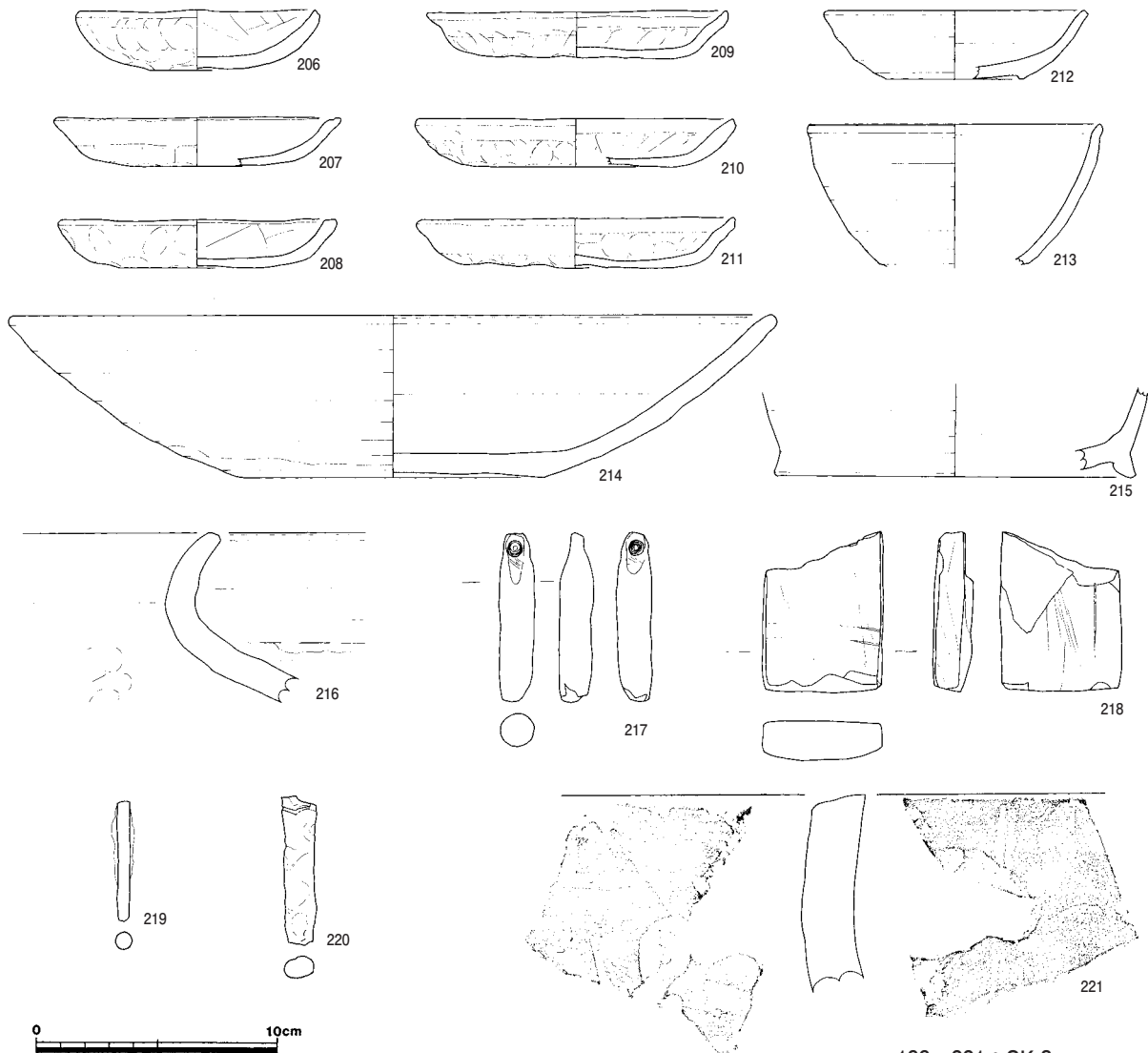


第55図 境松 D 区遺物実測図11 (1 / 3)

12層



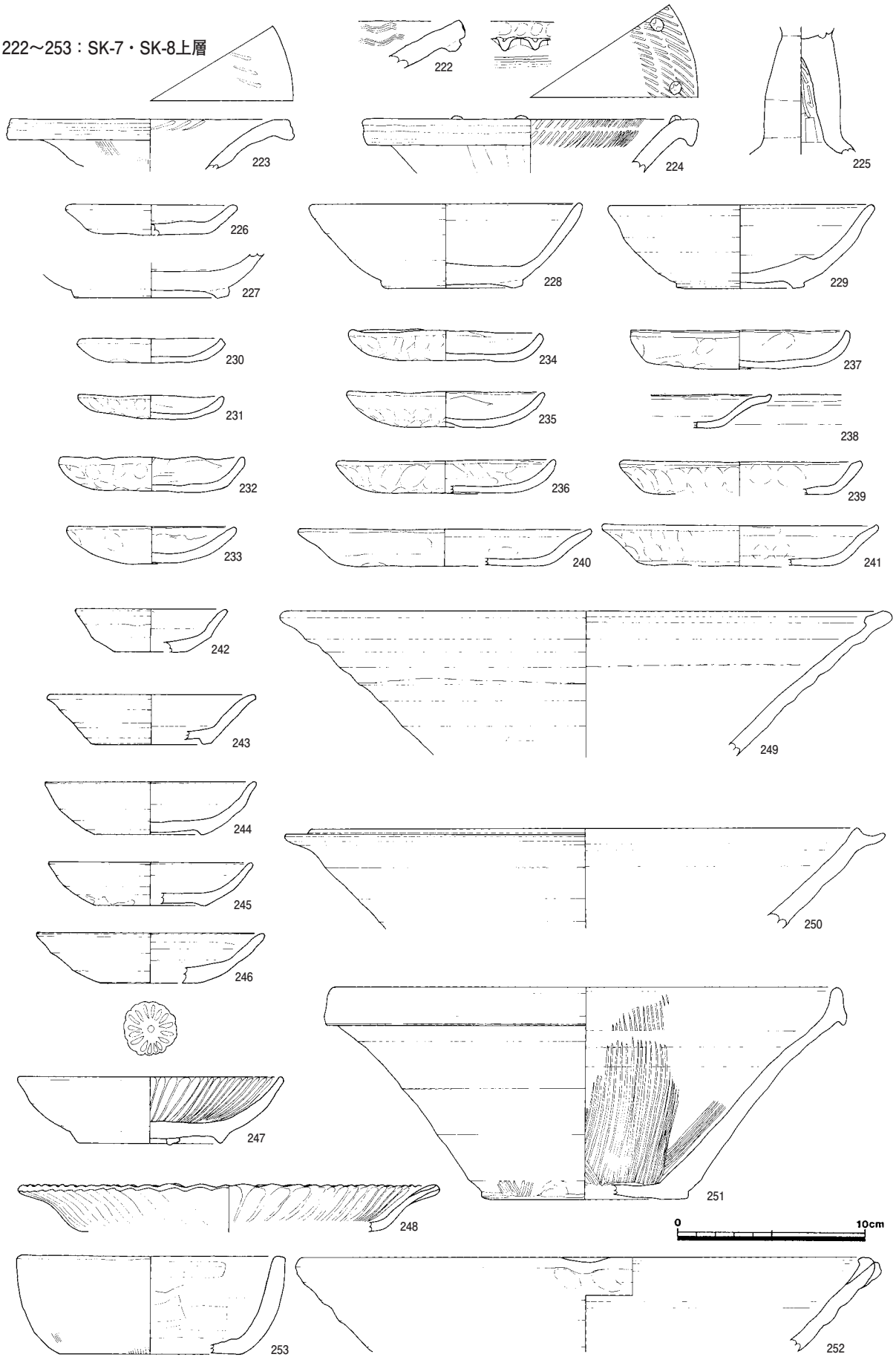
9・11層



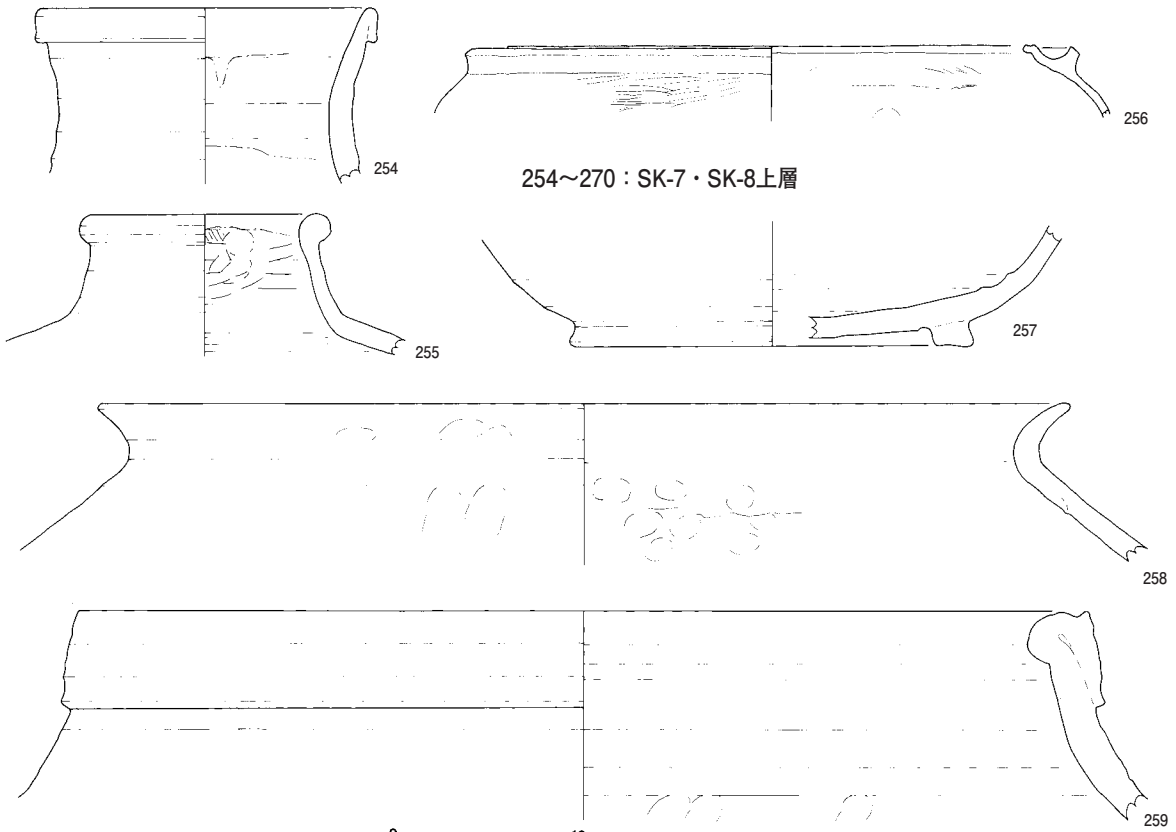
199~221 : SK-8

第56図 境松 D 区遺物実測図12 (1 / 3)

222~253 : SK-7・SK-8上層

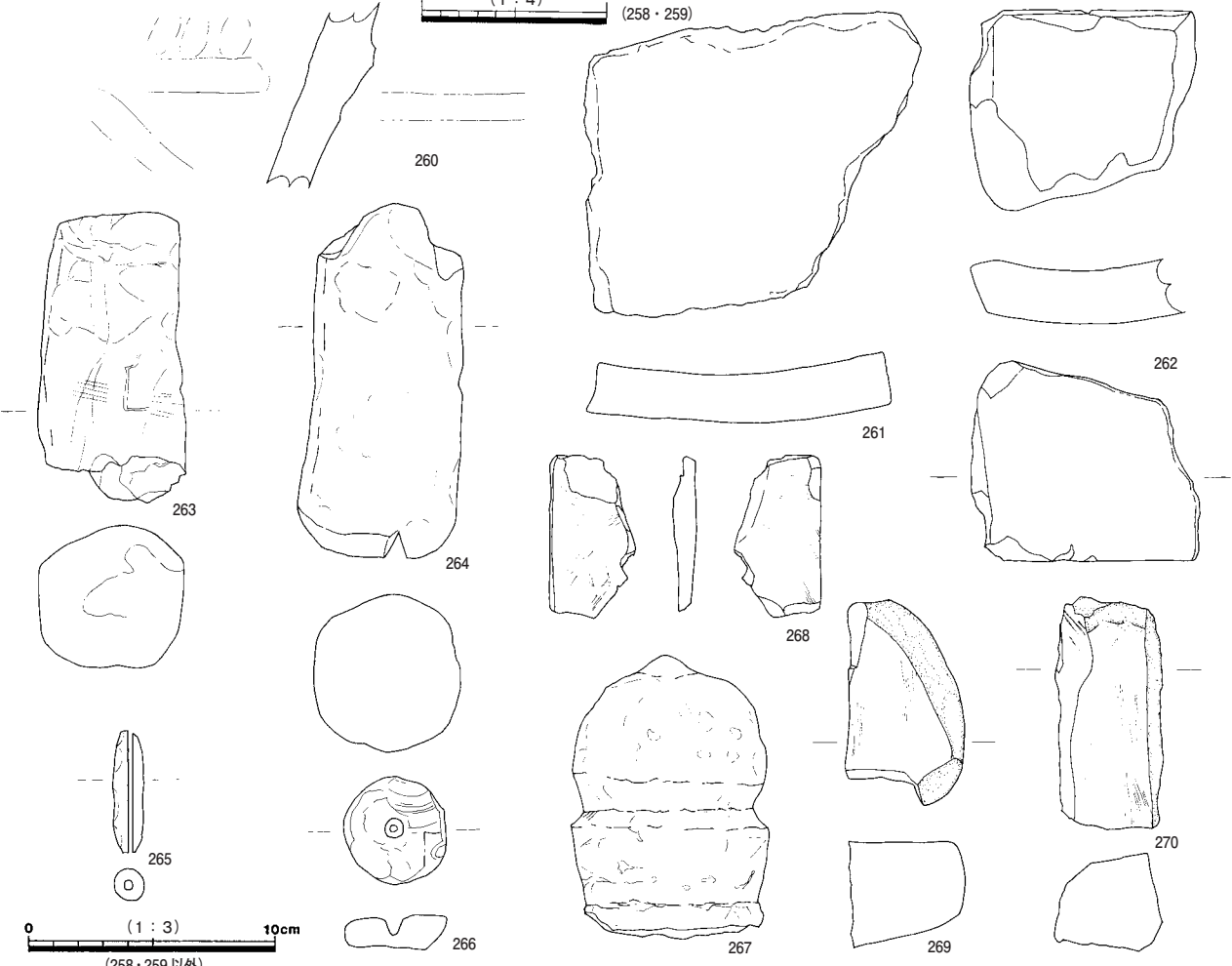


第57図 境松 D 区遺物実測図13 (1 / 3)



254~270 : SK-7・SK-8上層

0 (1 : 4) 10cm (258・259)



0 (1 : 3) 10cm (258・259以外)

第58図 境松 D 区遺物実測図14 (1 / 3 ・ 1 / 4)

3. 小結

境松遺跡D区では、古墳時代前半と中世、近世の3時期に主要遺構が確認されたが、中でも、遺構・遺物ともに最も多く発見されたのは中世のものであった。発掘調査以前の段階では、同台地上に弥生時代の住居址や方形周溝墓等が見つかっていることから、弥生時代の集落が展開するものと推定された。しかしながら、中世に多大な土地改変を受けていたことが、D区の調査成果から明らかとなった。特に掘立柱建物は周辺で確認される側柱建物ではなく、外周に柱穴列を持つ構造で、規模も大型であった。また、人頭大の扁平礫を礎石とするなど、工法も厳格であった。柱穴からは14～15世紀頃の思われる土師器皿や鍋の破片が出土している。その規模と内容から、隣接する坂津寺に関連する建物の可能性が考えられる。坂津寺は鎌倉時代から続くと云われ、近世にはD調査区から台地の西端までの間に建築物があったことが確認されている。D区で検出された掘立柱建物も規模から推定すると、別棟等の付属施設であった可能性がある。また、同時期の遺構として、大型土坑や、調査区を直線的に分断する大溝等も寺社関連の廃棄施設であった可能性がある。またSD-2から出土した銅鏡や、SK-7・SK-8から出土した一石五輪塔などの寺社関連遺物も、その可能性を示唆している。

近世になってからは、更に居住域としての土地利用が進んでいったようである。しかし、確認された掘立柱建物は、寺社関連の建物が移動しながら建て直しをされた可能性もある。いずれにせよ、台地上が信仰を集めるような場所であったことは確かである。

第4表 境松遺跡D区遺物観察表

遺物 NO.	遺構名	分類	器種	細別	時期	法量 (cm)			残存率	胎土	焼成	色調		備考
						口径/長さ	器高/幅	底径/厚さ						
1	SB-1	弥生土器	甕		条痕土器					やや粗	良	75YR7/3	にぶい橙	
2	SB-1	弥生土器	高坏		寄道式	26.6	(3.4)			密	良	75YR5/2	灰褐	外、5YR5/6明赤褐わずかに残る
3	SB-1	弥生土器	広口壺		寄道式		(2.1)			やや粗	良	10YR5/6	黄褐	
4	SB-1	土師器	壺	加飾壺		33.0	(10.9)		10%	密	良	10YR6/3	にぶい黄橙	頸径17.2
5	SB-1	土師器	高坏	有稜高坏		17.6	(4.0)		5%	密	良	75YR6/4	にぶい橙	
6	SB-1	土師器	高坏	有稜高坏	狭間Ⅰ式		(7.6)		20%	密	良	5YR6/8	橙	頸径3.0
7	SB-1	土師器	甕			10.1	(2.2)			やや粗	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
8	SB-1	土師器	甕?			13.8	(2.9)			やや粗	良	75YR6/4	にぶい橙	
9	SB-1	土師器	甕	受口状口縁甕	狭間Ⅱ式	14.0	(2.7)			密	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
10	SB-1	土師器	甕	受口状口縁甕	狭間Ⅲ式	16.2	(3.0)		3%	やや密	良	10YR7/6	明黄褐	
11	SB-1	土師器	甕	受口状口縁甕	狭間Ⅲ式	15.1	(4.0)		10%	やや密	良	10YR7/2	にぶい黄橙	
12	SB-1	土師器	甕				(1.6)			やや密	良	5YR5/6	明赤褐	
13	SB-1	土師器	甕		狭間Ⅲ式	16.8	(3.8)		3%	密	良	75YR6/6	橙	
14	SB-1	土師器	甕			14.4	(4.2)			やや粗	良	5YR6/8	橙	内25YR6/6橙
15	SB-1	土師器	甕			16.2	(4.1)			やや粗	良	75YR6/4	にぶい橙	
16	SB-1	土師器	甕				(5.9)		5%	密	良	10YR7/4	にぶい黄橙(内・外)	
17	SB-1	土師器	甕	台付甕	狭間Ⅲ式	7.7	(4.4)			やや密	良	10YR6/4	にぶい黄橙	
18	SB-1	土師器	甕	台付甕			(6.3)		5%	やや密	良	10YR7/6	明黄褐	台部頸径5.4
19	SB-1	土師器	甕	平底甕	狭間Ⅲ式		(9.7)	6.3	20%	やや密	良	75YR7/6	橙	内10YR4/2黄褐
20	SB-1	鉄製品	斧			10.0	4.5	1.2	100%					表面錆付着
21	SB-2	土師器	甕			18.3	(2.7)			密	良	75YR4/2	灰褐	
22	SB-2	土師器	甕	平底甕	狭間Ⅲ式?		(5.0)	6.0	20%	密	良	75YR6/4	にぶい橙	
23	SB-3	土師器	皿	土師皿		6.2	(1.55)			密	良	75YR6/4	にぶい橙	
24	SB-3	土師器	皿	土師皿		10.0	(1.55)		20%	密	良	75YR6/4	にぶい橙	
25	SB-3	陶器	皿			10.7	2.1	4.2	15%	密	良	25YR8/2	灰白	
26	SB-3	陶器	鉢	山茶碗			(2.4)			やや密	良	25Y7/1	灰白	
27	SB-4	土師器	皿	土師皿		10.2	(1.8)		30%	密	良	5YR6/8	橙	
28	SB-4	土師器	皿	土師皿		6.4	(1.4)		30%	密	良	75YR7/6	橙	
29	SB-4	土師器	皿	土師皿		7.6	(1.7)		20%	密	良	75YR7/6	橙	
30	SB-4	土師器	皿	土師皿		8.4	(1.8)		40%	密	良	75YR7/2	にぶい黄橙	
31	SB-4	土師器	皿	土師皿		7.0	(1.6)		50%	密	良	5YR6/6	橙	
32	SB-4	土師器	皿	土師皿		10.4	(2.4)		10%	密	良	10YR7/2	にぶい黄橙	
33	SB-4	土師器	皿	土師皿		14.0	(1.7)		15%	密	良	75YR7/6	橙	
34	SB-6	土師器	皿			9.2	(1.9)			密	良	75YR7/6	橙	内、10YR7/4にぶい黄橙 5YR7/6橙
35	SB-7	土師器	皿	土師皿		7.7	1.5		70%	密	良	5YR7/8	橙	
36	SB-7	土師器	皿			11.8	1.9		80%	密	良	75YR7/4	にぶい橙	
37	SB-7	土師器	皿	土師皿		17.0?	(2.0)		30%	密	良	75YR7/6	橙	
38	SB-7	石製品	石塔	空風輪			(25.3)	(14.9)						
39	SD-1	須恵器	坏身		7世紀	11.8	(2.4)			密	良	75Y6/1	灰	
40	SD-1	土師器	広口壺		欠山式	18.2	(2.5)			やや粗	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
41	SD-1	陶器	陶鉢			8.5	3.9		80%	密	良	25Y7/2	灰黄	孔径1.4
42	SD-1	陶器	碗	灰釉陶器		15.4	(3.9)		10%	密	良	25Y8/3	淡黄	
43	SD-1	陶器	碗	灰釉陶器		16.4	(3.1)			密	良	25Y8/3	淡黄	
44	SD-1	陶器	碗	灰釉陶器	10世紀前半	17.0	4.8	8.0	30%	密	良	25Y7/2	灰黄	
45	SD-1	陶器	碗	灰釉陶器			(2.9)			密	良	25Y7/2	灰黄	
46	SD-1	陶器	碗	灰釉陶器	10世紀前半		(1.9)	7.0		密	良	25Y7/1	灰白	
47	SD-1	陶器	碗	灰釉陶器	10世紀後半		(3.1)	7.6		密	良	25Y7/1	灰白	
48	SD-2	土師器	皿	土師皿		8.2	1.6		50%	密	良	5YR7/4	にぶい橙	
49	SD-2	土師器	皿	土師皿		9.8	1.3	7.4	40%	密	良	75YR7/4	にぶい橙	
50	SD-2	土師器	皿	土師皿		10.4	(1.6)	6.2	40%	密	良	75YR8/6	浅黄橙	
51	SD-2	土師器	皿	土師皿		9.6	1.7	5.2	90%	密	良	5YR7/8	橙	
52	SD-2	土師器	皿	土師皿		11.6	2.3		80%	密	良	10YR8/4	浅黄橙	
53	SD-2	土師器	皿	土師皿		12.1	2.2		100%	密	良	75YR6/6	橙	
54	SD-2	土師器	皿	土師皿		14.0	(2.3)		10%	密	良	75YR7/4	にぶい橙	
55	SD-2	土師器	皿	土師皿		13.2	2.9		20%	密	良	10YR8/3	浅黄橙	
56	SD-2	陶器	皿	緑釉皿		10.8	(2.3)		10%	密	良	25Y7/2	灰黄	
57	SD-2	陶器	皿	緑釉皿		10.8	2.4	5.2	40%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
58	SD-2	陶器	碗	天目茶碗	16世紀後葉	13.3	(5.1)		20%	密	良	75YR7/6	橙	大窯第3段階
59	SD-2	陶器	碗	平碗	16世紀	16.0	(4.1)		10%	密	良	25Y7/3	浅黄	
60	SD-2	陶器	碗	平碗	16世紀初頭	16.7	(3.8)		10%	密	良	25Y8/2	灰白	大窯第1段階
61	SD-2	陶器	碗	平碗	15世紀中葉	18.6	(6.4)		10%	密	良	10YR8/3	浅黄橙	古瀬戸後期
62	SD-2	陶器	碗	平碗	16世紀初頭	16.4	(4.7)		20%			25Y7/2	灰黄	大窯第1段階
63	SD-2	陶器	碗	平碗	16世紀後半	16.0	6.1	6.2	90%	密	良	10YR8/4	浅黄橙	大窯3段階
64	SD-2	陶器	壺	瓶子			(6.0)		5%	密	良	25Y7/2	灰黄	菊花文
65	SD-2	陶器	皿	折縁深皿		33.0	(8.1)			密	良	25Y7/2	灰黄	
66	SD-2	陶器	鉢	搦鉢	16世紀末～17世紀初頭	26.2	11.4	10.1	10%	密	良	75YR7/6	橙	大窯第4段階
67	SD-2	陶器	鉢	搦鉢	16世紀末～17世紀初頭	34.0	11.1	13.4	10%	密	良	5YR6/8	橙	常滑産
68	SD-2	陶器	鉢	搦鉢	17世紀後半	28.4	(5.2)		5%	密	良	5YR4/4	にぶい赤褐	

69	SD-2	陶器	燗台			12.2	(3.7)		2%	密	良	25Y6/2	灰黄	鉄軸施軸
70	SD-2	陶器	甕		16世紀	33.0	(6.7)		2%	密	良	5Y5/1	灰	常滑産
71	SD-2	土師器	鍋	伊勢型鍋	14世紀末 ~15世紀	22.0	(3.3)		5%	密	良	10YR6/2	灰黄褐	
72	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋	16世紀	17.2	(5.0)		10%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	頸径15.6
73	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋	16世紀	21.7	(5.8)		10%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	頸径20.4
74	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋	16世紀	21.8	(6.8)		10%	密	良	7.5YR7/4	にぶい橙	
75	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋	16世紀	22.0	(7.3)		5%	密	良	7.5YR7/6	橙	
76	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋	16世紀	23.3	(11.7)		20%	密	良	2.5Y8/2	灰白	最大径27.0
77	SD-2	土師器	鍋	内耳鍋	16世紀	28.3	(15.7)		20%	密	良	7.5YR5/3	にぶい褐	
78	SD-2	土師器	蓋				(3.0)			密	良	5Y4/1	灰	最大径32.8
79	SD-2	石器	硯							砂岩				上層
80	SD-2	石器	砥石			(6.4)	3.1	(1.4)		凝灰岩				48.8 g
81	SD-2	陶器		筒型容器		30.0	(16.5)		20%	密	良	2.5Y7/2	灰黄	
82	SD-2	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	19.6	(2.3)		2%	やや粗	良	2.5Y5/2	暗灰黄	
83	SD-2	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	30.3	(4.2)		3%	やや粗	良	7.5YR6/8	橙	
84	SD-2	弥生土器		台盤状土製品	長床式			(3.7)		やや粗	良	2.5Y8/3	淡黄	孔径6.8~7.0
85	SD-2	土師器	甕	受口状口縁甕	狭間Ⅰ式	10.6	(9.2)			やや不良		10YR8/3	浅黄橙	
86	SD-2	土師器	甕	くの字口縁甕	狭間Ⅱ式	19.4	4.5			密	良	2.5Y6/3	にぶい黄	頸径16.4
87	SD-2	須恵器	甕				(8.1)		5%	密	良	N6/1	灰	
88	SD-2	土製品	脚	土製支脚		(12.8)	6.8							
89	SD-2	陶器	碗	灰箱陶器	10世紀前半		(1.9)	7.0	20%	密	良	5Y7/1	灰白	
90	SD-2	陶器	碗	山茶碗	13世紀	15.2	(4.5)		10%	密	良	10YR7/2	にぶい黄橙	
91	SD-2	陶器	壺			17.2	(6.1)		5%	密	良	2.5Y6/2	灰黄	頸径15.0
92	SD-2	陶器	甕				(6.3)	17.0	10%	密	良	7.5YR6/1	灰	
93	SD-2	瓦	平瓦	布目瓦										
94	SD-2	陶器	甕				(10.6)			密	良	2.5Y7/2	灰黄	常滑
95	SD-2	銅製品	碗			4.3	5.5	60%	密	良				仏教具か?
96	SD-2	石器	石斧	磨製石斧	縄文時代後期 ~晩期	16.4	6.4	3.6		塩基性岩				
97	SD-3	土師器	甕			18.4	(3.6)			やや粗	やや不良	5YR4/8	赤褐	
98	SD-3	土師器	壺				(4.0)	8.2	5%	やや密	良	10YR5/3	にぶい黄褐	
99	SD-3	土師器	甕	台付甕			(6.1)	11.0	5%	やや密	良	7.5YR6/6	橙	
100	SD-3	土師器	高坏		松河戸Ⅱ式		(5.1)		20%	密	良	5YR6/8	橙	
101	SD-3	土製品	土鉢	管状土鉢		(4.2)	1.2			密	良	2.5YR5/6	明赤褐	
102	SD-3	土製品	脚	土製支脚		(11.2)	(6.5)	(3.4)		やや粗	良	7.5YR6/6	橙	
103	SD-3	陶器	碗	山茶碗	13世紀		(1.6)	7.2	5%	密	良	2.5Y7/2	灰黄	
104	SD-3	土師器	皿	土師皿		10.2	(2.1)		40%	密	良	7.5YR6/4	にぶい橙	
106	SD-3	土師器	皿	土師皿		11.6	2.0		30%	密	良	2.5Y7/2	灰黄	
107	SD-3	土師器	皿	土師皿		11.8	(2.0)		45%	密	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
108	SD-3	土師器	皿	土師皿		12.6	(2.2)		25%	密	良	7.5YR7/4	にぶい橙	
109	SD-3	土師器	皿	土師皿		12.8	(2.2)		50%	密	良	2.5YR6/6	橙	
109	SD-3	土師器	皿	土師皿		11.2	1.9		50%	密	良	2.5YR8/3	淡黄	
110	SD-3	土師器	皿	土師皿		12.6	1.9		60%	密	良	10YR8/4	浅黄橙	
111	SD-3	陶器	皿	折縁皿	16世紀	16.6	3.8	8.0	60%	密	良	5Y6/3	オリーブ黄	
112	SD-3	陶器	碗	天目茶碗	17世紀初頭	10.5	6.6	4.0	40%	密	良	内10YR5/4	にぶい黄褐	
113	SD-3	陶器	甕		16世紀末~ 17世紀初頭	32.2	(8.5)			やや粗	良	7.5YR4/4	褐	常滑
114	SD-3	陶器	鉢	播鉢	17世紀初頭	34.4	(7.1)		15%	密	良	5YR4/1	褐灰	
115	SD-3	陶器	鉢			25.4	8.7	8.4	15%	密	良	5YR4/2	灰褐	
116	SD-3	石器	砥石			(4.8)	(3.4)	1.1		凝灰岩				
117	SD-3	石製品	石塔	空風輪		(22.5)	(23.1)	(12.5)						
118	SD-5	土師器	皿	土師皿		9.8	2.3		100%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
119	SD-5	土師器	皿	土師皿		10.2	2.4		90%	密	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
120	SD-5	土師器	皿	土師皿		11.6	(2.4)		10%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
121	SD-5	鉄製品	釘	角釘		(4.0)	(0.55)	(0.5)						
122	SD-6	弥生土器	壺	広口壺			(7.4)			やや粗	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
123	SD-6	弥生土器	甕	台付甕	長床式	15.4	(3.1)			やや粗	良	10YR5/4	にぶい黄褐	
124	SD-6	土師器	高坏		狭間Ⅱ式	(6.9)		10.2		やや粗	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
125	SD-6	土師器	皿	土師皿		12.6	2.5		20%	密	良	10YR7/3	黄橙	
126	SD-6	土師器	皿	土師皿		11.4	(2.8)		30%	密	良	7.5YR7/6	橙	
127	SD-6	陶器	皿	反り皿		14.2	3.0	6.5	40%	密	良	2.5Y8/3	淡黄	
128	SD-6	陶器	碗	丸碗		11.2	7.3	5.2	60%	密	良	2.5Y8/2	灰白	
129	SD-6	土師器	蓋			4.0	(2.0)		20%	密	良	10YR8/4	浅黄橙	最大径16.4
130	SD-6	土師器	釜	茶釜	16世紀末 ~17世紀	14.2	(17.4)		40%	密	良	10YR8/6	黄橙	最大径23.1
131	SD-6	陶器	茶入れ			9.8	(5.9)			密	良	2.5Y8/2	灰白	
132	SD-6	陶器	壺	直口壺		11.5	(5.2)			密	良	2.5YR4/3	にぶい赤褐	
133	SD-6	土師器	鉢			34.6	(4.1)			やや粗	良	5YR7/6	橙	
134	SD-6	土師器	焜炉	大和くど		31.0	(7.7)			密	良	7.5YR7/6	橙	最大径31.2
135	SD-6	陶器	甕			30.6	(8.8)			密	良	10YR5/1	褐灰	常滑焼
136	SD-6	土師器	甕			33.4	38.0	17.4		やや粗	良	10YR8/6	黄橙	肥堯 最大径39.0
137	SD-6	鉄製品	金具	飾金具		(3.4)	(3.4)	1.6						

138	SD-6	鉄製品		把手		(39)	(38)														
139	SD-7	陶器	皿	丸皿		12.6	2.9	8.4	30%	密	良	7.5YR8/6	浅黄								
140	SD-7	土師器	皿	土師皿		11.4	1.9		50%	密	良	10YR5/2	灰黄褐								
141	SD-7	土師器	皿	土師皿		12.1	(22)		70%	密	良	7.5YR6/6	橙								
142	SD-7	土師器	皿	土師皿		10.8	2.4		30%	密	良	10YR8/3	浅黄橙								
143	SD-7	土師器	皿	土師皿		10.8	2.6		50%	密	良	10YR7/3	にふい黄橙								
144	SD-7	土師器	皿	土師皿		11.2	2.4		20%	密	良	10YR8/3	浅黄橙								
145	SD-7	磁器	皿	大皿		21.4	4.2	9.6	50%	密	良	7.5Y8/1	灰白								
146	SD-7	陶器	碗	丸碗	18世紀	8.4	7.2	4.8		密	良	10YR7/2	にふい黄橙								
147	SD-7	陶器	碗	筒形碗			(32)	4.8	50%	密	良	5Y8/2	灰白								
148	SD-7	陶器	碗	天目茶碗	17世紀中葉	11.3	6.9	4.7	60%	密	良	10YR	灰黄褐								
149	SD-7	磁器	碗	丸碗		10.2	7.0	4.7	30%	密	良	7.5Y8/1	灰白								
150	SD-7	磁器	碗	筒形碗	17世紀	12.0	7.6	6.0	80%	密	良										
151	SD-7	陶器	茶入れ		16世紀末	11.1	13.7	9.0	70%	密	良	2.5YR4/3	にふい赤褐								
152	SD-7	陶器	茶入れ				15.4	13.1	80%	密	良	5YR5/8	明赤褐								
153	SD-7	陶器	壺				(18.6)	15.0	40%	密	やや良	10YR7/2	にふい黄橙								
154	SD-7	陶器	壺				(33.2)	13.4	50%	密	良	2.5YR3/1	暗赤灰								
155	SD-7	土師器	甕	受口状口縁甕	狭間Ⅱ式	16.2	(3.0)			密	良	7.5YR7/6	橙								
156	SD-7	土製品	土鉢	管状土鉢		(4.8)	2.9														
157	SD-7	石製品	硯			(7.8)	5.0	(0.9)		凝灰岩											
158	SD-7	石製品	臼	石臼			(6.1)														
159	SD-7	銅製品	箸			(9.6)	0.5	0.5													
160	SD-7	銅製品	箸			(9.3)	0.35	0.3													
161	SD-7	貨幣	宗銭	皇宋通寶		2.55		0.15													
162	SD-7	貨幣				2.45		0.15													
163	SD-7	鉄製品	火打金			(6.2)	(3.1)														
164	SD-7	鉄製品	鉄滓			5.1	4.4	0.6													
165	SD-7	鉄製品	鉄滓			7.7	5.6	1.1												内外面に灰釉	
166	SD-7	土製品	土壁									10YR6/2	灰黄褐								
167	SD-7	土製品	土壁									10YR6/1	褐灰								
168	SD-7	土製品	土壁									10YR7/4	にふい黄橙								
169	SD-7	土製品	土壁									10YR4/1	褐灰							登窯第2小期	
170	SD-7	土製品	土壁									10YR6/1	褐灰								
171	SD-7	土製品	土壁									10YR4/1	褐灰							登窯第1小期	
172	SD-7	土製品	土壁									10YR7/4	にふい黄橙								
173	SD-7	土製品	土壁									10YR7/2	にふい黄橙								
174	SK-1	弥生土器	甕	台付甕			(2.9)			密	良	10YR7/4	にふい黄橙								
175	SK-1	弥生土器	鉢	台付鉢		18.4	(4.0)		5%	やや粗	良	10YR4/2	灰黄褐								
176	SK-2	弥生土器	壺	直口壺	寄遣式	9.0	(7.5)		10%	密	良	7.5YR6/6	橙								
177	SK-2	弥生土器	壺	広口壺		(16.4)	(2.7)		3%	やや密	良	2.5YR5/8	明赤褐								
178	SK-2	弥生土器	甕	台付甕		12.2	(7.5)		15%	密	良	10YR7/4	黄橙								
179	SK-3	弥生土器	甕	台付甕		21.8	(14.1)		30%	やや密	良	10YR3/2	黒褐								
180	SK-4	弥生土器	壺	細頸壺		11.8	(2.2)			密	良	7.5YR5/4	にふい褐								
181	SK-5	弥生土器	壺	広口壺		16.2	(3.0)		5%	密	良	7.5YR4/4	褐								
182	SK-6	土師器	壺	台付壺		19.2	(2.2)			やや粗	良	2.5YR5/8	明赤褐								
183	SK-6	土師器	壺	台付壺		22.6	(10.8)			やや密	良	7.5YR6/6	橙								
184	SK-9	土師器	皿	土師皿		10.1	(1.9)		15%	密	良	7.5YR7/6	橙								
185	SK-9	石器	砥石			8.7	4.2	2.7		花崗岩											
186	SK-10	石製品	石塔	一石五輪塔		(21.8)	(10.2)														
187	SK-7	土師器	皿	土師皿		10.8	2.3		70%	密	良	7.5YR7/3	にふい橙								
187	SK-7	土師器	皿	土師皿		8.2	1.1		40%	密	良	7.5YR7/4	にふい橙								
189	SK-7	土師器	皿	土師皿		12.2	2.1		20%	密	良	10YR8/3	浅黄橙								
190	SK-7	土師器	皿	土師皿		11.5	2.3		99%	密	良	7.5YR7/4	にふい橙								
191	SK-7	土師器	皿	土師皿		11.8	2.3		90%	密	良	10YR7/6	橙								
192	SK-7	陶器	壺	四耳壺	古瀬戸後期		13.0		20%	密	良	5Y5/3	灰オリーブ								
193	SK-7	瓦	平瓦	布目瓦																	
194	SK-7	土師器	釜	羽付茶釜	15~16世紀	13.5	(10.1)		10%	密	良	10YR8/3	浅黄橙								
195	SK-7	土師器	鍋	内耳鍋	15世紀	30.0	(15.0)		30%	密	良	10YR7/3	にふい黄橙								
196	SK-7	土製品	脚	土製支脚		(25.3)	6.4					5YR6/8	橙								
197	SK-7	土製品	脚	土製支脚			(7.9)														
198	SK-7	土製品	脚	土製支脚			(14.5)														
199	SK-8	土師器	皿	土師皿		11.6	2.0		40%	密	良	7.5Y7/6	橙								
200	SK-8	土師器	皿	土師皿		13.8	(2.0)		20%	密	良	10YR8/3	浅黄橙								
201	SK-8	陶器	皿	端反皿	16世紀中葉	11.8	3.0	6.4	98%	密	良									大窯第2段階	
202	SK-8	陶器	皿	端反皿	16世紀中葉	11.8	2.9	6.2	100%	密	良										大窯第2段階
203	SK-8	陶器	皿	端反皿	16世紀中葉	16.3	4.1	8.3	99%	密	良										大窯第2段階
204	SK-8	土師器	鍋	内耳鍋		30.7	13.5		30%	密	良	5YR7/3	にふい橙								
205	SK-8	瓦	平瓦			(8.9)	(13.0)	1.9												内面スス付着	
206	SK-8	土師器	皿	土師皿		10.2	2.5		40%	密	良	5YR6/6	橙								
207	SK-8	土師器	皿	土師皿		12.0	2.0		20%	密	良	10YR7/2	にふい黄橙								
208	SK-8	土師器	皿	土師皿		11.6	(1.8)		20%	密	良	10YR8/2	灰白								

209	SK-8	土師器	皿	土師皿		12.5	2.0		90%	密	良	10YR8/3	浅黄橙	
210	SK-8	土師器	皿	土師皿		13.4	2.0		30%	密	良	10YR8/2	灰白	
211	SK-8	土師器	皿	土師皿		13.2	2.1		60%	密	良	10YR8/3	浅黄橙	
212	SK-8	陶器	皿	丸皿	16世紀前半	11.0	(2.85)	5.7	30%	密	良	10YR8/3	浅黄橙	大窯第2段階後半
213	SK-8	陶器	碗	天目茶碗	16世紀後半	12.2	(5.8)		5%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	大窯第3段階
214	SK-8	陶器	皿	直縁大皿	古瀬戸後期	32.0	6.8	12.6	30%	密	良	10YR8/3	浅黄橙	古瀬戸後期
215	SK-8	陶器	壺				(3.8)	15.0	2%	密	良	10YR7/1	灰白	
216	SK-8	陶器	壺							密	良	2.5Y7/2	灰黄	
217	SK-8	石製品		舌状石製品		7.0	1.4	1.35						重さ25.2g
218	SK-8	土製品	砥石	瓦製砥石		6.7	5.0	1.7				7.5Y8/1	灰白	57.3g
219	SK-8	鉄製品	釘	丸釘		(5.0)	(0.5)	(0.7)						4.7g
220	SK-8	鉄製品	釘	平釘		(6.2)	(1.1)	(0.9)						重さ11.6g
221	SK-8	瓦	平瓦	布目瓦										
222	SK7-SK8上層	弥生土器	壺	広口壺	鏡水神平式				2%	やや粗	良	2.5Y6/2	灰黄	
223	SK7-SK8上層	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	15.4	(2.7)		3%	密	良	10YR7/4	にぶい黄橙	
224	SK7-SK8上層	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	18.0	(2.8)		3%	密	良	10YR6/2	灰黄褐	
225	SK7-SK8上層	土師器	高坏		宇田II式		(6.7)			密	やや不良	N4/0	灰	
226	SK7-SK8上層	陶器	小皿	山茶碗	13世紀	9.2	1.6			密	良	N7/	灰白	
227	SK7-SK8上層	陶器	碗	山茶碗	13世紀		2.3	8.3	20%	密	良	10YR7/2	にぶい黄橙	
228	SK7-SK8上層	陶器	碗	山茶碗	13世紀	14.2	4.5	6.8	60%	密	良	2.5Y8/1	灰白	
229	SK7-SK8上層	陶器	碗	山茶碗	13世紀	14.0	4.4	5.7	30%	密	良	2.5Y7/1	灰白	
230	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		8.0	1.3		50%	密	良	10YR6/4	にぶい黄橙	
231	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		7.8	1.3			密	良	7.5YR7/6	橙	
232	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		10.0	1.4		70%	密	良	7.5YR8/4	浅黄橙	
233	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		9.2	2.0		10%	やや粗	やや不良	7.5YR8/3	浅黄橙	
234	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		10.4	1.8		90%	密	良	7.5YR8/6	浅黄橙	
235	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		10.6	1.9	4.4		密	良	7.5YR7/6	橙	
236	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		11.8	1.8		80%	密	良	7.5YR7/4	にぶい橙	
237	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		11.8	2.1		80%	密	やや不良	N4/0	灰	
238	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿			(1.8)		10%	密	良	5YR7/6	橙	
239	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		13.0	(1.8)		20%	密	良	2.5YR7/4	淡赤橙	
240	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		15.8	2.0		20%	密	良	10YR5/1	褐灰	内面スス付着
241	SK7-SK8上層	土師器	皿	土師皿		14.8	2.2		10%	密	良	7.5YR8/4	浅黄橙	
242	SK7-SK8上層	磁器	皿	青磁		8.2	2.3	3.8	20%	密	良	7.5Y7/1	灰白	
243	SK7-SK8上層	陶器	皿	反り皿	16世紀中葉	11.2	2.7	6.4	30%	密	良	10YR7/6	明黄褐	
244	SK7-SK8上層	陶器	皿	丸皿	16世紀末	11.4	2.8	5.9	70%	密	良	10YR8/4	浅黄橙	大窯第4段階
245	SK7-SK8上層	陶器	皿	丸皿	16世紀末	11.0	2.3	5.9	20%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	大窯第4段階
246	SK7-SK8上層	陶器	皿	縁軸皿	16世紀末	12.2	2.7			密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	
247	SK7-SK8上層	陶器	皿	丸皿	16世紀中葉	14.2	3.6	7.7	60%	密	良	10YR8/3	浅黄橙	大窯第4段階後半
248	SK7-SK8上層	陶器	皿	菊反皿	17世紀初頭	22.7	(2.5)		3%	密	良	10YR8/4	浅黄橙	登窯第1小期
249	SK7-SK8上層	陶器	鉢	播鉢	16世紀後半	32.8	(7.7)		20%	密	良	2.5YR7/3	浅黄	
250	SK7-SK8上層	陶器	鉢	片口鉢	15世紀初頭	29.0	(5.3)		3%	やや粗	良	10YR5/1	褐灰	
251	SK7-SK8上層	陶器	鉢	播鉢	16世紀後半	27.0	11.3	11.0	30%	密	良	10YR8/4	浅黄橙	大窯第3段階後半
252	SK7-SK8上層	陶器	鉢	片口鉢	12世紀		(5.3)	15.2	5%	やや粗	良	10YR7/2	にぶい黄橙	
253	SK7-SK8上層	土師器	鉢	鉢		14.4	5.3	9.7	20%	密	良	7.5YR8/6	浅黄橙	
254	SK7-SK8上層	陶器	壺			13.6	(6.9)			密	良	2.5Y7/2	灰黄	
255	SK7-SK8上層	陶器	壺			10.0	(5.6)		5%	密	良	2.5Y7/2	灰黄	
256	SK7-SK8上層	土師器	釜	内弯形羽釜	14世紀末～15世紀初頭	20.9	(2.9)		5%	密	良	N3/	暗灰	
257	SK7-SK8上層	陶器		半割			(4.7)	16.0	10%	密	良	10YR7/1	灰白	
258	SK7-SK8上層	陶器	甕		13世紀前半?				3%	密	良	2.5Y5/1	黄灰	
259	SK7-SK8上層	陶器	甕		15世紀後半?	40.0	(8.3)		2%	密	良	2.5YR5/8	明赤褐	常滑焼
260	SK7-SK8上層	埴輪		円筒埴輪			(7.5)		2%	やや粗	やや不良	10YR7/6	にぶい黄橙	
261	SK7-SK8上層	瓦	平瓦							密	良	10YR6/2	灰黄褐	土師質
262	SK7-SK8上層	瓦	平瓦			12.2	12.5	2.0		密	良			121 生焼け
263	SK7-SK8上層	土製品	脚	土製支脚		(11.9)	6.0							
264	SK7-SK8上層	土製品	脚	土製支脚		14.4	6.5	6.4				5YR4/8	赤褐	
265	SK7-SK8上層	土製品	土錘	管状土錘		5.0				密	良	7.5YR7/4	にぶい橙	最大径1.2 孔径0.4
266	SK7-SK8上層	土製品	円盤	陶製円盤		4.4		1.4						孔径0.7～0.8 重さ28.3g 山茶碗の底部素材
267	SK7-SK8上層	石製品	石塔	一石五輪塔		11.5	8.1						淡灰褐	空風輪
268	SK7-SK8上層	石器	砥石			(6.6)	(3.5)	0.9			凝灰岩			重さ27.3g
269	SK7-SK8上層	石器	砥石			(7.1)	(8.7)				砂岩			
270	SK7-SK8上層	石器	砥石			(9.5)	(4.4)	4.0			凝灰岩			

第7章 若宮遺跡

1. 若宮遺跡の概要

若宮遺跡は低位段丘上に位置する遺跡で、北を境松遺跡、西を内田貝塚と接している。今回の調査は遺跡範囲の北東部で行われ、若宮遺跡第六次調査に相当する。若宮遺跡の遺跡範囲は、標高10～11mの最高位面と緩やかな傾斜面部、台地の下に広がる標高6m程度の低位段丘面からなる。第一次調査～第五次調査までの成果により、台地上面と低位段丘面で遺跡の性格が大きく異なることが判明している。以下にこれまでの若宮遺跡における調査の概略をまとめる。

昭和60～61年に実施された第一次調査の調査区は、遺跡範囲の南部に位置し、低位段丘面に相当する。明確な遺構が確認できるのは10世紀以降であり、遺跡の主体となる時期は13世紀後半、15～16世紀である。17世紀以降は牟呂地区全体に広く集落が形成されるが、縄文時代晩期の土器や、古墳時代後期の須恵器等の古い遺物はわずかであった。

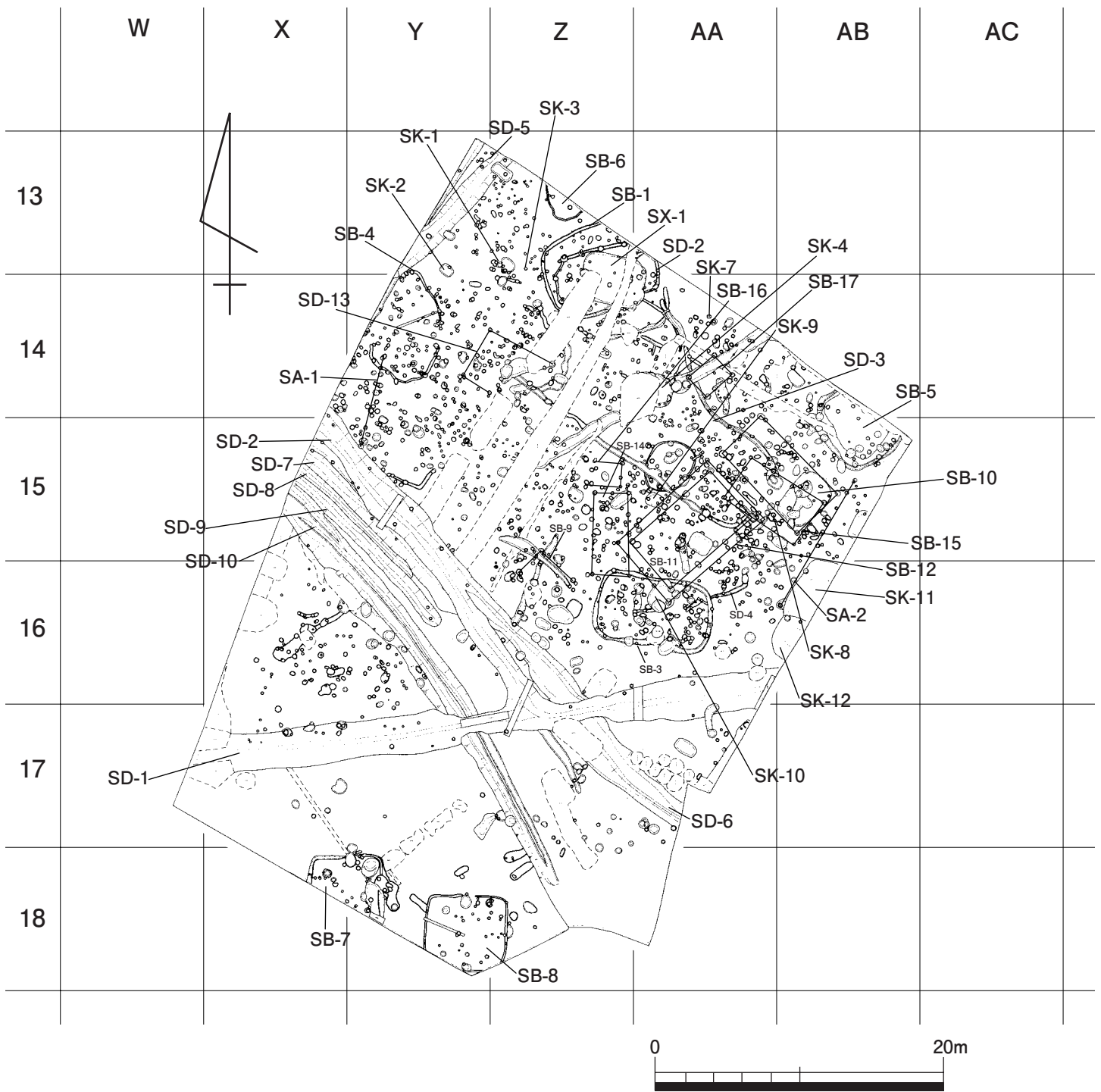
平成18年度に実施された第二次調査の調査区は、遺跡範囲の中央西端に位置し、台地上の端に相当する。隣接する内田貝塚では、古墳時代中期の埴輪窯である内田古窯が発見されたが、台地上には当該時期の住居等は見られなかった。新たな成果として、7世紀頃の竪穴建物などが発見され、台地上に古墳時代後期から終末期の集落が存在したことが判明した。また、時代が降ると、10世紀後葉頃の遺物を伴う廃棄土坑や祭祀関連と考えられる遺構が検出され、古代にも集落が存在した可能性が指摘された。中世以降の状況は第一次調査の状況と同様である。

平成19年度に実施された第三次調査の調査区は、第二次調査区の南東に接して位置し、台地上に相当する。主要時期は10世紀後葉で、掘立柱建物が11棟確認されている。第二次調査で指摘された古代の集落が存在したことが証明された。この他、戦国時代の掘立柱建物や、7世紀頃の遺物が少量確認されている。

平成20年度に実施された第四次調査は、8地点に調査区が設定されて調査が行われた。台地上では7世紀の掘立柱建物や10世紀の掘立柱建物群が確認され、当該期の遺構が南西向きの緩やかな斜面に沿って希薄になることも判明した。また、中世の土坑墓が発見され、北宋銭を伴う横臥屈葬人骨が出土した。

なお、第三次調査と第四次調査の調査範囲内は、昭和51年に牟呂町史編纂の一環で、小面積の確認発掘調査が行われている。未報告ながら円面硯や墨書土器などが出土しており、遺物は現在個人所蔵となっている。

以上の若宮遺跡の発掘成果から、今回の第六次調査においても、古代中世の集落跡が発見されると期待されて調査された。



第59図 若宮遺跡全体図 (1 / 400)

2. 遺構 (第60～71図)

若宮遺跡第六次調査では、弥生時代～近世の各時期の遺構が確認された。主体となる時期は、弥生時代中期末～後期初頭、6世紀末～7世紀、13世紀後半～14世紀の3時期である。弥生時代の遺構としては、竪穴建物6軒と調査区を分断する大溝が確認された。この大溝は、形態や付随する土橋等の遺構から環壕であると考えられる。竪穴建物は弥生時代中期～後期・長床式～寄道式期のものである。古墳時代の遺構は竪穴建物が2軒と掘立柱建物が1棟、大型土坑が1基である。古墳時代の竪穴建物は先に報告された集落址の広がりと考えられる。中世以降には、掘立柱建物が8棟確認される。13～14世紀に属すSB-10は大型の土坑を伴い、SH-11では柱穴に遺物を埋納しているなどの特殊な例が確認された。

A. 竪穴建物

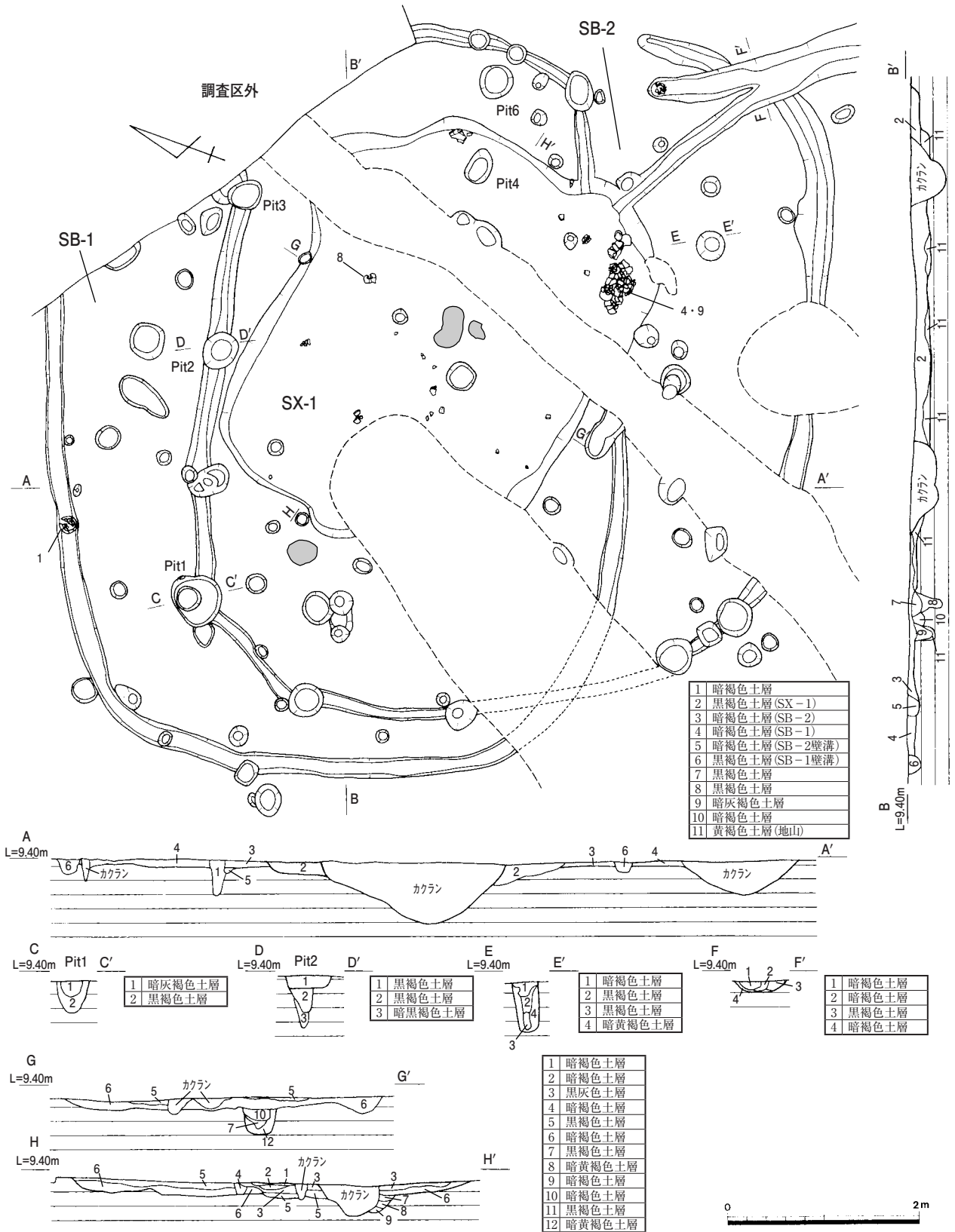
竪穴建物は合計8軒検出された。6軒が弥生時代、2軒が古墳時代終末期頃の建物である。弥生時代の建物は、後述するSD-1から台地の頂上に向かい展開し、反対側には確認されていない。台地上の標高が最も高い位置に、集落が形成されたと考えられる。時期は弥生時代中期末～後期である。古墳時代終末期の集落は、平成18年度以降の調査で確認された集落の広がりと考えられる。

SB-1・SB-2・SX-1 (第60図)

SB-1・SB-2は、Z・AA-13・14区から検出された竪穴建物である。主軸は北東-南西を向く。遺構の中央が溝上の攪乱を受けており、SB-1とSB-2の切り合い関係は不明確である。SB-1の柱穴がSB-2の壁溝に切られている点や、検出時の状況などから判断して、SB-1は重複するSB-2に先行するものであると思われる。また、SB-2の一部をSX-1が掘り窪めている。SX-1は、埋土の堆積状況からSB-2の使用が終わった段階で、廃棄土坑として転用されたと考えられる。

SB-1は、平面形が隅丸長方形を呈し、長軸約8m、短軸約6mを測る。南部に地床炉の痕跡が残る。柱穴は、直列するPit 1～Pit 3が直径40cm、深さ50cm程度で同規模であることから、4基あるいは6基の柱穴を有すると推定される。この内2基は消滅している。また、壁溝に隣接して検出されたPit 6も、他の柱穴と並ぶ状況が確認できる。SB-1の柱穴としては認めがたいが、掘立柱建物がSB-1の柱穴に重なって、建てられている可能性はある。しかし、いずれの土坑からも弥生土器以外の遺物が出土していない上、埋土の質も、古い時期の遺構に見られる特徴であったため、遺構の時期は弥生時代であると考えられる。SB-1の埋土は、深さが5cm程度と壁溝がわずかに残るのみである。壁溝は、残存部で幅20cm、深さ15cmを測り、断面形はU字形を呈する。遺物は、壁溝内から台付甕が出土している(第72図-1)。遺構の平面形及び、新旧関係、出土した遺物等から、弥生時代中期末・長床式期のものと考えられる。

SB-2は、長軸約7m、短軸約6.5mの隅丸方形で、SB-1と同じく、底面と壁溝がわずかに残



第60図 若宮遺跡遺構平面図1 (1/60)

るのみである。主軸は北東－南西を向くが、S B－1よりもわずかに東に振れている。柱穴は、4基と推定され、内2基が消滅している。柱穴の深さは50cm程である。S B－2からは、時期推定の可能な土器が出土していないが、S X－1から出土した遺物が、弥生時代後期前半に相当することから、弥生時代中期後葉・長床式期～後期前半・寄道式期の遺構であろう。

S X－1は、不定型の窪みである。底面の高さは一定ではなく、凹凸が著しい。所々でS B－2の床を掘り抜き、地山まで到達している状況である。また、埋土内に焼土が混入しており、S B－2の地床炉の破壊に伴い混入した可能性がある。出土遺物は台付甕・鉢などで、1ヶ所にまとまって出土している（第72図－3・4・9）。弥生時代後期・寄道式期。

S B－3（第61図）

Z・A A－16区で検出された竪穴建物である。主軸は東北東－西南西を向く。建物の西側は古墳時代の土坑（S K－4）により攪乱を受けており、北東部も近世以降に攪乱を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸約8.5m、短軸約5m、深さは10cmを測る。壁溝は深さ10cm、幅20cmを測り、やや歪んでいる。柱穴は4基確認され、いずれ円形の土坑で、深さは50～70cm程である。地床炉は西側と東側の2ヶ所で確認された。いずれも厚みは無く、地山の色が変色して、硬化しているような状況であった。埋土は2層に分かれ、上層を黒褐色土層、下層を暗黄褐色土層に分けられる。下層は、一定に広がる状況ではなく、層厚も薄い。機能面としての床面であり、貼床等の人工的なものではないと考えられる。また、上下層及び壁溝内の埋土には大量の炭化物が混入しており、焼失住居であった可能性がある。出土遺物は壺の胴部片、台付甕等がある。弥生時代中期後葉・長床式期。

S B－4（第62図）

Y－14区で検出された竪穴建物である。主軸は北西－南東を向く。全体が近代の土地整備により掘削を受けており、わずかに壁溝の底部が残るのみである。長軸約8m、短軸5.5mを測り、長楕円形を呈するが、壁溝も部分的にしか残っておらず、正確な形態は不明である。また、柱穴も確認できなかった。内部からは弥生土器と思われる小破片が出土しているが、中世以降の遺物も混入していることから、遺物は原位置を保っていないと考えられる。弥生時代中期後葉・長床式期～後期前半・寄道式期か。

S B－5（第62図）

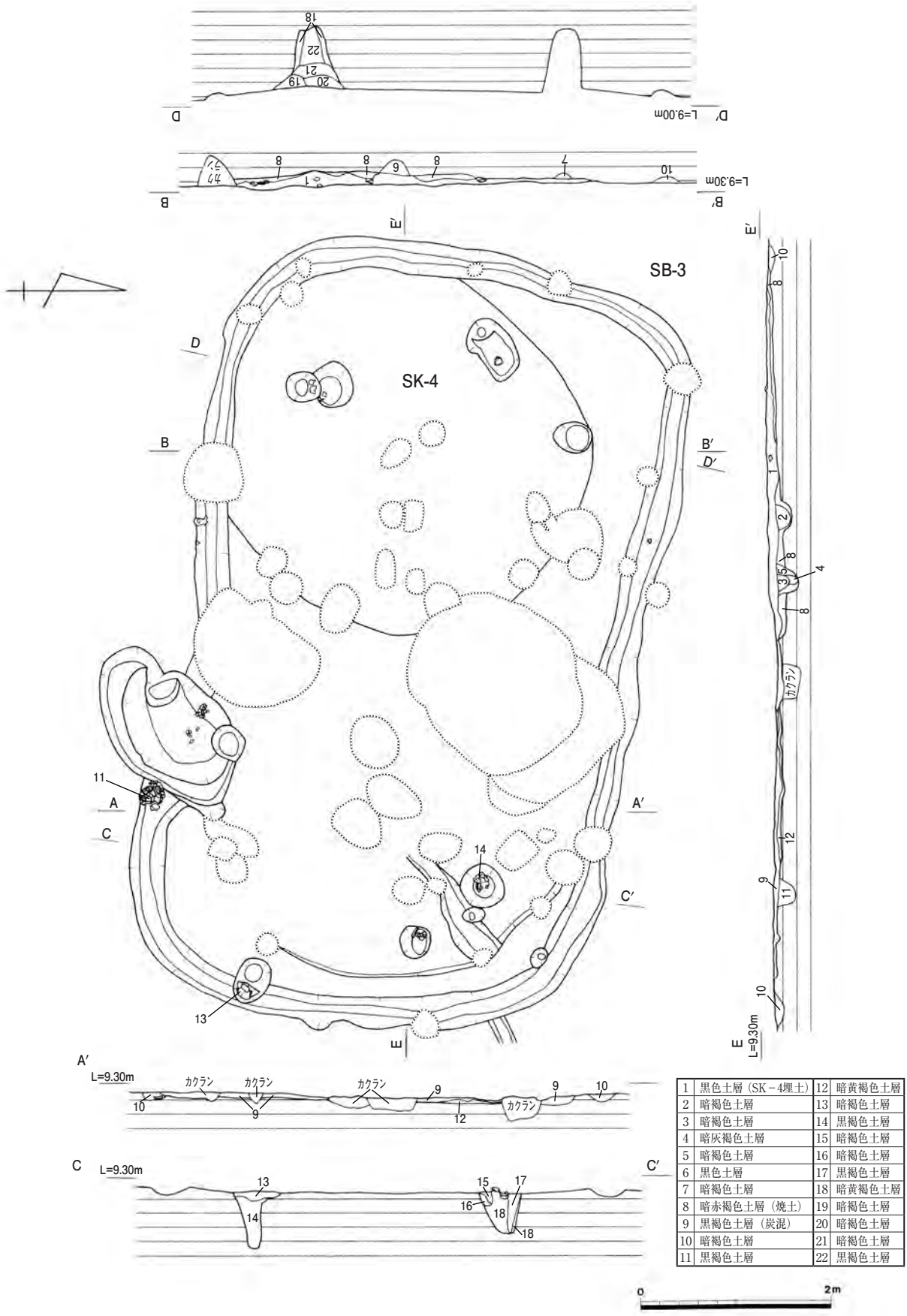
A B－13・14区で検出された竪穴建物である。主軸は南－北を向くと推定される。遺構の北半分は道路建設により消滅している。残存部より隅丸方形を呈すると考えられるが、やや不定形で、中心に向かって皿状に窪む。長径は約5.5mを測る。壁溝の幅や深さは他の住居と異なり一定ではない。地床炉と主柱穴は確認できなかった。出土遺物には、広口壺や台付甕などがある。弥生時代後期前半・寄道式期である。

S B－6（第62図）

Z－13区で検出された竪穴建物である。大半が調査区外に位置しており、検出された部分は壁溝の一部と柱穴1基のみである。壁溝は細く幅、深さ共に10cm程度である。柱穴と思われる土坑（Pit 1）からは、弥生土器の小破片が出土している。弥生時代中期後葉・長床式期～後期前半・寄道式期か。

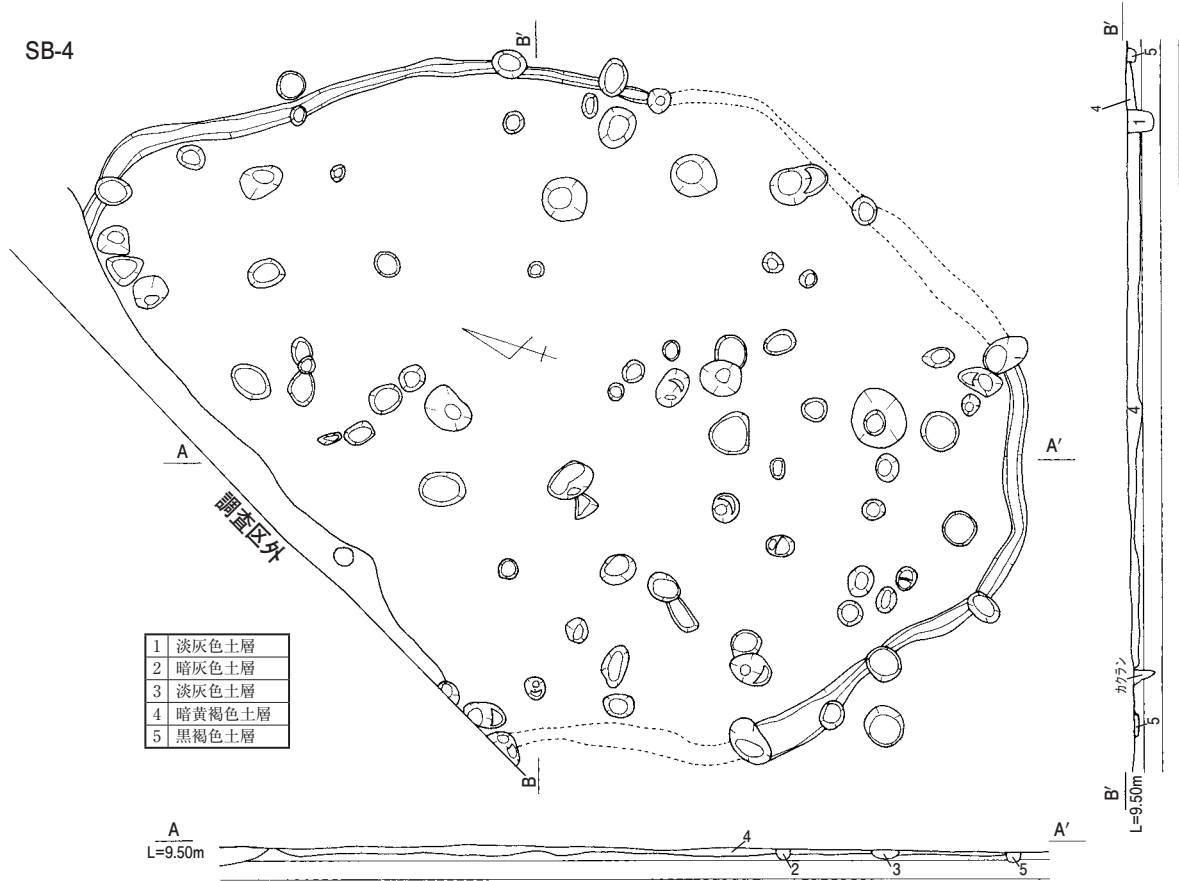
S B－7（第63図）

X・Y－18区で検出された竪穴建物である。主軸は南－北を向く。東部は現代の攪乱により消滅して

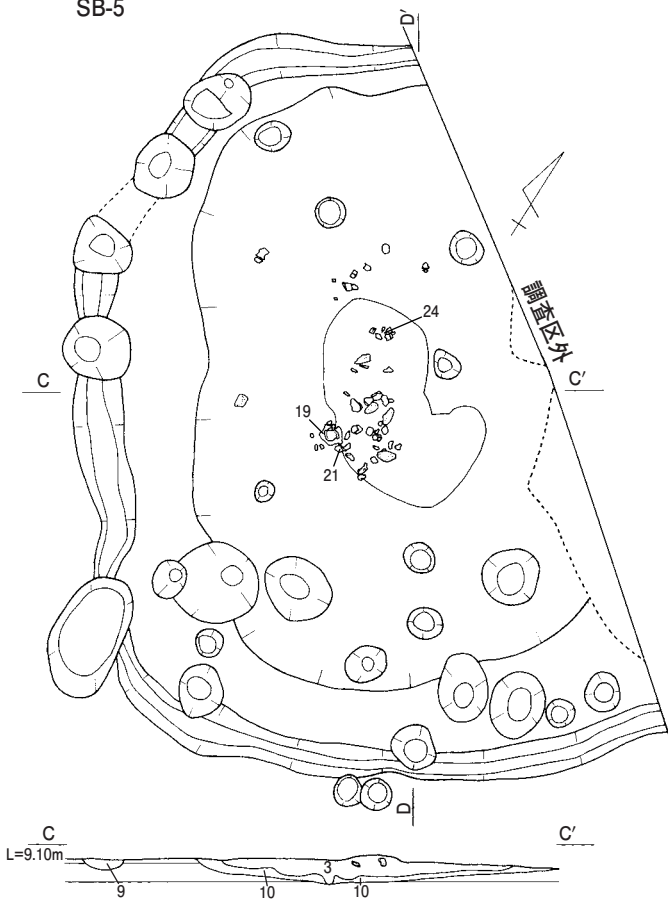


第61図 若宮遺跡遺構平面図2 (1/60)

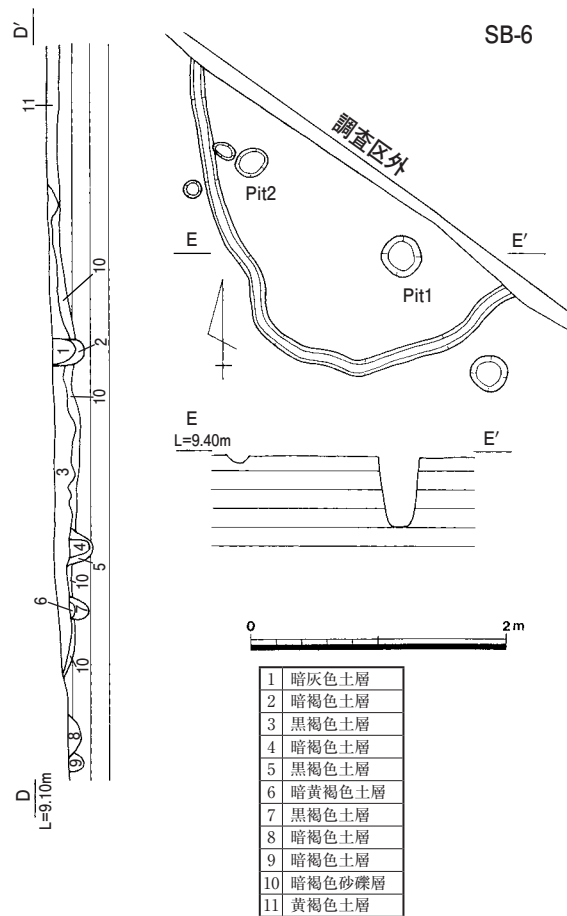
SB-4



SB-5



SB-6



第62図 若宮遺跡遺構平面図3 (1/60)

いる。平面形は一辺5mの隅丸方形を呈し、深さは20cmを測る。北側中央部に竈、北東部に貯蔵穴を伴っている。竈は主体部が削平されており、土坑状に窪んだ底面だけが残存している。平面形は長径1m、短軸70cmの卵形を呈している。貯蔵穴は直径1.5mの円形の土坑で、深さは40cmを測る。埋土には炭化物や焼土などが多く混入していた。これらは竈側に近づく程多く見られ、土器を覆うように堆積していたことから、隣接する竈の一部が埋没過程で混入したと考えられる。建物内部からは須恵器の高坏や長胴甕等が出土し、貯蔵穴からも須恵器の高坏や長胴甕が出土している。6世紀末～7世紀初頭。

S B - 8 (第63図)

Y・Z-18区で検出された竪穴建物である。主軸は北-南を向く。平面形は一辺が5.5mの隅丸方形で、深さは20cm未満である。北側中央部には竈が配置されるが、S B - 7と同じく、現代の削平により上部は消滅している。また、竈付近では、焼土が建物内部へ向い拡散する状況が確認された。柱穴は4基で、Pit 1のみ平面形が一段掘り窪むような形態である。また西側の2基は少々浅い。Pit 3からは、長胴甕が据えられたような状況で出土した。他の出土遺物には、須恵器の坏身・坏蓋・長胴甕等がある。6世紀末～7世紀初頭で、隣接するS B - 7よりも若干新しいか。

B. 掘立柱建物

調査区内からは無数の土坑が検出されたが、柱穴痕の検出状況や、土坑の配列から確実に掘立柱建物であるとされるものは9棟である。時期は大きく7世紀、13～14世紀、近世に分けられる。

S B - 9 (第64図)

Z-15・16区で検出された掘立柱建物である。長軸は北西-南東を向く。桁行2間以上、梁間1間以上の側柱建物で、残存規模は桁行2m、梁行3mを測る。柱間は桁行が1.5mで一定である。柱穴は、平面形が円形を呈す。深さはいずれも40cm前後である。柱穴から須恵器の小破片が出土している。7世紀か。

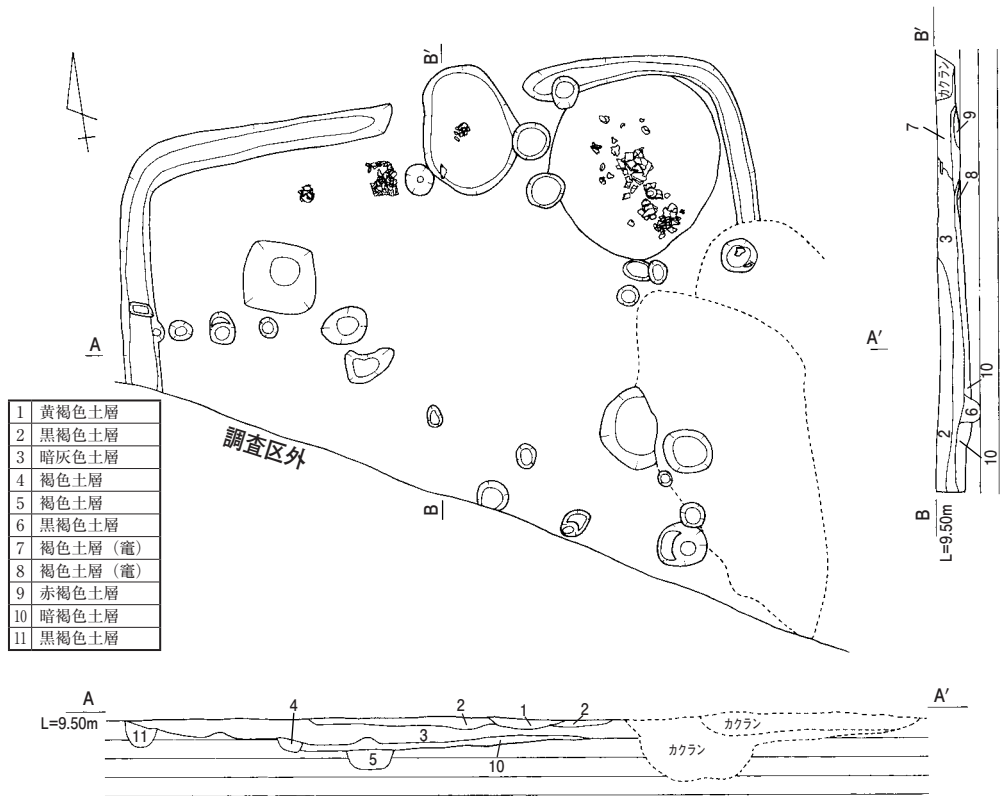
S B - 10 (第64図)

S B - 10は、AA・AB-14・15区で検出された掘立柱建物である。長軸は西北西-東南東を向く。桁行3間、梁間2間の側柱建物で、大型の土坑を伴う。規模は桁行4m、梁行7.5mを測り、柱間は2.2～2.5mである。柱穴は平面形が円形を呈し、深さはいずれも60cm前後である。柱穴内からは山茶碗の破片が出土している。土坑は建物東部の桁行1間、梁間2間内に収まり、平面形が楕円形、断面が皿形を呈す。深さは15～20cmを測る。埋土はしまりが強く、集石状に拳大の垂円礫や垂角礫が混入する。また山茶碗や、羽釜等の破片が出土している。13世紀末～14世紀頃か。

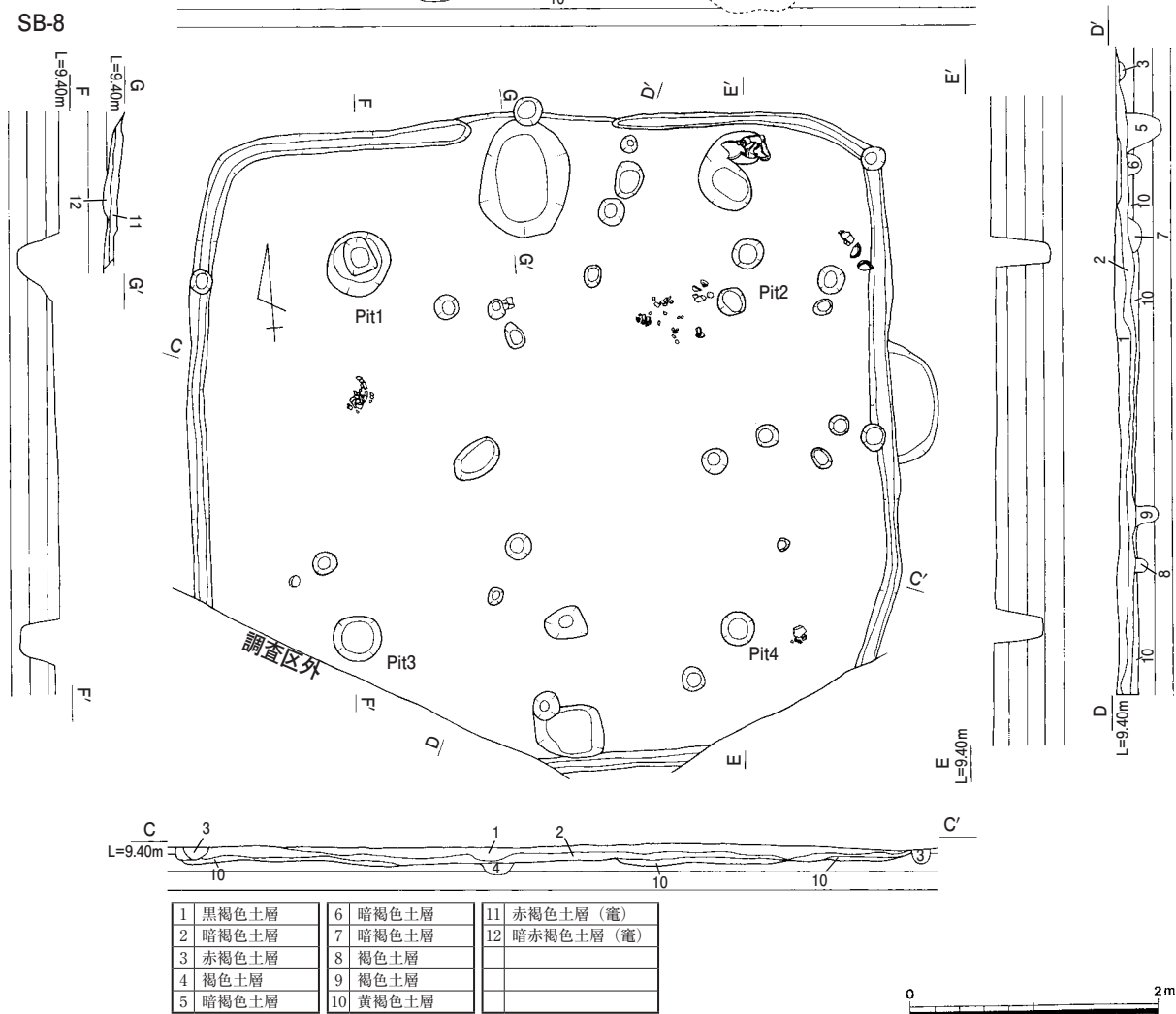
S B - 11 (第65図)

Z・AA-15・16区で検出された掘立柱建物である。長軸は北東-南西を向く。桁行3間、梁行1間の側柱建物で、規模は桁行7m、梁行4mを測る。柱間は桁行2.4m、梁行2mである。両側桁行2間目の柱穴を結ぶ中央に、規模が小さい土坑が存在するため、総柱建物あるいは間仕切りの可能性も考えられる。外側柱はいずれも深さが70cm前後を測る。Pit 1からは、土師器の碗が3点出土した。出土状況は重なった状態ではなく、1点毎に土で覆い隠す埋納的な状況が認められた。その他の遺物は、羽

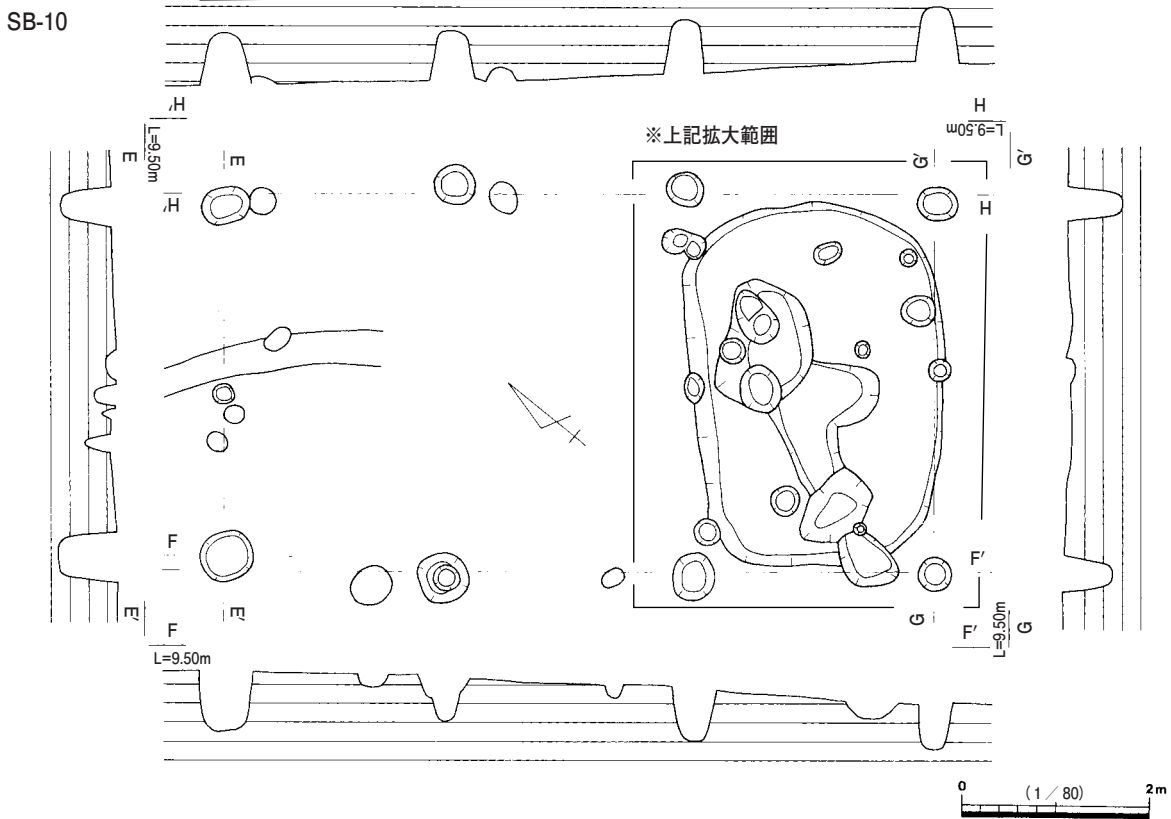
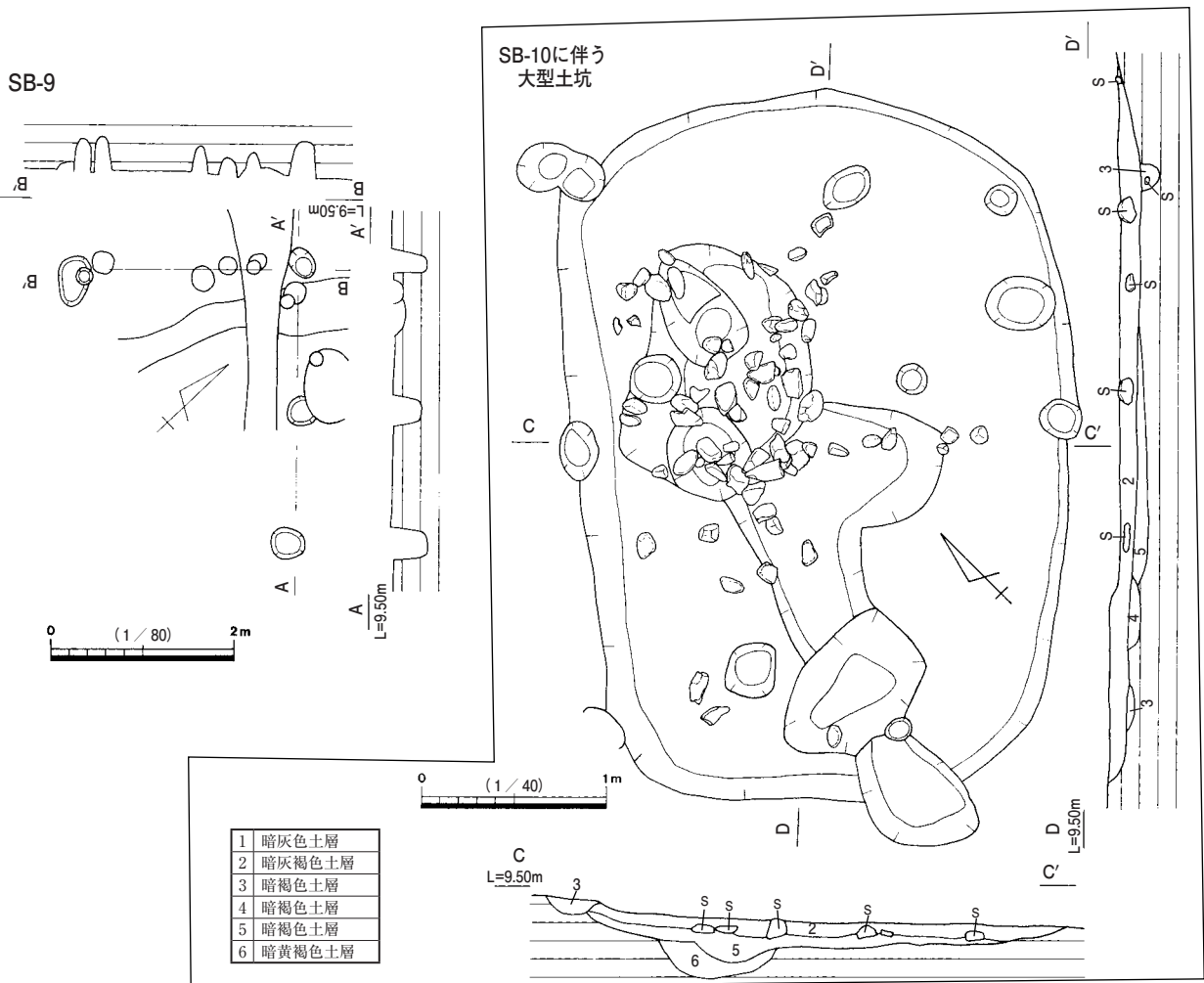
SB-7



SB-8

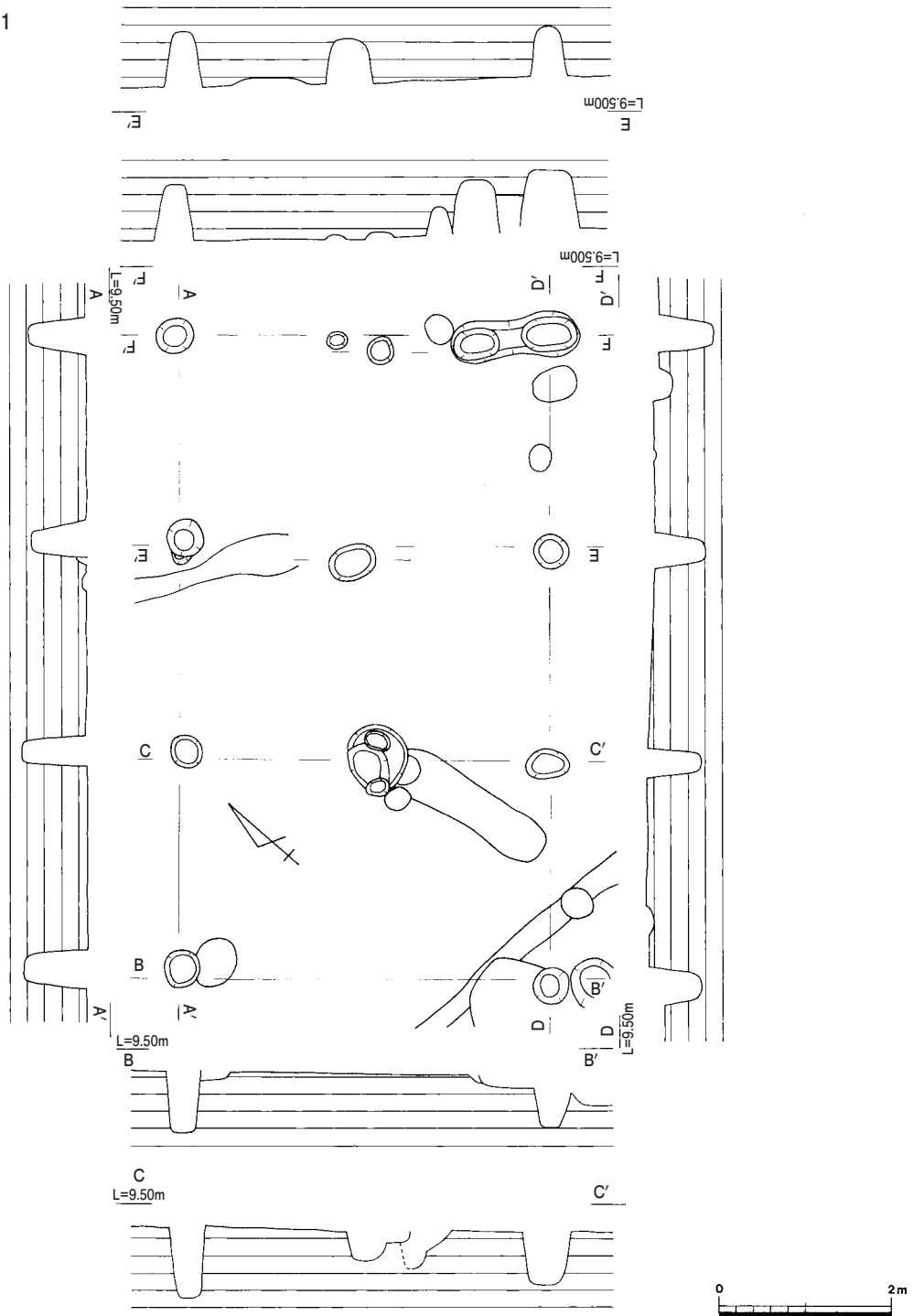


第63図 若宮遺跡遺構平面図4 (1/60)



第64図 若宮遺跡遺構平面図5 (1/40・1/80)

SK-11



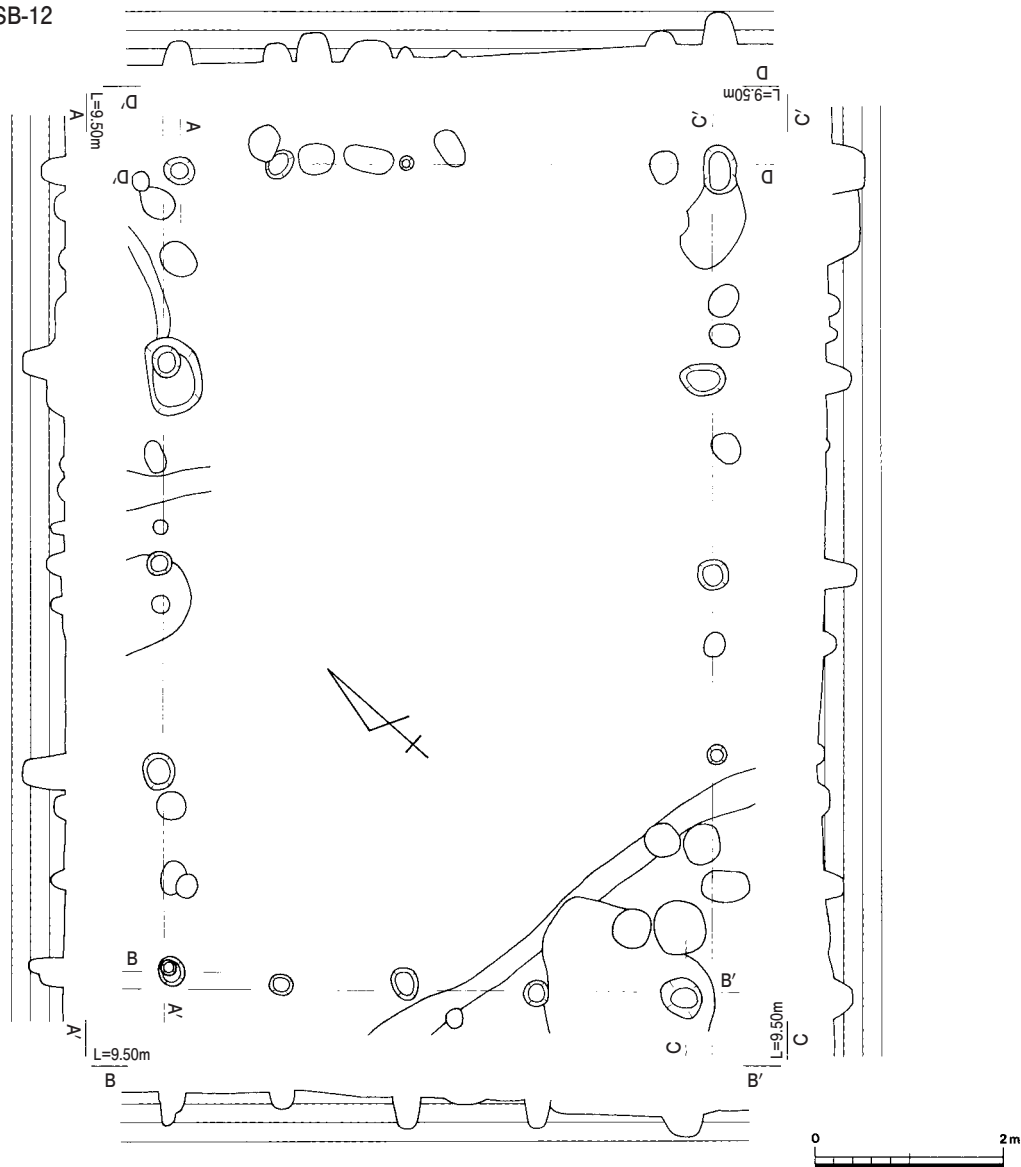
第65図 若宮遺跡遺構平面図6 (1/80)

釜の口縁部や土師器の小破片などが出土している。13世紀末～14世紀頃。

S B - 12 (第66図)

S B - 12は、Z・A A - 15・16区で検出された掘立柱建物である。長軸は北東 - 南西を向く。桁行4間、梁行4間の側柱建物で、規模は桁行8.5m、梁行5.5mを測る。柱間は桁行1.8m、梁行1.5mである。柱穴の平面形は直径20~30cmと小さく、深さも50cmでほぼ一定である。遺物は土師器の羽釜や

SB-12



第66図 若宮遺跡遺構平面図7 (1/80)

山茶碗等の小破片が出土している（第75図-47・48）。SB-11を囲うように位置し、柱穴の規模が小さくなることや、出土遺物の時期が同じことなどから、SB-11の外周柱穴列の可能性が大いにある。しかしながら、長軸方向がわずかに北向きに振れることから、別の遺構として報告する。13世紀末～14世紀頃。

SB-13 (第67図)

Y・Z-14区で検出された掘立柱建物である。長軸は北西-南東を向く。桁行2間以上、梁行2間以上の側柱建物で、残存規模は桁行4m、梁行4.8mを測る。柱間は2～2.2mである。柱穴の平面形は円形で、深さは約40cm前後である。遺物は土師器片が出土している。時期不明。

SB-14 (第67図)

Z-15・16区で検出された掘立柱建物である。長軸は北-南を向く。桁行4間、梁行2間の側柱建

物で、規模は桁行5.6m、梁行2.6mを測る。柱間は約1.3mで一定で、柱穴の深さは20～40cmでやや不揃いである。遺物は土師器の鍋の破片が出土している。近世か。

S B - 15 (第67図)

A A・A B - 15区で検出された掘立柱建物である。長軸は北西 - 南東を向く。桁行4間、梁行2間の側柱建物で、規模は桁行6m、梁行3.4mを測る。柱間は約1.8mで一定であるが、柱穴の規模と深さは、やや不揃いである。遺物は土師器の皿の破片等が出土している。近世か。

S B - 16 (第67図)

A A・A B - 15区で検出された掘立柱建物である。長軸は東 - 西を向く。桁行3間以上、梁行1間以上の側柱建物で、残存規模は桁行3.8m、梁行1.6mを測る。柱間は約1.8mで一定であるが、柱穴の深さは30～50cmとやや不揃いである。遺物は出土しておらず、時期不明。

S B - 17 (第67図)

A A - 14区で検出された掘立柱建物である。柱間が2.2mの正方形を呈する。柱穴の規模は一定で、検出時には4基すべてで柱穴痕が確認されている。周囲に同規模の柱穴は確認できなかったため、4本柱の小規模建物であると考えられる。

C. 柵列

柱穴が直列するが、方形に廻らないものを柵列として報告する。3ヶ所で確認された。

S A - 1 (第68図)

Y - 14・15区で検出された柵列で、6本の柱穴が約1.2m間隔で配置される。軸は南 - 北を向く。柱穴の深さは約50cmで、規模ともに一定である。出土遺物は弥生土器片や土師器片がわずかに出土するが、いずれも摩滅しており、二次堆積であると考えられる。

S A - 2 (第68図)

A B - 14・15区で検出された柵列で、7本の柱穴が約2m間隔で配置される。軸は北東 - 南西を向く。柱穴の深さは60cm程であるが、北に行くほど浅くなる。土師器の鍋の破片が出土している。S B - 15の短軸と同方向に並列することから、建物に伴う柵の可能性はある。近世か。

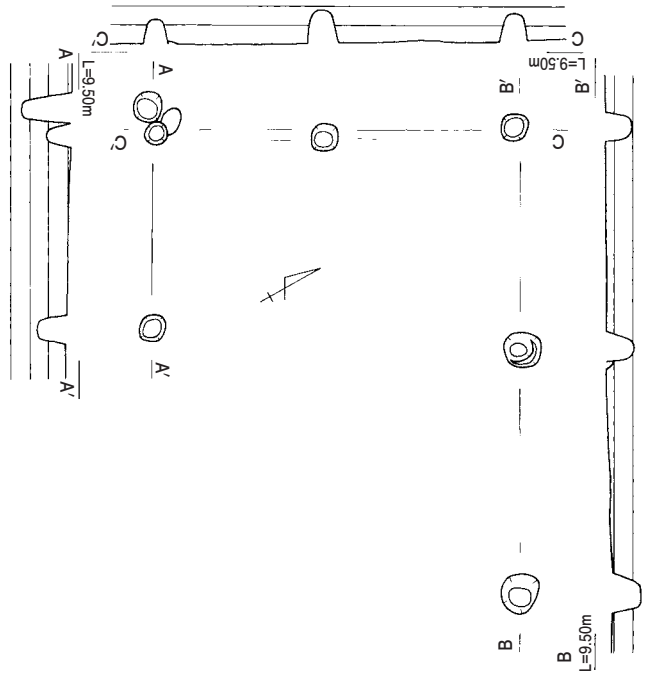
S A - 3 (第68図)

A A - 14・15区で検出された柵列である。1.4mごとに3つの柱穴が並び、東の柱穴のみ1.8mと離れている。軸は北東 - 南西を向く。深さは一定で、いずれも柱穴痕が確認できたため柵列と認定したが、遺物の出土は無い。時期不明。

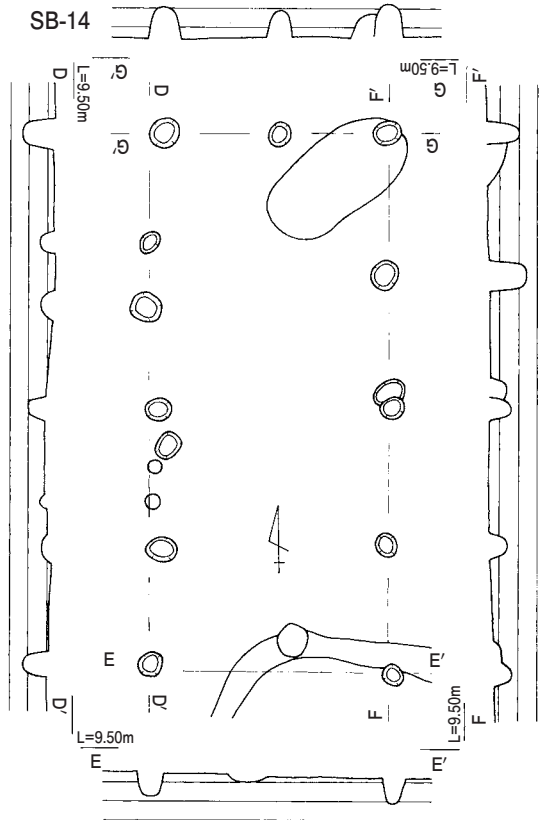
D. 溝

溝は9本確認され、この内4本が弥生時代の溝である。特にS D - 1及びS D - 2は環壕で、台地上を東西に分断し、更に調査区を中央で分岐する。また、土橋状の付随遺構も検出したため、一括して報告する。S D - 3・S D - 4は細長い溝で、竪穴建物と同時期と思われる遺物を包含するが、建物内から外に向かって延びる構造で、建物に付随するかは不明である。

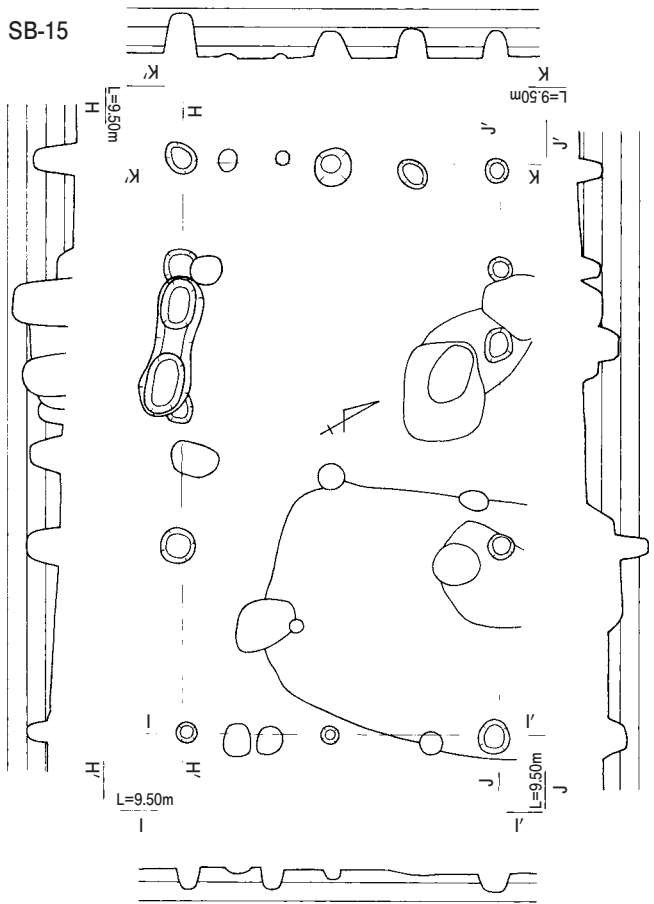
SB-13



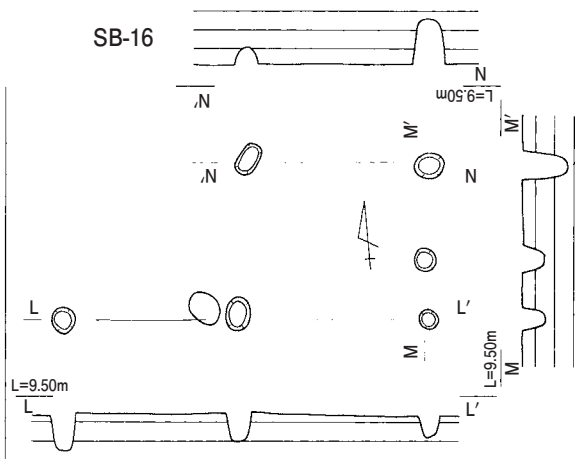
SB-14



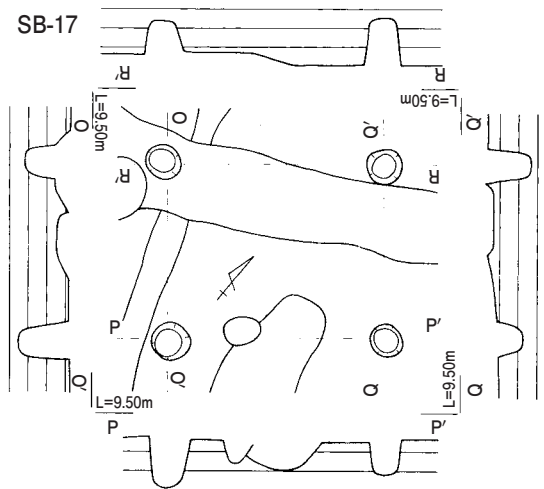
SB-15



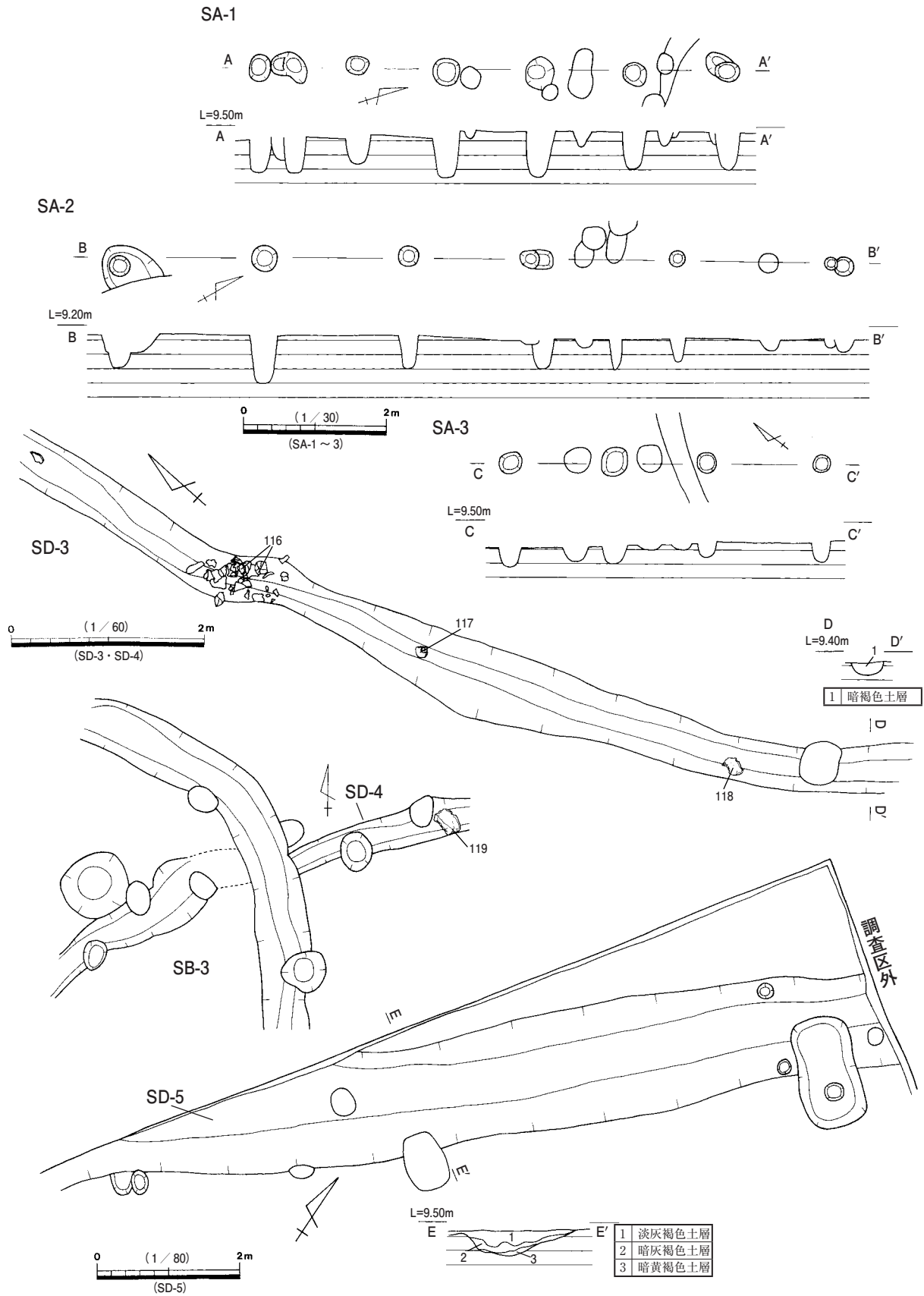
SB-16



SB-17



第67図 若宮遺跡遺構平面図8 (1/80)



第68図 若宮遺跡遺構平面図9 (1/30・1/60・1/80)

SD-1・SD-2・土橋状遺構（第69・70図）

SD-1・2は調査区の東西を横断する大溝である。Z-16・17区の境で分岐・屈折する。便宜上SD-1とSD-2の2本に分けて説明する。なお、分岐点の座標は $X = -137.560$ 、 $Y = 17.674$ である。

SD-1はX・Y・Z-17区で検出された溝で、調査区西端より分岐点まで16m程を測る。検出面での幅は2.4~2.6m程で、下場の幅は20cm程であった。深さは 130 ± 10 cm程である。断面はおおむね逆台形状を呈すが、下場から直立的に立ち上がり、50~60cm程の高さで幅が急激に広がる。

SD-2はX-15、Y-15・16、Z-16・17、AA-16・17にまたがって検出された溝で、分岐点でSD-1に対して62~64°屈曲する。調査区東端から分岐点までが17m程、分岐点から北西端部までが20m程を測る。検出面での幅は2.2~2.4m程で、下場の幅は20~30cmである。深さは検出面により異なるが、 170 ± 20 cm程である。断面はSD-1と異なりU字状で、下場から直線的に広がりを見せる。上場の幅はSD-1と同じである。地山は上部程、粘性に富む砂質土層で、下部程砂利状に粗くなる。なお、調査時は環壕も調査範囲で区切られていたために、雨天時には内部に水が満杯まで溜まる状況で、水の影響により環壕内の側面が一部崩壊してしまった。しかしながら、検出された環壕の側面に大きな崩落の痕跡などは見当たらないことから、利用段階では環壕内に水が溜まるような状況ではなかったと考えられる。

SD-1及びSD-2の埋土は下記の8層に大きく分けられる。一方方向から埋土が流れ込んだような状況は確認できず、複数回の掘り直しや、溝の壁面が崩落した痕跡が確認できる。

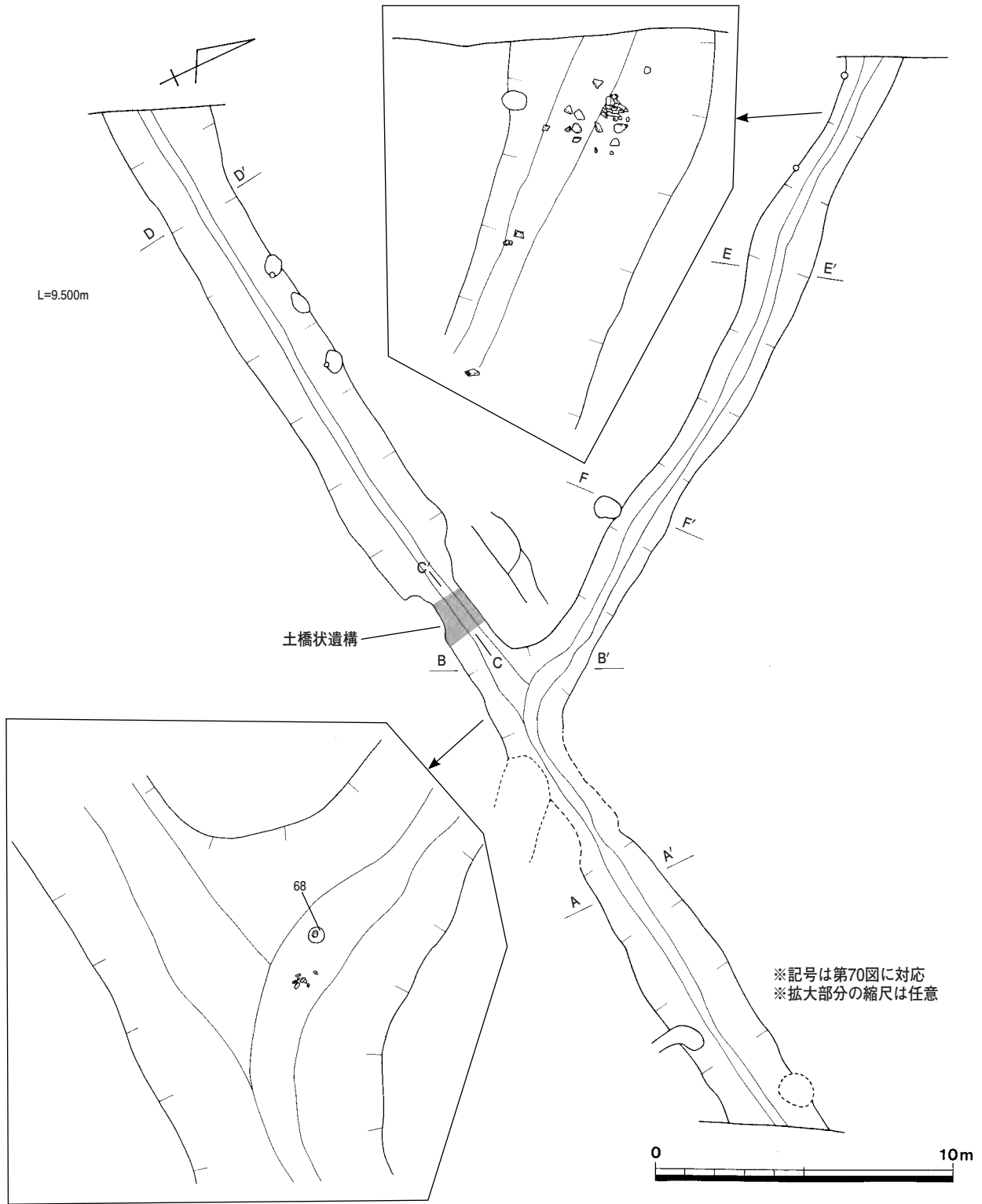
- 第1層 黒褐色土層（7.5YR3/2） 細かい砂粒が主体で、5mm大の小礫が混じる砂質土層である。層厚は検出面から10cm前後で、中世以降の遺物が多く含まれる。出土遺物実測図の上層に相当する。
- 第2層 5層に細分される。次の2-1層・2-2層は土器の埋納時に意図的に埋めた土であり、土器は含まない。環壕が古墳時代以降に溝として再利用された際の形状に堆積しているため、U字状に堆積している。層厚は最も厚いところで60cmを超える。遺物が最も多く出土する層であり、古墳時代から古代にかけての遺物が出土する。2-2層までが出土遺物実測図の中層に、2-3層以下は下層に相当する。
- 2-1層 黒褐色土層（10YR2/2） 弱い粘性の砂質土層で、1~5cm大の花崗岩や砂岩の小礫、赤褐色の小土塊や炭化物などがまばらに混じる。
- 2-2層 黒褐色土層（7.5YR3/2） 粘性のない砂質土層で、拇指頭大~5cm程の礫が混入する。しまりが強く、土器を包含する。
- 2-3層 褐色土層（7.5YR4/4） 1~5cmの礫がまばらに混入する。粘性があり、地山に似る。褐色の土層に黒色土が斑に混入する。
- 2-4層 黒褐色土層（7.5YR3/2） 拇指頭大~5cm程の礫が混入する。2-1層よりも粒子の粗い砂質土層。
- 2-5層 暗赤褐色土層（5YR3/2） 粒子の粗い砂質土層で、3cm大の小礫が多く混入する。
- 第3層 暗褐色土層（7.5YR3/4） 地点によって残存状況が異なる。層厚は最大30cm程である。粒

- 子の粗い砂質土層。粘性は無く、しまりが強い。1～5cmの礫が多く混入する。
- 第4層 地点によって、残存状況が異なる。層厚は10～20cm程で、2層に細分される。
- 4-1層 暗褐色土層（7.5YR3/4） 粘性の無い砂質土層。3～10cm程の礫が混入する。
- 4-2層 にぶい黄褐色土層（5YR4/4） 4-1層とは色調以外に差異はなく、大きめの礫が混入し、粘性も無い。
- 第5層 地点によって、残存状況が異なる。壁面の崩落による埋土であるため地山に似る。大きく2層に細分できる。
- 5-1層 暗褐色砂礫層（7.5YR3/4） 粒子の粗い砂質土に地山の小礫が多く混入する。粘性は無く、礫は3～5cm程で砂利層に近い。しまりは無い。弥生土器が出土する。
- 5-2層 褐色土層（7.5YR4/4） 粒子の細かい砂質土層に地山の小礫が混入する。5-1層と比較すると、礫の混入が少ない。
- 第6層 地点によって残存状況が異なる。最下層に堆積する。3層に細分できるが、壁面の崩落などによる地点別の堆積と考えられ、地山に似る。6-2層からは摩滅した土器片が出土している。
- 6-1層 褐色土層（7.5YR3/4） 粘性の無い砂質土層、1～3cm程の地山の小礫が混入する。
- 6-2層 明褐色土層（7.5YR5/8） 粒子の粗い砂質土層で、礫の混入は少ない。海砂に似る。
- 6-3層 黒褐色砂礫層（7.5YR3/2） 地山の小礫が主体の砂礫層である。壁面の崩落による堆積である。
- 第7層 暗赤褐色土層（5YR5/8） 後述する土橋状遺構に利用された埋土である。地山の土を利用して築かれたため、一見での判断は困難である。分岐点の断面で第6層の下に位置した第7層が、緩やかに弯曲しながら検出面まで立ち上がる。土器は出土しなかった。
- 第8層 暗褐色土層（7.5YR3/4） 後述する土橋状遺構の構築土である。第7層とは異なり、ほとんど礫を含まない。周囲の地山が同標高では砂礫層であるため、人工的な堆積と判断した。

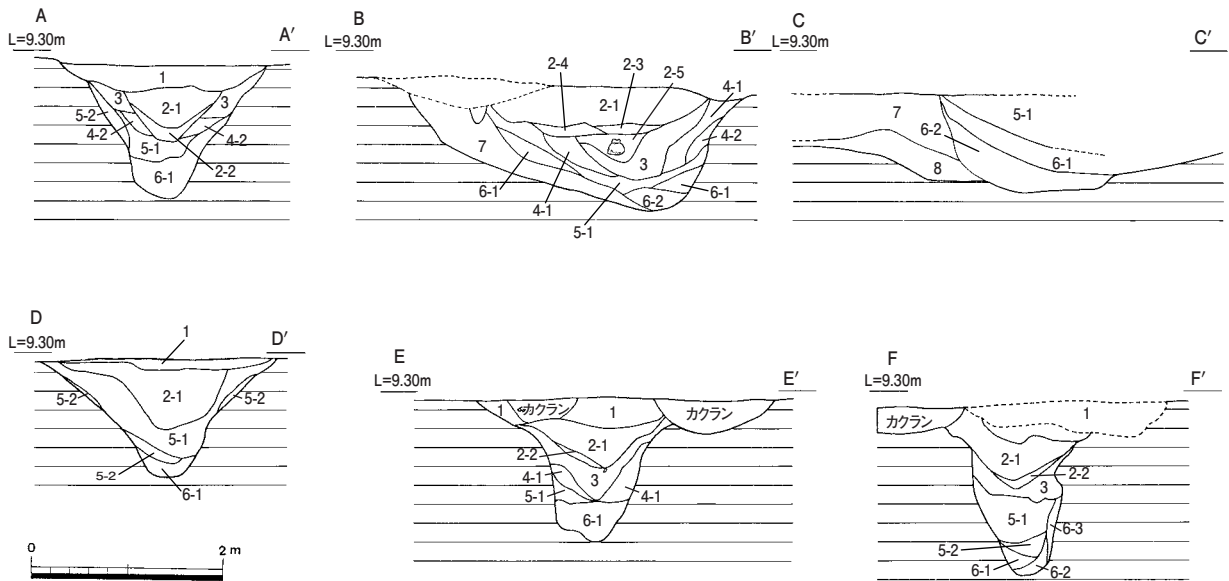
以上に挙げた埋土の堆積状況から環壕の造作過程は、以下の順であったと考えられる。

- ① 集落の外を廻る溝（SD-1）の掘削。
- ② 土橋状遺構の造成。
- ③ 集落の内を隔てる溝（SD-2）の掘削、及びSD-1の掘り直し。
- ④ 古墳時代初頭に溝として再利用。

SD-1とSD-2の、断面形状や標高値に差が生じているのは、掘り直しを受けた結果によるものであると考えられる。断面形状はSD-1が調査区西端から分岐点までが逆台形、分岐点から東がY字形、分岐点から北方向に延びるSD-2はU字形を呈している。東西の直線方向に逆台形の断面を持つSD-1が掘削され、次いでU字形の断面を持つSD-2が掘削される段階でSD-1の再掘削が行われたとすると、逆台形の下場を、新たに掘削した断面U字形の環壕の高さに合わせたと考えられるのである。このため、SD-1が分岐点から東側だけで、下場の標高地が40cmも下がっているものと思われる。また、土橋状遺構はSD-1西側部の下場と同じ高さから埋められていることから、SD-2掘



第69図 若宮遺跡遺構平面図10 (1/200)



第70図 若宮遺跡遺構断面図 (1/80)

削段階で土橋状遺構はすでに存在したか、あるいはSD-2掘削時の排土で土橋状遺構が築かれたと考えられる。

土橋状遺構 (第69・70図)

土橋状遺構はSD-1・2の分岐点からSD-1にかけて、盛土された遺構である。なお調査の初段階では認識できず、分岐点側の一部を破壊してしまった。そのため平面図は土層断面から推定復元したものである。規模は残残部で1.5×1.5m、深さは80cm程である。ただし、埋土はSD-1の幅に充填していたと考えられるため、上部はSD-1の上場幅2.2~2.4mまでは広がると考えられる。埋土は2層に分けられるが、いずれも地山と酷似している。

SD-3 (第68図)

AA-13・14区で検出された溝である。幅40~50cm、断面U字状で深さ20cmを測る。SB-2の内部から14m程延びる。SB-2を壊して作られている。遺物は台付甕や壺の破片等が出土している(第78図-106~108)。弥生時代後期。

SD-4 (第68図)

AA-16区で検出された溝である。幅40cm、断面U字状で深さ20cmを測る。SB-3の内部から5m程延びる。SB-3との新旧関係は不明である。遺物は弥生時代中期末の壺が出土している(第78図-109)。SD-3と類似点が多く、同一遺構の可能性はある。

SD-5 (第68図)

Y-13・14区で検出された溝である。幅約1.6m、断面は皿形を呈し、深さ30~40cmを測る。出土遺物は土師器の鍋や皿、陶器の甕などが出土している(第78図-110~116)。16世紀頃か。

SD-6 (第59図)

X・Y・Z・AA・AB-15・16・17区から検出された溝である。幅約1m、断面皿状で深さ40cmを測る。SD-2、SD-7と交差し、調査区を蛇行しながら横断している。遺物は近世の土師器の

皿や陶器などが出土している。近世の区画溝か。

SD-7 (第59図)

X・Y・Z X・Y・Z・A A・A B-15・16・17区から検出された溝である。幅1.2~1.5m、断面皿状で深さ30cmを測る。SD-2、SD-5と交差し、調査区を蛇行しながら横断している。遺物は出土していないが、SD-6を壊しているため、これより新しい時期の遺構であろう。

SD-8 (第59図)

X・Y-15・16区で検出された溝である。調査区西端から12m程直進して消滅する。幅40cm、断面が浅い皿状を呈し、深さは40cmを測る。遺物は出土していないが、18世紀以降の遺構か。

SD-9 (第59図)

X・Y・Z-15・16・17で検出された溝である。幅40cm、断面は皿形で、深さ30cmである。埋土には地山のブロックや破砕貝が入る。また、上層は破砕貝や地山ブロックが混じる混貝土層で、下層は砂質土層である。遺物は出土していないが、並列するSD-8と同じく、18世紀以降か。

SD-10 (第59図)

X・Y・Z-15・16・17で検出された溝である。SD-9と並列し、規模も同じであることから同時併存した可能性がある。幅60cm、断面は皿形で、深さ40cmである。埋土にはSD-8の上層と同じ破砕貝が混入する混貝土層である。遺物は近世の瓦や陶器の片口鉢、筒形鎧茶碗などが出土している。18世紀。

E. 土坑

土坑は調査区内から多数検出された。この中で主要なものを報告する。遺構の帰属時期は多様である。

SK-1 (第71図)

Z-13区で検出された皿状の浅い土坑である。直径50cm、深さは10cm程である。縄文後期中葉頃の縄文土器が1点出土しているが、混入品であろう。

SK-2 (第71図)

Y-13区で検出された隅丸長方形の土坑である。直径100cm、短径70cm程で、深さは約20cmである。弥生土器の壺と高杯の破片が出土している。

SK-3 (第71図)

Y-13区で検出された土坑である。直径20cm、深さ10cm程の小型の土坑である。弥生土器の壺の破片が出土している。

SK-4 (第71図)

AA-14で検出された不定形の土坑である。弥生土器と思われる小破片を包含するが、現代の攪乱で大半を削られ、原形は不明である。規模は長軸3m、短軸1mで、深さは20cm程である。遺物はすべて図化に耐えない小破片であった。

SK-5 (第71図)

SB-3の西側を壊して作られた大型の円形土坑である。浅い皿形で規模は直径4.3m、深さは15cm程である。土坑内には垂円礫が集石状に混入していた。埋土は焼土や炭化物を含む黒褐色土層で、須恵器や土師器を包含する。7世紀頃か。

SK-6 (第71図)

Z-17区で検出された土坑である。上部を削平されており、遺構検出面で土師器の甕の胴部が皿状に残存している状態で出土した。遺構の規模は、残存部で長径40cm、深さ15cm程である。

SK-7 (第71図)

AA-14区で検出された土坑である。直径30cm、深さ20cm程で、陶器の壺が正置された状況で出土した。10世紀頃。

SK-8 (第71図)

AA-15区で検出された楕円形の土坑である。直径60cm、短径30cm程で、深さは10cm程である。北宋銭が2枚出土したが、内1枚は細かく破損しており、図化できなかった。11世紀後半～12世紀。

SK-9 (第71図)

AA-15区で検出された遺構で浅い皿形の遺構である。長軸は120cm程で、深さは5cm前後である。SB-12の柱穴を壊して作られており、SB-12から出土した土器の一部が埋土内に混入していた。その他の遺物としては土師器の皿が出土している。近世。

SK-10 (第71図)

AA-16区で検出された円形の土坑である。SB-3と重複し、破壊している。直径は2m程で、深さは15～20cmである。埋土は混土貝層である。遺物は出土していない。近世か。

SK-11 (第71図)

AB-16区で検出された大型の土坑である。直径は4.5m、断面が皿状を呈し、深さは40cm程である。遺物は出土せず、時期は不明であるが、堆積土から判断して、近世か。

SK-12 (第71図)

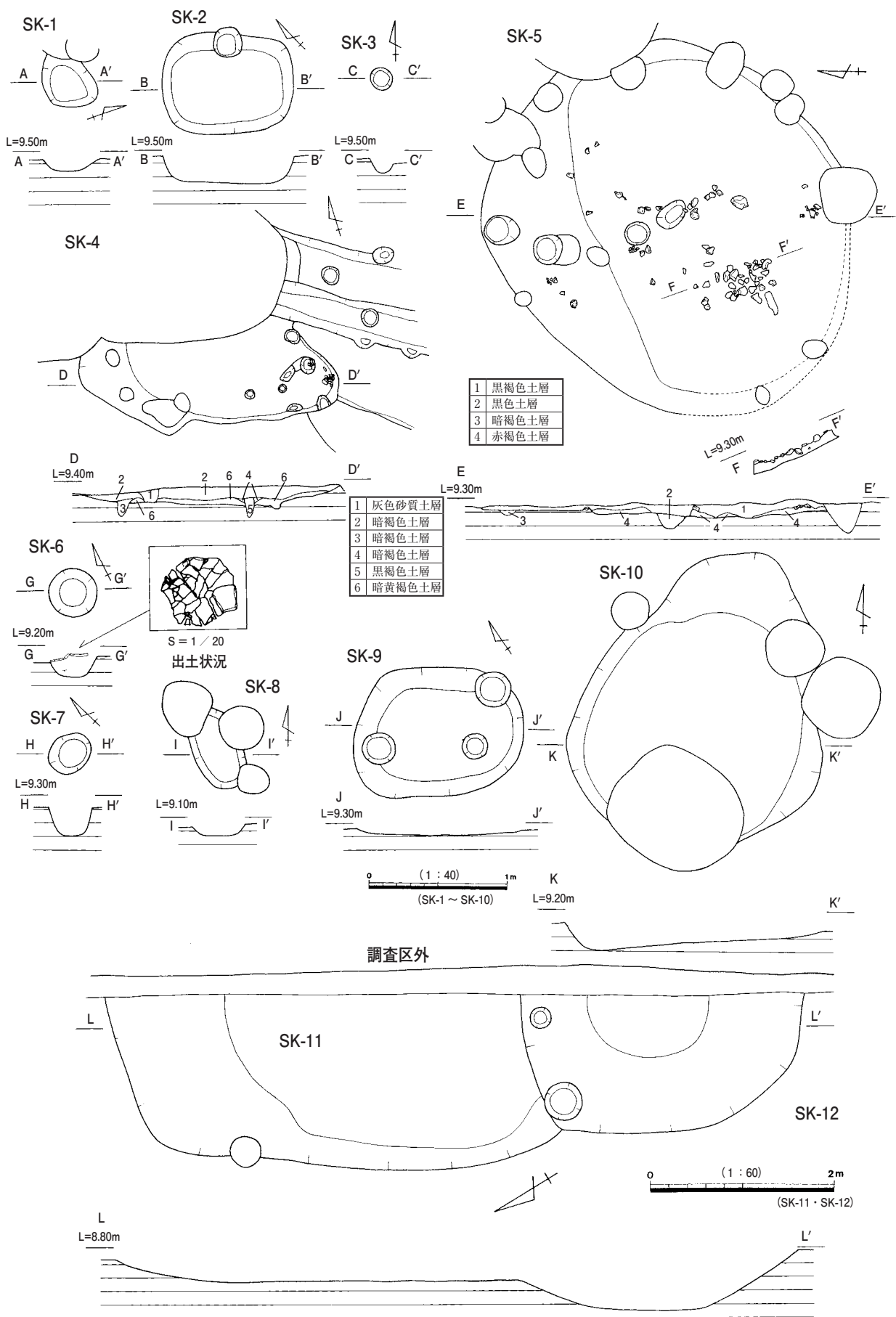
AB-16区で検出された円形の土坑で、直径3.3mを測る。深さは50cm程で、SK-11を壊している。遺物は土師器の皿の破片が出土している。近世。

3. 遺物 (第72～79図)

遺物は弥生時代から近世にかけての遺物が出土した。主要な遺物は、弥生時代中期後葉～7世紀初頭のものである。この内、弥生時代に属する遺物は大半が摩滅しており、文様・調整など成形・整形に関わる情報が読み取れない。原因は判然としないが、台地上の遺物の残存状況は良くないと言える。出土遺物の総量は収納用コンテナ(34×54×20cm)10箱である。

SB-1 (第72図)

壁溝内から台付甕が1点、反転した状況で出土した。脚部は欠損している。1は台付甕である。口縁



第71図 若宮遺跡遺構平面図11 (1/40・1/60)

部は短く、緩やかに屈曲する。口縁端部は先細り丸みを持ち、体部の最大径が口縁部よりも大きくなる。内外面ともにナデ調整される。

SB-2・SX-1 (第72図)

弥生土器の台付甕や鉢等が出土している。両遺構の遺物が混在していると考えられる。出土した遺物の大半は寄道式である。2～4・7・8は台付甕である。2・3は口径と体部の最大径が同規模であるが、4は体部の径がより大きい器形である。また2・3は口縁端部が丸みを持つが、4は端部を面取りする。2・3は内面板ナデ、外面にハケが残り、4のみ内外面ともにナデ調整である。5・6は壺の底部、7・8は台付甕の脚部である。8は外面にハケが確認できる。9は大型の鉢である。頸部の屈脚が明瞭で、口縁部は緩やかに外反する。口径と体部径が同規模であるが、頸部で窄まり、台杯甕に似た形状である。器厚は厚く口径が30 cmを超える。内外面ともにナデ調整される。

SB-3 (第73図)

弥生土器の壺や台付甕等が出土した。10～14は壺である。10は壺の肩部片で斜格子文が施される。11は器形がそろばん玉状を呈する。13もそろばん玉状の器形であるが、底部が広く、頸部の立ち上がりは丸みを帯びる。14は壺の底部片である。器厚が厚く、鉢の可能性もある。15～18は台杯甕である。15～17は脚部でいずれも柱状を呈する。18は口縁端部が丸く、頸部の屈曲は不明瞭で滑らかである。いずれも長床式である。

SB-5 (第73図)

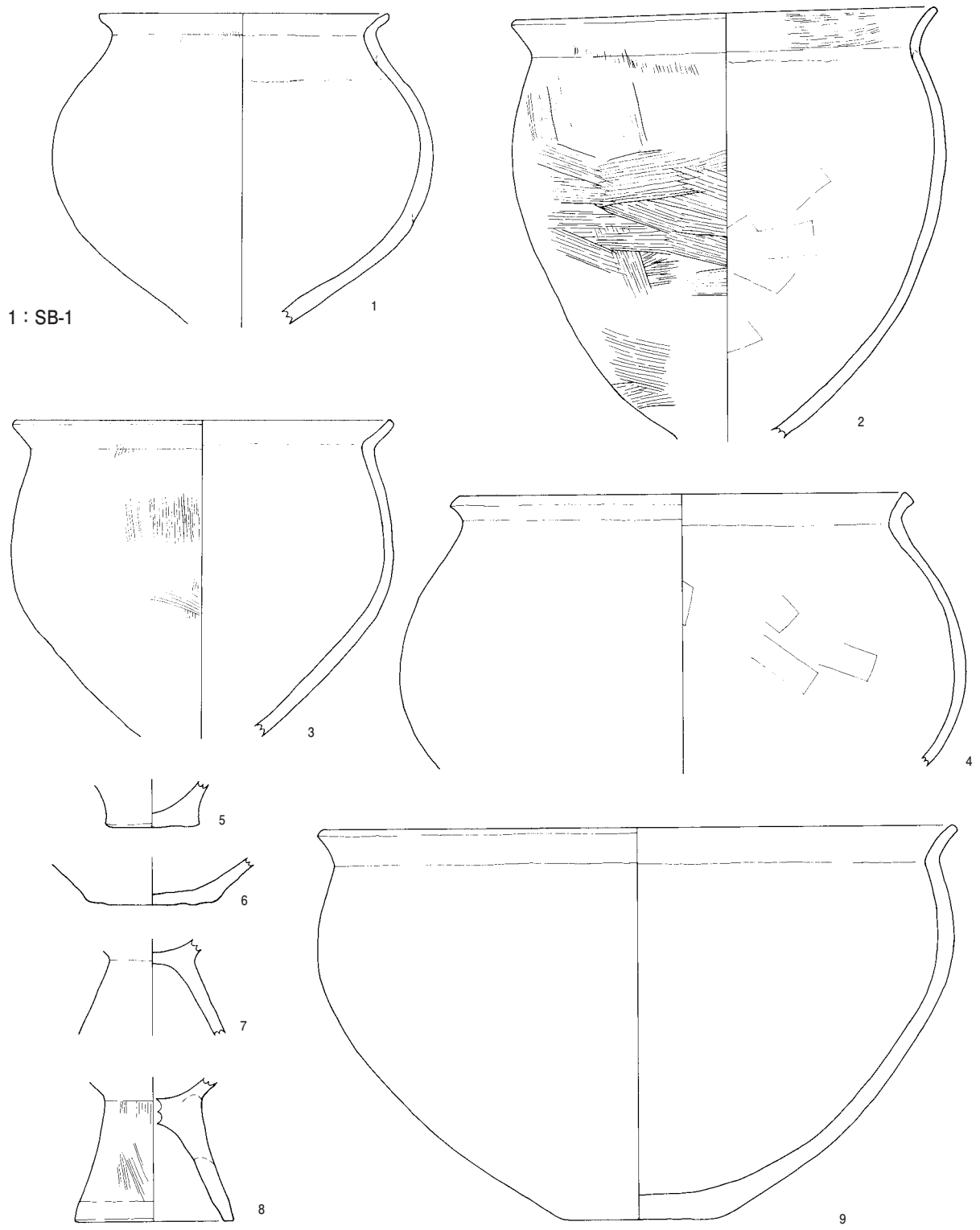
弥生土器の壺や台付甕が出土した。19～21は壺である。19は広口壺で、垂下する口縁端部に3条の沈線が廻り、口縁部内面には4つの列点文が貼り付けられる。また、頸部は沈線と突帯によって区画される。20は細頸壺の口縁部である。摩滅が著しいが、口縁部内面と端部に押引文が確認できる。21は小型の細頸壺である。外面に装飾は無くナデ調整である。頸部は直行し、口縁部の器厚がわずかに厚くなる。22～24は台付甕である。22・23は脚部で23は柱状を呈する。24の口縁端部は面取りされている。頸部の屈曲は明瞭で、内面には稜が確認できる。25～27は高坏の脚部である。25は内面が空洞であることから器台の可能性がある。25・27は脚部上位に櫛描横線文が廻る。

SB-7 (第74図)

6～7世紀の遺物が出土した。28は弥生土器の広口壺の口縁部片である。口縁内面に押引文、端部には2条の横線文が廻る。混入品である。29～32は須恵器である。29は坏蓋で胴部に沈線が廻る。30は坏身である。31・32は高坏である。胴部から受部へ屈曲が特徴的で、湖西産でない可能性がある。33・34は土師器の長胴甕である。33は胴部上位に最大径を持ち、肩部が張る器形である。34は胴部が直立的で、頸部から口縁部が肥大化する。2点とも外面ハケ調整。34は内面を板ナデ調整している。

SB-8 (第75図)

6～7世紀の遺物が出土した。35～38は混入品である。35・36は弥生土器である。35は高坏の脚部、36はワイングラス形高坏である。37は土師器の小皿である。底部に回転糸切痕が残る。14世紀頃の遺物と考えられる。38は土師器の柄手付鍋の破片である。39・40は須恵器である。39は摘付坏蓋である。口縁端部から直立的に立ち上がり、沈線の区画から丸みを帯びる。40は坏身である。立ち上がりが直線的に開く。41～45は土師器の甕である。口縁部が直線的に立ち上がる41・44と、緩やかに外反する

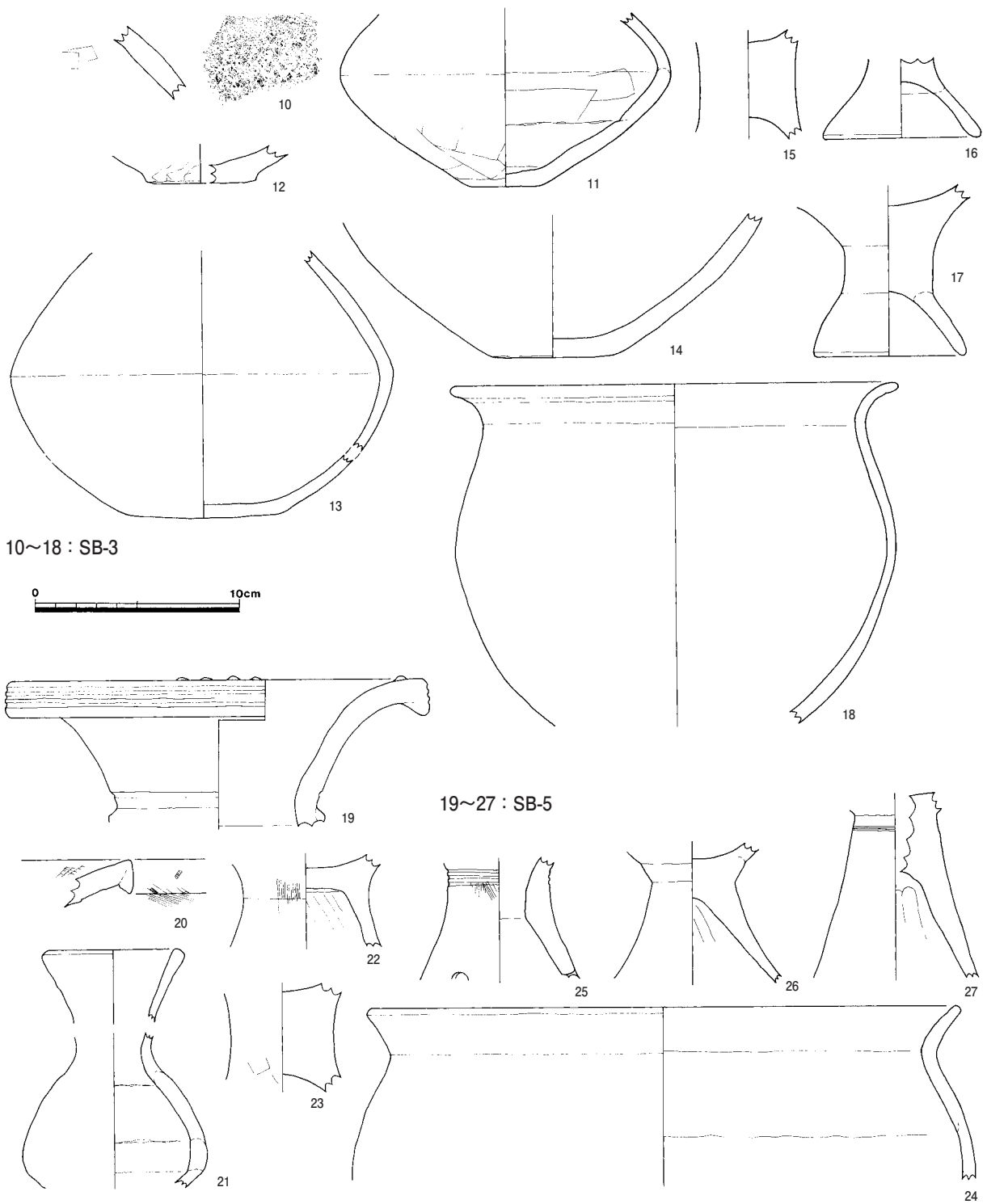


1 : SB-1

2~9 : SB-2 · SX-1

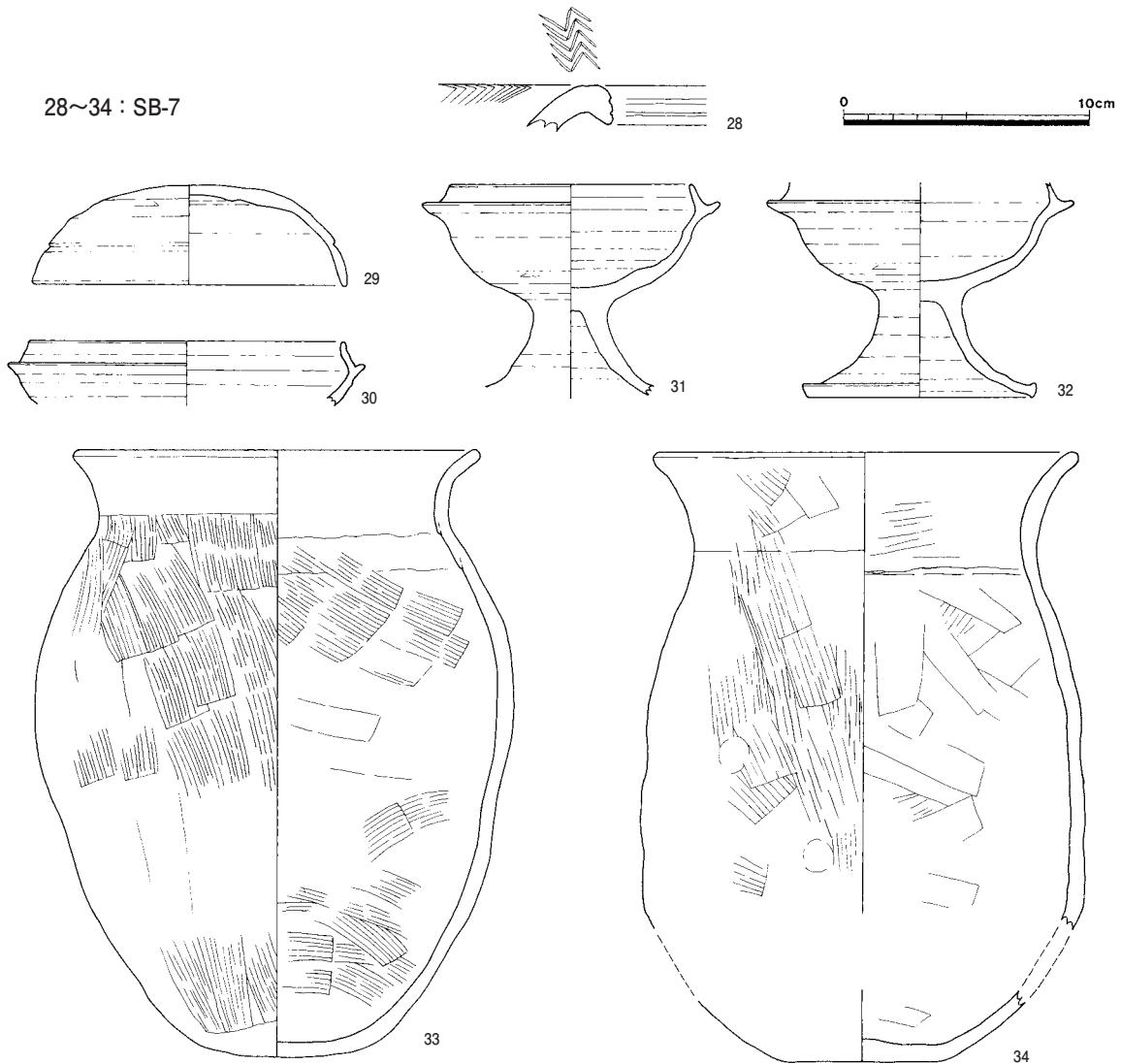
0 10cm

第72図 若宮遺跡遺物実測図1 (1 / 3)



第73図 若宮遺跡遺物実測図2 (1 / 3)

28~34 : SB-7



第74図 若宮遺跡遺物実測図3 (1 / 3)

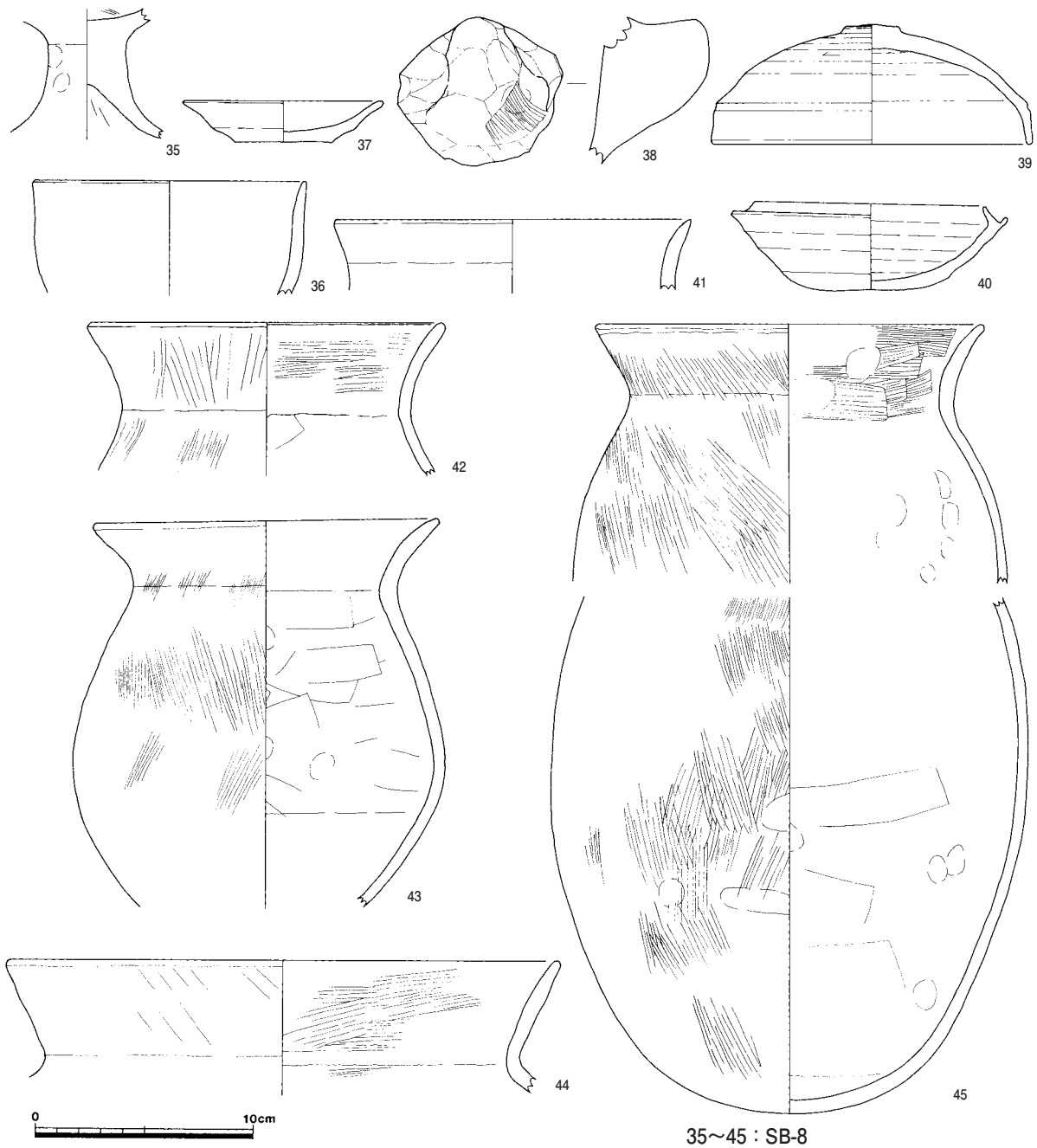
42・43・45がある。いずれも外面ハケ調整だが、口縁内面には42・44・45のように横向きのハケ目があるものと、41・43のようにナデ調整するものがある。

SB-9 (第76図)

柱穴から須恵器の坏身と壺の小破片が出土した。46は須恵器の坏身である。受部の立ち上がりが弱く扁平な器形である。47は甕の胴部片である。

SB-10 (第77図)

陶器の碗や鉢、土師器の碗や鍋が出土した。48は陶器の碗である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや鋭角になる。49は土師器の碗である。胴部の立ち上がりは丸みを持ち、頸部で屈曲し口縁部が外反する。50は土師器の鍋である。器厚が薄く、口縁を折り返すことから伊勢型鍋である。51は陶器の鉢である。口縁部が受口状で胎土に長石の粒が多く混入する。瀬戸産で瀬戸編年10型式に相当する。48~50が13世紀頃の遺物であることから、掘立柱建物の時期も13世紀頃と推定される。



第75図 若宮遺跡遺物実測図4 (1/3)

SB-11 (第76図)

土師器の碗と土師器の羽釜が出土した。52~54は土師器の碗である。立ち上がりは直線的で広角に開き、口縁下でわずかに屈曲する。器高は低く、器形は皿に近い。底面には回転糸切痕が確認できる。いずれも同一の土坑から出土している。55・56は土師器の鍋である。口縁部付近に短い羽が付くことから、内弯形羽釜である。13世紀頃の遺物であると考えられる。

SB-12 (第76図)

陶器の碗と、土師器の羽釜が出土している。57は陶器の碗である。渥美産と考えられる。58は土師器の羽釜である。口縁端部が内側に折り返され、口縁部付近に羽が付くことから、内弯形羽釜であると

考えられる。

SD-1・SD-2下層（第76図）

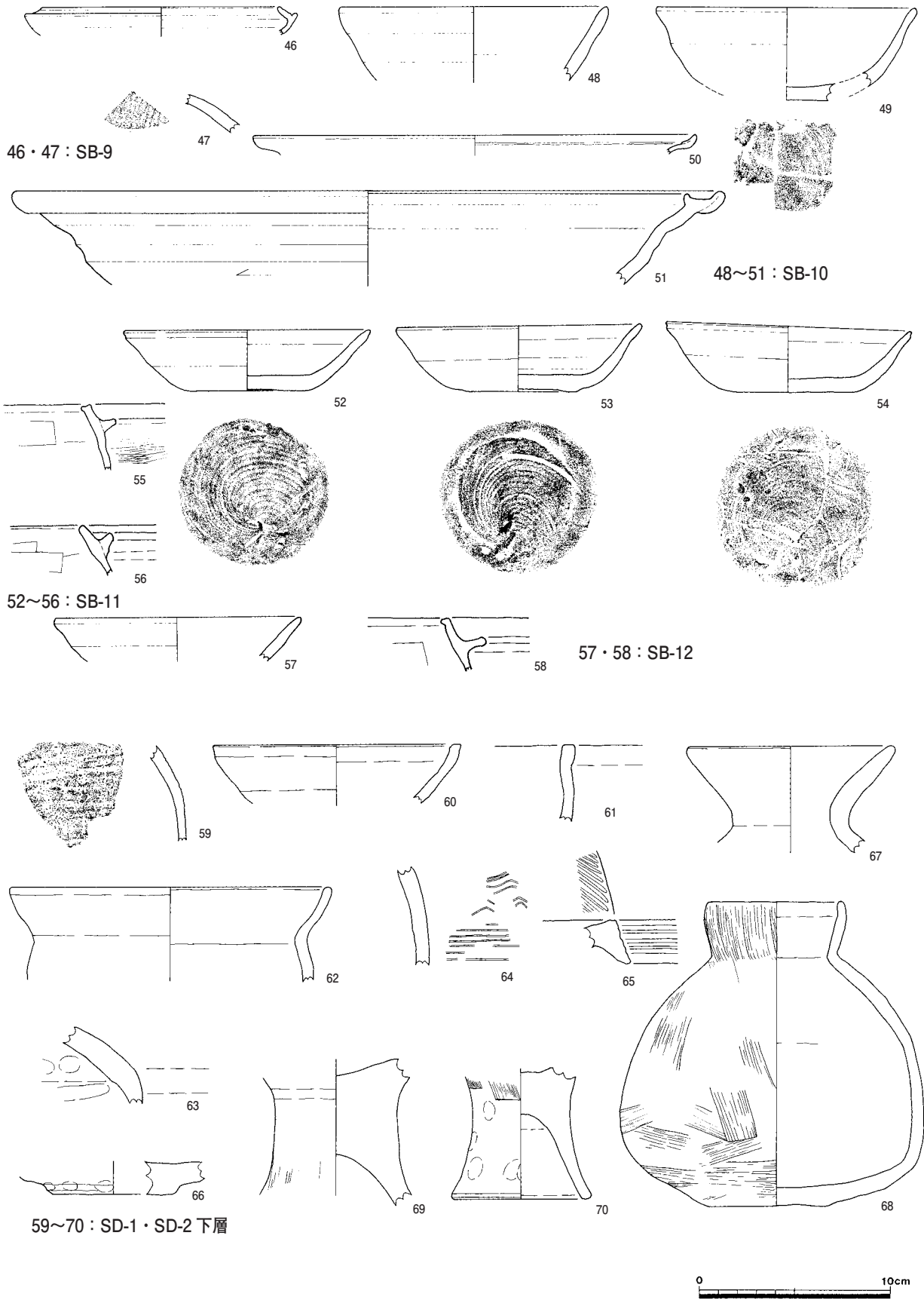
下層は2-2層から6-2層に相当する。2-2層～2-5層が古墳時代初頭（60・68）、3層～6層が弥生時代中期末以降（59・61～67、69・70）に埋没したと考えられる。59～67は弥生土器である。59は壺の胴部である。摩滅しているが、わずかに条痕文が確認できる。60・61は高坏の破片である。60は皿状の杯部で、口縁端部を面取りしている。61は立ち上がりが直立することから、ワイングラス形高坏と思われる。口縁端部を面取りしてあり、頸部がわずかに細くなる。62甕である。台付甕だと思われ、口縁部が内弯している。63～67は壺である。63・64は胴部片で、64は櫛描文が見られるが、摩滅が著しく不明瞭である。65は垂下する口縁端部を持つ広口壺である。端部に4条の櫛描横線文、口縁部内面に櫛描文が確認できる。66は底部片である。67は細頸壺で、頸部は短く全体的に摩滅している。68は土師器の短頸直口壺である。SD-1とSD-2の分岐点に正位置で配置されていた。意図的に配置されたものと思われる。口縁部がわずかに内弯し、肩部が張る。底部からは大きく開き、腰部で立ち上がる。外面にハケ調整が確認できるが、全面的に摩滅している。出土層位が3層であることから、環壕の埋没後に再利用された、古墳時代初頭・狭間式と考えられる。69・70は弥生土器の台付甕の脚部である。69は柱状を呈し、70は外反する。

SD-1・SD-2中層（第77図）

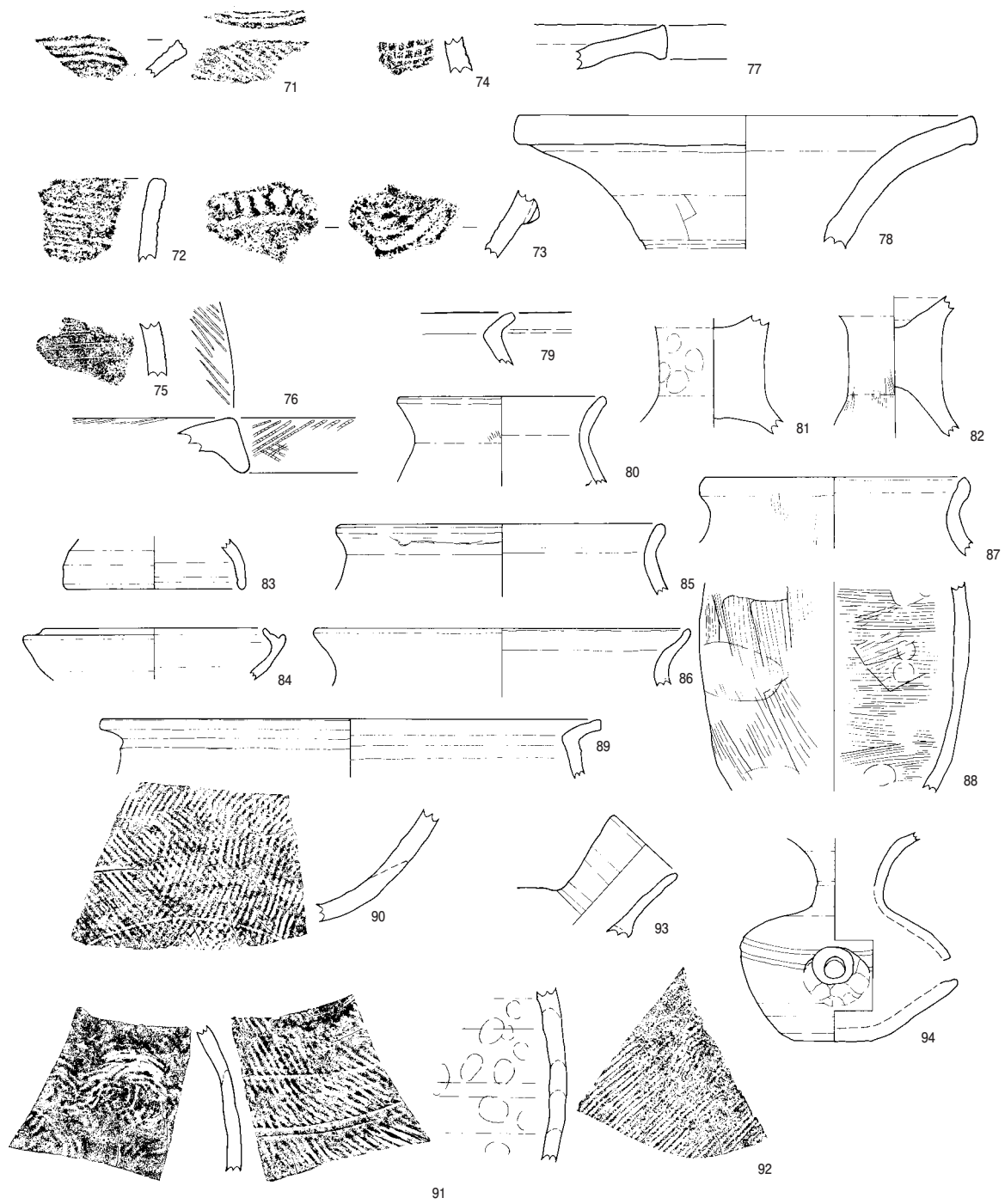
中層は2-1層に相当する。出土した遺物は古墳時代後半の遺物が中心で、弥生土器が少量混入する。71～82は弥生土器である。いずれも摩滅が著しく、混入品であると考えられる。71～73は条痕文土器で、71は細頸壺、72は甕、73は広口壺である。71は内面に横位の押引文、73は内面に円弧文が施される。弥生時代中期前半・続水神平式である。74・75は櫛描文の施された弥生土器である。74は斜格子文の壺破片で、弥生中期後半・長床式である。76～78は広口壺で76は口縁端部が垂下し、内面及び端部が櫛状工具で施文されている。77・78は口縁端部が垂下しない広口壺である。78は内面に円弧文を施す。いずれも弥生時代後期・寄道式である。79～82は台付甕である。79・80は口縁部で、79は頸部の稜が明瞭である。80は口径が小さいことから、古墳時代初頭の平底甕の可能性がある。81・82は台杯甕の脚部片で、柱状を呈していることから長床式と考えられる。83～93は古墳時代の遺物である。83・84・90～94は須恵器、85～89は土師器である。83は坏蓋で、84は坏身である。85～88は長胴甕で、口縁部は受口状に立ちあがる。87と88は多数の小破片を伴って同一地点から出土した同一個体である。89は口縁端部を面取りした甕である。胎土と形態が他の土師器と異なることから、上層から混入した古代の遺物である可能性がある。90～92は須恵器の甕で、91のみ内面にも当て具痕が残る。93は平瓶の口縁部で表面に自然釉がかかる。94は甗である。肩部に2条の沈線が廻り、注口部の張り出しは弱い。湖西産と考えられる。いずれも古墳時代後期の遺物である。

SD-1・SD-2上層（第78図）

上層は1層に相当する。弥生時代から13世紀頃の遺物が出土した。出土遺物は中世陶器や土師器の小破片が最も多く、中層から混入したと考えられる須恵器も出土している。弥生土器もわずかながら出土するが、いずれも表面が摩滅している。95～97は弥生土器である。95は条痕文の施された壺の頸部である。96・97は高坏で96は櫛状工具で上部への描上げが見られる。98～102は須恵器である。98は



第76図 若宮遺跡遺物実測図5 (1 / 3)



71~94 : SD-1・SD-2 中層

第77図 若宮遺跡遺物実測図6 (1/3)

杯蓋、99～101は坏身である。いずれも受部からの立ち上りが低く、6世紀末～7世紀初頭にかけての遺物である。102は高坏の脚部である。103は土師器の平底甕である。104・105は土師器の鍋で、口縁端部が顎状に肥大する、10世紀の清郷型鍋である。106は陶器の底部で、壺だと考えられる。底部にT字形のヘラ記号が施されている。107～113は陶器の碗である。107～111は底部片でいずれも灰釉陶器である。112・113は口縁部片である。渥美産の山茶碗と考えられ、13世紀頃の遺物であろう。114は土師器の鍋である。口縁端部が折り返され、ナデ調整される。頸部は直立し、口径よりも胴部径が大きくなると考えられる。115は陶器の壺と考えられる。高台は無く、直線的に立ち上がる。

SD-3 (第78図)

弥生土器が出土している。116はくの字状口縁の台付甕で、胴部に最大径がある。口縁端部は面取りし、刻みが施される。117は台杯甕の脚部である。118は高坏の脚部と考えられる。器厚は薄く、端部が反る。ラップ口状の直口壺とも考えられるが、外面がナデ調整されているのに対して、内面が未調整であったため脚部とした。弥生時代中期末～後期。

SD-4 (第78図)

119は細頸壺の胴部である。全体が摩滅しているが、頸部下に横方向の櫛描文が確認できる。弥生時代中期末か。

SD-5 (第78図)

弥生土器と近世初頭の遺物が出土している。120～122は弥生土器である。120は条痕文、121は櫛描文が施される。122は受口状の細頸壺で、口縁部外面に横方向の沈線が3条廻る。123は陶器の碗で、13世紀頃の渥美産山茶碗である。124・125は土師器の鍋で、124は13世紀頃の伊勢型鍋、125は16世紀頃のくの字口縁内耳鍋である。126は陶器の甕である。常滑産で、16世紀頃の遺物と考えられる。

SK-1 (第79図)

127は縄文土器である。深鉢の胴部と考えられ、横方向の沈線下に縄文が施文される。

SK-2 (第79図)

128・129は弥生土器である。128は碗形高坏の口縁部、129は壺の胴部である。129は櫛描文が施文される。

SK-3 (第79図)

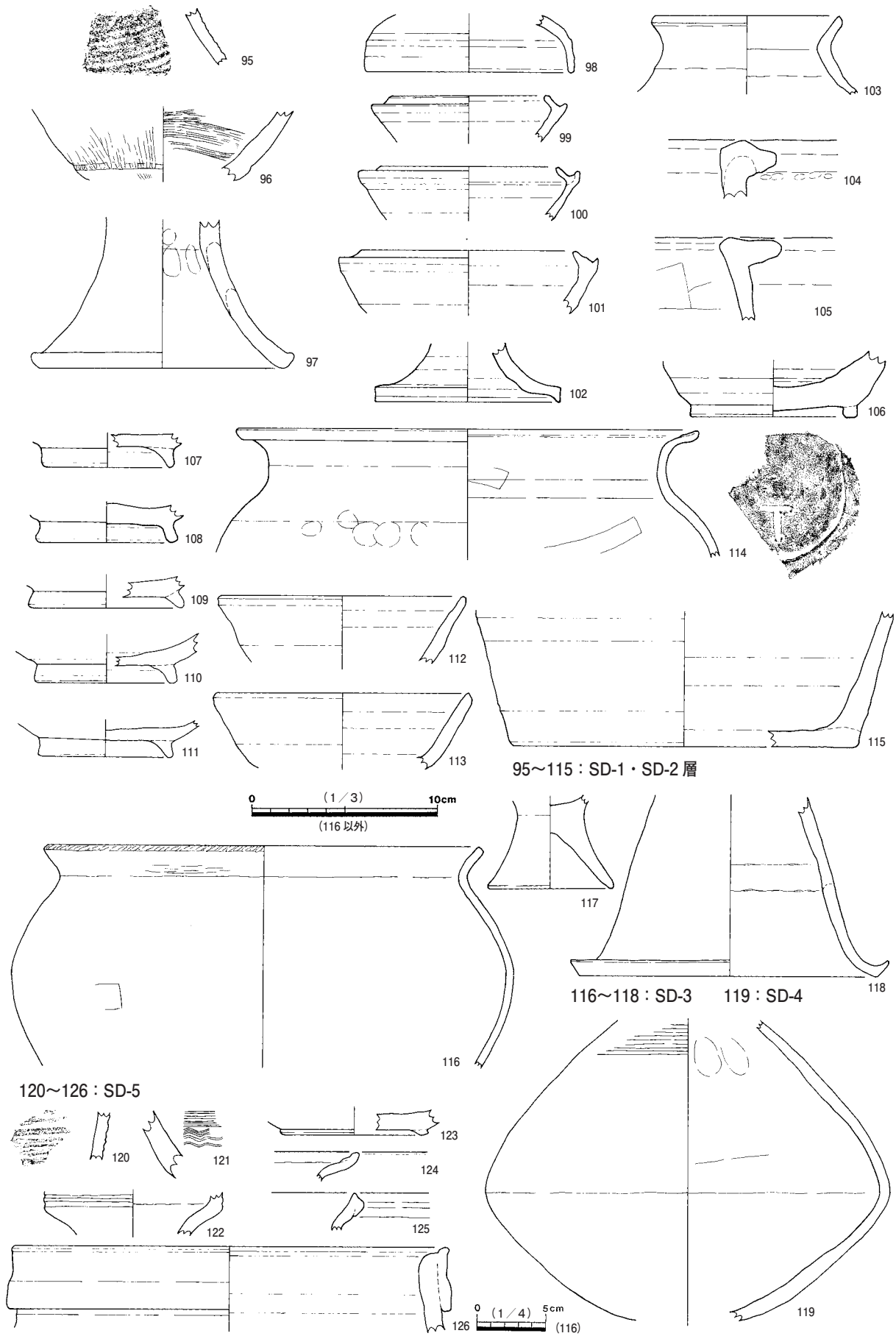
130・131は弥生土器である。130は条痕文が施されているが、摩滅が著しく混入品であろう。131は壺の胴部である。櫛描きによる横線文と波状文が施文されている。弥生時代中期か。

SK-5 (第79図)

古墳時代の遺物が出土した。132・133は須恵器の杯蓋で、132は口縁上部に沈線が廻る。134～136は坏身である。134・135は、受部からの立ち上がり口縁部と同程度までしか上がらない。6世紀末～7世紀頃の物と考えられる。136は受部の張り出しが弱く、立ち上がり部が直立し1.8cmを超えることから5世紀前半頃か。137・138は土師器の甕である。139は須恵器の甕の破片である。140は土師器の鍋の柄手である。

SK-6 (第79図)

141は土師器の甕の胴部である。手づくね成形で、内面板ナデ、外面にはハケ目が残る。小型の土坑



第78図 若宮遺跡遺物実測図7 (1/3・1/4)

内に横倒しになった状態で出土した。古墳時代後期か。

SK-7 (第79図)

142は陶器の壺である。柱穴状の土坑内に正置されるように出土した。ロクロ成形で肩が張り、高台は低い。灰釉が腰部までかけられている。10世紀頃。

SK-8 (第79図)

SK-8からは北宋銭2枚が出土した。このうち一点は破砕しており、文字が確認できなかった。143は北宋銭の元豊通宝である。

SK-9 (第79図)

144は土師器の皿である。型押成形で、内面はナデ調整である。145は陶器の鉢である。口縁端部が受口状を呈している。いずれも16世紀以降。

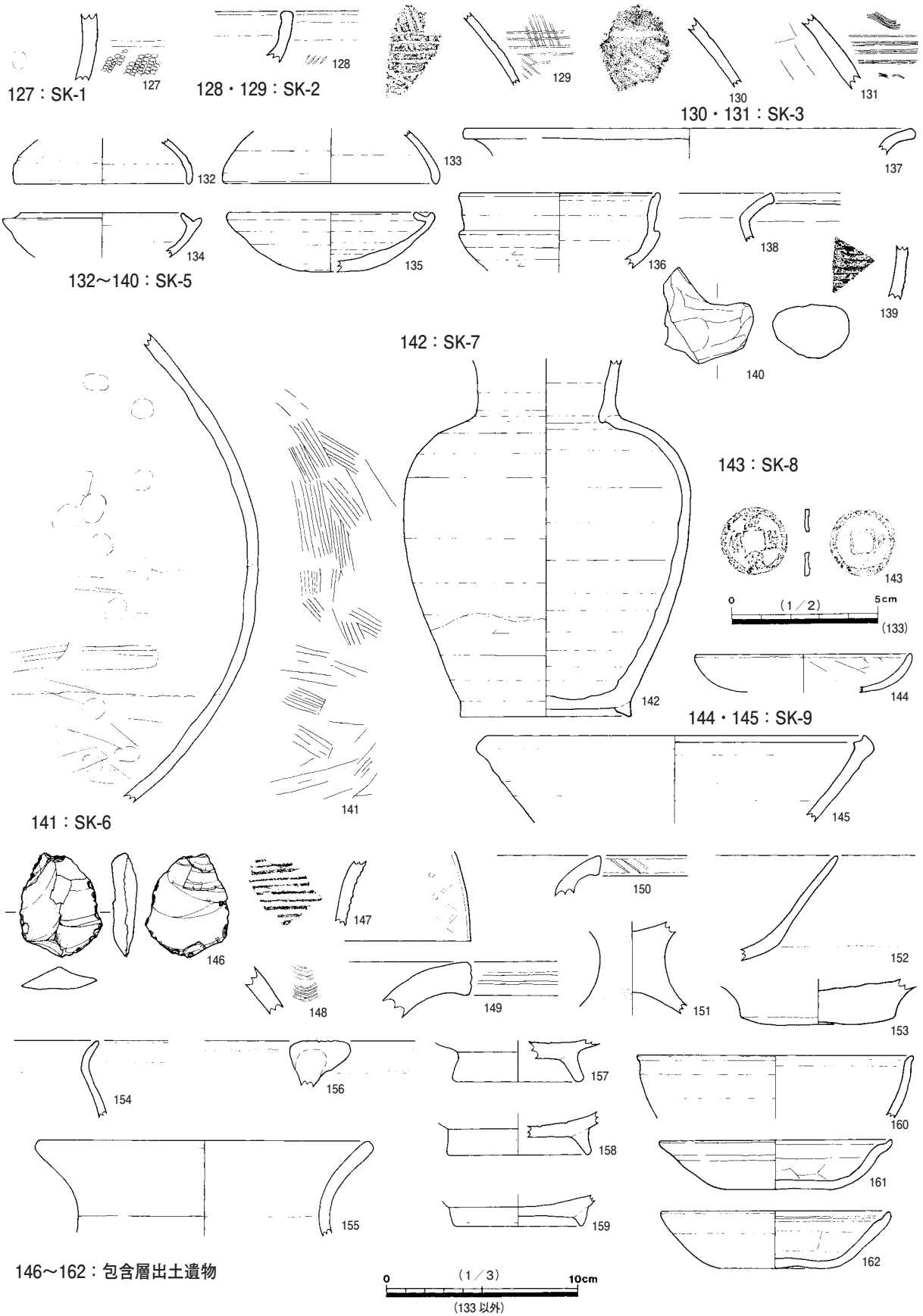
包含層出土遺物 (第79図)

遺構検出時、包含層第Ⅲ層から出土した遺物を掲載した。146は溶結凝灰岩製の剥片である。側縁部に微細剥離痕が確認できる。縄文時代。147～153は弥生土器である。147は続水神平式の甕で、表面に条痕が見られる。148～150は壺の破片である。148は波状櫛描文、149は口縁部内面に刺突文と押し文が確認できる。150は細頸壺の口縁部である。口縁端部に斜方位の沈線を連続して施文している。152は有稜高杯の口縁部である。151は台杯甕の脚部、153は壺の底部である。いずれも弥生時代中期末～後期。154～156は土師器である。154は甕の口縁部である。器厚が薄く、最大径が10cm程と小さいことから、古墳時代初頭の平底甕と考えられる。155は長胴甕で内外面ともに、ナデ調整される。156は10世紀頃の土師器の鍋である。157～159は陶器の碗で、いずれも10世紀頃の灰釉陶器であろう。160は陶器の碗で、近世の瀬戸産天目茶碗である。161・162は土師器の皿である。2点とも口縁部にて屈曲を見せる。16世紀。

4. 結語

若宮遺跡第六次調査は、それまでの調査とは異なり、台地上が調査対象地区となった。今回の調査により、それまで中世を中心とする集落址と考えられていた若宮遺跡において、台地上には境松遺跡から広がる弥生時代の集落が広がっていることが明らかになった。同時に、その集落範囲が明確に示されたことが今回の最も重要な調査成果である。

遺構の検出状況を見ると、環壕を境にして集落内外の様相の違いが明瞭で、環壕内部には建物址をはじめとする遺構が複数確認されているのに対し、環壕の外には一切の弥生時代の遺構が検出されなかった。この弥生時代の集落は、弥生時代中期末～後期にかけて営まれた集落で、環壕を構築する程の集団であったことも判明した。特に今回の調査で検出された環壕は、三河地域でも類例の少ない多重環壕である。しかしながら、出土遺物は極めて少なく、掘り直し、あるいは後世の再利用といった状況から、土器捨場としての機能は確認できなかった。また、SD-1とSD-2に挟まれた区域は、今回の調査では遺構などを発見することができなかった。明確に集落域との区画がなされることから、墓域や儀礼域、あるいは田畑などの区画である可能性があるが、高台という立地のため、粘質の



第79図 若宮遺跡遺物実測図8 (1/2 · 1/3)

ある土層とはいえ、水源の乏しい斜面上に田畑を構築するとは考えがたい。今後の調査で集落域とは異なる遺構の検出が予想される。台地上の集落に関しては、境松遺跡 B 区に見られるように、後世の大幅な地形改変により、全体像を把握することが難しい。現段階では、竪穴建物の主軸方向が一定ではないことから、規則性のある集落構造ではなかった可能性が高い。また、弥生時代に属する掘立柱建物が検出されていない点や、集落域内部の竪穴建物が散布的である点などから、集落内の居住空間はより高台の頂上部に集中していると思われる。今回の調査区は集落の南端部であり、集落への入口や、作業区域であった可能性がある。しかし、南方向は三河湾方面を臨むため、仮に集落の入口方向であったと仮定した場合、海上交通などの手段を用いていた可能性が考えられる。

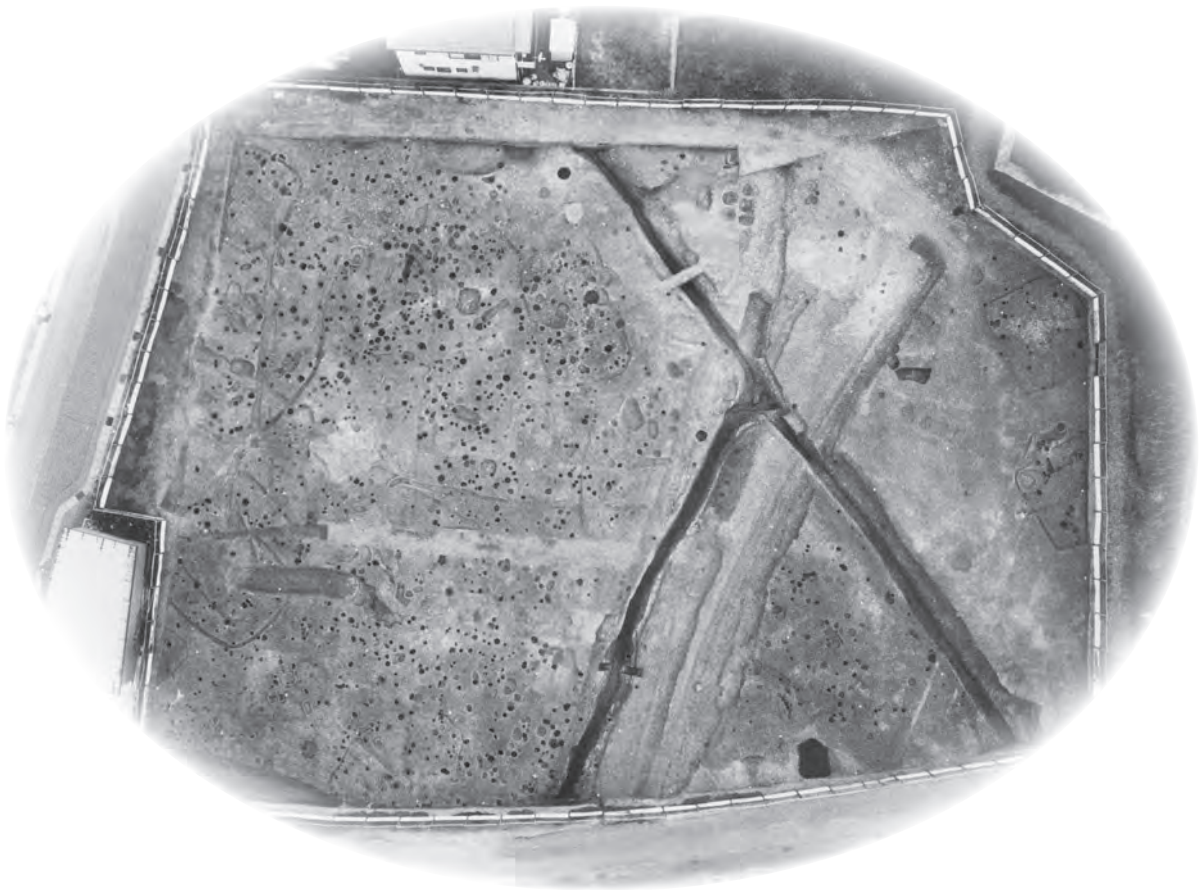
今回検出された環壕は集落の南部に相当する。この環壕は、境松周辺の台地を取り囲むように廻ることが予想される。これまでの調査で発見されなかった若宮遺跡の斜面部で、今後どのように環壕が検出されていくかによって、集落の全景を把握がなされることであろう。いずれにしても、今回の調査区で発見されたように、今後、分岐あるいは多重の環壕が検出されることが大いに予想される。改めて、集落の規模と出土遺物などを含めた遺跡の価値を精査する必要がある。

第5表 若宮遺跡遺物観察表

遺物No. NO.	遺構名	分類	機種	細別	時期	法量 (cm)			残存率	胎土 石材	焼成	色調	備考
						口径/長さ	器高/幅	底形/厚さ					
1	SB-1	弥生土器	甕	台付甕	長床式	14.1	(15.5)		70%	密	やや良	5YR6/8	橙
2	SB-3	弥生土器	甕	台付甕	寄道式	21.0	(21.4)		70%	密	良	5YR5/6	明赤褐
3	SB-3・SX-1	弥生土器	甕	台付甕	寄道式	18.8	(15.6)		20%	やや粗	やや良	7.5YR5/4	にぶい橙
4	SB-3・SX-1	弥生土器	甕	台付甕	寄道式	22.8	13.5		10%	密	やや良	7.5YR8/4	浅黄橙
5	SB-3・SX-1	弥生土器	壺			2.3	(4.6)		3%	密	やや良	7.5YR7/6	橙
6	SB-3・SX-1	弥生土器	壺				(2.3)		5%	やや粗	やや良	5YR7/8	橙
7	SB-3・SX-1	弥生土器	甕	台付甕	寄道式		(4.7)		5%	密	やや良	10YR8/6	黄橙
8	SB-3・SX-1	弥生土器	壺	台付甕	寄道式		(7.1)	7.8	5%	密	やや良	7.5YR8/6	浅黄橙
9	SB-3・SX-1	弥生土器	鉢	鉢	寄道式	31.6	19.4		70%	やや密	良	7.5YR6/6	橙
10	SB-3	弥生土器	壺		長床式				1%	粗	不良		
11	SB-3	弥生土器	壺		長床式		(8.7)	3.2	40%	密	やや良	5Y3/1	オリブ黒
12	SB-3	弥生土器	壺				(1.8)	5.4		密	良	2.5YR5/6	明赤褐
13	SB-3	弥生土器	壺		長床式		(13.1)	7.6	20%	やや粗	良	2.5YR7/4	浅黄
14	SB-3	弥生土器	壺				(7.1)	6.2	30%	やや粗	良	10YR5/3	にぶい黄橙
15	SB-3	弥生土器	甕	台付甕	長床式		(5.4)		3%	粗	良	2.5YR5/6	明赤褐
16	SB-3	弥生土器	甕	台付甕	長床式		(8.4)	7.4	10%	密	良	10YR6/4	にぶい黄橙
17	SB-3	土師器	甕	台付甕			(3.9)	7.8	3%	密	良	10YR7/3	にぶい黄褐
18	SB-3	弥生土器	甕	台付甕	長床式	22.0	(16.8)	20%		粗	良	10YR4/4	褐
19	SB-5	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	20.9	(7.5)		30%	密	やや良	7.5YR5/6	明褐
20	SB-5	弥生土器	壺	広口壺	寄道式		(2.3)		1%	密	良	7.5YR5/4	にぶい橙
21	SB-5	弥生土器	壺	細頸壺	長床式	6.0			30%	密	やや不良	5YR5/6	明赤褐
22	SB-5	弥生土器	甕	台付甕			(4.6)		5%	密	やや良	7.5YR6/6	橙
23	SB-5	弥生土器	甕	台付甕	寄道式		(5.3)		5%	やや密	良	7.5YR6/6	橙
24	SB-6	弥生土器	甕	台付甕			(4.8)		3%	やや密	良	7.5YR6/4	にぶい橙
25	SB-5	弥生土器	高坏		寄道式		(6.0)		5%	密	良	10YR7/4	にぶい黄橙
26	SB-5	弥生土器	高坏		寄道式		(7.1)		5%	やや密	良	7.5YR6/4	にぶい橙
27	SB-5	弥生土器	高坏				(9.0)		3%	密	良	7.5YR7/8	黄橙
28	SB-7	弥生土器	壺	広口壺	寄道式				3%	粗	良	10YR6/5	明黄褐
29	SB-7	須恵器	坏蓋			12.9	4.1		60%	密	やや良	7.5YR6/3	にぶい褐
30	SB-7	須恵器	坏身			14.6	(2.6)		3%	密	良	7.5YR6/1	灰
31	SB-7	須恵器	高坏		6世紀末	12.2	(8.7)		30%	密	良	2.5Y7/1	灰白
32	SB-7	須恵器	高坏		6世紀末	12.6	(8.8)	9.6	40%	密	良	2.5Y7/1	灰白
33	SB-7	土師器	甕	長胴甕	6世紀末-7世紀初	16.7	24.9		90%	粗	良	5YR5/8	明赤褐
34	SB-7	土師器	甕	長胴甕	6世紀末-7世紀初	17.6	(18.8)		3%	粗	良	7.5YR4/3	褐
35	SB-8	弥生土器	高坏						3%	密	良	10YR5/2	灰黄褐
36	SB-8	弥生土器	高坏	ワイングラス形高坏	弥生後期	12.6	(5.2)					7.5YR6/4	にぶい橙
37	SB-8	土師器	小皿	灰輪陶器		9.2	1.9	4.6	50%	密	やや不良	10YR8/3	浅黄橙
38	SB-8	土師器	鍋	把手付鍋			(6.7)		3%	やや粗	やや良	5YR6/8	橙
39	SB-8	須恵器	坏蓋			14.8	5.5		40%	密	良	5Y7/1	灰白
40	SB-8	須恵器	坏身		6世紀末-7世紀初	12.7	4.1	3.8	90%	密	良	5Y8/1	灰白
41	SB-8	土師器	甕			16.4	(3.2)		3%	やや粗	やや不良	7.5YR6/6	橙
42	SB-8	土師器	甕	長胴甕		16.4	(7.0)		30%	やや粗	やや良	5YR5/6	明赤褐
43	SB-8	土師器	甕	長胴甕		15.8	(17.8)		70%	やや粗	やや不良	5YR4/6	赤褐
44	SB-8	土師器	甕	大型甕		25.4	(6.0)		10%	やや粗	良	7.5YR4/4	褐
45	SB-8	土師器	甕	長胴甕	7世紀初頭	17.9			70%	粗	やや良	7.5YR5/6	明褐
46	SB-9	須恵器	坏身		7世紀	12.5	(1.4)		3%	密	良	10Y6/1	灰
47	SB-9	須恵器	壺				(2.0)		1%	密	良	10Y5/4	にぶい黄褐
48	SB-10	陶器	碗	山茶碗	瀬戸7型式	14.2	(3.8)		5%	密	良	2.5Y2/2	暗灰黄
49	SB-10	土師器	碗		13-14世紀頃	13.8	(4.9)		20%	密	良	10YR7/4	にぶい黄橙
50	SB-10	土師器	碗	伊勢型鍋	14世紀頃	23.2	(1.0)		1%	密	良	10YR5/3	にぶい黄褐
51	SB-10	陶器	鉢	片口鉢	瀬戸10型式	37.6	(4.9)		5%	密	良	2.5Y2/2	暗灰黄
52	SB-11	土師器	碗		13-14世紀頃	13.0	3.2	5.8	60%	密	良	7.5YR6/6	橙
53	SB-11	土師器	碗		13-14世紀頃	13.0	3.6	6.3	90%	密	良	7.5YR7/6	橙
54	SB-11	土師器	碗		13-14世紀頃	13.0	3.7	6.0	90%	密	良	5YR6/6	橙
55	SB-11	土師器	鍋	内弯形羽釜	13世紀頃		(3.5)		3%	密	良	10YR7/2	にぶい黄橙
56	SB-11	土師器	鍋	内弯形羽釜	13世紀頃		(3.0)		3%	密	良	10YR8/2	灰白
57	SB-12	陶器	碗	山茶碗	渥美Ⅲ-2型式	13.0	(2.3)		3%	密	良	2.5Y6/1	黄灰
58	SB-12	土師器	鍋	内弯形羽釜	14世紀頃		(3.1)		3%	密	良	2.5Y8/3	淡黄
59	SD1・SD27種	弥生土器	甕	条痕文土器	続水神平式		(5.0)		3%	やや粗	不良	N3/6	暗灰色
60	SD1・SD27種	弥生土器	高坏	小型高坏		13.0	(3.1)		3%	やや密	良	7.5Y6/8	橙
61	SD1・SD27種	弥生土器	高坏	ワイングラス形高坏					1%	密	良	7.5Y7/6	橙
62	SD1・SD27種	弥生土器	甕			11.0	(5.6)		10%	やや密	良	10YR7/6	明黄褐
63	SD1・SD27種	弥生土器	壺			16.8	(4.9)		3%	やや粗	良	7.5YR5/6	明赤褐色
64	SD1・SD27種	弥生土器	壺				(4.0)		1%	やや粗	やや良	10YR4/3	にぶい黄褐
65	SD1・SD27種	弥生土器	壺	広口壺			(5.1)		1%	密	良	7.5YR7/8	黄橙
66	SD1・SD27種	弥生土器	壺				(2.3)		1%	やや粗	良	2.5YR5/8	明赤褐
67	SD1・SD27種	弥生土器	壺	細頸壺				(6.4)	3%	やや粗	やや良	10YR6/6	明黄褐
68	SD1・SD27種	土師器	壺	短頸直口壺	狭間Ⅲ式	6.9	16.1	6.4	98%	やや粗	良	10YR8/6	黄橙
69	SD1・SD27種	弥生土器	甕	台付甕	長床式		(7.7)		8%	密	良	7.5YR5/6	橙
70	SD1・SD27種	弥生土器	甕	台付甕			(6.9)	7.4	10%	密	良	5YR5/8	明赤褐
71	SD1・SD27種	弥生土器	壺	細頸壺	続水神平式		(1.8)		1%	密	やや不良	10YR7/6	明黄褐
72	SD1・SD27種	弥生土器	壺	細頸壺	続水神平式		(3.8)		1%	密	やや不良	10YR7/6	明黄褐
73	SD1・SD27種	弥生土器	壺	広口壺	続水神平式		(3.4)		1%	やや密	不良	10YR5/8	黄褐
74	SD1・SD27種	弥生土器	壺		長床式		(2.7)		1%	やや粗	良	5YR5/8	明赤褐
75	SD1・SD27種	弥生土器	壺	広口壺			(2.6)		1%	やや密	良	7.5Y6/6	橙
76	SD1・SD27種	弥生土器	壺	広口壺	寄道式		(2.3)		1%	粗	やや不良	10YR8/4	浅黄橙
77	SD1・SD27種	弥生土器	壺	広口壺	寄道式		(2.5)		1%	やや粗	やや不良	5YR4/8	赤褐
78	SD1・SD27種	弥生土器	壺	広口壺	寄道式	22.4	(6.6)		5%	やや密	良	7.5YR5/6	明褐
79	SD1・SD27種	弥生土器	甕	台付甕			(3.6)		3%	やや粗	良	7.5YR5/7	明赤褐色
80	SD1・SD27種	弥生土器	甕	台付甕		10.2	(4.2)		3%	やや粗	良	7.5YR5/6	にぶい橙

81	SD1・SD2中層	弥生土器	甕	台付甕	長床式	(5.9)		10%	密	やや良	5YR5/8	明赤褐		
82	SD1・SD2中層	弥生土器	甕	台付甕	長床式	(6.9)		10%	密	やや良	10YR7/6	明黄褐		
83	SD1・SD2中層	須恵器	坏	坏蓋		8.8	(2.5)	5%	密	良	2.5Y6/1	黄灰		
84	SD1・SD2中層	須恵器	坏	坏身		13.1	(2.2)	3%	密	良	10YR5/1	灰		
85	SD1・SD2中層	土師器	甕	長胴甕		15.6	(3.2)	5%	密	良	7.5Y5/4	にぶい褐		
86	SD1・SD2中層	土師器	甕	長胴甕		18.6	(2.9)	3%	やや粗	良	10YR7/4	にぶい黄褐		
87	SD1・SD2中層	土師器	甕	長胴甕	6世紀末～7世紀初		(4.2)	1%	密	良	5YR6/6	橙		
88	SD1・SD2中層	土師器	甕	長胴甕	6世紀末～7世紀初		(10.4)	5%	密	良	5YR6/6	橙		
89	SD1・SD2中層	土師器	甕			25.0	(2.6)	5%	やや粗	良	5YR4/8	赤褐		
90	SD1・SD2中層	須恵器	甕				(5.6)	1%	密	良	2.5Y7/2	灰黄		
91	SD1・SD2中層	須恵器	甕		7世紀末		(7.2)	3%	密	良	2.5Y7/3	浅黄		
92	SD1・SD2中層	須恵器	甕				(8.7)	3%	密	良	2.5Y7/1	灰白		
93	SD1・SD2中層	須恵器	平鍋					10%	密	良				
94	SD1・SD2中層	須恵器	盃				(10.3)	3.9	80%	密	良	2.5Y7/2	灰黄	底部糸切り・線刻有り・湖西産
95	SD1・SD2上層	弥生土器	壺		縄水埴平式		(2.6)	1%	密	やや良	7.5YR6/8	橙		
96	SD1・SD2上層	弥生土器	高坏				(3.8)		3%	密	やや良	2.5YR5/8	明赤褐	
97	SD1・SD2上層	弥生土器	高坏				(8.0)	13.0	5%	密	良	2.5Y8/4	淡黄	
98	SD1・SD2上層	須恵器	坏	坏蓋	6世紀	4.4	(6.0)	3%	密	良	2.5Y8/1	灰白	外面に自然釉	
99	SD1・SD2上層	須恵器	坏	坏身	6世紀末～7世紀初	8.4	(2.5)	1%	密	良	7.5Y5/1	灰		
100	SD1・SD2上層	須恵器	坏	坏身	6世紀末～7世紀初	9.7	(3.6)	3%	密	良	2.5Y7/1	灰白		
101	SD1・SD2上層	須恵器	坏	坏身	6世紀末～7世紀初		(3.2)	9.9	1%	密	良	2.5Y7/2	灰黄	
102	SD1・SD2上層	土師器	高坏			10.0	(4.1)	3%	やや密	やや良	3YR7/3	にぶい黄橙		
103	SD1・SD2上層	土師器	甕				4.2		3%	やや粗	やや不良			
104	SD1・SD2上層	土師器	鍋	清郷型鍋				1%	やや密	良	7.5Y4/4	褐		
105	SD1・SD2上層	土師器	鍋	清郷型鍋				1%	やや密	良	5YR5/6	明赤褐		
106	SD1・SD2上層	陶器	壺			(3.0)	(8.8)	5%	密	やや良	2.5Y6/2	灰黄	「T」と刻線 窯記号か?	
107	SD1・SD2上層	陶器	碗	灰輪陶器	H-72	(1.8)	6.6	5%	密	やや良	2.5Y6/2	灰黄		
108	SD1・SD2上層	陶器	碗	灰輪陶器		(2.1)	7.2	10%	密	良	2.5Y7/2	灰白		
109	SD1・SD2上層	陶器	碗	灰輪陶器	O-53～H72	(1.7)	8.4	10%	密	良	7.5Y7/1	灰白		
110	SD1・SD2上層	陶器	碗	灰輪陶器		(2.6)	8.2	10%	密	良	2.5Y7/2	灰黄		
111	SD1・SD2上層	陶器	碗	灰輪陶器	O-53～H72	(2.0)	7.3	20%	密	良	2.5Y6/2	灰黄		
112	SD1・SD2上層	陶器	碗	山茶碗		13.0	(3.6)	3%	密	良	2.5Y8/1	灰白		
113	SD1・SD2上層	陶器	碗	山茶碗	渥美Ⅲ期	13.6	(4.1)	3%	密	良	2.5Y6/2	灰黄	内面スス付着	
114	SD1・SD2上層	土師器	鍋	伊勢型鍋		25.0	(6.9)	10%	密	良	10YR6/3	にぶい黄橙		
115	SD1・SD2上層	陶器	壺			(7.3)	18.5	8%	密	良	10YR8/1	灰白	外面灰釉	
116	SD-3	弥生土器	甕	台付甕		31.8	(15.9)	20%	粗	良	5YR5/6	明赤褐		
117	SD-3	弥生土器	甕	台付甕		5.0	6.8	3%	やや粗	良	2.5YR5/6	明赤褐		
118	SD-3	弥生土器	高坏			(9.7)	17.2	5%	やや粗	良	10YR6/5	明黄褐		
119	SD-4	弥生土器	壺			21.8	(16.2)	30%	密	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
120	SD-5	弥生土器	甕				2.1	1%	粗	不良				
121	SD-5	弥生土器	壺				(3.7)		密	良	2.5Y7/2	灰黄		
122	SD-5	弥生土器	壺	細頸壺			(2.3)		密	良	5YR6/6	橙		
123	SD-5	陶器	碗	山茶碗	渥美Ⅲ型式	(1.4)	8.0	3%	密	良	2.5Y7/2	灰黄		
124	SD-5	土師器	鍋	伊勢型鍋	13世紀	(1.6)			密	良	2.5Y8/2	灰白		
125	SD-5	土師器	鍋	内耳鍋	16世紀	(2.0)			密	良	10YR7/4	にぶい黄橙		
126	SD-5	陶器	甕		16世紀	13.6	(4.6)	1%	密	やや良	2.5Y7/2	灰黄		
127	SK-1	縄文土器	深鉢		縄文時代後期	(3.5)		5%	やや粗	やや良	2.5Y4/2	暗灰黄		
128	SK-2	弥生土器	高坏	碗形高坏		(2.7)		1%	密	良	10YR6/2	灰黄褐	内面スス付着	
129	SK-2	弥生土器	壺			(3.8)		1%	密	良	2.5Y2/1	黒		
130	SK-3	弥生土器	壺?			(3.6)		1%	密	良	2.5Y5/3	黄褐		
131	SK-3	弥生土器	壺			(3.8)		1%	密	良	2.5Y6/3	にぶい黄		
132	SK-5	須恵器	坏	坏蓋	7世紀前半	9.4	(2.3)	5%	密	良	10Y6/1	灰		
133	SK-5	須恵器	坏	坏蓋	7世紀前半	11.4	(2.8)	5%	密	良	10Y7/1	灰白		
134	SK-5	須恵器	坏	坏身	7世紀前半	10.4	(2.3)	10%	密	良	N 5/1	灰		
135	SK-5	須恵器	坏	坏身	7世紀前半	11.0	(3.1)	30%	密	良	10 Y 6/1	灰		
136	SK-5	須恵器	坏	坏身	長床式	10.6	(4.1)	1%	密	良	5Y7/1	灰白	無頸の高坏の可能性あり	
137	SK-5	土師器	甕			23.8		5%	密	良	10YR7/2	にぶい黄橙		
138	SK-5	土師器	甕			(2.5)		3%	密	良	5 Y 2/1	黒		
139	SK-5	須恵器	甕					1%	密	良	2.5Y5/2	暗灰黄		
140	SK-5	土師器	鍋					5%	密	良	5YR5/6	明赤褐		
141	SK-6	土師器	甕	長胴甕				30%	やや粗	やや良	2.5YR6/8	橙		
142	SK-7	陶器	壺		10世紀	8.9	(18.7)	80%	密	良	2.5Y6/2	灰黄		
143	SK-8	鉄	宋銭	元豊通宝	11世紀後半以降									
144	SK-9	土師器	皿			11.4	(2.0)	10%	密	良	7.5YR7/4	にぶい橙		
145	SK-9	陶器	鉢			20.8	4.5	3%	密	良	2.5Y7/1	灰白		
146	包含層	石器	剥片	使用痕有る剥片		5.4	4.3	1.2	80%	熔結凝灰岩				
147	包含層	弥生土器	甕		縄水埴平式		(3.4)		1%	密	良	7.5YR5/4	にぶい褐	条痕文土器
148	包含層	弥生土器	壺			(2.4)			1%	密	良	7.5YR5/4	にぶい褐	
149	包含層	弥生土器	壺	広口壺					やや粗	やや良	10YR4/6	褐		
150	包含層	弥生土器	壺	細頸壺		(2.1)			1%	密	やや良	2.5Y7/2	灰黄	
151	包含層	弥生土器	甕	台付甕		(4.8)		3%	やや密	やや良	10YR7/3	にぶい黄橙		
152	包含層	弥生土器	高坏			(5.5)		3%	密	良	5YR6/6	橙		
153	包含層	弥生土器	壺				8.0	1%	やや粗	やや良	10YR4/2	灰黄褐		
154	包含層	土師器	甕			(4.0)			密	良	10YR5/4	にぶい黄褐		
155	包含層	土師器	甕	長胴甕		17.8	(5.0)	3%	密	良	10YR6/6	明黄褐		
156	包含層	土師器	甕	清郷型鍋		(2.4)		2%	やや粗	良	7.5YR4/4	褐		
157	包含層	陶器	碗	灰輪陶器	O-53～H72	(2.2)	6.9	10%	密	良	2.5Y7/2	暗灰黄		
158	包含層	陶器	碗	灰輪陶器	O-53～H72	(2.2)	7.6	3%	密	良	2.5Y7/1	灰白		
159	包含層	陶器	碗	灰輪陶器		(1.6)	6.8	10%	密	やや不良	2.5Y8/2	灰白		
160	包含層	陶器	碗	天目茶碗		14.5	(3.3)	2%	密	良	2.5Y7/2	灰黄		
161	包含層	土師器	皿		16世紀	12.2	2.6	5.6	95%	密	やや良	10YR8/3	浅黄橙	
162	包含層	土師器	碗		16世紀	12.1	3.0	5.6	80%	密	良	10YR7/3	にぶい黄橙	

写真図版



若宮遺跡の環壕（南東から）



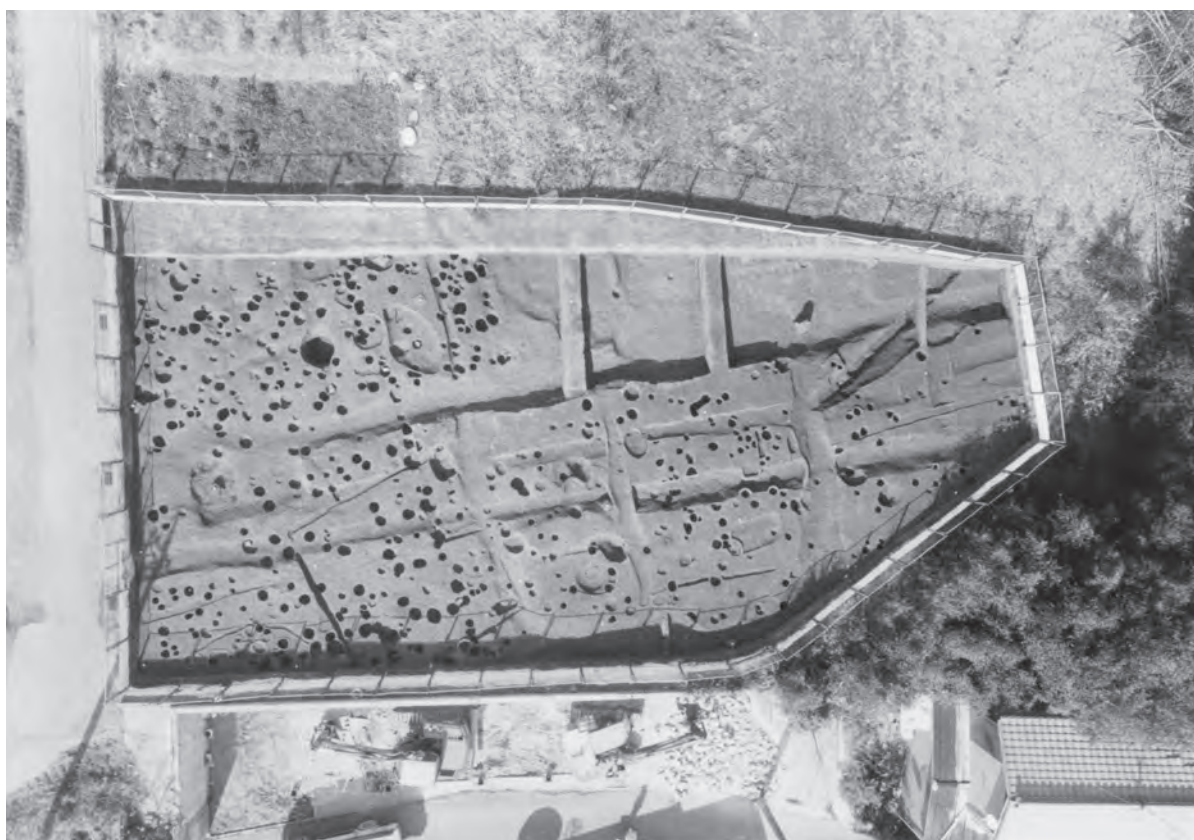
1. 境松遺跡 A 区全景 (上から)



2. 境松遺跡 B 区全景 (上から)



1. 境松遺跡C区全景（上から）



2. 境松遺跡D区全景（上から）



1. SX-1 遺物出土状況 1 (南から)



2. SX-1 完掘状況 (南から)



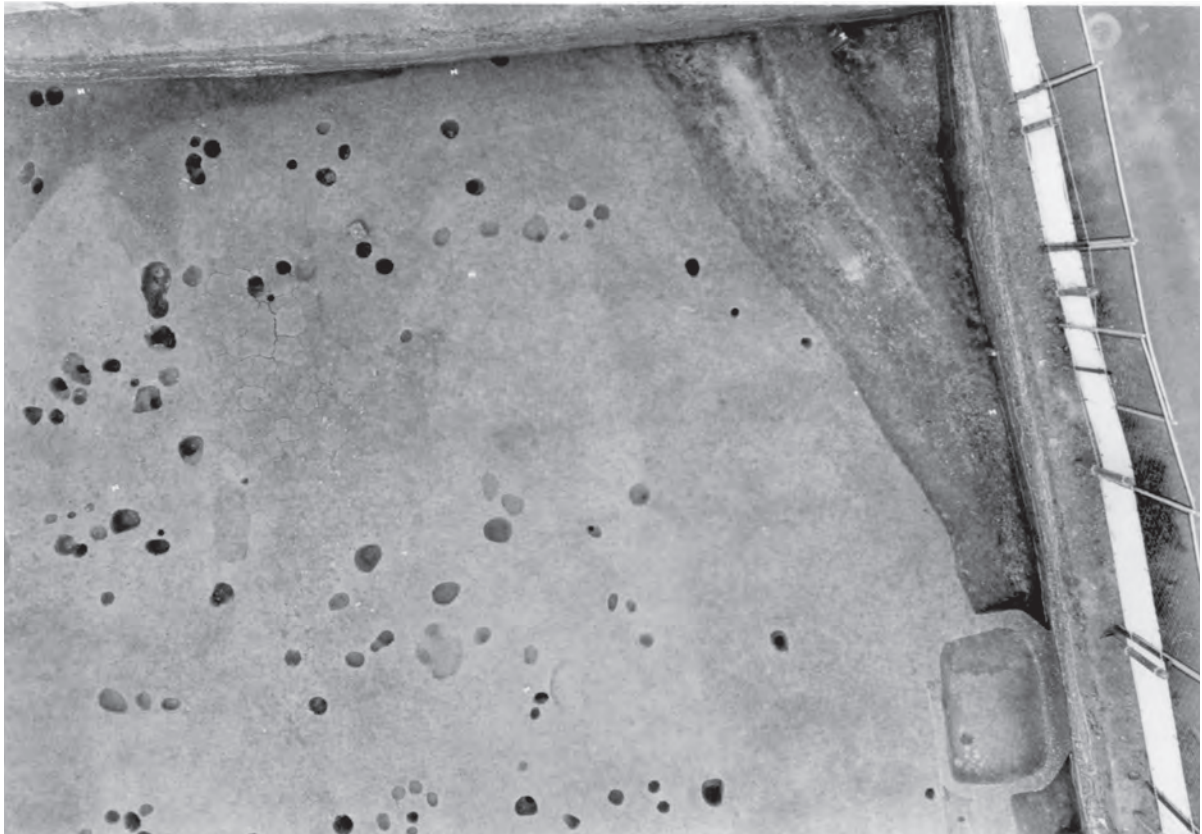
3. SX-1 遺物出土状況 2 (南西から)



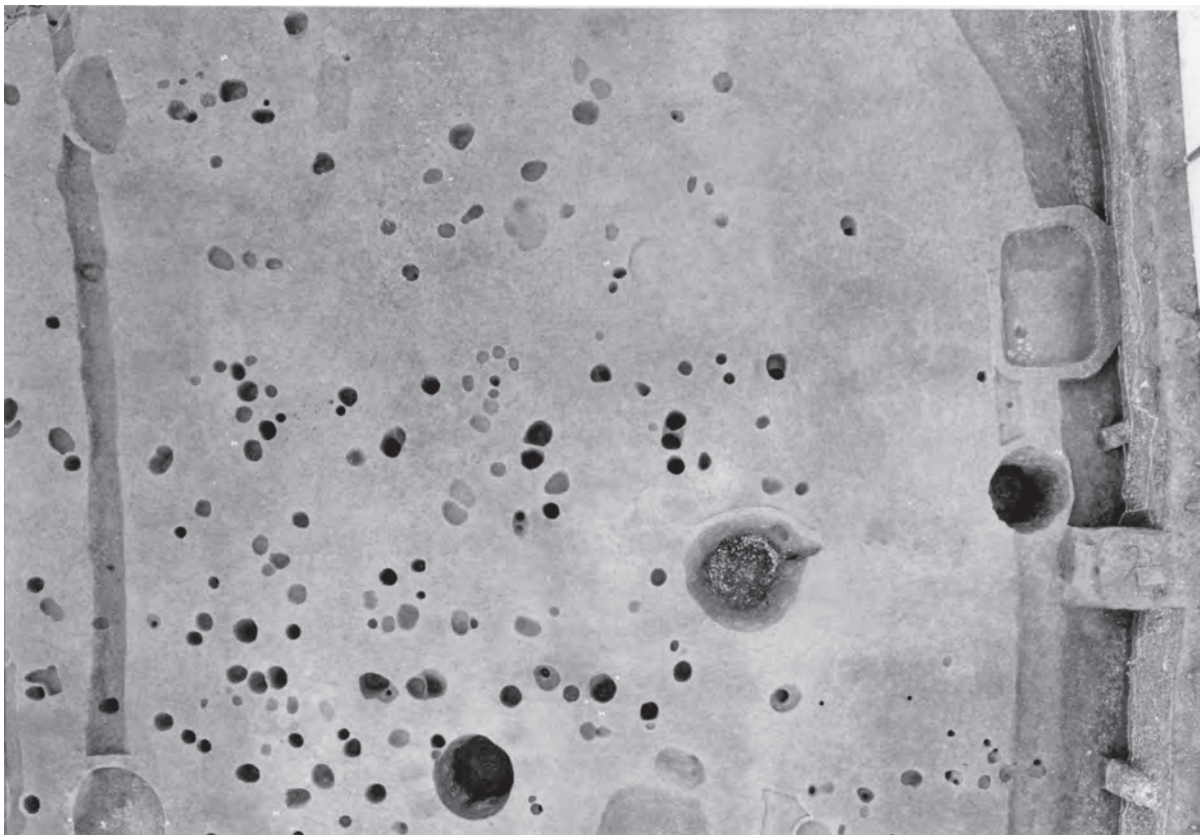
4. SB-1 根石検出状況 (南から)



5. SD-3 遺物出土状況 (北東から)



1. SB-1 完掘状況 (上から)



2. SB-2・3 完掘状況 (上から)



1. SB-2 完掘状況 (北西から)



2. SB-2 遺物出土状況 (南から)



3. SD-8・10 完掘状況 (西から)

4. SD-1・6 完掘状況 (南から)



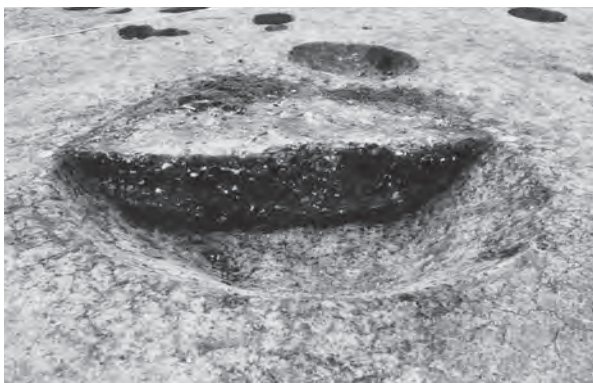
1. SD-8 遺物出土状況 (東から)



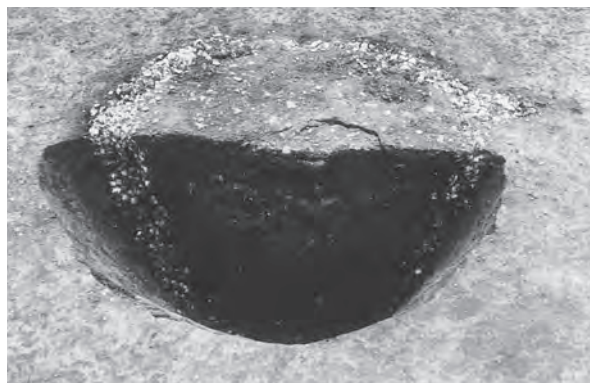
2. SK-5 完掘状況 (北西から)



3. SK-5 遺物出土状況 (西から)



4. SK-6 断面 (南から)



5. SE-4 断面 (南から)



1. SB-1・2完掘状況（北から）



2. SB-5完掘状況（北から）



1. SB-4・6完掘状況（北から）



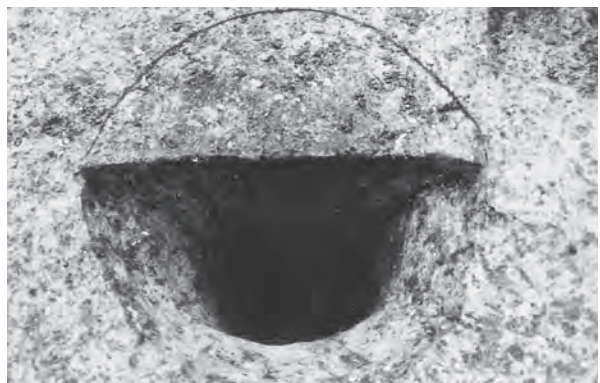
2. SB-2焼土検出状況（南東から）



3. SB-2柱穴断面（東から）



4. SB-5柱穴断面（西から）



5. SB-5柱穴断面（西から）



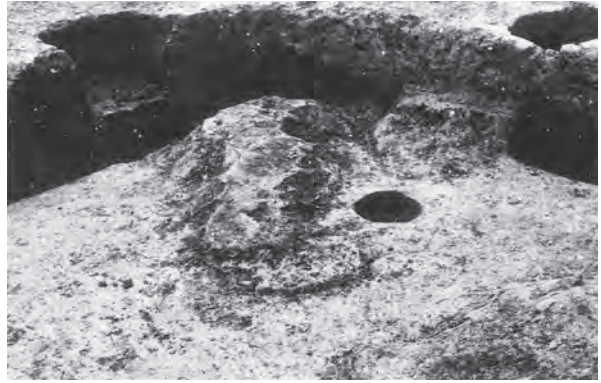
1. SB-5 焼土・炭化材検出状況（北から）



2. SB-5 遺物出土状況（南から）



1. SB-5焼土・炭化物出土状況（西から）



2. SB-5焼土・炭化物出土状況（北から）



3. SB-5遺物出土状況（南から）



4. SB-5遺物出土状況（南から）



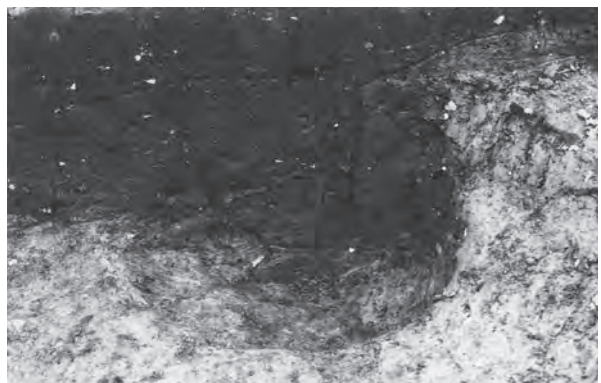
5. SB-1遺物出土状況（東から）



6. SB-5遺物出土状況（南から）



7. SB-5遺物出土状況（北から）



8. SB-5壁面断面（南から）



1. SK-1 遺物出土状況1 (北から)



5. SK-8 遺物出土状況1 (南から)



2. SK-1 遺物出土状況2 (北から)



6. SK-8 遺物出土状況2 (南から)



3. SK-1 遺物出土状況3 (北から)



7. SK-8 遺物出土状況3 (南から)



4. SK-1 遺物出土状況4 (北から)



8. SK-8 遺物出土状況4 (南から)



1. SK-6 遺物出土状況 (北から)



2. SK-10 遺物出土状況 (南から)



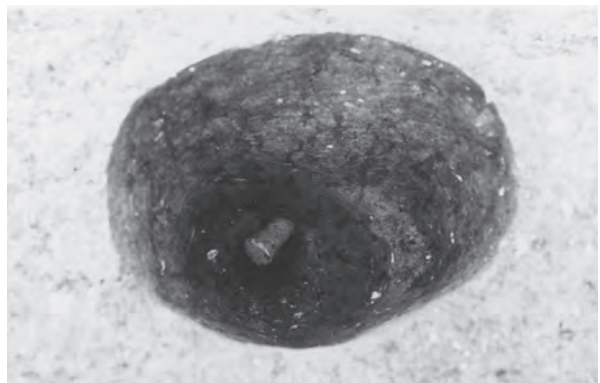
3. SK-21 遺物出土状況 (南から)



4. SK-24・25 遺物出土状況 (北から)



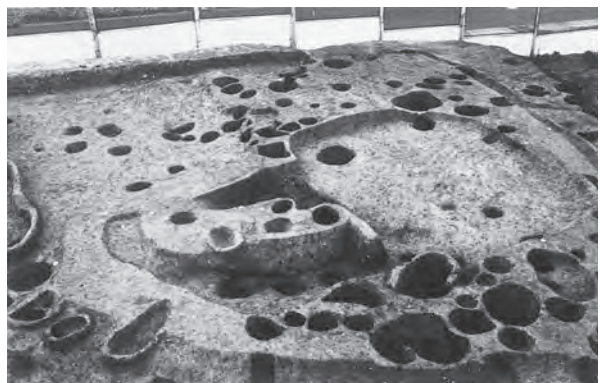
5. SK-26 遺物出土状況 (南東から)



6. SB-7 遺物出土状況 (南西から)



7. SX-1 完掘状況 (東から)



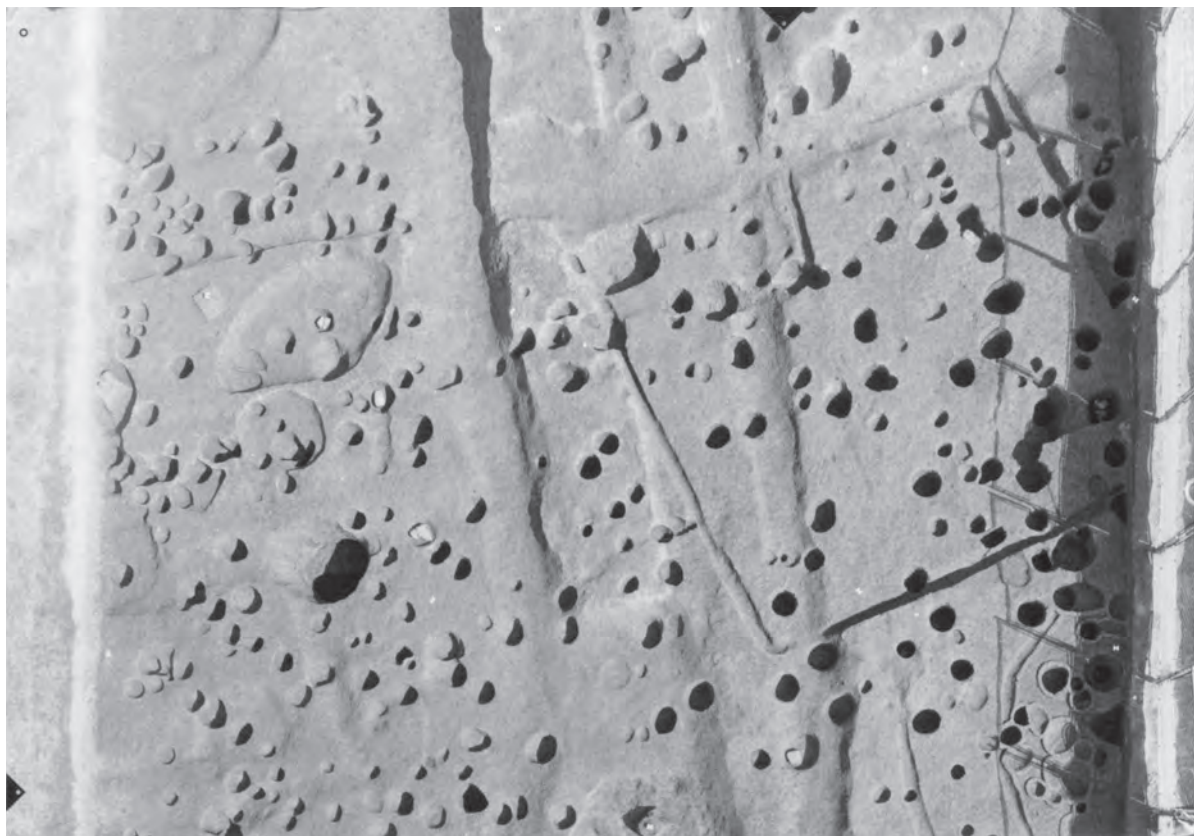
8. SK-32・33 完掘状況 (東から)



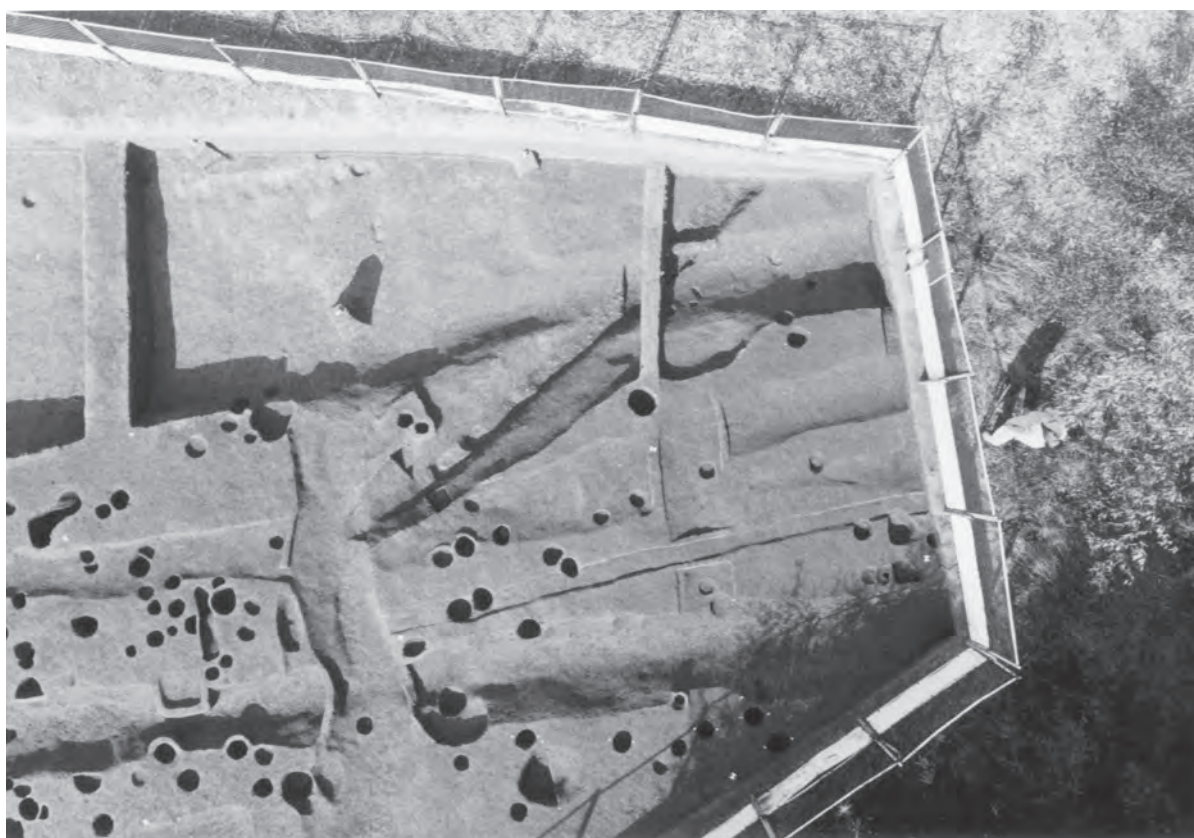
1. SB-1完掘状況（上から）



2. SB-1完掘状況（南西から）



1. SB-1・3・4完掘状況（上から）



2. SB-2全景（上から）



1. SD-2、SK-7・8完掘状況（上から）



2. SD-1完掘状況（北から）



3. SD-2遺物出土状況（北から）



1. SD-2 遺物出土状況 (西から)



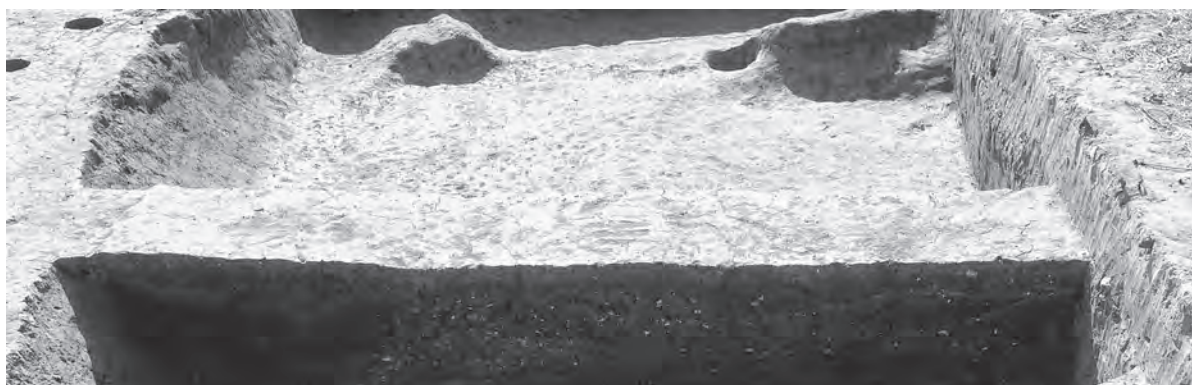
3. SD-2 遺物出土状況 (北から)



2. SD-2 銅鏡出土状況 (西から)



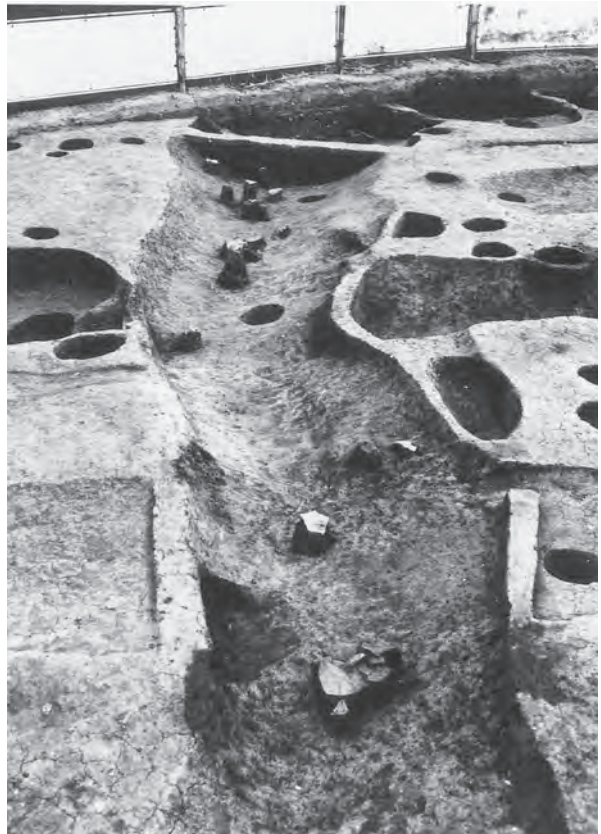
4. SD-2、SK-7断面 (北から)



5. SD-2、SK-8断面 (北から)



1. SD-3 遺物出土状況 (北から)



2. SD-6 遺物出土状況 (西から)



3. SK-7 遺物出土状況 (東から)



4. SK-8 遺物出土状況 (西から)



5. SK-8 遺物出土状況 (南から)



1. 若宮遺跡全景（上から）



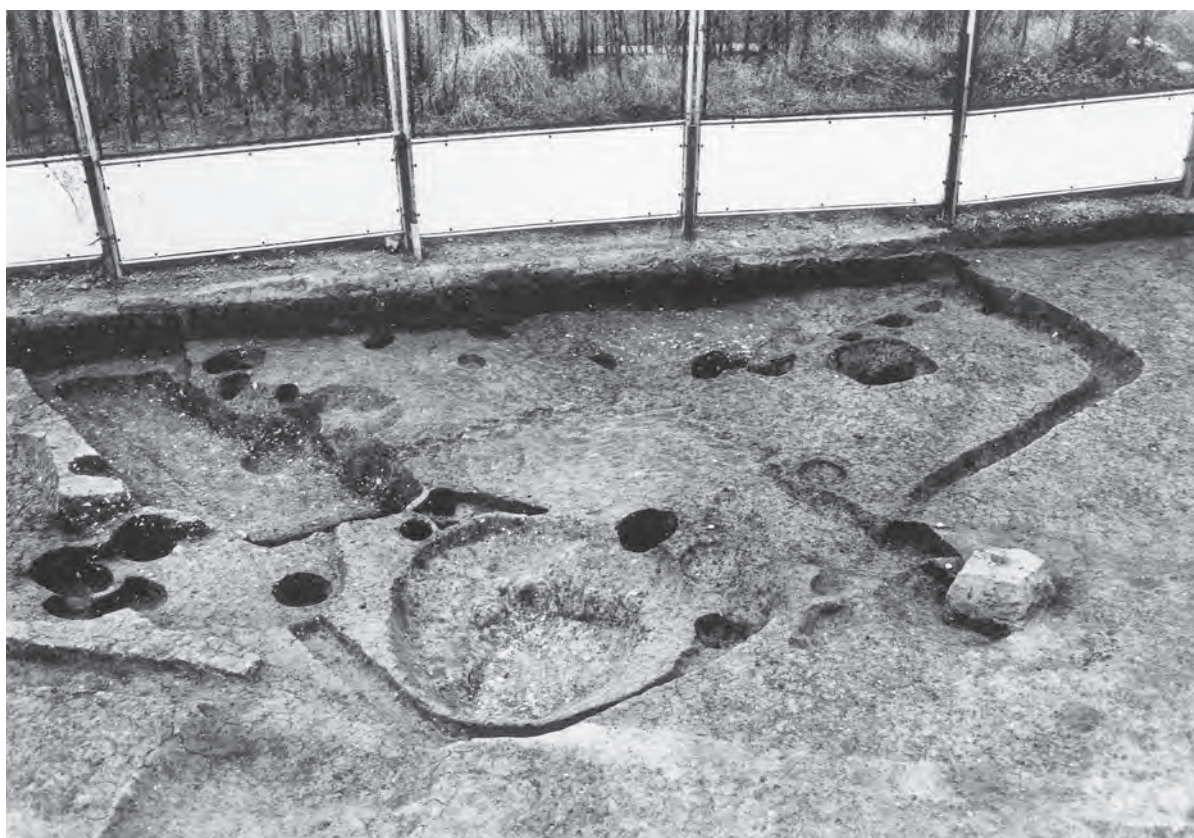
1. SB-1・2、SX-1完掘状況（東から）



2. SB-3完掘状況（東から）



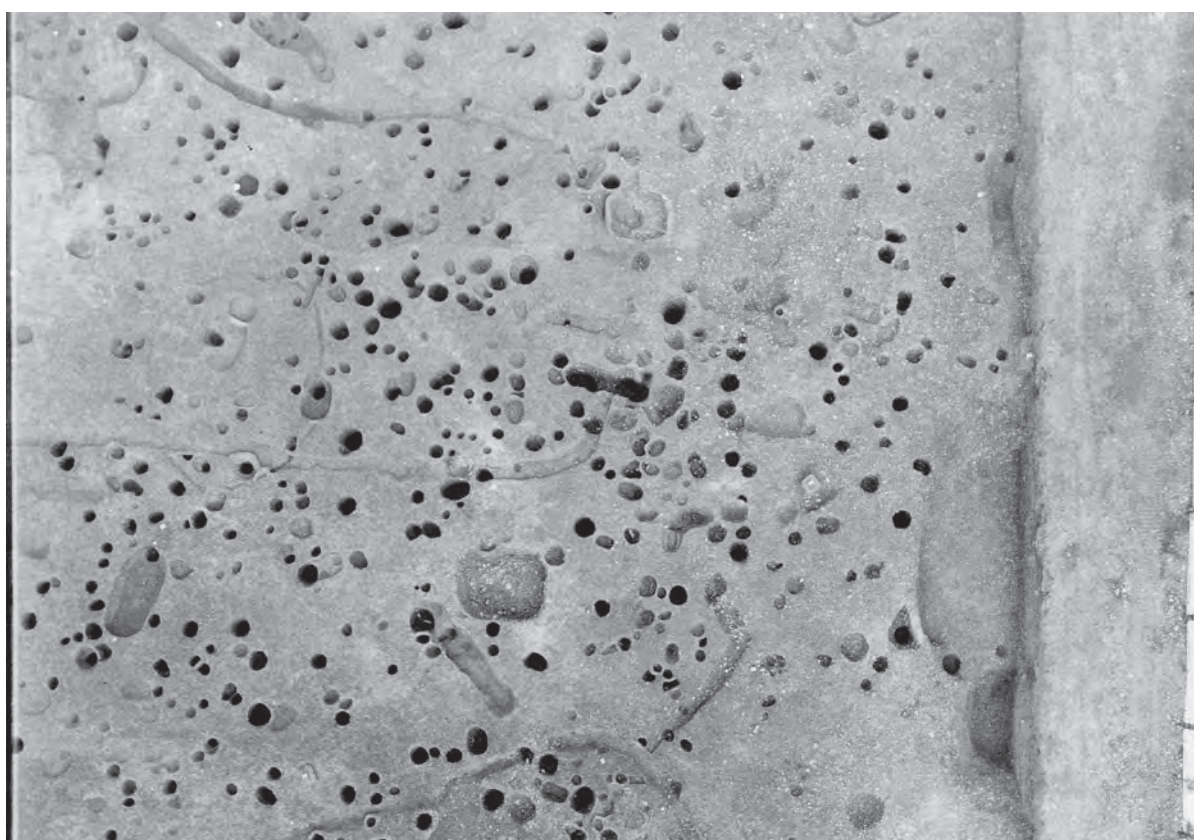
1. SB-5完掘状況（南から）



2. SB-7完掘状況（北東から）



1. SB-8完掘状況（北東から）



2. SB-10・11完掘状況（上から）



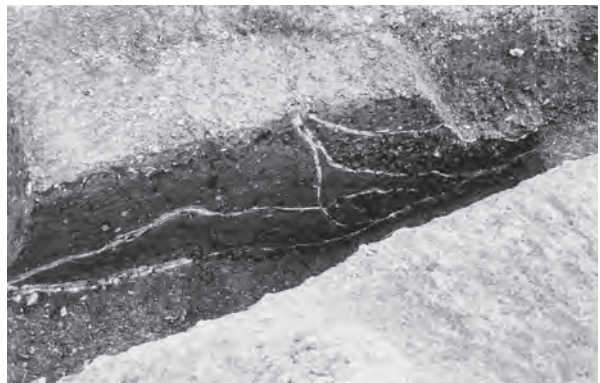
1. SD-1断面 (東から)



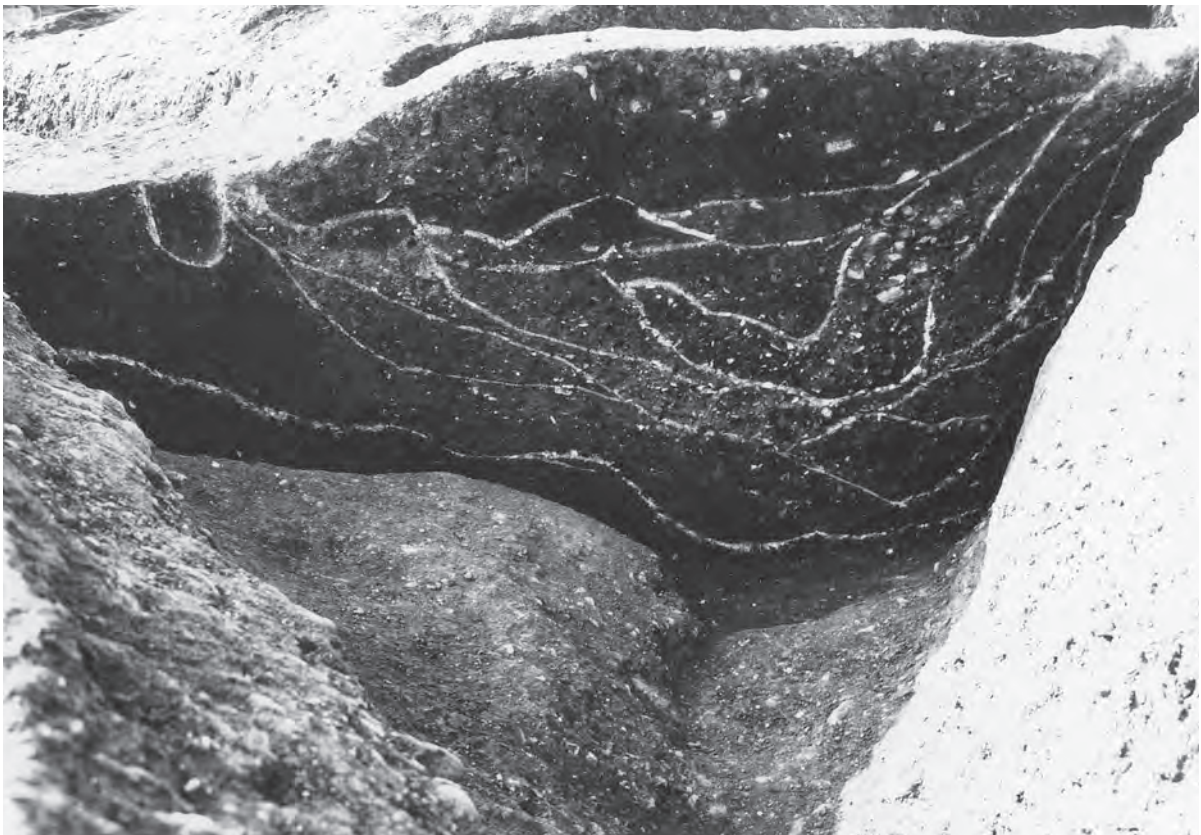
2. SD-2断面 (南から)



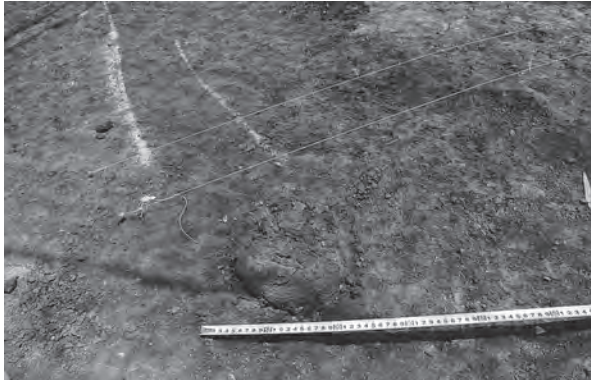
3. SD-1・2分岐遺物出土状況 (東から)



4. 土橋断面 (北西から)



5. SD-1・2分岐断面 (東から)



1. SB-1 遺物出土状況 (西から)



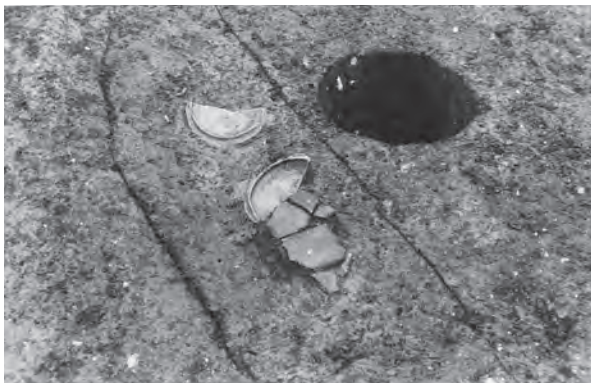
2. SB-2 遺物出土状況 (西から)



3. SB-7 貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



4. SB-8 遺物出土状況 (北から)



5. SB-8 遺物出土状況 (北東から)



6. SB-11 遺物出土状況 (東から)



7. SD-1 最下層遺物出土状況 (東から)



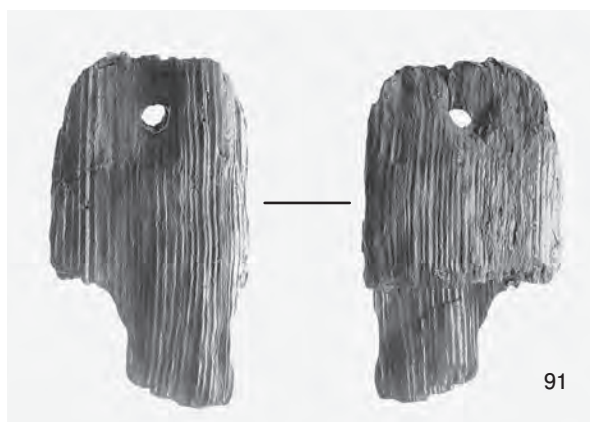
8. SD-3 遺物出土状況 (北から)



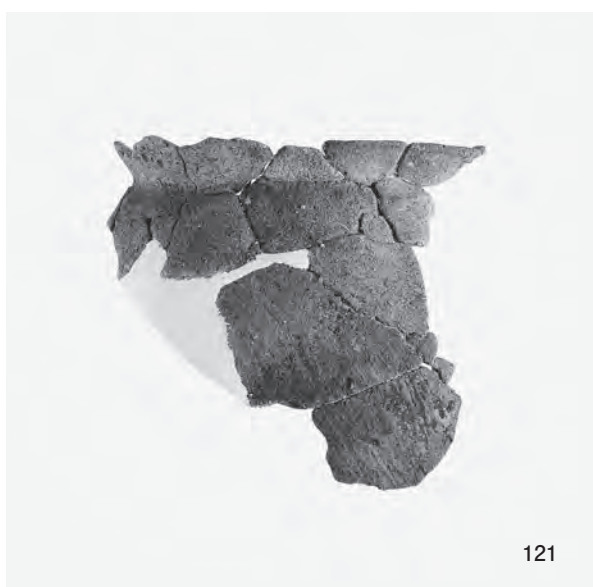
出土遺物-1



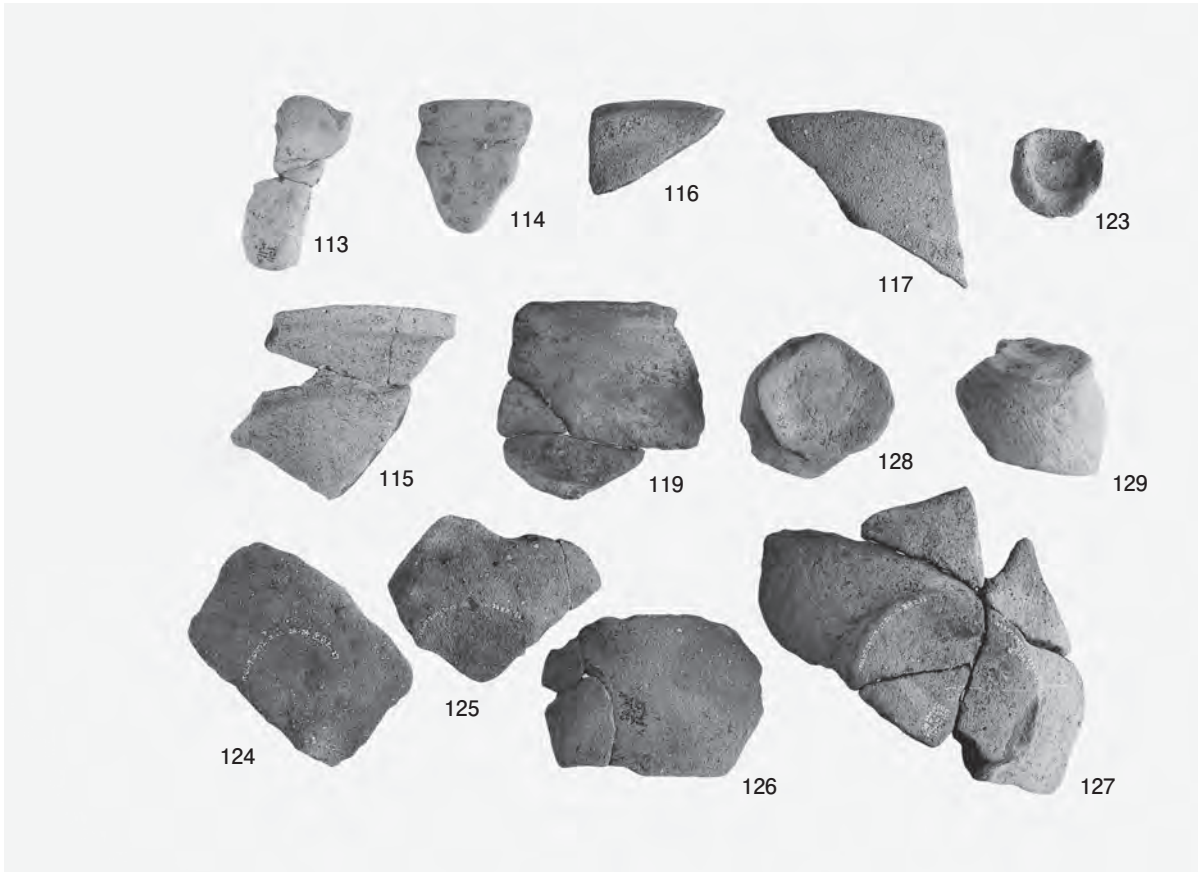
出土遺物-2



出土遺物-3



出土遺物 - 4



出土遺物-5



出土遺物-1



23



24



25



26



25

24

21

17

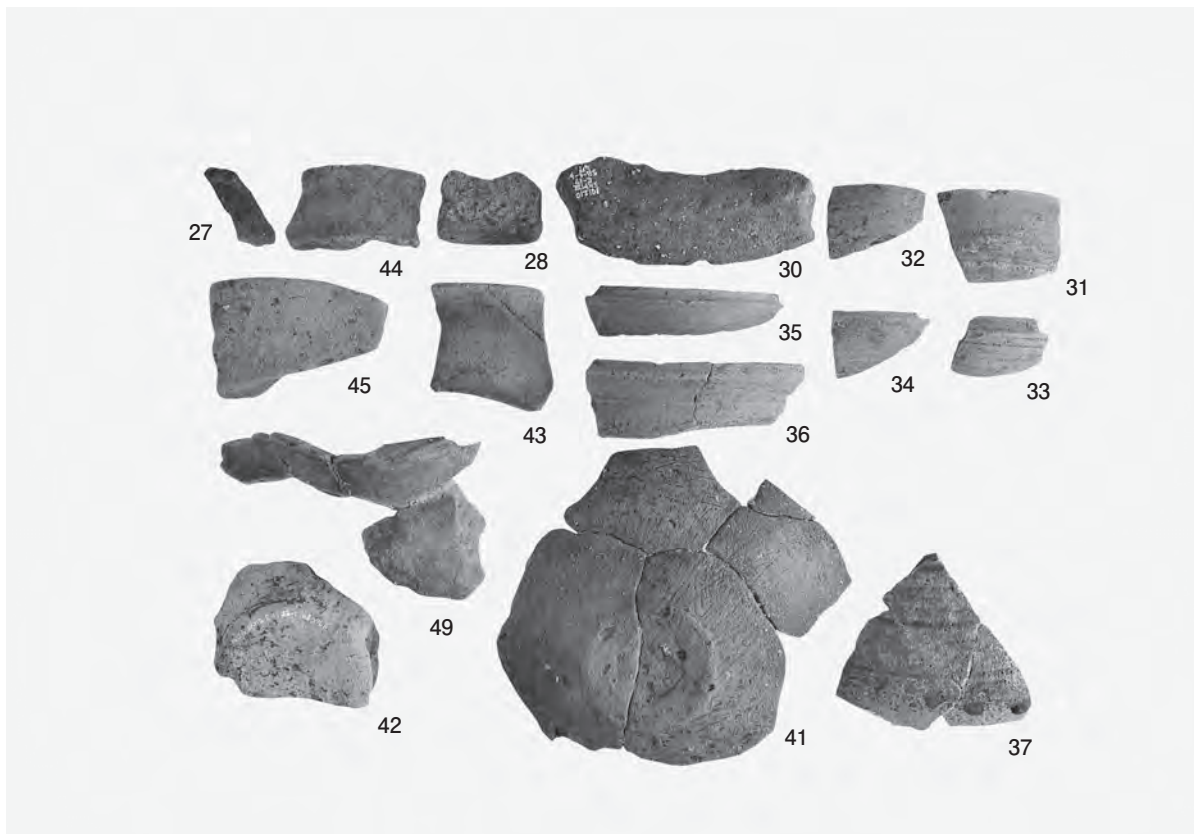
18

19

20

S B - 5 埋土下層出土資料

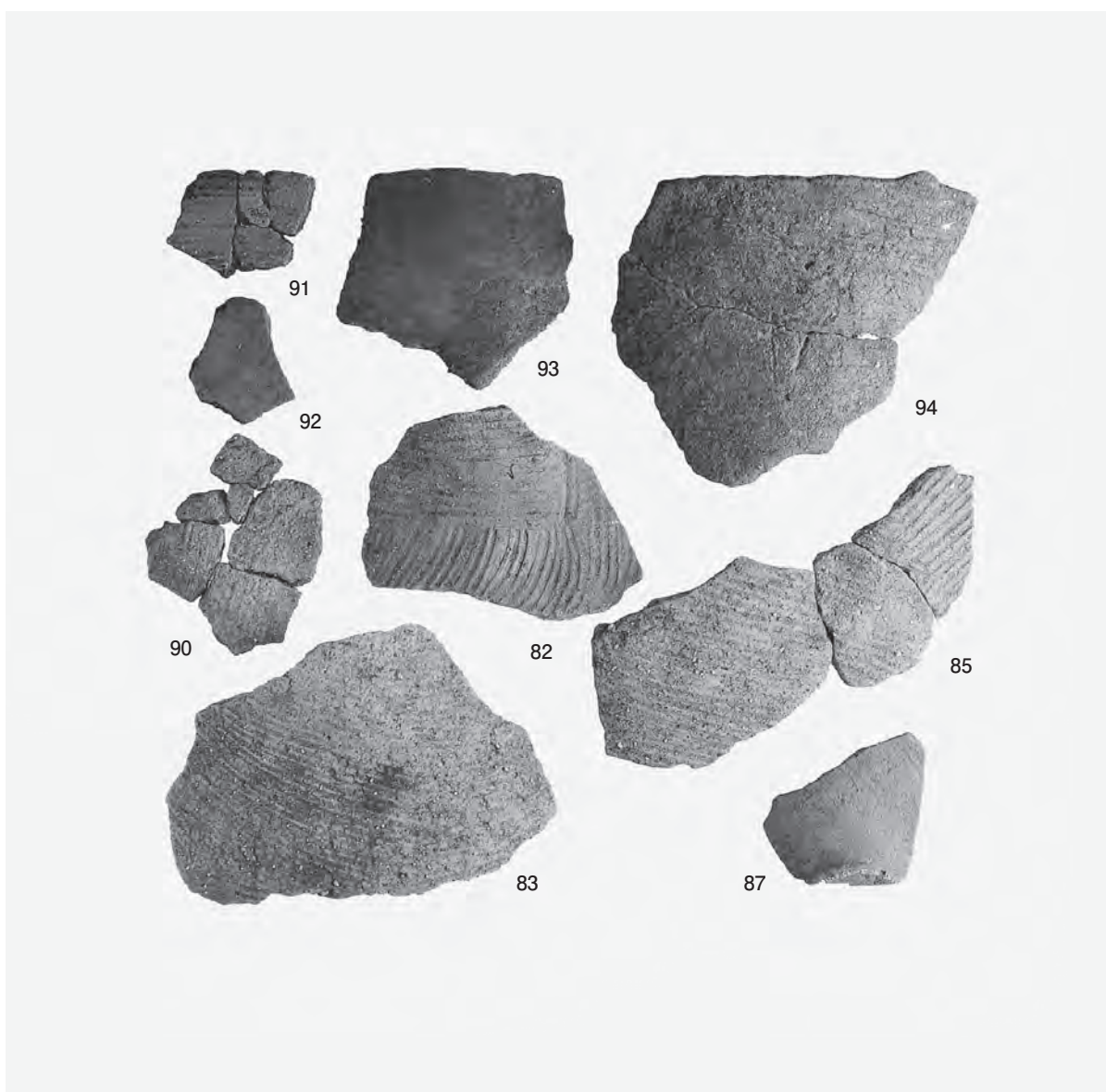
出土遺物-2



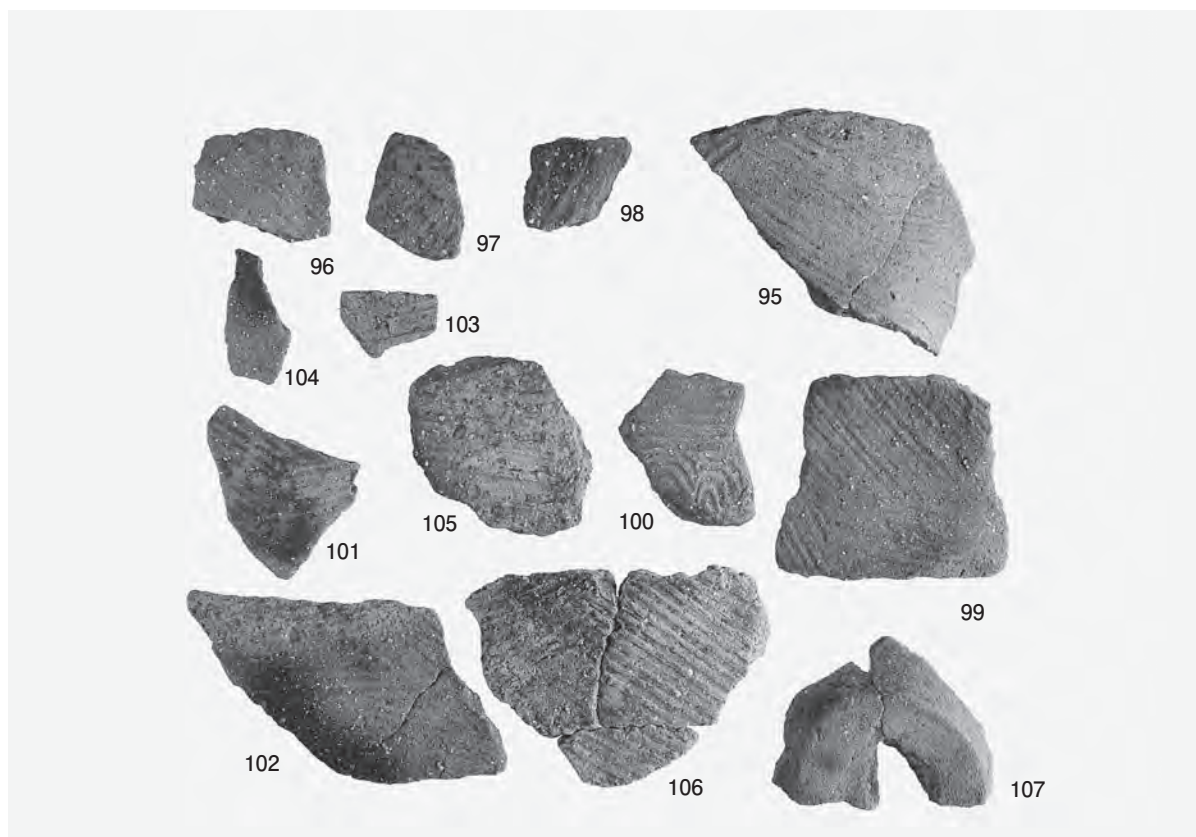
出土遺物-3



出土遺物-4



出土遺物-5

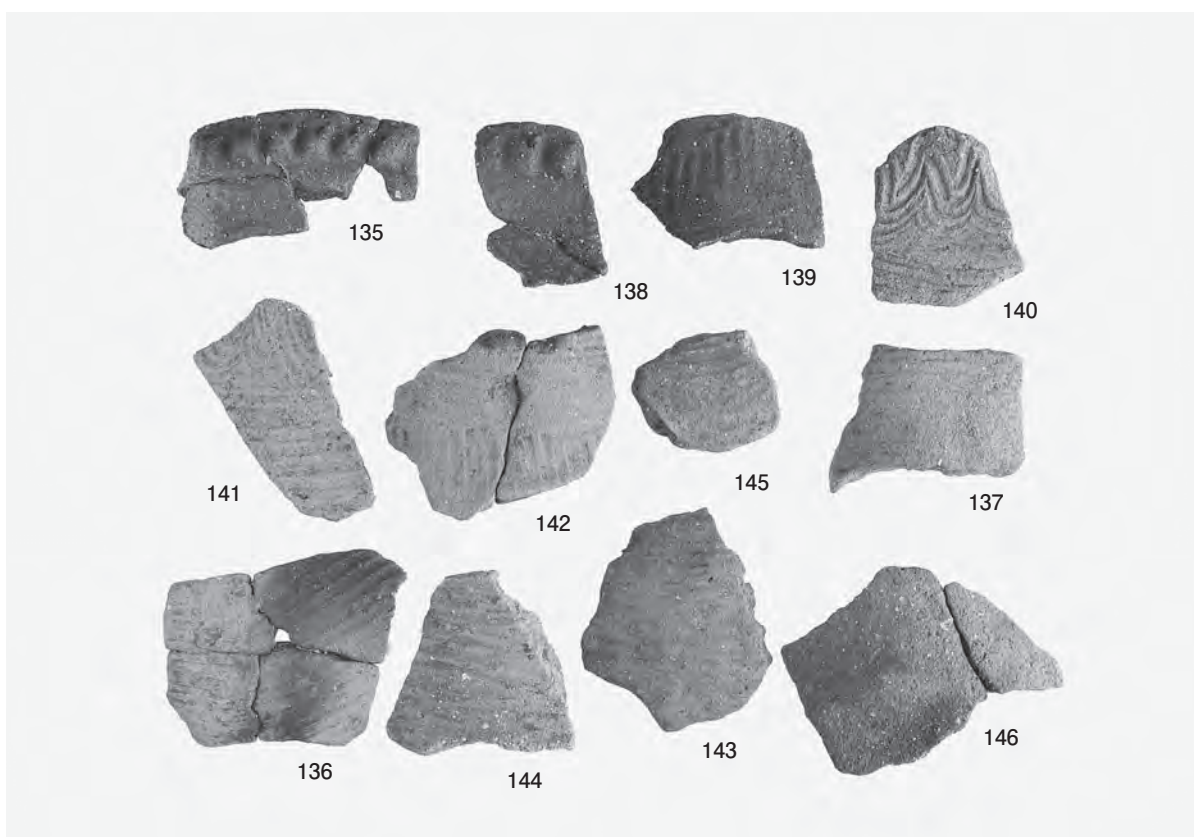


116



117

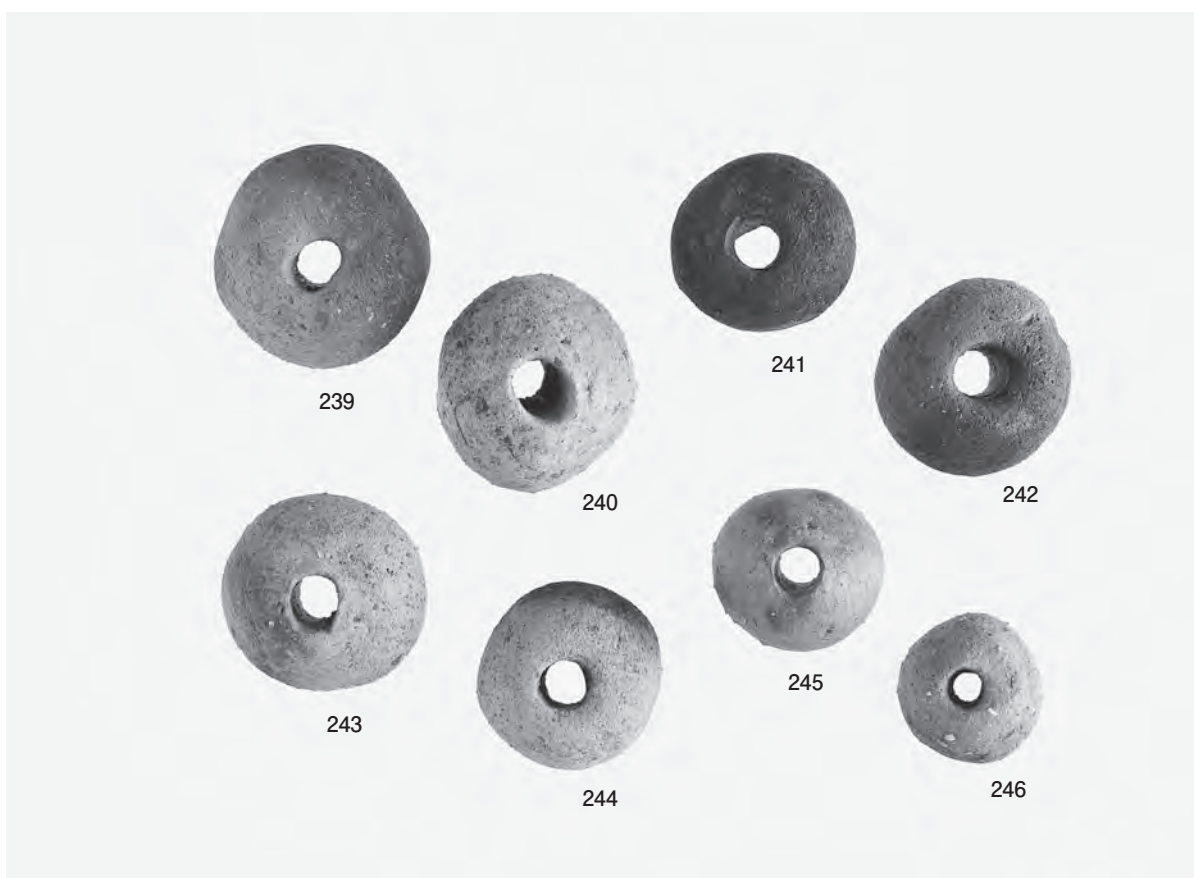
出土遺物-6



出土遺物-7



出土遺物-8



出土遺物-9



出土遺物-1



出土遺物-2



出土遺物-3



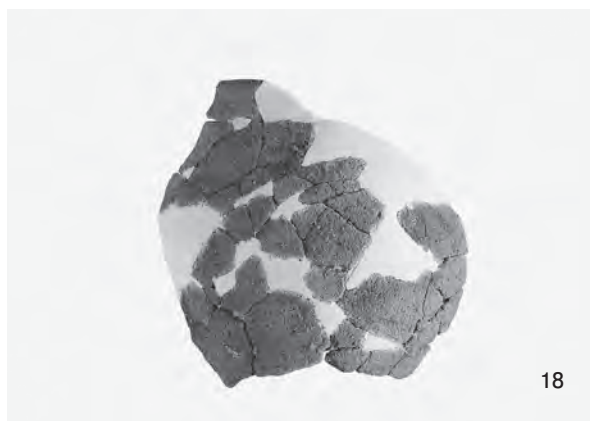
出土遺物-4



出土遺物-5



出土遺物-6



出土遺物-1



出土遺物-2



出土遺物-3

報告書抄録

ふりがな	さかいまついせき(2)・わかみやいせき(6)							
書名	境松遺跡(II)・若宮遺跡(VI)							
副書名	豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第124集							
編著者名	加藤幹樹、村上 昇、パレオ・ラボ (竹原弘展)							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 0532-51-2879							
発行年	2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カイツイセキ 境松遺跡 ワカミヤイセキ 若宮遺跡	トヨハシムロチヨウ 豊橋市牟呂町 アザサカツハンチ 字坂津3番地 他	23201	790391	34度 45分 27秒	137度 21分 40秒	20100506 ～ 20110222	3,000	区画整理 事業
			790389					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
境松遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居	弥生土器 土師器・石製銅鐸舌 ミニチュア土器		弥生時代中期後半から古墳時代前期後半頃の住居址及び遺物が出土した。		
若宮遺跡	集落	中世 近世 弥生時代 古墳時代	掘立柱建物 大型溝 掘立柱建物 竪穴住居 環壕 竪穴住居	土師器・灰釉小皿 銅碗 近世陶器・土師器				

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第124集
境松遺跡（Ⅱ）・若宮遺跡（Ⅵ）

豊橋牟呂坂津土地地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

2013年3月22日

発 行 豊橋市教育委員会©
教育部美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1

印 刷 株式会社 豊橋印刷社